

碩臺學園史 二

創立七〇周年記念

健土  
健民



愛愛愛  
土人神

星洲商花會  
一九五九年十月起工  
一九六〇年八月竣工  
總工務 謝錫祥 謝錫堯







酪農学園本館と大学中央館(上右)・とわの森三愛高等学校・農場実習 (右頁)

歴代理事長

名誉理事長  
学園長



酪農学園初代学園長  
酪農義塾 2 代理事長  
酪農学園初・4 代理事長  
故 黒澤 西蔵



酪農義塾開設時の理事長  
故 佐上 信一



酪農学園 2 代学園長  
酪農学園 5 代理事長  
酪農学園初代名誉理事長  
故 佐藤 貢



酪農学園 3 代理事長  
故 佐藤 善七



酪農学園 2 代理事長  
故 青山 永



酪農学園 4 代学園長  
牛島 純一



酪農学園 3 代学園長  
酪農学園 6 代理事長  
遊佐 孝五

現  
任  
役  
員  
常  
任  
理  
事



黒澤 力太郎  
酪農学園学園長



平尾 和義  
酪農学園理事長



大谷 俊昭  
酪農学園大学学長



菊池 利治  
酪農学園常務理事



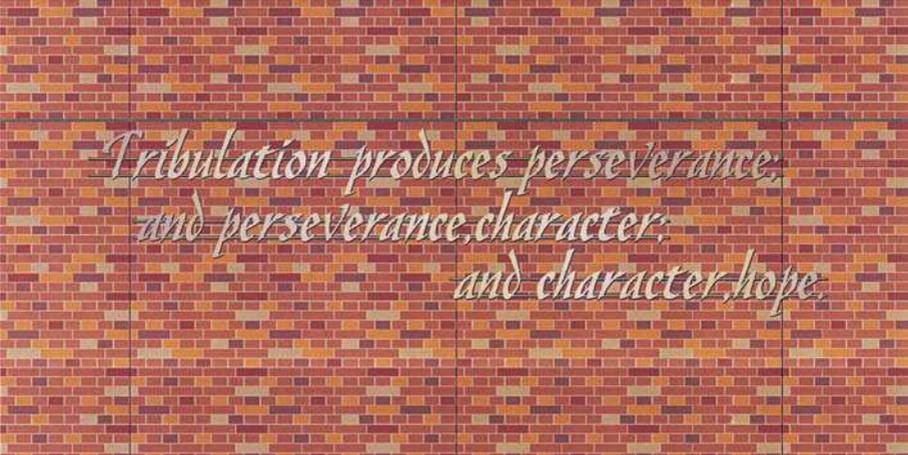
高橋 節郎  
酪農学園副理事長



村山 昭二  
とわの森三愛高等学校校長



安宅 一夫  
酪農学園大学短期  
大学部学長



*Tribulation produces perseverance,  
and perseverance, character,  
and character, hope.*

「(私たちは知っているのです)、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを――」

新約聖書・ローマの信徒への手紙 5章3～4節

2003年3月に完成した大学中央講義棟・北正面に刻まれた聖句

## 序にかえて

酪農学園理事長 平尾和義

酪農学園は、本年創立七〇周年を迎えることができました。

顧みますと、本学園は一九三三（昭和八）年一〇月、国内経済の大恐慌、北海道農業の冷害凶作と農村疲弊のさなか、北方寒地農業確立の理想に燃えた創立者黒澤西蔵先生の北海道酪農義塾の実学教育に始まります。それ以来、創立者は戦中、戦後の激動の中にあつて、初志を曲げることなく、幾多の試練を乗り越えて今日の酪農学園を築き上げてまいりました。

創立当初、わずか数十名（短期講習）の生徒による一年制の塾は、時代とともに大きな変遷を重ね七〇年を経て、今日みられるような大学学部とその大学院、短期大学部、高等学校となり、学生生徒数約五、五〇〇名、専任教職員数約三〇〇名の特色ある私学として着実に発展を遂げ、各界から高い評価を受ける伝統と実力を持つに至りました。

しかしながら、学園七〇年の歩みは決して平坦なものではなく、そこには激動の昭和史にあつて、打ち続く戦争や社会の変貌など、また私学なるが故の幾多の試練と苦難に満ちた年月があ

りました。

本学園が今日、私学の中でも最も特色ある教育機関として存在している根本には、多くの先人たちが、いつの時代にあつても、またいかなる苦難の時にあつても、創立者の初志と理想を失うことなく継承し、その具現化に向かつて努力された賜であります。学園の歴史はまた創立者の教育に注ぐ熱い思い、建学の精神と教育観、それを支え育んできたその時どきの先人たちの血と汗の結晶によってつくられてきた歴史でもあることが改めて認識され、忘れてはならないと思います。

この七〇年間を振り返り、その中の先人たちのご労苦をしのび、敬意と感謝を捧げるとともに、私たちはいまの時が先人たちが紡いできた時代の延長と次代をつなぐ歴史の時であること意識する必要があります。七〇年を意義あらしめ、学園が次の時代に向かつて力強く出発するに当たり、創立の原点とその使命を一人ひとりが受け止め、過去を顧み、現状を把握し、多くの先人たちの情熱とたゆまぬ努力への思いを深くし、その意志を引き継いでゆかねばなりません。

いま二一世紀に入り、急速な構造変化と改革の時代に私学を取り巻く環境はさらに厳しくなると予想されます。とりわけ少子高齢化の進行する社会動向は、学園全体の教育運営維持にこれまでで経験したものとは違う新たな試練に直面するものと思われまます。この試練を乗り越え新たな歴史を切り開き、さらなる前進と飛躍のために、近未来に懸ける学園のあるべき姿を描

いていくことこそが、現代に生きる者の責務であると存じます。そして学園存立の意義を不動なものにするためには、まず何よりも学園創立の原点を受け止め、役員関係者が一丸となつて一体的意志をさらに前進させ、私たちに課せられている時代と状況にこたえる教育研究に励み、学園全体の教育力を一層高め、広く社会一般の理解と支持が相まって、これが達成できるものと確信しています。

このような考えから、このたび創立七〇年記念事業の一つとして「酪農学園史二」を刊行することになりましたが、ここには通史としても学園創立時からの沿革も載せて、本学園の歩みを理解いただくとともに、本学が次の時代に向けて確固たる道を切り開き発展するための礎となることを願っています。

終わりに、酪農学園七〇年の歩みを学園の外にあつて温かく見守り、ご指導、ご支援くださいました多くの方々に深く感謝申し上げます、今後もより一層のご指導を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

また記念誌編集に当たられた委員各位のご尽力に深甚な感謝を表します。

## 発刊に寄せて

酪農学園学園長 黒澤力太郎

酪農学園の前身である北海道酪農義塾は、今から七〇年前の一九三三（昭和八）年に創設されました。創立者黒澤西蔵は、創立に際し、教育事業の前途に不安を持つ慎重論が多くある中で、幸いにも「酪連」（雪印乳業株式会社の前身）結成時からの同志である宇都宮仙太郎、佐藤善七、深澤吉平氏らの理解と協力を得て、酪連の総会で酪農義塾の教育運営費として毎年一定の助成金支出を決め、また篤志家からの寄付金を受けることよって設立されたのであります。

そして、初代理事長には時の北海道長官佐上信一氏が就任されました。この一私塾に現役の長官が当たるということからして、いかに当時の北海道にとり酪農の確立が重要な課題であり、また、その教育機関としての酪農義塾への期待の大きさをうかがい知ることができます。この際、創立者は自ら塾長として全寮制の生徒と起居を共にして実学教育、人間教育に当たりました。

創立当初、校舎は酪連の所在する札幌郡札幌村苗穂の一角にありましたが、一九四二（昭和17）

年に現在の文京台キャンパスに一七〇haの農地を取得し、野幌機農学校としてユニークな全寮制の中等教育を実施してまいりました。一九四五（昭和20）年八月、先の大戦にわが国は敗れ、社会が混乱の極に達しておりました時、創立者はデンマーク復興の歴史に倣い、神を愛し、人を愛し、土を愛するキリスト教の三愛精神と健土健民の哲理、すなわち酪農によって健康な国土をつくり、そこに健康な国民が育つという理念をもって、酪農学園の建学の精神と定めたのであります。

さらに創立者は、わが国酪農・食糧の発展自立には、高等教育による人材養成がどうしても不可欠として、一九五〇（昭和25）年に酪農学園短期大学を開設いたしました。その後はご存じとおり大学、七五年には大学院を開設して高等教育の充実に力を注ぐ一方、その間、通信教育、自動車学校や女子高等学校の開設などを進めてきました。今日、一三三haのキャンパスに、学生・生徒五千五百余人が教職員ともども日夜教育研究に励み、四万四千余名、通信教育の卒業生を加えると一五万人に及ぶ卒業生が全国各地で活躍する学園にまで発展いたしました。

創立当初、わずか八〇名の生徒から出発した本学園が、七〇年の星霜を経た今日、このように成長発展を遂げることができましたことは、神のご恩寵の賜と感謝するものであり、合わせて創立以来、幾多の困難を克服して今日の学園を築き上げられた多くの先達・役職員の献身的なご努力によるものと、感謝に堪えないところであります。

さらに、本学園の建学の理念、教育理念に共鳴され、絶大なご支援ご協力を賜っている財団

法人酪農学園後援会、ならびに財団法人酪農育英会などの関係機関に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

このように拡大発展してきた酪農学園ですが、その前途は決して樂觀できるものではありません。否、もっと厳しい試練を課せられるであろうと思います。しかし、いついかなる時にあっても創立の初心に帰り、建学の精神を再確認し、特色のある教育研究の向上に努め、魅力ある学園を築いていただきたいと思えます。酪農学園史の発刊を機会に、特に故人になられた方々には衷心より哀悼の意を捧げる次第であります。

## 凡例

本書は標題を『酪農学園史二』（以下『学園史二』と略す）と定め、一九八〇（昭和55）年に刊行された『酪農学園史』（以下『学園史一』と表記する）と連続性を持たせた。

『学園史二』の編成は第一部酪農学園通史、第二部学校再編と現況、第三部事務局・関係団体・職員録の三部とし、第一部には主として酪農学園創立および組織の経緯、第二部には酪農学園が設置した各学校の変遷と現況、第三部には酪農学園事務局と関係諸団体、会社とともに酪農義塾創設以来今日まで就任・在職した役職員名を掲出した。

- 一、人名はすべて敬称、敬語を省略した。
- 一、書き表し方については、「新聞用字用語集」（共同通信社）によった。ただし、人名、地名など固有名詞は慣用に従った。また、外来語の表記は外国の地名、人名と同様片仮名を用いた。
- 一、引用資料と引用文については、原則として原文のままとした。その際、明らかな誤植は訂正した。また、漢字の一部を旧字体から新字体に、歴史的仮名遣いの一部を現代仮名遣いに改めた。
- 一、数表記については、確定数には一〇、一〇〇などを用い、約、おおよそを意味する概数には十、百などを用いた。

一、度量衡についてはメートル法と慣用のものを併用した。  
一、年次表記については西暦に従い、和暦は必要に応じて（カッコ）内に示した。ただし、図表の一部は西暦表記としてある。

# 酪農学園史 二 目 次

扉・背文字 佐藤 貢

序にかえて 酪農学園理事長 平尾和義…………… 1

発刊に寄せて 酪農学園学园长 黒澤力太郎…………… 5

凡 例…………… 9

## 第一部 酪農学園通史

序 章 酪農学園創立者 黒澤西蔵…………… 25

田中正造との出会い／宇都宮仙太郎から酪農の手ほどき／キリスト者として生き抜く／酪農自営／デンマーク農法の研究／社会活動／酪農は健土健民の母／「証言」

第一章 北海道の開拓と酪農…………… 35

一 北海道の開拓と農業の変容…………… 35

開拓使の設置と開拓／ケプロンとダンの功績／開拓の危機

二 行き詰まりの打開と酪農…………… 38

「牛馬百万頭計画」の策定／モデルはデンマーク

三	「酪連」の設立と歩み	40
	酪連の誕生／酪連の歩み	
四	絶妙の酪農人脈	43
	ダンから町村金弥へ／酪農トリオ／目指すは東洋のデンマーク	
<b>第二章</b>	<b>酪農学園の創立と初期の教育</b>	47
一	北海道酪農義塾の設立	47
	北海道酪農義塾設置への胎動／酪農義塾の機構と教育／三つの特質と農場教育／酪農義塾の教育目的／冬期学校と酪農義塾教育の成果	
二	戦中・戦後の混乱と農業教育	51
	当時の農業教育機関／農民道五則／戦後の教育正常化	
三	実学重視の教育	55
	農場教育の強化／農場の再編と中央農場／地方農場の変遷／工場実習と乳製品工場／乳製品工場の売却	
<b>第三章</b>	<b>学校の設置と変遷</b>	61
一	機農高等学校の開設と変遷	61
	酪農義塾教育の継承／迫り来る戦時色／戦後の学校改革／キリスト教教育の浸透／教	

会の設立とキリスト教講座／新制高等学校への移行／「農業協同組合科」(農村経済科) の新設／同盟休校／農業の変容と両課程の統合／委託実習／委託実習生受け入れ酪農 家名／生徒の減少と教育整備／校名の変更と統合問題	二	酪農学園短期大学の開設と変遷	72
「酪農学園大学部」として発足／三愛精神と実学教育／工場実習／学科とその推移／特 別入学制度と三愛塾／校名の変更	三	三愛女子高等学校の開設と変遷	79
市内唯一の女子高校／人格と徳性の情操教育／開校後の推移／学校の移設／教育内 容／短期大学との連携および英語科の設置	四	酪農学園大学の開設と初期の教育	85
設置への胎動と開学／開学式／樋浦学長の式辞・黒澤学園長のことは／三愛精神と実 学教育／学科の増設／人間形成と教養課程／学生の状況／大学紛争／学生生活と学生 寮の推移／開学後の変遷と動向／獣医学教育六年制と大学院	第四章	酪農学園の組織と変遷	97
一 土地・建物・財政の変遷	一	土地・建物・財政の変遷	97
学園用地の選定と取得／学園用地の沿革／学園用地の位置略図／農地および植林地の 現況／学園用地の現況／建物の変遷／学園内主要構築物・施設／酪農義塾の創立と財			

政／機農学校の設立と財政／戦後の財政と学校運営／長期財務計画／私学助成と財 政／学生・生徒数の減少と将来計画の策定／二〇〇二年度財務状況	二
経営機構の変遷	115
社団法人から財団法人へ／学校法人酪農学園・事務組織	
三 学校法人と寄付行為	116
学校法人酪農学園寄付行為	
四 理事長・学園長の交代	133
理事長／六代理事長に遊佐孝五・就任あいさつ／七代理事長に平尾和義・就任あいさ つ／学園長／歴代役員	
第二部 学校再編と現況	
第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合	145
一 各種学校	145
(1)酪農学園自動車学校／歴代酪農学園自動車学校校長／閉校時の教職員／卒業生数の状 況／(2)酪農学園短期大学酪農学校／佐藤貢理事長あいさつ／歴代酪農学園短期大学酪 農学校校長／業務停止時の教職員／主要出版物一覧／短期大学酪農学校卒業生数	

二	両高等学校の統合	160
	統合の基本的考え方／統合準備作業／校名の決定／正式に設置認可／統合は二段階方式／男子生徒は機農寮に／PTAなど関係団体／開校式および入学式／井上昌保校長の開校式式辞／生徒会合併式／校長の選任と教頭制／設置趣意書／歴代学校長／統合時の両高等学校教職員	
<b>第二章 とわの森三愛高等学校</b>		
一	建学の理念と教育活動	176
二	校名およびエンブレムの由来と校歌	177
	校名の由来／エンブレムの由来／とわの森三愛高等学校・校歌／本校の組織機構図	
三	教育課程	180
	(1)普通科〔特設進学コース・普通コース〕／(2)英語科／(3)酪農経営科	
四	年間主要行事	193
五	統合「一〇周年記念式典」	195
	村山昭二校長の式辞	
六	修学・研修旅行	197
	普通科修学旅行／ヨーロッパ酪農研修旅行	

七	図書館とメディアセンター 図書館／メディアセンター	199
八	クラブ活動 人間性・体力・自立心を養う／農業クラブ／朗報相次ぐ／体育系クラブ／文化系クラブ／クラブ活動の近年の主な成績／生徒会組織図／農業クラブ組織図	201
九	寮生活と日課 機農寮日課と入寮の心得／シオン寮日課と入寮の心得／生徒数の推移／教職員数の推移／現教職員	207
第三章	酪農学園大学短期学部	223
一	三学科体制とその後の変遷 坂本与市学長の入学式式辞／(1)教養学科の設置と変遷／(2)経営情報学科の設置と変遷	224
二	短期大学部酪農学科 附属農場における実習教育／卒業生の動向／学生数の推移／教職員数の推移／現教職員	233
第四章	酪農学園大学 教育組織の変容／教育サービスの強化／施設設備の整備	249

一	酪農学部	256
	(1)酪農学科／(2)農業経済学科／(3)食品科学科／(4)食品流通学科	
二	獣医学部	281
	(1)獣医学科	
三	環境システム学部	289
	(1)経営環境学科／(2)地域環境学科	
四	大学院研究科	300
	酪農学研究科酪農学専攻／酪農学研究科フードシステム専攻／酪農学研究科食生産利 用科学専攻／酪農学研究科食品栄養科学専攻／獣医学研究科獣医学専攻	
五	附属施設・機関	310
	(1)酪農学園大学・短期大学部附属農場／主要施設・主要農機具／(2)酪農学園大学・短期 大学部附属図書館／(3)酪農学園大学エクステンションセンター／学術交流協定締結先 一覧／酪農公開講座開催一覧／(4)酪農学園大学附属家畜病院・大動物臨床センター	
六	学生生活	338
	学生生活／学生寮／学生寮の推移／活発化する課外活動／課外活動団体名／奨学資金 制度／健康管理と医療互助会／学生相談室／学生会館／中央館ロビー・学生ホール／	

酪農学園生活協同組合

七 学生数の推移……………349

八 学生の進路状況……………355

九 開学記念式典と記念行事……………357

短期大学開学三〇周年・大学二〇周年記念式典と行事／短期大学開学四〇周年・大学三〇周年記念式典と行事／短期大学部開学五〇周年・大学四〇周年記念式典と行事

一〇 教職員数の推移と現教職員……………364

### 第三部 事務局・関係団体・職員録

#### 第一章 酪農学園事務局……………375

一 学園事務局……………375

創設と推移／学園事務局設置時の組織図／現在の事務局機構／現学園事務局職員

二 黒澤記念講堂の建設……………380

黒澤西蔵の銅像移設

三 学園創立記念式典と記念事業……………384

学園創立五〇周年記念式典・祝賀会／佐藤貢理事長の式辞／学園創立六〇周年記念式典・祝賀会／遊佐孝五理事長の式辞

四 創立者と名誉理事長の逝去 ..... 396

創立者黒澤酉藏の逝去と酪農葬／葬儀委員長町村金五葬送の辞／佐藤貢名誉理事長の逝去／平尾和義理事長の追悼のことば／黒澤力太郎学園長の追悼のことば

第二章 関係団体と会社 ..... 405

一 財団法人酪農育英会 ..... 405

二 財団法人酪農学園後援会 ..... 413

三 酪農学園同窓会連合会 ..... 421

四 北海道アルバータ酪農科学技術交流協会 ..... 429

五 酪農学園職員組合 ..... 434

六 クロバー食品株式会社 ..... 442

七 酪農学園貴農同志会（酪農学園職員OB会） ..... 447

第三章 酪農学園役職員録 ..... 453

一 酪農義塾役職員	453
二 酪農学園役職員	455
酪農学園史年表	509
編集後記	525
酪農学園略図	528

第一部 酪農学園通史

北海道の開拓が始まったのは、明治の新政府が一八六九（明治<sub>2</sub>）年開拓使を設置してからであり、以来、百三十余年の歲月とともに本道の農業は日本の食糧基地として重きを成すに至った。しかし、その過程には、過酷なまでの大きな犠牲が払われてきたのである。

特に、大正初期（一九二一）から昭和の初期（一九二六）にかけて北海道の農業は、地力の減耗によつて幾度も冷害、凶作に見舞われてその存亡の危機に直面していた。

こうした中であつて、酪農の先達たちは、酪農によつて本道農業の流れを変え、その再建を図ろうと考へて、農民の酪農教育を目指し、札幌村苗穂（現札幌市東区苗穂）の一隅に北海道酪農義塾（以下「酪農義塾」と略す）を興した。

酪農義塾教育は、その後、戦後の混乱、社会経済の変動など、わが国自体が未曾有の激変期にあつたため、その影響をまともに受けて幾度か存立の危機を経験しながら、七〇年の星霜を経て今日の酪農学園を形成するに至った。

この間、学園は大学院、大学、短期大学、農業高等学校、女子高等学校に加えて通信教育、自動車学校も設置し、その後社会の変容に合わせて閉校、統合、あるいは再編を行つて今日、文京台緑町の広大なキャンパスに、酪農義塾創設時の理想と伝統を守りながら新しい時代に向かつて歩みを進めているところである。

このような学園発展の姿をみると、酪連（後出）をはじめ多くの関係諸団体の援助、協力があつたことはもちろんであるが、酪農学園の創立者黒澤酉藏を中心とする、学園関係役職員の献身的な努力

を思わずにいられない。

これらの人々は、長年にわたって酪農振興に資する人間教育の理想に向かって衆知を集め情熱を傾けてきた。広大なキャンパスにキリスト教に基礎を置く酪農教育という、類例をみない新しい教育理念と使命を掲げて社会の信頼を積み重ねてきたのである。

一方、酪農学園の今日的発展の要因の一つに、札幌郊外の一寒村に学園用地を選定、取得した先見の明があったことも見逃してはならないが、特にこの地で営農にいそんでいた十数戸の農家の人々の理解と協力があつたことを忘れてはならない。

## 序章 酪農学園創立者 黒澤西蔵

創立者黒澤西蔵については、もはや多言は要さない。何よりも冊子『酪農学園の歴史と使命——私なぜ酪農学園をつくったか——』が学園全教職員に行き渡っているし、『酪農学園史一』にはその生いたちから最晩年まで詳述されているので本章では、黒澤の生涯の歩みの概要を記述しておく。

**田中正造との出会い** 黒澤は一八八五（明治18）年茨城県久慈郡世矢村（現常陸太田市）で元之助の長男として誕生した。貧しい農家だったので、母イノの行商で辛うじて生計を立てるとどん底生活だった。小学校（四年制）を出ると、農作業の合い間に近くの村の漢学塾に学んだ。生地は水戸学発祥の地、黄門・水戸光圀ゆかりの西山荘のすぐそばである。黒澤の生涯を貫いたすさまじいばかりの正義感と行動力は少年期に学んだ知行合一（ちこうぎょういつ）の水戸学が源泉とみることができよう。

向学心に燃える黒澤は一四歳で上京、神田数学院という私塾に給仕兼小使いとして住み込み苦学するのだが、一九〇一（明治34）年に起きた、田中正造の天皇への直訴事件が黒澤の血を沸かし、その運命を大きく変える。

記録によると、栃木県足尾銅山から流される鉱毒が渡良瀬川流域の田畑を荒廃させて村落住民に大打撃を与えた。農民救済の先頭に立った栃木県選出代議士田中正造は衆議院で銅山の即時操業停止を訴え続けたが、政府「銅山党」には馬耳東風であった。万策尽きた田中は明治天皇の行幸の列に直訴す



晩年の黒澤酉蔵 (1977)

るといふ思い切った手段をとった。衝撃は国中を走り、足尾鉍毒事件は初めて一大社会問題となった。まさに公害闘争の原点だった。これに感動した黒澤は田中の下にはせ参じて農民救済運動に身を投じ、各地の農民と懇談したり田中の連絡役などを果たし、官憲に逮捕されて前後六カ月間投獄される。この獄中生活の際、婦人矯風会会長の潮田千勢子より差し入れられた聖書によって、後年黒澤がキリスト者となる素地が培われていった。

その後、田中らの世話で京北中学校(旧制)を卒業した黒澤は心機一転、新天地を求めて北海道の地を踏む。一九〇五(明治38)年七月、二〇歳の時だった。常日ごろ「弟妹を自分の子供と思つて育てほしい」と言っていた母がこの二カ月前に亡くなり、幼い弟妹を養育する責任が黒澤の双肩にかかってきたからである。

#### 宇都宮仙太郎から酪農の手ほどき

札幌に着いた黒

澤は紹介状を持つて訪れたのが当時の北海タイムス理事阿部宇之八の自宅であった。「北海道で働きたいのですが、独立できる仕事はないでしょうか」と申し出ると、阿部は「君のような変わった男にうつつけの人物がいる」と言つて、米国帰りの牛飼いの宇都宮仙太郎を紹介した。上白石の宇都宮牧場に出かけると、宇都宮は「牛飼いの三徳(得)」を説明し、快く牧夫見習として採用して

くれた。これが黒澤の進む道を決定づけた。

牧場の一日はさすがに厳しかった。午前三時には起きてカマドに火をおこし朝食の支度の手伝いを買って出た。牧場の仕事は牛舎からのふん出しに始まる重労働は、小柄なこともあって骨身にこたえた。宇都宮から酪農を学び、さらに二年間の兵役を終えた一九〇九（明治42）年、山鼻屯田村（現札幌市中央区南一〇西八）で待望の搾乳販売業を始める。土地、家、それにたった一頭の乳牛も借り物であった。それでもかなりの開業資金がかかったが、これは兵隊生活の際支給される月一元二〇銭の手当の中から一元を貯金してためた二四円であった。

**キリスト者として生き抜く** 師と仰ぐキリスト者田中正造の感化や獄中での聖書に教えられるところも多く、さらには既に親交を深めていた佐藤善七らの影響も受けて独立した年のイースタに日本メソジスト札幌教会で、杉原成義牧師から洗礼を受けキリスト者として、生き抜くことを自らに誓った。この受洗が、後日酪農学園の教育理念とした神・人・土を愛する「三愛精神」や「健土健民」への提唱へと、大きく開花するのである。

**酪農自営** 黒澤の一日は早朝三時には起き、乳牛の世話や搾乳、そして五時から牛乳配達のために札幌市内を駆け回るのである。帰宅後は放牧や舎内の掃除、午後には再び搾乳、殺菌、ビン詰めと一連の作業が続く、午後一〇時ごろまで働き通した。これを年中一日も休まずに続けたのである。

黒澤と苦労を分かち合った妻・梅江のささやかな願いは「早くランプをつけずに起きられるようになりたい」ということであった。

このようにして黒澤酉蔵の搾乳販売にかけた努力と情熱が実り、得意先が次第に増え、たった一頭だった搾乳牛も増えていった。そこで気がかりだった郷里から幼い弟妹を引き取り、兄弟が力を合わせて働き抜いた。一人前の牧場経営（札幌市南一四西一五に移転）と自他共に認めたのは一九二二（大正12）年のこと。農地四ha、乳牛三〇数頭を持ち、近代的な牛舎、サイロなどを整えた札幌地方でも指折りの酪農家となった。

**デンマーク農法の研究**　当時、黒澤が研究傾注し続けたのは宇都宮から直接伝授された「デンマーク」であった。北欧の小国デンマークは酪農による循環農法でやせた土地を肥沃な土地によりがえらせ、バター、チーズの乳製品を輸出して国民経済を立て直し、福祉国家の道を歩む酪農先進国であった。全国に組織された協同組合が生産から集荷、製造までを手がけ、農村の支柱になっている。デンマークの農法、協同組合主義こそ理想——との信念を持つようになった。そしてその底流にあるデンマーク救国の指導者、グルンドビーの信仰や思想に深い感銘を覚えるのだった。

**社会活動**　酪農経営の基礎を盤石にした黒澤は、一九二四（大正13）年、道会議員となり、道会で拓殖計画問題を中心に活躍を開始した。

道議会活動で特筆されるのは、第二期道拓殖計画の策定に尽力したことである。一九二七（昭和2）年から二〇カ年計画で人口六〇〇万人、耕地面積一五八万ha、牛馬一〇〇万頭を実現するというものである。有畜機械化農業、デンマーク農法によって本道に寒地農業を確立しようとする黒澤の年来のビジョンが採り入れられた。当時の乳牛頭数が全国で一四万頭、本道で四万三、〇〇〇頭というから「牛



六尺棒を片手に佐藤栄作首相(左) 松野頼三農相(右から2人目)に酪農の原理を説く(1966.11)

馬百万頭計画」とはいかにも壮大なものだった。

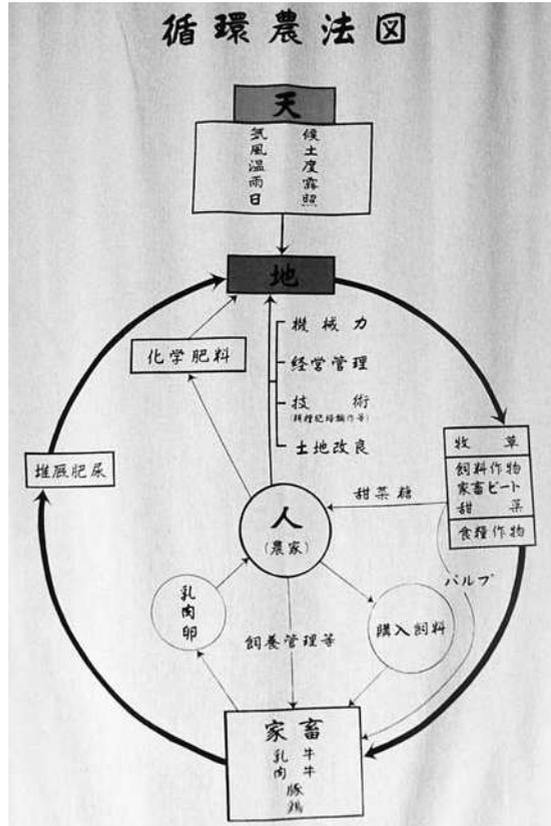
黒澤は酪農民の組織化とその運営面でも優れた手腕を発揮した。不況による練乳会社の牛乳買い入れ制限、乳価安などで苦境に追い込まれている酪農を立て直すため、デンマークのように酪農家が協同組合に結集して製造、販売を手がけようと一九二五(大正14)年に宇都宮らとともに北海道製酪販売

組合(以下『酪連』=雪印乳業の前身)を結成し、そして一九三三(昭和8)年には、酪農民を育成し、乳製品技師を教育するために酪農義塾を興すのだった。

一九四一(昭和16)年、酪連と道内練乳各社の合併で北海道興農公社が設立されると社長に推され、北海道信用購買販売組合連合会長、新北連会長なども兼務、本道農業関係団体の第一人者となった。

政治的にはさらに一九四二(昭和17)年、衆議院議員に当選、国政の場でも活躍、終戦直後には全国の同志とともに協同組合主義を掲げた「日本協同党」を結成したものの、公職追放となり、政治活動から引退する。(公職追放の際のGHQ提出資料の中から宮部金吾博士と小野村林蔵牧師の「証言」を末尾に掲載)。また、一九五四(昭和29)年から一九七〇(昭和

循環農法図



学園建学の理念である「三愛精神」と「健土健民」は黒澤精神の集大成ともいえる。特に、いつも念頭にあったのは化学肥料偏重、農薬多用で荒廃が進んでいる農地のことであつた。健康な国土によつてこそ健康な国民が維持される、と「健土健民」を唱え、「土地に堆きゅう肥を入れ、健全な土地にしなければ取り返しがつかなくなる」と循環農法の実践を説き、酪農は「健土健民」の母と高唱しながら九七年の人生を全うした。

45)年までの一六年間にわたつて道開発審議会会長を務め、政府への建議活動を展開した。この中から新酪農村の建設や北海道の食糧基地構想を政策として具体化させるなど、多彩な業績を残した。

酪農は健土健民の母 黒

澤は九七歳の生涯を閉じるまで、多岐にわたる分野で大きな働きをしたが、やはり出色は酪農の振興であつた。酪農

「証言」1

北海道大学名誉教授 理学博士 宮部 金吾

私は北海道大学前身である札幌農学校第二期の卒業生でありまして、クラーク先生が帰米されてから間もなく入学し、間接ではありませんが、同先生の感化を比較的濃厚に受けた者であります。

私は青年時代より母校で教鞭をとり、現在名誉教授として未だに専攻の植物学の研究を続けて居る者であります。

黒澤酉蔵君とは三十年來の交わりで、その清廉なる人格と事業に対する情熱については常に敬服しているものであります。

彼は北海道の如き北方の農業は、酪農によらねばならぬとし、デンマークを理想として平和な農村の建設を夢見て、今日まで闘って来ました。彼は地方並に中央政界にも出たことがありませんが、彼の言動より忖度すれば、それは総て日本の酪農を発達させるための「一手段」であつたと見られるのであります。恐らく彼の心境はそうであつたろうと思います。

彼は熱心なクリスチャンとして社会事業に対する隠れた援助者であり、禁酒運動などにも非常に力を入れておりますが、それはおよそ平和な社会、人類の幸福への彼の精進の現れであります。

敗戦の日本は民主的な方法によって再建を急ごうとしているが、便乗的民主主義者の多いのを残念に思います。

吾、すでに齡九十歳にして、クラーク先生の遺された民主的精神に基く社会活動を許さぬ国家社会の現状を眺めて、焦燥の感、切なるものがあります。この時、私の黒澤君に期待するもの、洵に大なるものがあるであります。彼の公私一切の生活は、人類の幸福を招かんとする一點に凝集しており、況んや、偏

狭きょうなる国家主義者とは正反対の思想を有していることは、私の誓ちかつて証言するところでありませう。

昭和二十四年四月十六日

右

札幌市北六条西十三丁目二番地

宮部金吾

「証言」2

札幌北一条教会牧師

前日本基督教団北海教区長

北米長老教会伝道局設立

北星高等女学校前校長

小野村 林 蔵

私は日本基督教団北一条教会牧師としての責任に於いて、黒澤西蔵氏の人柄について、証言することを許して頂きたいと存じます。

私は大正七年（一九一八年）十月に、札幌日本基督教会（現在の札幌北一条教会）に牧師として就任してより三十余年間、同氏と親交を続けて居ります。従って、同氏の人ひとと為なりについては、相当に正しい知識を持つて居るつもりであります。

同氏は明治四十一年（一九〇八年）、日本メソジスト札幌協会で受洗してより今日に至るまで、約四十一年間、同教会に属する忠信な信者として信仰の操守そうしゅを持じて来られました。

同氏は若くして受洗するや、その信仰の精神そんしんから、北海道を酪農の楽土らくどとすることにより、「乳と蜜との流れる」平和郷たらしめたとの念願をもつて、今日まで、四十余年を一貫して、努力経営をつくして来た人であります。自由独立を愛する純粹の農民の出身であり、今日にもなお、農民の心に生きつつある人でもあります。北海道の酪農が今日の発展を遂げるに至ったには、同氏及び同氏と志を同おうして、終始祈いのれ共いにしながら協力して来た同信の友たる数名の酪農家たちに、その功績の大半があることは、北海道の農のう事じを知る人々のひとしく認めるところであります。

筆が私事に及んで恐縮であります。太平洋戦争中、私は「言論、出版、集会、結社等臨時取締法」に触れて投獄せられ、平和主義、自由主義、親米主義者という理由のもとに、昭和十九年九月に、懲役八月の判決を受けるに至りました。その時、氏は当時の社会状況のきびしさを顧かへりみず、官権の圧迫や社会の指弾にされされつつある私の味方として、常に弁護の側に立ち、八方尽力して下さいました。これは当時としては容易ならぬ勇氣と決断とを要する態度でありました。同氏の衷心に燃ゆる世界主義、人道主義的思想、感情の発露であることは明白であります。

（注）この二人の「証言」資料は「黒澤酉蔵研究会」主宰浅田英祺氏の提供による。

## 第一章 北海道の開拓と酪農

### 一 北海道の開拓と農業の変容

開拓使の設置と開拓 酪農学園七〇年の背景には困難を極めた北海道の開拓が深いかかわりを持っていた。

明治維新（一八六八年）になって本道は、新政府に統括されるところとなり、一八六九（明治<sup>2</sup>）年七月北海道と改称され、渡島、石狩、胆振、日高など一一国・八六郡に区画された。

開拓使の初代長官は鍋島直正であり、二代目は東久世通禧であったが、実質的には一八七〇（明治<sup>3</sup>）年五月、開拓次官になった黒田清隆がさい配をふるった。黒田は官僚制度を整えるとともに、一八七一年（明治<sup>4</sup>）年、それまで函館にあった施政の本部を札幌に移した。一方、廃藩置県によって一八七二年八月には、本道の藩領のすべてが開拓使の管理下に入り、ここに本格的な開拓の歴史が開かれた。

当時、本道の人口は一〇万人足らずであったため、開拓使の当初の事業は府県からの移民の招来にあった。そのため、手厚い保護の移民政策がとられ、やがて多くの移民が入植したが、思うがままに進まぬ開墾と厳しい自然条件に抗しきれず離脱したものも少なくなかった。しかし、間もなくその定着者によって本道の開拓は確かな歩みを始めたのである。

ケプロンとダンの功績 開拓使次官の黒田清隆は広く本道を踏査した結果、その開拓のモデルをアメリカに求めることになり、一八七一年（明治4）年、自ら二十余名の留学生を連れて渡米し、合衆国農務長官ホールレス・ケプロンはじめ、多くの学者、専門家の招へいを実現した。

同年九月、団長として来日したケプロンは道内を精力的に調査し、その緯度、気候、資源、土質から未開の荒野は牧畜業に好適であると判断し、各種の種苗、農機具、家畜の導入など、本道における農業の方向、畜産の前途について明快な示唆を与えるとともに、その具体策として農耕園の開設や学校の設置などを開拓使に進言した。

そのことによつて東京、札幌、七重、根室に官園が設けられ、続いて真駒内種畜場が開設されるなど、アメリカ農業の経営・技術が本道に移入され始めた。ケプロンらの描いた開拓の青写真は経営の大型化とともに家畜の導入であった。そのためアメリカから基礎牛四〇頭と緬羊一〇〇頭を輸入することになり、その家畜の輸送に当たったのがエドウィン・ダンである。

ところが日本にはこれだけの家畜を管理できる技術者がいなかったため、ダンはケプロンの要請で日本に残り、家畜の管理に当たりながら農村子弟を集めて飼養管理の指導をすることになった。

日本人の妻を迎えたダンが日本に永住を決め、北海道の本格的な開拓指導に乗り出したのは一八七六（明治9）年である。彼らの紹介した農法は従来とは異質のもので、まず経営規模の拡大と有畜農業であった。

しかし、ダンらの指導にもかかわらず、酪農は必ずしも普及されなかった。本道の気候、風土、資

金、国民性など困難な問題に直面し、その実践に多くの歳月を要した。そのころのほとんどの農民は畜産への関心は薄く、本州府県の穀しゆく農業や水稻に強い郷愁を抱いていたからである。

一方、教育についても札幌農学校（現北海道大学の前身）が設置され、人材の養成、農業技術の研究、普及が急速に進められた。

ケプロンの日本滞在は四カ年に及び、この間新しい欧米式の農業技術を紹介しながら、各分野から招へいした欧米人は七五名を数えている。その中に真駒内種畜場を開設したエドウィン・ダンをはじめ札幌農学校のウイリアム・S・クラークも含まれていたことは特筆に値するものであった。

**開拓の危機** 開拓使による一〇年計画が終わり、一八八二（明治15）年、開拓使に替わって函館、札幌、根室の三県と北海道事業管理局が設置された。三県一局の分県時代となったため、全道一円の行政は統制を欠き、ようやく軌道に乗りにかけた拓殖事業は活気を失い頓挫するに至った。

しかし、一八八六（明治19）年一月になって、北海道庁が設置され全道は一つに統括されて、開拓事業も再編成された。その過程でケプロンやダンが直接指導した家畜を採り入れた農業経営の意義が徐々に理解されるようになった。

大正初期（一九二一）の本道農業は、明治末期（一九一一）からの不況、一九一二年の冷害、凶作によって著しく疲弊し、また地力の減耗もあからさまな問題となってきた。

当時、本州より移住してきた農民は、未知の自然の中にあつて、その気象や土地に適した農業を営

む知識や経験もなく、府県の延長的農法に終始していた。開拓初期の大地は豊沃であったが、彼らは広大な耕地の地力維持や愛土精神に欠け、地の利、不利をみてはほかの地へ転住、転職を自在にしていた。

さらに、こうした難局の最中に勃発した第一次世界大戦によって、もともと商品価値の高かった本道の畑作物は、海外への輸出、価格高騰の波に乗って投機的な対象となり、青えんどう、菜豆類、でんぷん原料のばれいしょ、あまなどが空前の価格で取引された。一部の農家は農業の本質を忘れてひたすら利益の追求に走り、単作・連作を繰り返し、地力の減耗という取り返しのつかない事態を自ら招いた。

やがて大戦が終わり、輸出農産物の価格が暴落することによって大混乱が起こり、倒産、離農者が続出し、疲弊した大地と堅実経営の農家のみが残された。さらに、昭和初期（一九二六―）の深刻な不況に加えて、一九三一、三二、三四、三五年と連続して本道を襲った冷害、風水害は本道の農業に壊滅的な打撃を与えた。思えば、日本の資本主義の発展とともに歩んだ本道の農業は、太古からの豊沃な大地を生かし切れずに収奪の道を歩みつづけ、冷害、凶作という自然からの報復を受けることになったのである。

## 二 行き詰まりの打開と酪農

### 「牛馬百万頭計画」の策定

このように地力略奪型の農業、冷害凶作と一大危機に直面した本道の

農業は、その行き詰まり打開のため根本的な立て直しを必要とした。

本道の気候や風土に最も適した農業経営、すなわち、適地・適作による北方寒地農業の確立——が、本道農業界の合言葉となり、官民一致しての指針となった。その具体化のために従来の府県延長的主穀農業に替わって有畜農業が登場し、特に、乳牛飼養を主とする酪農経営が本道農業立て直しの主役の座を占めることが確実となった。

北海道の酪農は、一八八六（明治19）年ころから、都市周辺の飲用牛乳と官、民牧場や民間会社によるバター、練乳の製造によって推進されたが、当時の需要状況からしてみるべきものがなかった。

その後、本道農業の衰退の兆しの中にあつて、その行き詰まり打開策として、一九〇五（明治38）年、北海道庁は有畜農業による農業経営の根本的改革を図ることになり、乳牛に対する奨励、補助政策を決めた。さらに「第一期北海道拓殖計画」に基づく畜産政策は、資本家の乳業参加をうながし、乳牛を飼育する農家が次第に増え、低迷していた練乳事業も脚光を浴びることになった。

また、黒澤西蔵、後出の深澤吉平が道会議員として、一九二六（昭和元）年に終わった第一期拓殖計画に引き続き策定された「第二期拓殖計画」の中に「牛馬百万頭計画」を盛り込んだ。これによって本道農業における酪農の位置付けを明確にするとともに、酪農に対する奨励、補助政策の道を開いたため、酪農は急速に発展することになった。

**モデルはデンマーク** その一方で、かねてよりデンマークの農業に強い関心を持っていた宇都宮仙太郎らが中心となつて、デンマーク式農業の導入を提唱した。その結果、一九二二（大正11）年、時

の北海道長官宮尾舜治は、五名の官民をデンマークに派遣して研究に当たさせた。そして翌二三年にはデンマークとドイツより、それぞれ二戸の酪農家を招いて、飼料作物中心の輪作式経営による酪農とビートの栽培を紹介し、「大農式」のアメリカの農法に対し、有機的小農経営に適する有畜複合経営を本道に導入する契機としたのである。

大正から昭和の初めの冷害、凶作後に急速に広がりをもせた酪農には、こうした背景があった。また、民有未墾地処分法による自作農家育成の道が開かれたことも、大きな要因となった。このようにして、本道農業にデンマーク型の農業が導入され、畑作農業の体質を変えてゆくのであるが、デンマークから学んだのは酪農技術にとどまらず、その根底にある農民の農業観や生活観をはじめ、農民の強力な組合組織や教育施設にまで及んだ。

### 三 「酪連」の設立と歩み

**酪連の誕生** 当初、官営牧場で始められたバター、チーズ、練乳などの乳製品製造は、その後民間に移り、個人牧場でのバターの製造、民間企業による練乳の製造を母体として発展していたが、たまたま、第一次世界大戦時における乳製品の輸入減少は、国内乳業界に活気を与え、急速に発展した。ところが、一九二三（大正12）年九月の関東大震災によって市場が災害を受けた上に乳製品の関税が撤廃されたため、価格の安い外国の乳製品が一時に大量輸入された。このため、基盤の弱かったわが国の乳業界は混乱し、北海道、極東、森永の道内三練乳会社は販路を失い、乳製品の製造を制限して

原料乳の買入れを差し控えた。そのため買入れをめぐって生産者との間に紛争を起こすことになった。

このように乳業会社の経営が直ちに生産者に影響を与え、その経済生活を脅かすという事態になったため、宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵、佐藤善七、深澤吉平らを中心とした酪農先達たちは、デンマークをモデルとした組合製酪事業を興して、これに対処することを考えた。デンマークに習って、酪農民が結集して乳製品の製造から販売まで自分たちの責任で遂行するのが製酪組合であった。多くの畜牛家と協議を重ね、六百三十余名の同志を結束して、一九二五（大正14）年五月有限責任北海道製酪販売組合を設立し、札幌村野津幌（現札幌市厚別区上野幌）の出納農場の製酪所を借りて、バターの製造に着手した。

しかし、全道一円を区域とした単位組合は、産業組合法上認められないという道当局の指摘があったので、その指導下に町村を単位とした連合体に組織を変えて、翌二六年、石狩、空知管内に二五の単位組合を組織して、「保証責任北海道製酪販売組合連合会」（「酪連」）を設立したのである。

**酪連の歩み**　練乳会社と並立の形で出発した酪連は、原料乳の増加に伴い仮工場が狭くなり、交通の便も悪いために銀行より資金を導入してその規模を拡大し、札幌村苗穂（現札幌市東区）に近代的設備を持った工場を建設しバターの生産は軌道に乗った。

昭和（一九二六）に入って世界経済恐慌の余波により再び乳業界の不況は深刻となり、前記の練乳会社は事業を縮小し、地方の工場や集乳所を閉鎖して、再び原料乳の買入れを制限した。

酪連は農民を基盤とした組合組織であった立場上、これらを傘下に収め、全道に集乳網を広げて、一九三三（昭和8）年には本道の原料乳はすべて酪連が一元的に集乳した。その中から練乳会社に対して必要量を供給するという、いわゆる原料乳の統制契約を結び、さらに酪連は練乳の製造を中止し、練乳会社はバターの製造をやめるといふ、協定を結んだ。

これは組織された農民の団結と酪連が常に酪農振興の立場で事業を運営したためでもあり、その上、酪連製造のバターの品質が優れていた結果でもある。さらには、第二期拓殖計画による財政補助の裏付けがあったことも見逃せない。

その後、酪連はバター、アイスクリーム、チーズ、カゼイン、市乳の製造販売へと事業を拡大していったが、絶えず農民の指導啓発に努めた。

酪農経営は穀しゆく農業と異なって乳牛が介在するので、多くの知識、技術を必要とする。また道東、道北地方のいわゆる冷涼地帯に乳牛を導入し、経営を安定させるためには、すぐれた地域リーダーの存在が不可欠であった。そのため、後述の酪農義塾を設置し、酪農家の子弟や酪連職員の酪農教育に踏み切ったのである。

やがて時局は、日華事変に伴う戦時体制下突入、酪農調整法をはじめとする経済統制法が次々に公布施行されるに及び、農民の意向に従い、各練乳会社との合意によって、一九四〇（昭和15）年、明治製菓、極東練乳、森永練乳と自主的に統合し、「有限会社北海道興農公社」を設立したが、四二年、北海道、拓銀、北連などの資本参加によって組織を株式会社に変更し、製酪事業のほか、食品、肉加工、



酪農界の総帥的存在であった  
宇都宮仙太郎

皮革、土地改良、種苗、製菓などの事業を包含する農業部門の一大総合事業体に変身した。  
戦後、農民と従業員を株主とする株式の民主化のもとに、一九四七（昭和22）年、北海道酪農共同株式会社に組織を改めて再出発したが、一九五〇年、過度経済力集中排除法によって、雪印乳業株式会社と北海道バター株式会社（後のクロバー乳業株式会社）に分割されたが、一九五八（昭和33）年、再び合併して現在の雪印乳業株式会社となった。

#### 四 絶妙の酪農人脈

ダンから町村金弥へ 先に述べたように北海道の開拓は明治期に入ってからであり、広大な未開地を有する北海道の開拓に欧米式の農法を採り入れようとケブロン、ダンらを招いたが、しかし、家畜を主体にした有畜農法や新しい農業技術も理解されず、土地は堆肥や肥料も使わないためにやせ細り、三年に一度の割合で見舞われる冷害凶作に開拓農民は困窮を極めていた。

このような状況の下、ダンの酪農の意志を受け継ぎ、そして育てたのは札幌農学校の二期生でクラーク博士の影響を受けた町村金弥であった。町村は在学中からダンから指導を受けるなど、わが国酪農研究の第一人者であり、後に真駒内種畜場の場長になった人である。

一八八五（明治18）年八月のある日、種畜場の町村金弥の下に、入門を請うため、はるばる訪れたのが大分県中津出身の宇都宮仙太郎であった。

**酪農トリオ** 宇都宮は二年間、種畜場の牧夫になって働き、町村金弥から酪農の真髄を学んだ。さらに、三年間本場アメリカに渡って、各地の牧場で血のにじむような修業に励みウイスコンシン大にも学んだ。そこで世界的に著名なヘンリー博士やバブコック博士に師事し、帰国後は自ら札幌で牧場を経営しながら酪農振興に尽力した。

宇都宮はウイスコンシン大学でヘンリー博士の記念講演を聴き、雷撃に打たれたようなショックを受ける。「アメリカ農業は、すべからずデンマークに学ぶべし」ということであった。アメリカの上を行くデンマーク——宇都宮はこの時の感動が生涯忘れられず、デンマークに強い関心を持つようになっていた。

序章で触れたが、一九〇五（明治38）年七月、この宇都宮牧場の門戸を叩いたのが茨城県出身で二〇歳の黒澤西蔵である。

黒澤は、宇都宮仙太郎、佐藤善七らとともに酪連や酪農学園の創設に奔走するが、学園建学の精神「健土健民」は、田中正造と宇都宮という二人の師によって養われた精神に起因している。

佐藤善七は宇都宮とは早くからの知り合いであり、また黒澤が独立する際、土地や建物の世話をするなど、親しい仲であった。ことに製酪組合や酪農学園創立の際には要<sup>かなめ</sup>となつて実務を担った。この三人は生涯強いきずなで結ばれており、世間ではこの三人を親しみを込めて「酪農三羽ガラス」と称

した。

黒澤と同世代に、深沢吉平と町村金弥の長男・町村敬貴がいる。深沢は出生、渡道の年、信仰、デนมーカー農法や協同主義を唱えたところも黒澤と実に似ており、黒澤とともに酪農家の声を道会議員、国会議員として道政や国政に反映させていくスポークスマンの役割を果たした。

敬貴は一九〇六（明治39）年アメリカに渡り、一〇年間各地の牧場で研修し、さらにウイスコンシン大学に学んだ。帰国後は牧場を開き、わが国の乳牛や土壤改良に多大の業績を残した。また、敬貴は文京台キャンパスの選定および購入について種々仲介の労をとるなどその後の学園形成についても力を尽くした。北海道知事として酪農に深い理解を示した酪農学園後援会初代会長の町村金五は敬貴の実弟である。敬貴の創設した町村農場は末吉に継がれている。

この二人もまた、宇都宮、佐藤、黒澤らの盟友であった。彼らは「北海道の農業は酪農でなければ確立できない」という堅い信念で結束することによって際立った相乗効果を生みながら、わが国酪農の基盤を固め、そして高めていったのである。

**目指すは東洋のデนมーカー** これらの人々の出会いは師弟関係であったり、信仰を通じての友人であったり、時には血縁関係であった。その絶妙の酪農人脈は、まさに天の配剤であり、運命の糸で結ばれた縁<sup>えにし</sup>であった。彼らの究極の理想は、世界一の酪農国として繁栄しているデนมーカーをモデルに据え、北海道を東洋のデนมーカーにするべく壮大な夢を描いていたのであった。

数百年をかけた欧米の酪農を、わが国は実質的には四、五〇年の歳月で基盤をつくり上げ、ピーク

時の一九六〇（昭和35）年には四一万の酪農家戸数を数えるに至った。それには多くの理由もあろうが、その一つには日本酪農の黎明期に海外に指導者を求め、ケブロン、ダン、あるいは札幌農学校のクラーク博士らのすぐれた指導者に恵まれたからであろう。

北海道の酪農は、いかなればケブロンが立案して、ダンが実践指導した。そして、それを引き継ぎ育てたのが町村金弥であろう。その金弥から直接教えを受けた宇都宮仙太郎を筆頭とし、その宇都宮の理想を受け継いだ黒澤酉蔵、佐藤善七、深澤吉平らは生涯を酪農発展に捧げた同志であった。このほか、本田栄三郎、北村謹、幡野直次、町村敬貴、佐藤貢らの存在も忘れることができない。

さらに北海道農業の特殊性をよく理解し、英断をもって酪農推進政策を遂行した北海道庁長官宮尾舜治、根釧原野に酪農の先便をつけた同長官佐上信一、道庁技師の石澤達夫の活躍も見落としてはならない。

これらの人びとの多くが、酪連の創立者であるとともに酪農義塾の創設に当たって役職員になって自ら尽力するなど酪農学園の礎いしづえになり、精神的指導者ともなったのである。そうして彼らに共鳴し、深い理解を持って協力した人たちが後を絶たない。もし名を挙げ始めたら際限がないだろう。

このような時代背景の中で、多くの先達によって酪連が結成され、そして酪農学園の始祖校である酪農義塾が創設されたのであった。

## 第二章 酪農学園の創立と初期の教育

### 一 北海道酪農義塾の設立

北海道酪農義塾設置への胎動　酪連の事業も年とともに軌道に乗って安定し発展をみることになり、懸案であった道内の原料乳統制問題も一九三三（昭和八）年に入って一段落した。一方、北海道の農業は酪農先達たちの長年にわたる努力によって、有畜農業への転換がようやく浸透し、乳牛を飼養する農家が年ごとに増えてきた。

酪連専務であった黒澤酉蔵は、かねてから農民教育に重大な関心を持ち常にその必要性を痛感しており、あらゆる機会をみては酪農教育機関の設置を説き、関係者の意思統一に努めるとともに外部に対しても積極的な働きかけを始めた。

一九三三（昭和八）年五月、真駒内種畜場で開かれたデンマーク会（デンマーク農業の研究会）において、黒澤は学校設置についての私案を発表したところ、同席していた佐上北海道長官をはじめ多くの者から賛同を得ることができた。

酪農義塾の機構と教育　そのころ本道には幾つかの農業学校や農業の指導機関があったが、酪農についての専門指導教育の施設は見るべきものがなかった。そのこともあって、この計画は急速に進

んだ。北海道酪農義塾（以下酪農義塾）の教育は現職の北海道長官佐上信一をはじめ、酪連会長宇都宮仙太郎、同専務黒澤西蔵、同常務佐藤善七、道立農業試験場長安孫子孝次、道立種畜場長相原金治、北海道帝国大学教授上原轍三郎、デンマーク会出納陽一らが発起人となって進められた。そして、一九三三（昭和八）年一〇月一日、札幌村苗穂（現札幌市東区苗穂）の酪連用地内に新築された塾舎に酪連、産業組合、集乳所職員ら二五名を集め、修業期間一カ月の短期講習を開始した。

その直後、酪農義塾創設の主目的であった農村青年の酪農教育と取り組み、翌一九三四年二月一日、全道の農村より選抜された八〇名の生徒を迎えて全寮制による実学教育（修業年限一カ年）が始まった。

酪農義塾の教育は農業の知識、技術を実習によって体得せしめることにあったが、デンマークの農業学校教育をモデルとした人間教育にも大きなウェイトをおいた。

その教育機構は

① 酪農科Ⅱ将来自ら酪農に従事する者。② 製酪科Ⅱ酪連や産業組合における技術、事務職員となる者。③ 補習科Ⅱ随時酪農、製酪について講習を行う。

この三科とし、教育は毎年二月に始め翌年一月に終わることにした。つまり、一カ年を三期に分けて最初の三カ月間は精神教育と基礎学習、次の六カ月間はもっぱら農場や工場において実習に努め、体力の強化と技術の習得、残りの三カ月間は、この間の教育を反復、補修することとした。

**三つの特質と農場教育**

また、この酪農義塾の特質は次の三点であった。

① 少数精鋭主義（酪農自営を行うとともにその地方の指導者となるため、厳しく人選した）

② 全寮制主義（教師と生徒が寝食を共にすることによる）

③ 実学主義（直接実習に従事することによって生産、経営技術を体得する）

しかし、この三つの教育目的を達成するためには酪農義塾の直接の指導者の育成が先決であった。そのため、厳しい経済状況の中にありながらも中曾根徳二、野喜一郎の両講師をデンマークに留学させてすぐれた技術と精神を修得させて塾教育に反映させるなど、当時としては画期的な教育を実行した。

酪農義塾の一年制酪農教育は毎年二月から始め五月までに一期の教育を終え、製酪科の生徒は酪連の工場において実習教育に入ったが、酪農科の生徒は酪連用地の第一農場と新たに札幌村三角（現札幌市東区）に購入した一一haの第二農場で玉ねぎや牧草を作付けした。また、生徒自らの手で牛舎やサイロを建設、有名牧場より寄贈された乳牛を飼養、酪農経営と乳牛飼育の実習を始めた。

その後、この第一農場は酪連が使用することになったため、三角の第二農場のみでは乳牛の飼養や教育上支障がでてきた。そのため、一九三八（昭和13）年一〇月酪連が取得した札幌村野津幌の出納農場跡地二一haに移転して、本格的な酪農経営と酪農教育を実施したのである。

**酪農義塾の教育目的** 酪農義塾設置の目的は、農村青年を教育訓練し、酪農経営に習熟せしめ適地、適作による農業の経営改革によって、本道独特の寒地農業を確立するための中堅幹部を養成することであった。

したがって、酪農義塾における教育では生徒を精神と身体の両面により徹底的に鍛えることにした。まず、勤労と実習によって体力の増進と酪農の知識、技術を体得させることにし、生徒全員を塾に収容して塾内、圃場、畜舎、工場はすべて教室とみなし、晴耕雨読、流汗悟道——を教育の基本とした。精神教育では酪農義塾を一つの道場と考え、修養と鍛練によって人格の高揚と盤石不動の精神を植えつけ、農業者としての確固たる人生観と農民精神の育成に努めた。

一方、農村経済の組織的改善を図るため産業協同組合主義の教育にも意を注いだ。

**冬期学校と酪農義塾教育の成果** 一方、一九三六（昭和11）年より苗穂の塾舎を活用して冬期学校を開設し、農村青年に対する酪農教育を行ったが、わずか一週間の合宿教育にもかかわらず、経営合理化運動とともに多くの反響を呼んだ。さらに一九三八年からは女子部も開講した。一九三九年以降は酪農義塾のほかに各地に冬期学校を設けて講師を派遣開講し、一九四四（昭和19）年まで継続実施したが、その受講人員も一、二一四名を数え、酪農の普及と農村の再興に大きな力となった。

このように酪農義塾の教育は開設以来黒澤塾長を先頭に、各界の指導者やすぐれた教師たちによって、着々と教育の成果を収めていた。一九三六年六月、文部次官山本厚三が来塾し特別講演を行い、また七月には社団法人として認可されるなど、その存在は社会の注目を集めるようになった。

その間、酪連はじめ関係者の強力な財政援助もあって教育内容も充実するとともに、施設の拡大も進み、すぐれた卒業生を社会に送ることによって、酪農の振興に寄与した。

しかし、日華事変の進展、戦局の拡大に伴い指導者や若者の軍隊への召集、産業徴用者も増え農村

の空洞化が進み塾教育も限界に達し、その存続が困難になったため後出の機農学校の設置、充実を待って一九四四（昭和19）年一月、一〇期生の卒業を最後に発展的に解散し、その施設などのすべてを同校に委譲し三月三十一日閉塾した。

酪農義塾の教育は一〇カ年に過ぎなかったが、多くの酪農自営者や酪連、産業組合の基幹要員を養成したほか、短期講習、冬期学校の開設などによって開拓以来の略奪農業や冷害、凶作に悩む本道農業に大いなる一石を投じるとともに、その後の酪農発展の基礎を築いたものとして高く評価されていた。

## 二 戦中・戦後の混乱と農業教育

**当時の農業教育機関** 商業、工業を含めたいわゆる実業教育が、わが国の教育制度の中で定着することになったのは、日清戦争後日本経済が発展期に入った一八九九（明治32）年に「実業学校令」が施行され、同時に「農業学校規程」が公布されてからである。

本道では一九〇七（明治40）年に設置された空知農学校（現岩見沢農業高校）が最初であり、続いて一九二〇（大正9）年、十勝農学校（現帯広農業高校）、一九二三（大正12）年、永山農学校（現旭川農業高校）が設置され、本道農業の中堅技術者養成に役割を果たしていた。

そのほか、農業試験場に技術者養成の機関が設けられ、さらに、小学校に付設された実（農業補習）学校も農民養成に貢献していたが、この補習学校は一九三五（昭和10）年、青年訓練所と一体化し青年

学校となり、一九三九（昭和14）年には義務制となって戦時下の体制がとられることになった。また後に、道においても農学校の不足に対し、一九三九年、美幌農林学校、一九四一年には大野、倶知安、静内にそれぞれ農学校を設置した。

こうした農業教育の中にあつて酪農義塾の教育は、当時としては最もユニークな教育方針や内容を持ち、本道農業教育に新たな道を開くものとして大きな期待が持たれていた。しかしこの義塾も日華事変の進展によってその継続が困難となり、一九四二（昭和17）年、学制に基づく機農学校の設置となった。

この機農学校では、酪農義塾の教育方針を踏襲して生徒のすべてを学校寮に収容し、農場即教室、実習即授業の実学教育を基本方針としていた。

しかし、この学校教育も太平洋戦争下にあつて多くの制約を受けることになった。つまり、すべてが戦時体制にあり、本校においても皇道農業、兵農一致の精神が強調され始めた。軍事教育の実施に並行して、教育の統制強化に関する法令が次々に公布、施行された。

一方、生徒や教師の徴兵、応召も相次いだため学校教育は大きな混乱の中で一九四五（昭和20）年八月一五日、終戦を迎えた。

#### 農民道五則

このような混乱の中にあつても学校教育は附属農場、畜舎、製酪工場等における実習を本位とし、いわゆる晴耕雨読、流汗悟道、実地の体験によって心身の鍛練を図らんとするものである、というものであった。ここに明らかなように、実習を本位とする実地教習とは、デンマークの

農民教育の在り方を範とするものであって、特に実学教育は現在の学園建学の精神の一つの柱として一貫して受け継がれているものである。

ところが、農民精神の唱導については、当然現在の建学精神のもう一つの柱である三愛精神によって展開されるべきものであった。しかし、当時のわが国は既に戦時下の状況にあり、教育も国家主義的統制を強化されつつあったので、キリスト教に基づく三愛精神を標榜することはおよそ不可能であった。したがって、農民精神の発露は黒澤の唱える「農民道五則」によって展開された。危機にある農業を振興し窮乏の底にある農村を更正することによって、日本経済の発展を期する黒澤は、農民が実践すべき農民道徳を農民道として提示した。これは酪農義塾の寮生、その後の機農学校においても一九五四（昭29）年まで各寮で毎朝朗唱している。この「農民道五則」とは次のようなものである。

一、農民は誠そのものたれ

一、農民は天地の経綸に従え（土地の役目を知れ）

一、農民は土を愛せよ

一、農民は勤労を尊び儉約を守れ

一、農民は協力一致せよ（産業組合によって団結せよ）

この土を愛せよ、産業組合によつて団結せよ——というのは三愛精神を投影した内容であつて、この表現において三愛精神の一端をくみ取ることもできるが、三愛精神そのものは酪農義塾の方針においては伏せられていたといえよう。

**戦後の教育正常化** 戦争の終結によってわが国の教育制度は根本より変革され、連合国の占領下に再編成の道を歩むことになった。

一九四六（昭和21）年一月、新しい「日本国憲法」が公布され戦後日本の進むべき方向の基礎が明確化した。一九四七年三月には「教育基本法」の公布、施行によって教育の理念や方針が定められ、同時に「学校教育法」が制定された。すなわち、六、三、三、四の現行学制の発足である。

この学制に基づいて一九四七年、新制中学校、一九四八年、新制高等学校、一九四九年には新制の大学が発足した。また、一九四九年にはこの学校教育法の一部が改正され、短期大学制度が設けられて専門的職業人養成の道も開かれた。

学園では、こうした教育制度の改革に対応して、後出の機農学校の高等学校への移行をはじめ、通信教育、短期大学、自動車学校、女子高等学校、さらに、四年制の大学ならびに大学院を順次設置して、教育の量と質の充実、拡大を図り、時代や社会の要請にこたえていくのである。

終戦とともに皇道を基調とした教育理念は崩壊したため、学園においても、今後の精神教育の支柱をどこに置くかについて慎重な協議がなされた。

黒澤西蔵はかねてより、デンマークを敗戦のどん底から世界有数の酪農国に復興させた老牧師グルンドビーの思想と愛国の情熱に強い関心を抱いていた。佐藤善七、札幌教会の白戸八郎牧師らの積極的提言もあって、一九四六（昭和21）年九月一日、学園教育の精神的よりどころをキリスト教に置くという歴史的決断が下された。

### 三 実学重視の教育

**農場教育の強化** 学園における農場教育は、酪農義塾の開設とともに始まった。苗穂の酪連用地や札幌村三角の農場では牧草の輪作方式と乳牛の飼養、白石村の農場(出納農場の跡地)ではラジノクロバーを主体とした放牧地に、本道で初めての電気牧柵器を設備し、輪換放牧を実施するなど、画期的な酪農教育を行い、また一九四二(昭和17)年、開校の機農学校では一六〇haの農地を活用し、一〇〜一五ha規模の経営実習農場をつくり、この農場にそれぞれ寮を設置、生徒を収容し生活と実習を一体化した教育が行われた。

その後、設置された酪農学園短期大学、酪農学園大学では、附属農場(後出)を施設し、学園教育の支柱である実学教育の徹底が図られた。

特に記しておきたいことは、北海道の三大劣悪土壌といわれる学園の重粘土地、元野幌農場(後出)の泥炭地、植苗農場(後出)の火山灰地のことである。創立者の意図は、これらの劣悪土壌を酪農によつて必ず沃地にできるという確信があつたといわれる。

**農場の再編と中央農場** 農業の近代化に伴い、農場教育の在り方を検討していた学園は、農場を統合し合理的に活用することになり、一九六四(昭和39)年四月中央農場を設置した。

この農場では、機農高校(後出)の管轄下にあつた農場のすべてと、短期大学実習農場の一部の合計四六・五haの耕地に乳牛七〇頭を飼育して、短期大学と機農高校の実習農場として発足した。

そのため飼料作物は、各農場、各寮の計画に基づいて一元的に作付け、収穫することによって機械の利用効率を高め、牛舎、圃場、養鶏、養豚を合わせ管理し、また元野幌の耕地七三ha、乳牛四〇頭をも所管し、学園農場の大半を管轄して合理化の追求を図ることにした。

しかし、この農場の整備が進むにつれて農場の運営と教育、研究のかかわり方が新たな課題となってきた。

すなわち、実習の指導にはきめ細かな計画と実施の体制が必要で、そのためには学校と農場が一つの組織であることが望ましいというのである。たまたま、学園用地の一部売却（道立図書館、道教育研究所敷地）や短期大学寮の建設によって酪農学園大学農場は著しく縮小されることになったこともあって実習農場の再編成が行われた。大学・同短期大学は共用の附属農場、機農高校は独自の農場とすることになり、一九七五（昭和50）年をもって中央農場を分割して再度の農場編成となった。

**地方農場の変遷** 学園ではこの文京台の農場のほか、元野幌と苫小牧市植苗に農場を開設し学生、生徒の実習教育を実施してきた。

元野幌農場Ⅱ一九四二（昭和17）年開発営団より一八〇haの荒地を借り入れて、その一部を機農学校の実習農場とし、食料や飼料の作付けを行っていた。戦後は機農高校の別科や農機科を置き、さらに、通信教育酪農学校の実習農場として活用したこともあった。しかし、この地は多くの河川が豊平川と合流する低地帯で、常に河川が氾濫し、水禍が絶えなかったことに加えて、一面葎に覆われた泥炭地であったため、開拓も著しく遅れていた。一九五六（昭和31）年に至って、このうちから一一〇haの分



附属江別乳製品工場 (1955年ころ)

譲を受け、事務局や中央農場の所管下に、牧草の栽培、乳牛飼育の農場経営を行ってきたが、一九七六（昭和51）〜一九八二（昭和57）年度の間は、サツラク農業協同組合との生産委託方式による試験耕作を行った。

その後学園の直轄の下に牧草の試験耕作地とし、その一部を大学附属農場とした。

植苗農場⇨義塾の時代にその基本財産として酪連より寄贈を受けたこの地は、樽前山系の粗粒火山礫地であったため利用されないままに過ぎていた。一九四七（昭和22）年、機農高校の実習農場とし選科、別科を設置し、農場教育が進められてきたが、一九五六（昭和31）年、その手を離れて事業部の所管の下に乳牛、豚、鶏などを飼育していた。

一九七三（昭和48）年、学園直轄の下に一六〇haの農場に、牧草を作付けし乳牛飼育農場とし、当時としては最先端のロータリー式パーラシステムを導入した。この間、一九五六年より一〇カ年にわたって、植苗塾（修業年限一カ年）を設けて、酪農義塾方式による酪農自営者の養成教育を行ったこともあった。

しかし、学園は地方農場の在り方を検討してきたが、この農場を産学連携産学共同の見地からコーンズ・エコファームの協力を得て環境

保全とITをキーワードに最新技術を導入した「自然と牛と人の共生」を目指した酪農モデル農場を建設し、二〇〇二（平成14）年九月三日完成した。現在一〇〇haの農場に約二〇〇頭の乳牛が飼養されており、排出されたふん尿から一日、三〇〇m<sup>3</sup>のバイオガスを取り出して、コージェネ発電装置で一日六〇〇〜七〇〇kWの電気を発生させて農場内で使用したり、北海道電力への売電している。

**工場実習と乳製品工場** 酪農義塾の時代、製酪科の生徒は、一期の基礎教育が終わると、酪連苗穂工場において実習教育に入り、卒業後は技術者としてそのまま工場の従業員となったり、事務職員として酪連や集乳所、産業組合に配置されていた。

戦後、学園が大学設置計画を進める中であって、その研究、実習工場が必要になってきた。そのため、江別市緑町にあった北海道酪農協同株式会社（乳製品工場）を利用することを考え、同時にこの工場を経営することによって、当時逼迫しつつあった学園財政の立て直しを図ることにし、北海道酪農協同株式会社にその分譲方を要請した。同社はその前身であった酪連、興農公社に引き続いて、学園の財政援助をするとともに、多くの職員や技術者の教育を学園に委嘱してきた経緯もあって、一九四八（昭和23）年六月、この工場を学園に無償で分譲した。

この工場は、その後設置された酪農学園大学部、（酪農学園短期大学）、酪農学園大学の附属実習工場として乳製品の製造、加工、研究などの実験、実習に大きな役割を果たしてきた。一方、近隣酪農家の生乳処理工場とし市乳、練乳、バター、アイスクリームなどを製造販売することによって、毎年多額の収益を得て学園教育の力となった。

乳製品工場の売却

しかし、この工場は、文部省より非収益事業として認可されていたが、その後工場の拡大、事業量の増加に伴い多額の費用を要することとなり、加えて、乳製品の市況悪化によって欠損金を生ずる事態となった。よって雪印乳業株式会社が助成のために、その製品を市価以上の価格で買い上げたところ、会社に対する課税問題が起り、これを停止せざるをなくなった。たまたま、一九六〇（昭和35）年、酪農学園大学の設置によってその後多額の設備費を必要としたため、一九六二（昭和37）年三月、この無償で譲与された工場のすべてを雪印乳業株式会社に五億一、四〇〇万円（分割払）で売却するという前代未聞の“商談”が成立した。

## 第三章 学校の設置と変遷

### 一 機農高等学校の開設と変遷

酪農義塾教育の継承 一方、時代的には戦時色が強まり軍隊の応召者や産業徴用者が相次ぎ、農村の不耕地、生産の低減、加えて農業技術指導力の低下などから、せつかく軌道に乗りかけてきた本道の農業は停滞のやむなきに至った。

こうした状況の中にあつて酪農義塾の関係者は、学制に基づく三年制の農業学校を設置して義塾教育を継続することにした。この計画は買収した江別町西野幌（現在地）の土地に、一九四二（昭和17）年三月三十一日「甲種農学校野幌機農学校」（農業科課程）として、文部省よりその設置が認可され、校舎の落成を待つて、六月一六日、一、二六名の入校生を迎え入学式を行った。続いて一八日、関係者多数出席のもとに開校式を行った。暗雲覆う太平洋戦争の真つただ中の開校であつた。

この学校では、農業学校として種々の学制の制約を受けながらも、あくまで実学教育によつて、すぐれた農人を養成することを教育の根幹とした。そのため、農場実習に重点を置いた教育が行われ、一年生は基礎実習農場（二〇ha）において牛、馬、小家畜を主体の畜産とふつう作物や飼料作物、蔬菜園芸作物の基本を学ぶ耕種を主とし、二、三年生は経営実習農場（規模の異なる五〜一五ha）において経

営を実践し、経営能力を身に付けることにした。従って、一年生全員は集合寮（機農寮）に、二、三年生はそれぞれの後出の経営農場附属寮に分峰した。

これらの寮には、寮長が家族とともに住み、寮生活と農業技術の指導に当たったが、この体制は戦後十数年間続き、生徒の人間形成に大きな影響を与えた。

### 迫り来る戦時色

しかし、先にも触れたが戦争が苛烈になるにつれて学校教育に対する国の統制がますます強化され、一九四三（昭和18）年一〇月「教育に関する非常措置方策」、翌四四年三月「学徒動員実施要綱」、同八月には学校報国隊の組織の下に「学徒勤労令」が公布された。そのため生徒の勤労奉仕が法制化され、続いて、一九四五（昭和20）年三月「決戦教育措置法」、五月「戦時教育令」が公布されるに及び、学校の一般教育は完全に停止するに至った。

この間、軍事教育のための現役将校の配属、荒木大将、北部軍司令官樋口中将、同報導部長田村大佐などの軍要人、また皇室から三笠宮が来校視察するなど、学校教育は軍隊精神が強調され、学級の編成も小隊、分隊と呼称されるなど寮生活も軍事色に塗りつぶされていった。

また、教職員の兵役応召者も相次ぎ、その数も終戦時まで二三名を数え、生徒の中からも徴兵されるものもあった。

さらに終戦年の一九四五年五月には軍の要望により教職員、生徒一八名を千島に派遣し、同地の開拓指導に当たり、七月薄氷を踏む思いで帰校した。

ともあれ、このような風雲急を告げる中で同年三月、一期生の卒業式を挙行し九六名を送り出した

が、うち一一名は学校に残り助手として後輩の指導に当たった。

### 戦後の学校改革

このように、多くの学校関係者の意に反して学校教育は戦時色の度合いを強めざるを得なかったが、一九四五（昭和20）年八月一日、山河は荒れ果て、多くの人命の犠牲の中でわが国は未曾有の敗戦を迎えた。戦争が終わってしばらくの間、本校の教育も混乱が続いていた。やがて、極度の緊張から解放された生徒たちは、戦時中の抑圧に対する反発もあって、四五年一〇月、二、三年生全員が教育の改革を訴え「無断脱寮」帰郷するという事件が起きたが互いの話し合いの中で歩み寄りを見つけ二週間余りで平常に戻った。

翌四六年、興農公社の社長でもあった黒澤校長は同社の再建に専従することになり校長を辞任した。代わって四月、十勝農学校（現帯広農業高校）校長であった川村秀雄が校長として就任し、戦後の学校改革に着手した。川村は、まず学校の組織と教職員の配置替えを行い、新たに一カ年制の研究科、選科の別科制度を設けて酪農の速成教育の道を開き、また通信教育酪農科（二年制・後出の「野幌高等酪農学校」）の設置に踏み切った。

そして同年九月には、かねてより検討されていた教育方針を「精神教育の基本理念をキリスト教の聖書に置く」との方針に転換された。

農場教育についても独立採算制を基本に整備強化を図り、夏期間の教室授業は各学年を二学級に分け、一週間交代で半数が午前中教室で授業を受け、半数は実習、午後は全員が実習につくという実学教育の本質も守り、毎週の各寮での研究会と相まって実習効果を高めた。一九四七（昭和二二）年より

七農場（七寮）に機農寮を合わせて八寮（第一農場・報徳寮、第二農場・平和寮、第三農場・栄光寮、第四農場・自由寮、第五農場・希望寮、第六農場・精農寮、第七農場・至知寮、第八農場・機農寮）となり、農場の整備とともに寮の体制も整うことになった。

**キリスト教教育の浸透** 敗戦を契機に、キリスト教をもって精神教育のよりどころとした機農学校においても、職員、生徒は少数の信徒を除いて、戸惑いを感じていたことは事実である。そうした中で、一九四六（昭和21）年九月、大森三郎牧師が本校に着任した。大森牧師は一九四〇（昭和15）年より宣教師として、中国において伝道活動に献身していた。敗戦により引き揚げて来札し、白戸牧師を通じて札幌教会より派遣の形で、本校のキリスト教啓発に努めたが、教室や寮における情熱あふれる説教と祈りに、若い魂は大きな感化を受けた。同年一二月二三日には、本校教室で初のクリスマス賛美礼拝が行われ、各寮より多数の生徒がこれに参加した。

また、生徒の有志によって「機農学校キリスト青年グループ」が結成され、卒業後のキリスト教による農村再建運動を目指し、約二〇名が参加した。

大森牧師の在任は翌年の八月までのわずか一年間に過ぎなかったが、当時の生徒でその後牧師など、直接牧会活動をしている者は八名を数え、いかに影響の大きかったかを知ることができる。

**教会の設立とキリスト教講座** キリスト教々々の母体となる教会を学園内に設立する計画は、黒澤、白戸らによって進められていたが、大森牧師の辞任後、一九四八（昭和23）年三月に古山金作牧師を迎えるに及んで急速に展開された。当初は、職員住宅を集会所として職員の信徒を中心に、礼拝お



草創期の会堂（1948年）

よび日曜学校がもたれていたが、五月に信徒による教会設立の総会が開かれ、学園構内に教会敷地が決定された。農場内の旧農家住宅を移動、改修して一〇月待望の会堂が誕生した。一九五二（昭和27）年西野幌三番地に、宗教法人野幌教会として新会堂が移転するまで、職員およびその家族をはじめ、学生、生徒の布教など学園教会として大きな役割を果たした。

学園職員に対してキリスト教の理解を深めるための努力も、折に触れてなされていたが夏、冬の休暇時にキリスト教講座が計画された。第一回は一九四八年一月に、白戸牧師の「宗教と教育」という講座が定期的に行われた。同年七、八月には第二回講座が、機農学校教職員を対象に行われ、この講座は一九五〇年ころまで続けられた。ところがキリスト教教育が定着する道程は平坦ではなかった。「――学園の至る所で新と旧、伝統と革新の両分子が競合拮抗して不協和音を出し、教会も大学もなかなか軌道に乗らなかつた」（『落穂拾い』池田実・一九八二）とあるように、学園にキリスト教が浸透するには多くの日時を要し、定着したのは短期大学の教育が軌道に乗ってからである。

**新制高等学校への移行** 一九四八（昭和23）年一月「高等学校設置基準」が公布されたため、本校も高等学校の認可を受け、同年四月より「野幌機農高等学校」として新たな出発

をした。まず、校則を根本的に改め新制度に基づく教科課程としたが、その中心教科を「実習」に置いた。しかしその後、文部省の教科課程の変更もあって、この「実習」という教科は廃止されて「総合農業」となり、単位制が取り入れられるなど大きく変化していくことになった。

また、同時に研究科、選科を廃して、新たに別科（修業年限一カ年、一九四九（昭和24）年四月、農機科（同）を設置するなど、教育の再建は着々と進んだが、同年九月、学校火災によって校舎、施設のすべてを焼失するという痛恨事もあった。しかし全道の農業協同組合、農民、関係者の援助によって一九五一年七月復興した。

「農業協同組合科」（農村経済科）の新設 一九五四（昭和29）年四月、既設の農業科のほかに農業協同組合の職員養成を目的とした農業協同組合科（修業年限三カ年）を併置した。五五年には別科、農機科を廃止、翌五六年四月農業協同組合科の名称を農村経済科と改め、農業協同組合の職員養成と併せて、農村の二男、三男の教育に門戸を広げた。

さらに、数次にわたる教育課程の改訂や農業の近代化に即応した教育の充実、建物、施設の整備、拡大、農場の編成など取り組みんできた。

同盟休校 こうした中で一九六二（昭和37）年、北海道農協連や関係団体、会社の寄付により鉄筋コンクリート三階建の現校舎の竣工をみるなど、開校二〇周年を迎えて本校の様相は一変した。

しかし、ここに至る一九五四（昭和29）年一月に本校の存亡にかかわる危機が発生した。いわゆる「同盟休校」である。この同盟休校は生徒会（自治会）が校内の民主化、寮運営の改善など学校側に二〇

項目の要求を掲げて授業放棄したものである。終戦から九年目ということもあって学園内にはまだ民主化に戸惑いの残っている分野もあった。事態は二カ月に及んだが、この事件は本校はもとより酪農学園の、その後の民主化や発展のための大きな契機ともなった。

**農業の変容と両課程の統合** 一九六一（昭和36）年、農業基本法が制定され、自立経営農家育成のための農業の近代化が推し進められることになった。これに伴って中央産業審議会は、同年「農業の近代化に即応する高等学校教育の改善方策について」の建議を行い、翌六二年文部省は、「高等学校農業教育近代化実施要綱」を発表し、農業自営者養成学科に対し、三カ年にわたって設備など内容充実のための助成金制度ができ、本校もその対象になった。

こうした農業の大きな転換期の中にあつて本校は、農業自営者の教育に徹することになり、一九六三（昭和38）年農業科、農村経済科の両科を統合して「酪農経営科」とし、定員三学級一五〇名を二学級九〇名としたが折りしも中学卒の急増期であつたため、入学希望者も多く三学級編成を続け、一九六五（昭和40）年には定員一三五名に変更した。

**委託実習** 酪農経営科の実習の中でも道内の優秀酪農家で二〇日間の実体験する、いわゆる委託実習は一九六五（昭和40）年から実施された。この実習は校内酪農実習で味わうことのできない貴重な体験であり画期的なことであつた。受け入れ酪農家八七戸は野喜一郎、安田勲、井上錦次、門前道彦らの努力によって決定された。

委託実習生受け入れ酪農家名

- ① 太田正治 (八雲町大新)
- ② 太田 保 (八雲町大新)
- ③ 細田昌隆 (八雲町大新)
- ④ 都築達三 (八雲町立岩)
- ⑤ 加藤孝光 (八雲町立岩)
- ⑥ 水野浩利 (八雲町三杉町)
- ⑦ 大井文夫 (八雲町春日)
- ⑧ 鈴木眞一 (八雲町鉛川)
- ⑨ 小寺浩一 (八雲町立岩)
- ⑩ 森 茂 (伊達町字北稀府)
- ⑪ 宮本嘉吉 (余市町美園町)
- ⑫ 黎明農場 (倶知安町字八幡)
- ⑬ 木嶋与四松 (ニセコ町字有島)
- ⑭ 石村正明 (真狩村字見晴)
- ⑮ 山田昭二 (今金町字神丘)
- ⑯ 宮脇 清 (北松山町字兜野)
- ⑰ 安達義夫 (和寒町字原和)
- ⑱ 窪井義隆 (剣淵町一二区)
- ⑲ 中野正太郎 (豊富町徳満)
- ⑳ 白田 登 (豊富町中豊富)
- ㉑ 蔭田正夫 (天塩町字振老)
- ㉒ 北斗農場 (幌延町字幌延)
- ㉓ 黒瀬清市 (幌延町字幌延)
- ㉔ 若狭農場 (雄武町)
- ㉕ 大黒嘉夫 (興部町北光)
- ㉖ 小林正彦 (興部町北光)
- ㉗ 澤口勝男 (中湧別町)
- ㉘ 平田義道 (北見市川東)
- ㉙ 蓑島 勇 (訓子府町穂波)
- ㉚ 龍田弥太郎 (訓子府町穂波)
- ㉛ 三上 勇 (美幌町古梅)
- ㉜ 西 暁男 (東藻琴村字西倉)
- ㉝ 厚海武士 (東藻琴村上東)
- ㉞ 荻野俊二 (小清水町一区)
- ㉟ 宮串友一 (旭川市外西神楽)
- ㊱ 北村愛作 (旭川市神居町富沢)
- ㊲ 谷口正男 (東神楽村字志比内)
- ㊳ 保田光弘 (美瑛町字置杵牛)
- ㊴ 和田英彦 (上富良野町日の出)
- ㊵ 竹森勝太郎 (奈井江町大和)
- ㊶ 堀己之松 (奈井江町十二号)
- ㊷ 寺島嘉一 (栗山町字御園)
- ㊸ 乙部博行 (門別町字厚賀)
- ㊹ 奥田清次郎 (新冠町字緑丘)
- ㊺ 服部白雄 (浦河町元浦川)
- ㊻ 竹田 剛 (早来町字遠浅)
- ㊼ 金川幹司 (早来町字遠浅)
- ㊽ 富樫 健 (早来町字遠浅)
- ㊾ 小華和一男 (早来町字遠浅)
- ㊿ 山田一英 (早来町字遠浅)
- 51 照井靖幸 (早来町字遠浅)
- 52 杉村 茂 (早来町字富岡)
- 53 佐々木武 (早来町字富岡)
- 54 戸田克己 (千歳市長都)
- 55 原田 恒 (恵庭町下島松)
- 56 福屋茂見 (恵庭町字戸磯)
- 57 谷口修治 (広島村字北の里)
- 58 松浦武徳 (広島村字西の里)
- 59 井上 武 (江別市字角山)
- 60 新田哲彦 (清水町字清水)
- 61 沢本輝之 (清水町字熊牛)
- 62 菊地義孝 (清水町字人舞)
- 63 須田重勝 (清水町字人舞)

- ⑥4 藤田秀明（清水町字人舞）  
 ⑥5 佐藤松太郎（帯広市上清川町）  
 ⑥6 林 信義（更別村字上更別）  
 ⑥7 角倉 博（大樹町字振別）  
 ⑥8 金曾定雄（大樹町字開進）  
 ⑥9 高橋 巖（大樹町字開進）  
 ⑦0 小川貞雄（浦幌町字美園）  
 ⑦1 榊原日出雄（音別町直別）  
 ⑦2 高嶋政文（音別町直別）  
 ⑦3 田中静夫（音別町字二俣）  
 ⑦4 福田五郎（釧路市愛国）  
 ⑦5 内藤義雄（釧路市鶴丘）  
 ⑦6 森 謙造（浜中町字茶内）  
 ⑦7 白川 清（浜中町字茶内）
- ⑦8 島 安治（根室市西和田）  
 ⑦9 中川 弘（根室市字牧の内）  
 ⑧0 鷺見孝男（中標津町侯落）  
 ⑧1 高橋節郎（中標津町計根別）  
 ⑧2 水沼徳一郎（中標津町計根別）  
 ⑧3 長尾良実（別海村本別）  
 ⑧4 小倉将義（別海村中西別）  
 ⑧5 石毛達男（別海村上春別）  
 ⑧6 佐々木喜一郎（標津町）  
 ⑧7 札木東虎（標茶町磯分内）
- 合計 八七戸  
 （一九六五年七月一日〜八月四日）  
 （注）氏名・所在地は当時の資料のままとした。

### 生徒の減少と教育整備

しかし、農業基本法に基づく農政が進行する中であって、農家の規模は拡大されたが同時に離農する農家が増えて、その戸数は減少をたどり中学卒そのものも減った。そのため一九六九（昭和44）年より再び定員を二学級九〇名に変更した。やがて、この生徒数の減少は財政問題ともからんで本校の存続に大きな課題を投げかけることになった。

こうした財政的危機は単に本校ばかりでなく、高校、大学を含めた全私学共通の問題でもあったが、本校にとってはその存立をゆさぶる問題として緊急の対策が迫られることになった。



機農高校の実習風景（1955年ころ）

そのため、赤字軽減の具体的方策の一つとして、統合寮二棟を新築して、全生徒をこれに収容し、厨房組織の改善と併せて寮関係経費の節減を図った。

さらに、一九七五（昭和50）年には、①定員の確保、②大  
学、短大との連携による優先入学、③国、道、後援会に対する  
助成金対策、④園芸科併置の検討、⑤厨房の外部委託によ  
る経費の節減など――まず厨房の外部委託を實行し、七六  
年には道および文部省に対し、管理運営費と産業教育設備費  
の助成陳情を行った。特に文部省初中局職業教育課では、本  
校教育の趣旨に深い理解を示し、一九七七年より異例とも思  
われる特別助成（農業自営者養成教育）となったがこのことは本  
校にとって財政面はもちろん大きな精神的支援となった。

一方、同窓生や農業団体の協力などによって、六〇名台に  
まで低下していた入学生徒数も一九七七年度以降は毎年九〇  
名の定員を確保するまでの復調をみせた。

しかし、一九八一（昭和56）年度より再び生徒数が急減し始めた。こうした状況の中でたびたび教育課程を改訂し、農業教科の実験、実習強化のために農業実験室を新設して、実習農場の再編成を行う

など、私立農業高校としての特性を生かした教育体制を整えて生徒数定員の確保に努めた。

さらにキリスト教による精神教育を柱とし、毎週の学校礼拝や聖書の授業、春秋の聖書週間を通じてキリスト教教育の浸透を図る一方、広大な農場を活用し教科内、総合、時間外実習のほか、夏期、冬期の特別実習、さらに、一九六五（昭和40）年から酪農家への委託実習（前出）を行ってきた。

このほか農業クラブ、スポーツなどの教科外活動にも意を用い、また全寮制の特性を生かし、放課後や夜間を利用して危険物、毒劇物、溶接の取扱者資格、家畜商、簿記検定、自動車、大型特殊車の免許取得の機会を与えるなど、卒業後酪農自営者となるための素地づくりに努めてきた。

**校名の変更と統合問題** このように多くの曲折と体験の中で一九八二（昭和57）年六月一日、開校四〇周年を迎えた。

折りから、わが国の酪農を取り巻く諸情勢は極めて厳しく、特に、農村の近代化に伴う農業人口の減少は、農業高校への進学生徒数の激減となって現われてきた。そのため全道の農業課程高校は公、私にかかわらずなく定員確保が困難となってきた。本校も、年々入学生徒が減り、再々にわたって岐路にたたされるに至った。

そのため年々評価を高めていく酪農学園大学との連携を強めることを特策として校名を「酪農学園大学附属高等学校」として位置付け、大学との連携を強化し、建学の理想である酪農教育をさらに一歩進めると同時に農場運営の効率化、生徒数の確保、学校運営の改善への対策を進めるなど、存亡をかけて同窓生や全職員も懸命の努力を重ねてきた。しかし、多くの日時の中で検討を重ねてきた理事

会はこの危機を乗り切るため苦渋の選択をした。つまり三愛女子高校（とわの森三愛）との統合に踏み切る決断をしたのであった。

## 二 酪農学園短期大学の開設と変遷

「酪農学園大学部」として発足 一九四五（昭和20）年八月一日——太平洋戦争の終結は、学園教育にも大きな転機をもたらした。

すなわち、創設者たちが描いてきた学園の農業教育をさらに進めて高度の酪農教育を実施し、新時代に適応した酪農人を養成して戦争によって荒廃した日本農業を酪農によって再建し、その振興発展を図ろうというのである。

そのため、一九四七年早くも酪農専門の大学を設置することにした。たまたま、当時アメリカの文教政策の一つとして、キリスト教会の協力のもとに、日米合同による「国際基督教総合大学」（ICU）設置の構想が打ち出された。黒澤西蔵はこの財務委員長の職にあったので、先に学園の教育理念をキリスト教の精神に置くことを決めた経緯もあって、この「国際基督教総合大学」の一環としての基督教酪農大学を野幌に設置したいと周到な準備に入った。

このことについて『国際基督教大学創立史』（一九九〇年刊）に次のように記されている。「北海道の実業家で、酪農学園の学園長でもある黒澤西蔵が、一つの興味深い特色を研究所にもたらした。彼は将来、ICUで行われるような教育を北海道でも展開し、やがて、酪農大学をICUの分校にするとい

う考えを持って、一〇名の学生を研究所に派遣したのである。」この一〇名とは遊佐孝五、牛島純一、細川明らのことである。

ところが、その後この「国際基督教総合大学」は、その計画を大幅に縮小し東京都に単科大学を設置するにとどまった。そのため学園ではこの構想をあきらめ独自の酪農大学を設置することになり、

まぼろしに終わった「基督教酪農大學設立趣意書」(原文のまま)

日本國民を基督教の世界觀に立脚して眞に平和と自由を愛する文化の高い國民として新生せしめんが爲めには先づ教育の大刷新を行はなければならない。

又日本の農業は米穀單營の農業であつて、甚しく不合理であるから之を有畜農業に改めて、より以上に食糧の増産を圖らなければならないが、この爲に最も急を要することは、酪農を普及發達せしめることである。

更に國民榮養の改善、體位の向上といふ點からみても緊要缺くべからざる脂肪・蛋白質の給源として牛乳乳製品の製品の増産を圖る爲にも、酪農の普及發達は極めて重要である。

本大學は、かゝる要請に應へんが爲めに、次に掲ぐるところの綱領に基き、實際に立脚せざる觀念教育の弊を打破し基督教主義による酪農の生ける教育を行ひ、以て世界平和の確立と、人類文化の向上に貢献せんとするものである。

而して本大學は、目下設立計畫中の國際基督教綜合大學の一環たらしむるものである。

尙北海道は明治初年米國農務長官、ホラシ・ケブロン氏の計畫によつて開拓せられ次で、アムハースト・マサチューセツツ農學校々長ウヰリアム・エス・クラーク博士が札幌農學校々長として基督教主義の教育を行つた歴史的の地であり、又、日本の北邊に位し米國に於けるウイスコンシンの如き土地であつて、酪農には最も適して居るので、此大學を北海道に置き、日本酪農の最高指導學園たらしめんとするものである。

昭和二十三年六月



短期大学校舎 (1962年ころ)

一九四八(昭和23)年五月、文部大臣あてに設置申請をするとともに教師の選任、養成、学生の募集を始めた。

しかし、当時わが国の教育界が戦後の変動期にあったことや学園の計画した校舎や施設など、多くの事由によって認可を得ることができなかった。そのため、とりあえず北海道知事認可による、各種学校二年制の「酪農学園大学部」として、学長に岐阜農林専門学校教授樋浦誠を任命し四九年七月一日、酪農科三九名の新入生を迎えて開校した。

同年六月、学校教育法の一部改正によって、短期大学制度が設けられたため、一九五〇(昭和25)年三月文部大臣認可の下に、「酪農学園短期大学」を設置し、「酪農学園大学部」を廃して在校生を吸収し、四月開学した。

**三愛精神と実学教育** 本学の教育方針は「キリスト教による人間教育を基本に、神、人、土を愛する三愛精神と実学によって酪農人とその指導者を養成する」ことにした。

特に、この実学教育こそ学園創設以来変わることのない教育の根本であり、勤労と実習によって農業の特殊性を把握させ、同時に科学知識と技術を体得させることにあった。

また、開学の翌五年にはキリスト教学校教育同盟に加入するなど、キリスト教教育に大きく意を用い、学校や学生寮においては聖書に基づく人間形成を図ったが、前記の「国際基督教大学」の一環として計画していた酪農大学構想の中に、既にキリスト教中堅教師の養成が進められていたこともあって、開学と同時にキリスト教の強い信仰に培われた樋浦学長やこれら教師の体当たりの教育によって多くの学生に宗教と科学への心の眼を開かせた。

初期の教育は大学部創期生三九名、短期大学一期生三八名、二期生四二名と、学生数は少なく、学長を中心に若い教職員が学寮に泊まり込み、家族的教育とキリスト教の精神による人間教育を推進した。

一方、当時の学園の財政は苦しく、教育研究設備も乏しいため、教職員と学生がともに校舎のブロックやレンガ積み、暗渠排水作業などを行った。

このように財政上のこともあったが実学に重きを置いた本学の教育は、農場や工場を教育の場として、教師、学生が一体となって酪農の科学究明と取り組んだ。すなわち広大な農地を農場に活用し、耕作、播種、除草、収穫などの肥培管理から貯蔵に至る各種機械や器具の取り扱い、さらに多数の乳牛を飼育し、その飼養管理など幅広い分野にわたって実験・実習を行い酪農経営に必要な多くの知識や技能の修得に努めた。この農場はその後幾多の変遷を経て附属農場（後出）として今日に至っている。

**工場実習** 一方、工場実習は前述のとおり酪農学園乳製品工場を開学とともに附属実習工場とし、学生はこの工場において乳製品の製造、加工の研究、実験、実習によって単位を取得することにした。

同時に学生は一定期間、この工場の従業員とともに作業に従事することが義務付けられていた。このことは現実に商品として市場に販売される市乳、練乳、バター、アイスクリームなどの乳製品の製造、加工に直接参加することによって、その実態を理解させるとともに、卒業後の酪農経営や製酪業務に対する自信と実力を高めることにあつた。

なお、この工場は一九六二（昭和37）年雪印乳業株式会社に売却したが、替わつて学園内に酪農学園大学・同短期大学共用の乳製品実習室が設置され、引き続き実習教育が行われている。

**学科とその推移** 本学では開学以来、酪農自営者と指導者の養成に重点を置いた教育を実施しているが、その間、製造科を設置したり、季節制や生活科学専攻を設け、農業形態や社会情勢の変化に対応してきた。

この酪農科は二カ年で全課程を終える通常の短期大学の形態で、特に実学をモットーとした講義に加えて酪農や一般農業の実験、実習に重点を置き、また全道の優秀酪農家への委託実習も行っている。農業後継者のための季節制は酪農科第二コース（前記の二年制は第一コース）と称し、六四年開設した。このコースは、酪農科の全課程を三カ年で履修するというわが国でも本学独特の画期的な制度であつた。授業は農閑期に入る一月から三月までの五カ月間に集中的に行うほか、夏期はそれぞれの農場において実地に農業を習得させた。特に、このコースへの入学生の多くが自営者であつただけに、後継者養成に明るい希望を与えたとともに教職員にある種の緊張感を与えていた。

ところが当初多数の入学者のあつたこのコースも時代の流れとともに学生数が減少し、加えてこの

制度は、短期大学設置の基準上からもいろいろな問題があつて継続が困難になつてきたため、一九八四（昭和59）年度より学生の募集を停止し、在学生の卒業を待つて廃止することとした。

また、生活科学専攻は、逐年増加している女子学生を対象に酪農科の中に開設した。酪農畜産に関する科目を履修しながら生活科学に対する科目を履修するもので、食品、栄養、被服、住居、児童、公衆衛生などの講義と実習を行つてきた。

本学では当時特別講習を受けることによつて、家畜（牛）人工授精師の資格を得ることができると、毒物、劇物取扱責任者、公務員中級職の受験資格が与えられた。

このほか、一九六二（昭和37）年、本学の中に製造科を設置して、製酪、加工の技術者養成を行つたが、その後、製酪技術の高度化などによつて、四年制大学への進学志向が高まつたため、一九六四年募集を停止し、一九七二（昭和47）年正式に廃止した。

**特別入学制度と三愛塾**　本学では家庭の事情などで高等学校に進学できなかった農村青年に、大学教育の機会を与えることになり、酪農学園短期大学受験資格の中に「その他、相当の年齢に達し、本学において高等学校を卒業した者と、同等以上の学力ありと認められた者」との一項を設け通信教育や次の三愛塾で学んだ生徒の中から進学希望者を選び、約二カ月の特別教育を実施して学力判定の上、入学を許可した。

この制度によつて毎年数名の入学者があり、これらの学生の勉学意欲はほかの学生に劣らず、卒業後、教師、農業改良普及員、町村役場、農協などで活躍している者も多い。しかし、この制度は一九

五九（昭和34）年をもって打ち切ったが酪農学園短期大学初期の一つの試みとして、三愛塾とともに高く評価されている。

一方、本学では開学と同時に樋浦誠学長主導の下に大学の農村への開放が始まり、その教育活動の一環として、一九五〇（昭和25）年より夏、冬の休暇時を利用して農村青年を対象にした二週間の三愛塾を開いて三愛精神による新しい村づくり運動を展開した。

この塾では男女、年齢を問わず新農村の建設に熱意のある者を入塾させ、講師には短大の教師や牧師、農村の指導者が当たった。やがて「三愛友の会」が組織され、全国的にその輪が広がり各地に支部もでき、ようやく社会の注目を浴びるようになったが、一九六四（昭和39）年、樋浦学長の退任とともに大学の教育活動の場から離れた。

**校名の変更** このように本学は、四九年の開学以来酪農教育一筋の道を歩み、わが国酪農の振興、発展に努めてきた。

この間、酪農科の中に季節制や生活科学専攻を設けるなどして、多くの農業中核者を養成してきたが時代の推移とともに、この季節制は前述のとおり廃止されることになった。また、従来、女子学生に与えられてきた生活改良普及員の受験資格も法改正によって一九八四年度より四年制大学卒業生を対象とすることが決定された。こうした中で、札幌や石狩圏を中心とした女子の短大進学志向は年々高まってきた。

本学では、こうした女子の高等教育への進学率増加の情勢に対応し、三愛女子高校との関連性を考

慮して単に酪農教育のみにとらわれず、女子を対象にした幅広い教育を実施するため、一九八四(昭和59)年教養学科(女子のみ)の増設を決めた。そして学校名も「北海道文理科短期大学」と改めた。さらに一九八九(平成1)年、経営情報学科を設置して、三学科体制に入った。新たな短期大学を目指し、具体的方策を進めてきたのであった。

### 三三愛女子高等学校の開設と変遷

**市内唯一の女子高校**　酪農学園における女子教育機関の設置問題は酪農義塾開設以来一つの課題でもあった。

しかし、わが国の農業政策がたえず揺れ動いている中であって、農村女子の都市への流出が相次いでおり、加えて厳しい学園の財政もからんで農村女子のみを対象にした教育機関の設置は現実性を欠いていた。

ところが、もはや戦後ではないといわれた昭和三〇年代(一九五五―)に入って、道都札幌市は急激に人口が増加し、江別市もベッドタウンとして急速に発展し著しい人口の増加がみられ、女子を含む高等学校進学希望者は激増してきた。

当時、江別市には道立江別高校、道立野幌高校と酪農学園設置の機農高校の三校があったが、江別高校を除いた二校は農業課程であり、また機農高校は男子校であったため一般女子の高校進学は極めて狭き門となっていた。そのため、普通課程の女子高校設置への市民の声は日を追って高まり、間も

なくそれらの声が江別市を動かすかたちとなって学園に要請してきた。

学園ではこうした状況を慎重に検討しながら近隣町村の諸情勢も分析し、地域住民の要望にこたえらるとともに、長年考えていた女子教育の実践に踏み切った。一九五八（昭和33）年二月、北海道知事の認可を得て全日制普通課程「酪農学園女子高等学校」を設置し、同年四月二日、学園用地内東端に新築した仮校舎において開校した。学校長は黒澤酉藏であった。

**人格と徳性の情操教育** 本校の教育は、私立女子高等学校としての特性を生かし、キリスト教による神・人・土の三愛精神を基調として、人格と徳性を養うための情操教育を行い、公正な人生観、世界観に立脚した人間育成に努め、社会・家庭に有用な女性を養成することに主眼を置いた。

当初の教育は、酪農学園女子高校という特殊性から、そのカリキュラムも独創的で、進学を目的とした「普通コース」と就職および家庭生活を目的とした「家庭コース」、「生活コース」の三コースを設けた。

特に、生活コースでは学園の特殊性を強調し、地方風土に適合するための総合的生活教育を目指し、酪農食品Ⅱ乳製品、食品の調理および各種食品のびん詰加工による保存。園芸Ⅱ園芸草花の栽培、造園、室内飾花、冬期温室管理。生活実習Ⅱ生活寮での実習——など實際生活に役立つ技術の修得に力を置いた。

しかし、こうしたカリキュラムも時代の変遷や生徒の生活環境の変化によって、一九六一年以降「生活コース」を廃止して純然たる普通高校とした。

**開校後の推移** このように本校は設置者が酪農学園であり、当初は一部酪農に関する教育構想もあつて酪農学園女子高等学校としたが、開校後、父母や生徒などより普通課程の女子高校にふさわしい校名に改名して欲しいとの要望もあつて、生徒より校名の募集を行い、一九六〇(昭和35)年四月「愛女子高等学校」と校名を変更した。

このことは、草創期の生徒が早くも本校の建学の精神を深く体得していたことを示すものでもあつた。また、一九六一年には第一回卒業式を行い八六名が巣立つた。

この間、一九五八年、本校舎、六二年体育館、六三年礼拝堂が建てられ、一九六八(昭和43)年には開校一〇周年を記念して、本道では最初の電子オルガンが設置され、本校の音楽教育にも新たな一ページが加えられた。

また、一九六三年には募集定員を二〇〇名から二五〇名に、翌六四年からは三〇〇名に改められ、生徒数も毎年増え続けて、六五年以降は全校生八〇〇名を超え、一時は九〇〇名に迫る勢いだった。教育内容においても生徒自身もさることながら教職員の努力と相まって父母の信頼も大きくなった。一方、生徒会、PTA、同窓会の設立、制服、校旗、校章、校歌などが相次いで制定された。

このように本校は開校以来、関係機関、関係者の努力によって多くの建物を次々に建設し、また、礼拝堂をはじめ諸施設を整備し、ようやく江別市における唯一の私立女子高校としての態様を整えて市民の中にも定着した。

### 学校の移設

ところが一九七二(昭和47)年、国土開発幹線北海道縦貫自動車道路・札幌―岩見沢



市内唯一の女子高校として開設した三愛女子高校旧校舎

間の敷設計画案が浮上し、この道路が本校のグラウンドを横断することになった。この案が実施されると本校の教育環境は根本的に破壊され、将来の学校計画に大きな支障をもたらすことが明らかになったので、学園をあげて反対阻止に努めた。

しかし、その後六年間に及ぶ年月の間に、この構想は着々と進み、周囲の状況からみて、学園のみの反対は困難になってきた。加えて、二〇年にわたって整備、充実を図ってきた本校の建物や施設は木造が主であったため老朽化が進み、更新の必要に迫られるものも多くなっていた。同時に既にJR大麻駅が一九六六（昭和41）年に開設されていたことも移転決断への大きな判断材料になった。

こうした経緯のもとに一九七八（昭和53）年、本校を大麻駅最寄りの学園用地西端（現在地）に移転することを決定し、翌七九年一月には校舎・施設の竣工移転を終えた。

教室、体育館、礼拝堂（講堂）と管理棟の五棟よりなっており、各棟はドーナツ状に廊下によって結ばれた極めてユニークな形態となっている。この建物の特色は普通教室では東南に面して半円形をとり、

日照に配慮しているほか、体育館は冬期間の活用を考慮し、大きなスペースをとっていることである。また、礼拝堂は本校教育のシンボルである三愛精神の三つの愛を象徴する三角形構造の独創的な建物とし、その中に宗教音楽の立場から、新たに東北以北唯一のアーレン・パイプ電子オルガンを設置した。また礼拝堂はシンボルタワーの先端、地上三〇mのところに十字架が取り付けられており、定時に鳴り響く塔の鐘の音とともに本校の象徴的建物となっている。

一方、遠隔地よりの生徒のため、四八名収容の生徒寮（シオン寮）を設置しているほか、クラブ室、合宿所を整備して、課外教育活動にも配慮した。

**教育内容** このように本校は、開校以来教師、生徒の努力、父母の協力などによって、教育施設も整備され、女子高校としての独特の校風を樹立した。

この間、大学、高校をめぐる激動の時代を背景に、授業料の改訂論議や、「キリスト教主義とは何か、教育における礼拝問題」などを経験してきたが、こうした試練の中にキリスト教主義教育はさらに定着し、地域社会の要請にこたえる教育が進められた。

その後、本校では、① キリスト教教育、② 人格と個性の尊重、③ 分かる授業と進路別クラス編成、④ 徹底した生活指導による生活能力の養成、⑤ 社会組織の一員としての自覚の養成、⑥ 教師との人格的接触——を教育の指導方針とした。そのため、毎週の学校礼拝と聖書の時間を設けてキリスト教教育による全人的人間形成を図ったほか、一学年は基礎学力に重点を置き、特に数学、国語はグレード別授業を行って個人指導の徹底を図ってきた。

二学年は進路に沿った指導の下に進路別、類型別教育を実践し、三学年は進路別、類型別をさらに発展させ各自の進路に応じた教科選択ができるように配意した。

**短期大学との連携および英語科の設置**

このように本校はJR大麻駅に近く、さらに道立図書館に近接した文教地区の中心に位置し、広大な牧場と牧歌的ふん囲気の中に近代的校舎、施設を完備して教育環境は大きく改善されており、同時にこの諸状況を生かして新しい教育が展開された。

ところが、戦後、もっぱら私学の増設によって高校問題に対応してきた本道の教育行政は、近年住民の公立志向傾向もあつて私学の振興とはうらはらに公立偏重に移行し、公立高校の新・増設へとその方向を転換した。

すなわち、道教育庁が執り進めている「北海道教育長期総合計画」によると、一九七六（昭和51）年から一九八五（昭和60）年までの一〇年間に、三六校の公立高校（前期一六校、後期二〇校。後期二〇校のうち一〇校は札幌圏を新設することにした。この計画が進行するに従つて、既に、公立高校においてさえ定員割れをみている現状にあつて私立高校への影響は、計り知れないものとなつた。事実、丙午年生ひのえうまれが入学した一九七七（昭和52）年は別として、一九七八年以降における本道私立高校への入学者は平均一割の定員割れを招くに至つた。

加えて、一九八四（昭和59）年大麻に公立高校を設置することが決定し、本校を取り巻く諸情勢は一段と厳しさの度を加えてきた。

こうした状況に対応して本校では、将来展望対策委員会、将来展望委員会を中心に対策を検討し、

一九八四年より英語科を新設した。

また、本校生徒の上級学校進学希望者の増加に対応して、学園内の酪農学園大学・同短期大学との連携を強化するとともに、本校Ⅱ短期大学という女子一貫教育体制の確立を図ることになった。

この女子一貫教育体制については、学園においても当時の酪農学園短期大学に女子のための教養学科を増設することを決め、一九八五（昭和60）年開設を目指して具体的準備作業に入った。

一方、大麻への公立高校新設に伴う本校への影響について、道教育庁および江別市にその対策を要請した結果、一九八二（昭和57）年九月三〇日、江別市議会は私学振興のため本校への助成を決議し、八三年から管理運営費の一部助成化が実現することになった。

このように本校は、一九八三年創立二五周年を迎えて重大な局面に立たされるに至ったが、これに対し前述の酪農学園短期大学との連携、自治体よりの助成に加えて、地域住民との密接な交流、教育内容の充実強化を図るため、ボランティア活動、英語科の併置、三学期制度の実施、教育相談室の設置など取り組み、不転の構えで新たな発展を目指した。

しかしながら学園理事会はその前途に大いなる危機感を持ち、酪農学園大学附属高校との統合を現実問題として検討し始めたのであった。

#### 四 酪農学園大学の開設と初期の教育

##### 設置への胎動と開学

短期大学設置の項で述べたように酪農学園における大学設置への動きは戦

後間もなく始まった。戦争によって疲弊した本道の農業を酪農によって再建するため、酪農や製酪関係の技術者や指導者を養成するための酪農専門大学を設置するのがそのねらいであった。

そしてこの大学設置が具体的な兆候として現われたのが、一九四七（昭和22）年の酪農大學設置計画である。しかし、この計画は結局、酪農学園短期大学の設置にとどまった。しかし、あくまで四年制大学を設置しようと考えていた学園の願いは、その後もその実現に向かって働き続けていたが財政問題などもあり実現には多くの年月を要した。

昭和三〇年代（一九五五―）に入ってからわが国の諸情勢が一応安定し、経済の高度成長期の中で子弟の高学歴志向が高まってきた。また、短期大学十余年の実績もあって世論や社会のすう勢も酪農大學設置への気運を醸成してきた。

学園ではこうした状況により四年制大學設置の時機と判断して、一年余りにわたって準備を進め、一九五九（昭和34）年九月、文部大臣に「酪農学園大學」の設置を申請し、一九六〇年一月二〇日その認可を得た。

**開学式** 一九六〇（昭和35年）四月二〇日——ここにわが国で初めての酪農学部を置く酪農学園大學の開学式が行われた。初代学長は酪農学園短期大学々長の職にあった樋浦誠であった。

開学式には、一〇〇名の定員に対し応募者は二六五名に及び一八〇名の入学となった。新設大學としては極めて明るい出発となった。

なお、この開学式における樋浦学長の式辞と黒澤学園長のことは、本学の目的、教育方針を明示

しており、示唆に富む内容なのでその要旨を次に掲載する。

樋浦学長の式辞（抜粋）

第一は本学の建学の精神、すなわち、三愛精神についてであります。神を愛し、人を愛し、土を愛する三つの愛の精神は元来聖書からでているものであり、本学の教育の土台も聖書に置いてあります。バイブルは周知のとおり全人類の書物であります。今日世界における文化国家を形成している民族は、この聖書を心のかてとして生長し発展したものであります。

聖書は歴史の書物であり文化の書物でもありますが、何にも増して宗教の書物であり、信仰の書物であります。神が愛であり真理であることを人間に告げてくれるのが聖書であります。だが、一体神とは何であるか、真理とは何であるか、人間の本能からくるいわゆる、人間愛と神の愛とがいかに異なるものであるか、諸君はやがて学ぶであります。

第二は、本学の実学教育についてであります。酪農学園の歴史は遠く酪農義塾にさかのぼるのであります。創立以来一貫して実学教育を実施してきています。大学教育もまたこの基本線に立つものであります。実学教育とは実際と学問とが一丸となって会得される教育を意味するもので単なる実利教育ではないのです。学問はそれ自体法則的であり抽象的であることが要請されますから、実際から浮きあがる危険があります。実学教育はこの点を反省し超克することに特色があると思います。実習教育や勤労教育は常に諸君の理解に先行する。つまり諸君の無理解の間に早くも実行されなければなりません。困難を感じるのは諸君の側だけでなく、先生の側にもあるのです。この困難と戦いつつ、切磋琢磨するところに実学教育の本領があるのです。

第三は、大学共同体についてであります。大学共同体の構成要素は主として教師と学生であります。教

師だけでもあるいは学生だけでも大学共同体は成立しません。従つて、この二つは車の双輪の如く大学共同体成立の要素です。ところがこの二つの輪は実は同時に形成されたものでなく、まず、大学の組織ができ一定の教育方針、主義、主張を明白にした後、諸君が自由意志によつて応募、入学したことによつて初めて大学共同体の成立をみるに至つたのであります。

この事実からみると学生は誕生の順序の上では第二次的存在であります。この構造は大学共同体の本質として最後まで深い意味を持つております。それだけに大学共同体が本当によく組織され運営されることが望ましいわけであります。

#### 黒澤学園長のことば（抜粋）

大学の建学の精神については、学長が話されたとおりです。わが国の農業は骨が折れるばかりでなかなか利益があげられない。そのためどうも学生諸君には人気がなく、これに反して商工業には人が集まつております。これは世間一般の空気です。私はこのことをよく考えて欲しいと思つたのです。今日世界をリードしているアメリカ、ソ連の二大国をみても農業が土台になり、その上に工業が発達し、さらに、その上に商業が発達してあります。これは経済産業の正しい姿です。

近年、わが国の産業の発達は実に目覚ましいものがあります。しかし、農業についてはいくらひいき目にもて繁栄しているとはいえません。農業が貧困であるということは、農業そのものが本質的に貧困であるということではありません。科学の力と農民の努力があればまだまだ向上発展の余地は十分あります。

酪農学園の目的は、この農業の質を改善向上せしめることにあるのです。欧米人の体格は単なる人種の素質やその遺伝だけでなく食糧にあるのです。われわれは速かに米食中心の食生活から脱却しなければなりません。そのためには、どうしても動物性の蛋白質と脂肪の生産が要求され、ここに酪農の必要性が生まれてくるのです。

現在、わが国の農業教育を見るとまことに抽象的で徹底を欠いています。ことに重要な乳牛やその他の家畜についても、単に標本的に養っているところが多いのです。この大学では広大な農場、乳製品工場をもって実験、実習に努めており、学長のいうところの本当の実学大学なのです。

次に、キリスト教教育についてありますが、民主主義の本義は実はバイブルの中にあるのであります。「天は人の上に人をつくらず」という言葉があります。天とは何か、それは神であり真理であります。神はどんな人にも平等であります。人間関係の基本を、また人間形成の基本を学園ではバイブルにおいているのであります。

### 三愛精神と実学教育

初期の本学が高度な学問研究に努めていることはもちろんであるが、その教育の特色は、「キリスト教の精神に基づく人間教育」と「実学教育」にある。

神と人と土を愛するという「三愛精神」は本学の人間教育の柱であり、「キリスト教学」を必修科目とし、専任の宗教主任による「学校礼拝」を設けほかの科目に優先した時間割を組み、また、春、秋には「キリスト教教育強調週間」を設けて、学生の人間形成に役立たせている。従来とかく理論学習偏重になりがちな大学教育に対し、本学では実学を尊重し、実際と理論が一致する教育、研究の場を形成する努力をしており、附属農場をはじめ各種の実習実験室を充実して酪農科学の實際を把握修得させた。

### 学科の増設

酪農学園大学の開設は短時日の中にも慎重を期し、将来への発展構想を秘めて発足した。しかし、当初は準備の遅れもあつて必ずしも十分な出発とはいえなかつた。その後、教師陣も



建設中の大学第1校舎（1960年ころ）

強化され、講義の充実、校舎、施設の整備をみるに及んで全国的に反響を呼び、学生数は年とともに増加することになった。

やがて、国の農業基盤の整備、構造改善などに関連し農業基本法の制定をみ、また農村における獣医師不足問題が起こってきたため、学園では酪農学部の中かに一九六三（昭和38）年農業経済学科、翌六四年獣医学科を相次いで増設した。

この獣医学科の開設に至る経過は他項で述べるが、経営指導もできる大動物中心の獣医師養成を目指す本学の動きに対して、獣医師の絶対数の余剰を唱える日本獣医師会の猛烈な反対に会う中で誕生したのである。さらに獣医学科は六年制への移行、学部昇格（一九九五）へと発展したのであった。一方、四番目の学科として食品科学科（一九八七）、次いで食品流通学科（一九九三）、そして環境システム学部、地域環境学科、経営環境学科（一九九七）を設置して、三学部七学科体制となり、また、大学院二研究科五専攻（修士・博士）

一九七五)を設置して生産、加工、流通、市場の分野までを扱う酪農総合大学へと発展を遂げている。  
**人間形成と教養課程** 本学における専門教育は、主として三学年より始めた。また、学生の研究室への配置も同様であった。

それは専門的知識と技術を備えるとともに、総合的な知識と識見を有する人材を養成することであった。教養課程はこうした人間形成のために設けられたもので、いわば大学教育の根幹である。

従って、一、二学年はすべてこの教養課程を履修する。

教養課程では、一般教養科目として人文、社会、自然の三系列と外国語、保健体育科目によって構成されており、教員と学生の緊密な触れあいを高めるため、教養課程のときから教養ゼミナールが開設されている。

このほか、酪農実習は一学年は附属農場で、二学年は道内の酪農家に委託して実施している。こうした酪農家で寝食を共にした体験は、今まで家畜や作物、土に直接触れたことのない学生に対しても、関心と自信を持たせ、専門課程に進んでからの勉学に大きなプラスとなっている。

**学生の状況** 本学への入学生の状況は酪農学科、農業経済学科にあつては、わが国の農業政策を反映して、また、第一次ベビーブームも去つて昭和四〇年代後期(一九七一)の一時期応募者の減少がみられたが、入学者についてはおおむね順調に推移し、昭和五〇年代(一九七五)に入つてからは応募者、入学者ともに増加の傾向にある。

特に、獣医学科にあつては設置以来応募者数は逐年増加し、一時は二、〇〇〇名にも達した。そのた

め七五年以降定員を四〇名より一二〇名に変更したが、なお毎年一、〇〇〇名を超える応募者がある。このことは酪農畜産における家畜診療の増加や公害、環境衛生などに関連して、獣医師の需要が増加していることが主因であるが、一面、本学の特色や教育の在り方、ことに獣医師国家試験の合格率が極めて高いことなどが、全国的に高く評価されてきた成果でもある。

**大学紛争** 大学四三年の歴史の中にあつて、大学紛争は数度経験しているが学生の授業放棄による、深刻な大学紛争は二度あつた。

その一つは、樋浦誠初代学長の更迭に端を発した人事問題をめぐる紛争で、三カ月余りにわたり全学ストライキを体験することになった。今一つは学費値上げ問題で、この紛争は四カ月にわたつて紛糾し、やがて、学生自治会の機能停止にまで発展した。

もちろん、こうした大学紛争は、全国的な傾向であつて、本学も多くの学生からの大学批判の矢面に立たされることになった。

学長更迭問題Ⅱ念願の獣医学科が設置され、大学の学科充実によつて、学校づくりの基礎体制を終えた学園理事会は、一九六四（昭和39）年三月、任期満了した樋浦学長に代わつて黒澤理事長（園長）を二代目学長に選任した。

この学長更迭は、人事を一新し、大学の体質を改善し、新しい時代に適応した学園づくりの一環として行われたものであるが、当時、学園における大学学長の任期や選任規程に多くの不備な点があつた。さらに、この人事について理事会と教授会の間に意見の相違、意思の疎通を欠いていたことに加

えて、樋浦学長が大学部、酪農学園短大、同大学を通じて、長期にわたって学長の職にあつたため、学生に人格的な感化を受け信望を寄せていた学生や同窓生・教職員も多くいたため、大学、短大の学生自治会を中心に同窓生を巻き込んだ大学紛争に発展した。

この紛争は、高まりつつあつた全国的な学生運動の時代背景の下に日増しに激化して、やがて、理事会や教授会の体質問題にまで波及し、学生自治会は「学園の民主化、樋浦学長の復帰」を要求して、五月一日、授業の放棄を決め無期限ストライキに入った。

これに対し理事会は、「学長問題専門委員会」を、教授会は「学長問題改善委員会」と「学生対策委員会」を設置して、事態の解決に精力的な努力を続け、学長選出に関する方向づけを決定した。また、樋浦学長も再び学長に就任する意思のないことを表明するなどによって、紛争は逐次沈静化した。一方、学生も長期授業ボイコットの及ぼす影響などより、六月三〇日ストライキの中止を決めた。

このように、三カ月余りに及んだ大学紛争も表面的には一応平静に復し、授業も開始されたが、人間関係を取り巻く確執と不信感はその後も重々しくキャンパスを覆いしばらく続いた。なお理事会は初代学長に対して、短大創立以来からの功績を多とし、学園顧問および名誉教授の地位に遇した。

この紛争を契機に、学園寄付行為の改定、学長選任規定が整備されるとともに、学園の体制も整ってきた。

学費値上げ問題Ⅱ経済の高度成長に伴う物価の上昇は、教育施設の充実拡大を目指す学園財政に大きく影響し、その経営基盤を脅かすに至つた。そのため、一九七一年一月一九日の学園理

事会は、経営の安定確立の一方策として、大学、短大の学費値上げの方針を固めた。

これに対し、学生自治会は学費値上げ反対を決議し、その撤回を求める活動を開始した。たまたま、当時は全国各大学においても学費値上げをめぐる紛争が相次いでいたこともあって、学生の反対運動は熾烈を極め、一二月三日全学無期限ストライキに入った。

こうした状況の中で理事会は、一二月一三日、学費値上げを決定したため事態はますます複雑になり、この紛争は冬期休暇をはさんでしばらく続くことになった。

その間、教授会は理事会の決定はやむを得ないとして、学生の説得に動いたが容易に解決しなかった。

しかし、卒業や進学、獣医師の国家試験など急迫した事態を前に、教授会と学生との間に大学の在り方、現代社会における役割など数回の話し合いによって、ある程度の合意ができたため、一九七二（昭和四七）年二月一七日、学生大会を開いてストライキ解除を決定し、四カ月余りにわたった学費値上げ問題は一応終結した。

さらに、この学生大会は、学生自治会の全学連よりの脱退と執行部の活動凍結を決議したため、一九六一（昭和三六）年四月発足した大学学生自治会（短大第二コース学生自治会を除く）は、実質的にその機能を失った。

なお、このほか、一九七二年一〇月、大学農場用地の一部売却問題をめぐって一部学生による本館建物の封鎖、占拠があった。翌七三年七月には学長選任のための、理事会、評議員会開催に対し、学

長就任反対の一部過激派学生による学園本部の不法占拠、封鎖などがあったが、いずれも間もなく解除された。

**学生生活と学生寮の推移** 本学における学生寮の歴史は酪農学園大学部、酪農学園短期大学の開設に始まり、酪農学園大学の設置によって大きく変化し今日に至っている。

すなわち、本学の学生の多くは教育の特殊性よりして道内各市町村や府県の、いわゆる地方出身者によって占められていたため、そのほとんどが下宿、間借り生活の状況にあった。そのため、酪農学園大学部や酪農学園短大の時代は機農高校より委譲を受けた農場寮を活用して学生寮とした。ダビデ寮、ヤコブ寮、マルコ寮、ヨハネ寮、ペテロ寮などがそれであった。このユニークな寮名はキリストの使徒の名から付けられた。

その後、酪農学園大学の設置から学科の増設に伴い、学生数は逐年増加し、特に、酪農学科、獣医学科の入学者の多くが府県出身者となってきたことから大学ではこれに対応し、一九六二、六七年にかけて学生寮（創世寮二棟・男子二三八名、いづみ寮女子二〇名）を設置した。このほか、酪農学園短期大学第二コース学生のための寮（北光寮二棟・男子二〇四名、かなん寮女子二五名）を設置した。

**開学後の変遷と動向** 大学は開学以来、四十余年の歴史を刻みその間学科や学部を増設したり、後記の大学院を設置するなど、教育の拡大を図るとともに、教師陣の増強、校舎、施設の整備、研究、演習のための附属施設を設け、教育・研究の充実に努め、また、多くの地方出身者のため、学生寮を付設するなど、大学としての態様を確立してきた。

一方、本学の特色ある教育の在り方は、年毎に高く評価され、現在では本道はもちろん、各都府県より多くの学生が集まり、教育体制、建物、施設の整備と相まって、卒業生は酪農、政治、経済、獣医、教育、福祉などあらゆる分野で活躍しており、評価は年々高まってきている。

**獣医学教育六年制と大学院** 学術の進歩は、獣医学の分野においても大きな変革をもたらした。

特に、畜産、酪農や環境（公害）問題をめぐる、環境衛生、公衆衛生、食品衛生など、各分野において、獣医学の果たす役割はいちだんと多くなり、獣医師に対し高度の知識、技術が要求されてきた。こうした、時代や社会の要請に対応し、教育、研究態勢の確立を図ることになり、文部省の認可を得て、「獣医学研究科獣医学専攻修士課程」を設置し、一九七五（昭和50）年四月開設した。

この修士課程には、当初は獣医学科を卒業した一部のもが進学していたが、その後獣医師法の改正によって獣医学教育年限が延長になり、獣医師受験資格が獣医学教育六カ年卒業者に限られることになったため、一九八二（昭和57）年度よりは、獣医学科の卒業生のほとんどがこの課程に進学した。

しかし、近年における新しい獣医学の領域に対応するためには、さらに、精深高度の研究が必要となってきた。

そのため、学園では「獣医学研究科獣医学専攻博士課程」三年を設置することになり、文部省認可によって、一九八一（昭和56）年四月開設した。なお大学院の経緯については二部に後出するのでここでは割愛する。

## 第四章 酪農学園の組織と変遷

### 一 土地・建物・財政の変遷

**学園用地の選定と取得** 酪農義塾は酪連専務黒澤西蔵の教育構想により、酪農自営者と酪連従業員との教育を目的に設立された関係上、塾舎、実習地とも酪連所有のものを使用して教育が進められた。しかし、酪農科の実習農場の必要性から一九三四（昭和9）年三月、札幌村三角に宅地、農地一一haを二万六、三〇〇円で購入して実習を行ったのである。これが義塾用地の始まりである。

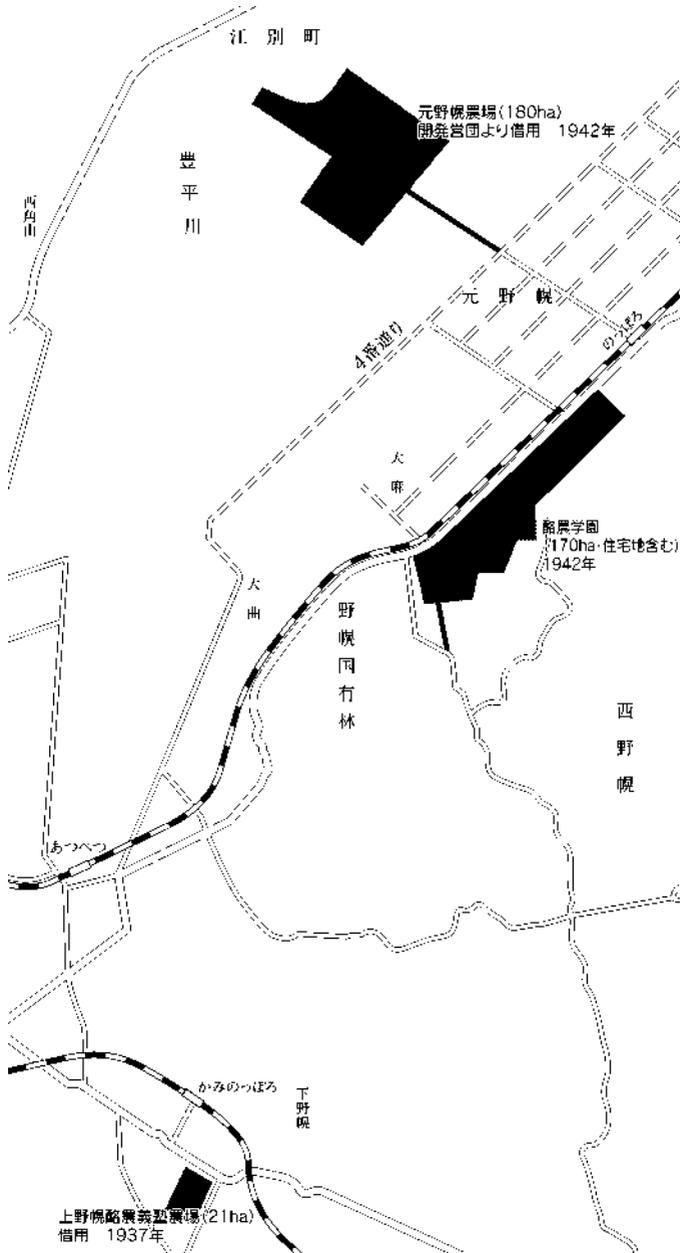
その後、義塾の酪農科が白石村野津幌の出納農場に移転したため、この用地は酪連に売却した。間もなく機農学校設置問題が起こり、校地の選定となったが、教育の重点が酪農の自営者養成に役立つ実学教育にあつたため、広大な農地を必要とし、またその地理、環境も重要課題であつた。

そのため、義塾の理事長であつた黒澤西蔵を中心に選定が進められ、江別町西野幌（現文京台緑町）の現学園用地が選定され、一九四二（昭和17）年三月この土地の所有者山田慎一との間に売買契約が成立した。その地積は一六〇haで、当時は札幌市との境界まで一面の農地と原野で人家も二十数戸と極めて少なく、一寒村に過ぎなかつた。

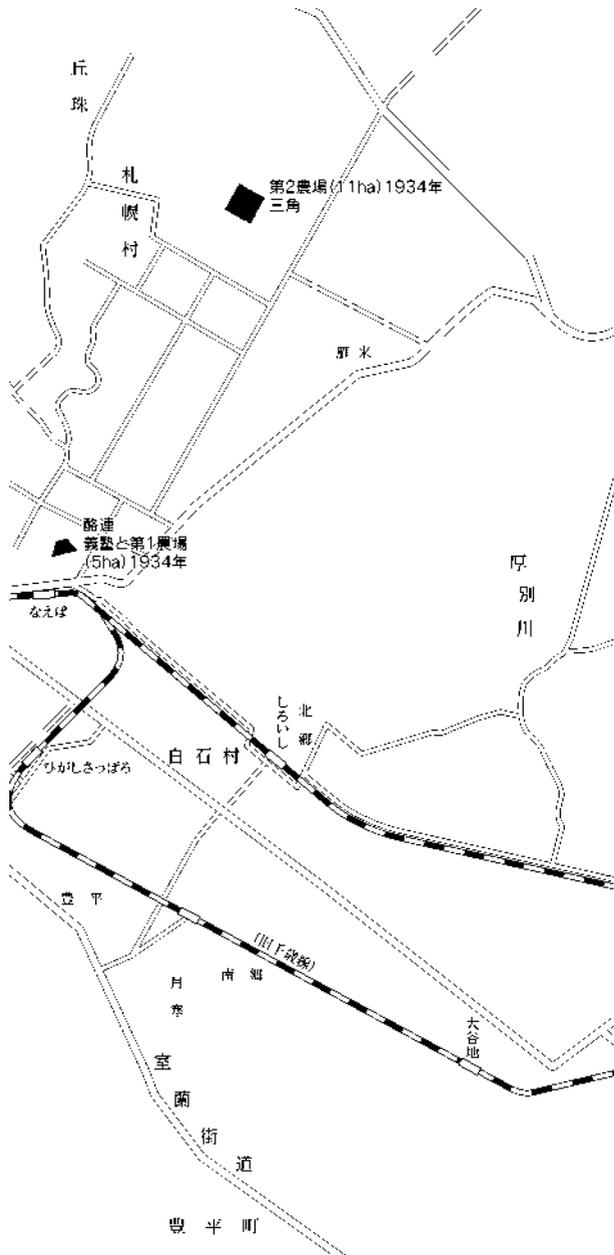
### 学園用地の沿革

現在、この文京台地区は戦後国有林の一部解放によって急速に住宅化が進み、

学園用地の位置略図



第四章 酪農学園の組織と変遷



(注) 一九三五年の地図(地理調査所)を基に作成

一八〇万都市札幌と隣接し、学園用地の一部分譲を契機として学園をはじめ道立図書館、道教育研究所、道立食品加工研究センター、札幌学院大学、北海道浅井学園大学のほかJ Aカレッジが建てられている。さらに数キロ内には北海道開拓記念館、同百年記念塔、道立啓成高校、道自治政策研修センターなどの教育、文化機関、また野幌寄りには札幌理工学院、北海道情報大学などが軒を連ね、これら一帯は江別市の文教地区に指定されている。

この地は、原始林の關係もあつて気候は温暖で雨量も多く、地続きの野幌付近からは、縄文時代の石器、土器が出土し、原始先住民族の足跡がみられるなど、北海道としては考古学上恵まれた環境にあった。

野幌地区の開拓は、一八八五〜六(明治18、19)年元野幌を中心とする野幌屯田兵村の開設に始まり、続いて一八九〇(明治23)年入植した北越殖民社(関谷孫左衛門を中心とする新潟県人)によつて東・西野幌の開拓が進められてきた。しかし、これらが入植したところは主として平たん地で、土壤条件もよく開拓は急速に進んだが、学園所在の丘陵地帯は第四世紀洪積層に属した地帯で、上層は一m近い重粘土に覆われており、かつ、飲料水にもこと欠いていたこともあつて、長い間開拓から見放され、その一部はれんがの原料土採取地となつていた。

明治末期(一九一〇)に至つて山田朝太郎を地主とした十数戸の移民によつて、ようやく開墾が始められた。一九四二(昭和17)年当時は二二戸の小作農家が西野幌部落を形成し、農耕に従事していたため、その移転が困難な問題であつた。



西野幌部落の氏神「十二山神社」と住民。現在の学園ホール前の林にあった (1938)

やがて、これらの農家のうち一四戸が同町元野幌学園元野幌農場隣接地に移住し、通称機農部落を形成することになったが、この元野幌の地は先にも記したとおりの低湿地帯で、水禍の脅威、営農生活への不安などから交渉は難航した。

その後、江別町長坪松唯三郎や同町の酪農先達、町村敬貴の強力なあつ旋と農家側の深い理解と譲歩によって、一九四三（昭和18）年その移転を完了した。

**農地および植林地の現況** 学園の用地のうち文京台、元野幌、植苗の農場については既に記述したので、重複をさけるため省略し、ここでは福島、別海、望来の用地について若干の説明を加えることにする。

福島植林地（松前郡福島町千軒）Ⅱ一九四一（昭和16）年酪連より酪農義塾資産として寄付を受けたものであるが、その後、一部を売却し、一九六八（昭和43）年には近接地二三haを購入、現在五〇haを所有している。そのほとんどに杉を植林しており、既に五〇年を越えた杉も多く適

宜間伐材、あるいは立木として売却している。また、二〇〇二年一月に落成した研修館にも同杉材が使用された。

別海植林地(野付郡別海町奥行)Ⅱこの土地も福島植林地と同じく酪連より寄贈されたもので、当初一、三〇〇ha近くあったが、その後、道開発計画による新酪農村の建設や産業道路の敷設に伴い、一、〇〇〇ha余りを分譲した。この間、一部を開墾して肉牛牧場を開設したこともあったが、みるべき成果を得られなかったため、その一部を当時の管理人に分譲し、現在二九一haを所有しているが、そのすべてが防霧保安林としての指定を受けている。

望来原野・農地(厚田郡厚田村字望来)Ⅱ西野幌農場の一部を道立図書館、道教育研究所、JAカレッジの建設用地として分譲したが、これらの代替地として一九六八(昭和43)年江別市新野幌に一〇haの農地を取得した。たまたま、この地が宅地となり団地が形成されることになったため、一九七三年、三井不動産株式会社に売却した。

その後、学園の将来展望の中で農地の確保を図ることになり、同年八月厚田の原野と畑地一二二haを購入し、その一部を肉牛実験牧場にしたこともあったが、現在は植林地として活用している。

このように、学園の用地は学園の歴史とともに多くの変遷を経ており、現況は付表のとおりである。

第四章 酪農学園の組織と変遷

学園用地の現況 (財産別)		筆数	地積 (ha)	
区分	所在地			
基本財産	北海道江別市野幌若葉町	二	一・七	
	北海道江別市文京台東町	九三	一一六・六	
	北海道江別市文京台東町	二	一・五	
	北海道江別市元野幌	九	一〇四・九	
	小計	一〇六	二二四・七	
	運用財産	北海道江別市野幌若葉町	一	〇・八
		北海道江別市西野幌	四	七・三
		北海道江別市文京台東町	四	〇・六
		北海道江別市文京台東町	三	三・六
		北海道松前郡福島町字千軒	一七	五三・六
北海道野付郡別海町奥行		一九	二八七・三	
北海道苫小牧市植苗		二一	一四四・七	
北海道石狩郡厚田村大字望来		一四	一一一・四	
小計		八三	六一九・三	
合計		一八九	八四四・〇	

**建物の変遷** 酪農学園は他の項でも述べてきたように、教育の充実拡大とともに必然的に施設設備の建設が急がれた。また、学園開設時から建物はサイロや一部の寮を除きほとんどが木造であり老

朽化が進む中で解体、あるいは建て替えられ、今では、往時の建物は珍しいほどである。

学園最初の鉄筋コンクリート三階建の大型建築物は一九六〇（昭和35）年の大学開設に合わせて建てられた現在の第一校舎であった。その後の建築物も中学校を解体した古材の利用で獣医学科の講義棟を建てるなど厳しい財政の中でのやりくりであった。近年になってほとんどの建物は鉄筋コンクリートなどの永久建築になり、内装や設備の高度化には隔世の感がある。その象徴的なものは一九九八（平成10）年三月環境システム学部を設置に伴って建てられた学園初の一〇階建の高層建築、酪農学園大学中央館であろう。ここでは、過去に幾度も移転を繰り返してきた酪農学園本館と大学中央館について記しておく。また、過去二〇年間の施設設備は別表に掲げた。（インテリジェント牛舎群および農場施設は大学・短大附属農場の項）

酪農学園本館の完成は新しい酪農学園本館は一九九〇（平成2）年八月二五日に着工し、翌九一年七月三一日に竣工した。落成式は九月六日、菅沼英二宗教主任司式により佐藤貢名管理理事長はじめ遊佐孝五理事長、高田哲夫副理事長、平尾和義大学学長、坂本与市短期大学学長、高橋節郎同窓会連合会長、学園関係者および建築に携わった関係業者の参列を得て行われた。

建物の概要は、鉄筋コンクリート造陸屋根、地下一階、塔屋一階、地上四階建である。延床面積は二、四九一<sup>2</sup>mで、学園内で初めての定員五人用油圧式エレベーターを設置した。総工費五億一、五〇〇万円、備品費一、五〇〇万円（その他周辺外構工事を除く）である。

地下一階には機械室、水槽室、地上一階には大学・短大事務部総務課、教務部入試課、学園事務局

総務課、経理課、管理課、事業部などの事務室がワンフロアの中に配置された。二階には学生部学生課、厚生課、就職課、教務部教務課など事務室の他掲示コーナー、学生用ロビー、三階には各役員室、秘書室、応接室、非常勤講師室、就職相談室、機器室、四階には大・中・小の会議室三室、それに準備室、男・女休憩室が配置された。

本館落成に伴い大学・短大事務部、教務部、学生部、学園事務局などの事務部門が一堂に集約されたが、一九九八（平成10）年四月に酪農学園大学中央館が落成し、さらにそれに伴って学生サービスセンターが開設されたため、再び大幅な移動がなされ今日に至っている。

酪農学園大学中央館の完成は一九九八（平成10）年三月に完成した酪農学園大学中央館は、学園で初めての一〇階建の高層・複合建造物である。

工事は一九九六年一〇月から進められ、基礎工事の完了に合わせて一九九七年四月三〇日遊佐理事長をはじめ各部長および教職員、工事関係者が出席し、山口宗教主任の司式のもとに定礎式が執り行われている。

この建設は大学・短大の改組転換による環境システム学部設置関連施設に加えて、図書館、学生ホール、ロビーなどを包括した教育研究活動の向上と学生生活の充実、活性化の機能を果たすことを目指したものである。

建設地は、野外礼拝堂の森の東側、同窓生会館（旧短大校舎）南側の旧第八校舎跡地であり、自然に恵まれた閑寂なキャンパスの中で背後に野幌森林公園、前景に石狩平野を見おろすことができる。

建物の概要は、延床面積一〇、四六三㎡、地下一階・地上二〇階・塔屋二階建、高さ四三mに及ぶ高層建築で、総工費二億一、七〇〇万円、備品費二億八、〇〇〇万円であった。

一・二階のロビーは、一般学生が休息・軽食・自習・ミーティングなどに、学生ホールでは音楽・会議など各種行事に活用されている。三〜六階にはマルチメディア機能を重視した図書館（七月移転）、七階には情報管理・会議室、八〜一〇階は新学部等関連の研究室・演習室が設けられている。

落成式は一九九八年四月六日執り行われ、式後落成を記念して一階学生ホールにて演奏会が催された。この中央館は直後の工事によって旧図書館（学生サービスセンター）と廊下で連結されるなど、全館の総合的な利用により機能的で充実した学生生活をおくるための中心的役割を担う建物として、さらなる酪農学園発展の願いのこもったシンボリックな建造物といえる。

第四章 酪農学園の組織と変遷

施設名	建設年	面積(m <sup>2</sup> )	備 考
◇大学・短大部			
農業経済館	1984 (昭和59)	3,053	大教室 2 小教室 4 研究室14 準備室 3 会議室他
食品科学館 (旧酪農2号館D棟)	1988 (昭和63)	2,169	実験室 4 研究室 7 演習室 1 準備室他
食品科学講義棟 (旧酪農3号館)	1988 (昭和63)	1,500	大教室 3 小教室 2 準備室 1 他
食品流通館	1994 (平成6)	2,791	中教室 3 小教室 3 コン ピュータ室 1 研究室10 演習 室 5 実験室 1 他
食品加工実習室 (旧肉製品製造実験実習室)	1990 (平成2)	314	実習室 講義室 乾燥室 検査 室 スモークングルーム他
圃場温室実験棟	1986 (昭和61)	990	実習室 ガラス室 ガラス温室 網室 地下収納庫 恒温器室他
家畜センター 実験実習室	1986 (昭和61)	457	実験室 3 実験準備室 試料調 整室 冷蔵室 乾燥室 粉碎室 他
家畜センター・ 羊舎	1986 (昭和61)	196	羊舎
家畜センター・ 豚舎	1987 (昭和62)	155	豚舎
家畜センター・ 第1実験鶏舎	1987 (昭和62)	149	鶏舎
家畜センター・ 第2実験鶏舎	1987 (昭和62)	218	鶏舎
獣医2号館	1986 (昭和61)	2,557	実験室 7 研究室10 演習室 7 無菌室 2 準備室 3 洗浄室他
獣医4号館	1989 (平成1)	2,548	実験室 3 研究室 9 演習室 5 実習室 2 準備室 3 共通機器 室他
病理解剖室	1989 (平成1)	240	解剖室 標本室 準備室 シャ ワー室他
焼却炉格納庫	1989 (平成1)	112	焼却炉 2 基
大動物臨床センター	1992 (平成4)	1,417	研究室 2 実験室 1 演習室 1 実習室 1 手術室 2 準備室 牛舎他
酪農学園大学中央館	1998 (平成10)	10,660	研究室37 図書館 会議室 教 職課程指導室 学生ホール他

学園内主要構築物・施設 (過去一〇年間・農場関係は別掲)

第一部 酪農学園通史

施設名	建設年	面積(m <sup>2</sup> )	備 考
環境システム館 (旧経営情報館)	1989 (平成1)	1,360	中教室4 小教室1 研究室1 コンピューター室2 演習室他
環境システム館(増築)	1993	674	研究室5 コンピュータ室3
計	(平成5)	2,034	演習室他
環境システム講義棟 (旧教養館)	1984 (昭和59)	1,222	小教室4 実習室 実験室 研 究室2 演習室2他
環境システム講義棟(増築)	1995	1,284	中教室2 実習室2 研究室5
計	(平成7)	2,507	演習室2他
酪農学園本館	1991 (平成3)	2,711	大学短大部学務部 入試部 エ クステンションセンター 学長 室 理事長室 事務局他
学生サービスセンター (旧図書館改修)	1998 (平成10)	1,781	就職部 学生部 教務部 学生 相談室 医務室
研修館	2002 (平成14)	410	研修室 資料室 事務室他
中央講義棟	2003 (平成15)	2,540	大教室3 小教室2 ホール他
黒澤記念講堂	1984 (昭和59)	1,133	ホール 展示室 宗主任室 講堂事務室
酪農学園ホール	1987 (昭和62)	2,315	学生ホール 食堂 生協 北洋 銀行・郵便局 ATM 他
体育館(増築)	1988 (昭和63)	1,997	体育室 器具庫 更衣室 シャ ワー室
弓道場	2002 (平成14)	170	射場 的場
◇高校			
校舎(西棟)	1989 (昭和64)	644	普通教室
校舎(東棟)	1995 (平成7)	1,025	教室3 実験室2 準備室 加 工実習室 職員室他
図書館棟	2001 (平成13)	761	図書室 教室3他
実習棟 (旧大学・短大部第1牛舎改修)	2001 (平成13)	925	実習室 ロッカー室他
格納庫	2001 (平成13)	248	実習用機械格納庫
シオン寮(増築)	2000 (平成12)	399	寮室5 和室 浴室他

**酪農義塾の創立と財政** 一九三三（昭和八）年五月、その構想を発表した酪農義塾は、その後の酪連役員会において具体的方針を固め、九月の酪連総会で設置が承認された。

しかし、財政的には酪連が毎年経常費五、〇〇〇円を支出するといっただけに、関係者の苦労はなみなみならないものがあつた。やがて、武田清平、桐澤兼太、宇都宮仙太郎、黒澤酉蔵、佐藤善七ら篤志者の協力によつて現金二万七、九〇〇円と、桐澤兼太から家屋（延べ二三坪）と耕馬一頭、また、乳牛は宇都宮勤、町村敬貴、黒澤和雄、木村弁三郎、佐藤昇、中西藤市、馬場和一郎からの現物寄付があつたので、これによつて塾舎、施設を設備して同年一〇月一日開塾した。

やがて、農場用地の購入、施設の拡大などによつて、ようやく義塾としての態勢を整えるに至つた。なお、開設時（一九三五年一月）の決算書によると経常支出一万五、二〇五円五七銭、臨時費（土地購入設備費）四万一、四九〇円七五銭となつており、貨幣価値の差違によるとはいえ今昔の感に堪えない。

**機農学校の設立と財政** その後、機農学校の設置へと歩みを進めることになつたが、学校開設には広大な用地を必要とし、さらに校舎、施設の設備費に加えて、義塾と同様に生徒から授業料や寮費を徴収しない方針であつたため、多額の資金を必要とした。

たまたま、当時酪連は、その経営を興農公社に移行し解散することになつていたので、その余剰金の中から六〇万円、また、全道の農民が積み立てていた「北方農業基金」の中から五〇万円の拠出を得ることができ、機農学校の発足となつた。引き続き、興農公社の役員や関係者より多額の寄付があり、また生徒の労働による農場収益金などによつて、戦時下の学校経営を乗り切つてきた。

このように戦時下の学園財政は、酪連を中心とした関係者の援助、協力によって曲がりなりにも切り抜けてきた。

**戦後の財政と学校運営** 戦後、学園がその経営母体としていた興農公社が新時代に適応して大きく改組されたため、学園の財政も逐次自立の道を歩むことになった。

しかし、学園は戦後の教育と取り組み、高等学校への改組、通信教育および短期大学の設置へと組織を拡大したため、その教育費や施設費は著しく増加した。

当時、わが国の経済は戦後の激動期にあつて、インフレーションによる物価の高騰が続いていたことなどから、学園財政は大きな危機下にあつた。そのため、収益事業を経営したほか、前出のとおり北海道酪農協同株式会社より江別乳製品工場を無償で譲り受け、その経営利潤によって局面の打開を図ってきた。

昭和三〇年代（一九五五）に入つて学園の財政は極度に悪化し、酪農学園短期大学、機農高校の存続、縮小問題にまで発展した。こうした中であつて一九五八年に三愛女子高校、一九六〇年には酪農学園大学を設置した。そのため学園の経営はますます困難となつた。

そのため、江別乳製品工場を雪印乳業株式会社に五億一、四〇〇万円にて売却したほか、「酪農学園後援会」を組織して多額の募金をしたり、授業料や入学金の改訂、学生・生徒数の増員、父兄よりの寄付金などによつて財政の確立に努めた。

もちろん、こうした財政の逼迫は、単に酪農学園のみの問題ではなく、全私学の直面した共通の問

題であったので、やがて国庫や道よりの助成の道が開かれていった。

#### 長期財務計画

このような財政の逼迫のなかに学園は、酪農学園大学の拡充と取り組み、農業経済学科に引き続いて、獣医学科を増設し、昭和五〇年代（一九七五―）に入って、大学院の設置、獣医学六カ年教育に伴う校舎、施設の充実、三愛女子高校の移転、酪農学園大学、同短期大学ほか老朽校舎の増・改築整備を急ぐことになった。

そのため、学園ではその永続的発展の基礎を固めることになり、一九七七（昭和五二）年一二月、七八―八三年度にわたる第一次長期財務計画を策定した。

この計画によつてすでに七九年、三愛女子高校の校舎、施設の移転、新築したのを始め八〇年酪農学園短期大学、酪農学園大学酪農学科の校舎（酪農二号館）、八一年、同獣医学科の第三校舎（獣医三号館）、研究室の竣工を終えたほか、附属農場牛舎、機農高校体育館、統合寮など短期間に積極的に教育施設の整備を進めた。

**私学助成と財政** 戦後の学園は、経済の高度成長、ベビーブーム、国民の進学志向などを背景に、曲折があつたが漸次発展の道を歩んできた。

その間、一九七〇（昭和四五）年「私学振興財団法」、一九七五（昭和五〇）年「私学振興助成法」が制定され、私学に対する大幅の資金助成の道が開かれたため学園財政にも活力を与えた。

特に、七七年から、機農高等学校に対し、文部省および道より農業後継者養成のための補助金が交付されるなど、当局の学園教育に対する評価も高まってきた。ところが、七八年度より国の財政事情、

臨時行政調査会の答申などもあって私学助成は抑制されることになり、当初の「經常費二分の一助成」は、まったく困難な見通しとなってきた。

**学生・生徒数の減少と将来計画の策定** こうした状況の中であって、学園を取り巻く経営環境は極めて厳しく、近隣地域での公立高校の新・増設、間口増に加えて、農業近代化政策の浸透は酪農家戸数、後継者の減少となり、必然的に酪農学園各学校への入学学生生徒数の漸減となって現れ、学園の経営に大きな課題をもたらすに至った。

そのため学園では一九八二(昭和57)年一二月、学園の危機的状况とその打開発展を図るため、「学園の現状と将来計画の策定」を提示し、「酪農学園将来計画推進委員会」を発足させて新たな展望の下に、恒久的財務対策を急ぐとともに、それぞれの学校が教育および財務において取るべき具体的施策を実行に移してきた。

その後この基本計画は時代の変化推移により修正される中、九〇～九四年度中期計画、これに連動し、九二～九七年度(’92教育財務中期計画)、九八～〇三年度(’98教育財務中期計画)へと引き継がれ、教育および財務の改善に大きな役割を果たしてきた。これらは学費の見直し、改訂も行いながら各学校の既設学部学科を中心とした新增設、改組転換、統廃合による新たな教育課程、教育組織と附属施設の編成を年次計画により行ったもので時代の要請に対応するとともに、財政の健全化を目指した(第二部 学校再編と現況)。

少子化が進み、受験人口が減少し、大幅な欠員を生じた学校も少なくなり、募集停止や廃校手続き

をする学校も出る中、学園を取り巻く環境もまた今後ますます厳しくなると予想されるが、それを乗り切るためには財政基盤の確立は急務である。学園の教育環境条件はなお未熟なところが多く、取り組むべき教育や学生生徒のための環境整備など多くの課題がある。従ってこれらに還元される固定自己資金（基本金組み入れ）、流動性自己資金は、消費収支差益から賄うほかなく、差益を生み出せるような財務体質の維持・改善は、学園経営にとって最重要課題となってきている。

二〇〇二年度の消費収支（決算）の状況は、次表のとおりである。

資金収支計算書 (概要) (単位：千円)

収入の部		支出の部	
科 目	決 算 額	科 目	決 算 額
学生生徒等納付金収入	6,371,391	人件費支出	3,869,250
手数料収入	176,995	教育研究経費支出	1,850,016
寄付金収入	52,950	管理経費支出	605,144
補助金収入	997,860	借入金等利息支出	2,995
資産運用収入	7,498	借入金等返済支出	140,650
資産売却収入	842	施設関係支出	859,768
事業収入	506,238	設備関係支出	322,845
雑収入	262,719	資産運用支出	1,998,444
借入金等収入	46,100	その他の支出	646,976
前受金収入	1,188,174	資金支出調整勘定	△ 381,091
その他の収入	1,183,496	次年度繰越支払資金	3,224,395
資金収入調整勘定	△ 1,434,398		
前年度繰越支払資金	3,779,527		
収入の部合計	13,139,392	支出の部合計	13,139,392

消費収支計算書 (概要) (単位：千円)

消費収入の部		消費支出の部	
科 目	決 算 額	科 目	決 算 額
学生生徒等納付金	6,371,391	人件費	3,851,014
手数料	176,995	教育研究経費	2,688,409
寄付金	63,488	管理経費	635,955
補助金	997,860	借入金等利息	2,995
資産運用収入	7,498	資産処分差額	102,123
資産売却差額	842	徴収不能額	1,719
事業収入	506,238	消費支出の部合計	7,282,215
雑収入	313,050	当年度消費収入超過額	85,645
帰属収入合計	8,437,362	前年度繰越消費収入超過額	605,195
基本金組入額合計	△ 1,069,502	翌年度繰越消費収入超過額	690,840
消費収入の部合計	7,367,860		

貸借対照表 (概要) (単位：千円)

資産の部		負債の部	
科 目	2002 年度末	科 目	2002 年度末
固定資産	26,862,044	固定負債	2,309,091
有形固定資産	15,442,590	流動負債	1,799,500
その他の固定資産	11,419,454	負債の部合計	4,108,591
流動資産	3,557,997	基本金及び消費収支差額の部	
資産の部合計	30,420,041	科 目	2002 年度末
		基本金	25,620,610
		消費収支差額	690,840
		負債、基本金、消費収支差額の部合計	30,420,041

学校法人会計の計算書類は、資金繰りの状態を示す「資金収支計算書」、経営状態を示す「消費収支計算書」、財産状態を示す「貸借対照表」により表示し、私立学校法第 47 条および学校法人会計基準第 4 条に定められた規則に基づき作成。(△はマイナスを示す)

## 二 経営機構の変遷

社団法人から財団法人へ 一九三三(昭和8)年創設した酪農義塾は、設立を急いだことや詰め切れない分野もあって、その組織は単なる任意団体だった。

従って役員のひとつは前出の酪連創設にかかわった幹部や関係者であったが、その中において理事長に就任した佐上信一は現職の北海道長官であった。当時、現職の地方長官が、こうした一私塾の理事長に就任するということは、全国的にも異例のことであっただけに佐上長官のこの塾に対する期待の大きかったことがうかがえる。

その後、酪農義塾の教育、施設の拡大充実に伴って法人化の必要性が生じてきたため、一九三六(昭和11)年七月、文部省認可による「社団法人北海道酪農義塾」とした。同時に黒澤西蔵を理事長に選任し組織の確立と教育の整備に努めてきたが、やがて前出のようにこの酪農義塾は多くの優れた生徒を送り出して一九四四(昭和19)年三月をもってこの法人も解散した。

酪農義塾を引き継いで文部省令による三年制の農業学校を設置することになった学園は、一九四二(昭和17)年三月二日、文部省の認可を受け「財団法人興農義塾野幌機農学校」を設立し、同時に野幌機農学校を設置して、黒澤西蔵理事長のもとに戦時下の教育に努めてきた。

一九四六(昭和21)年三月、黒澤に代わって青山永が第二代理事長に就任、戦後の学園運営と取り組み、野幌高等酪農学校(通信教育)を興して、農民教育と酪農振興に尽力した。また、酪農学園大学(国

際キリスト教大学野幌キャンパス)の設置準備に入るなど終戦直後の法人運営に大きく貢献した。

一九四九(昭和24)年五月、青山に代わって第三代理事長に就任した佐藤善七は同月、財団法人興農義塾野幌機農学校の名称を「財団法人酪農学園」に変更するとともに寄付行為を根本的に改訂し、先に決定したキリスト教の精神に基づく三愛精神をもって学園教育の基本理念とすることを明確に示した。一方、懸案であった酪農学園短期大学を設置開学したほか、学園の財政や機農高校校舎焼失後の再建に当たるなど、法人運営に卓越した手腕を發揮した。

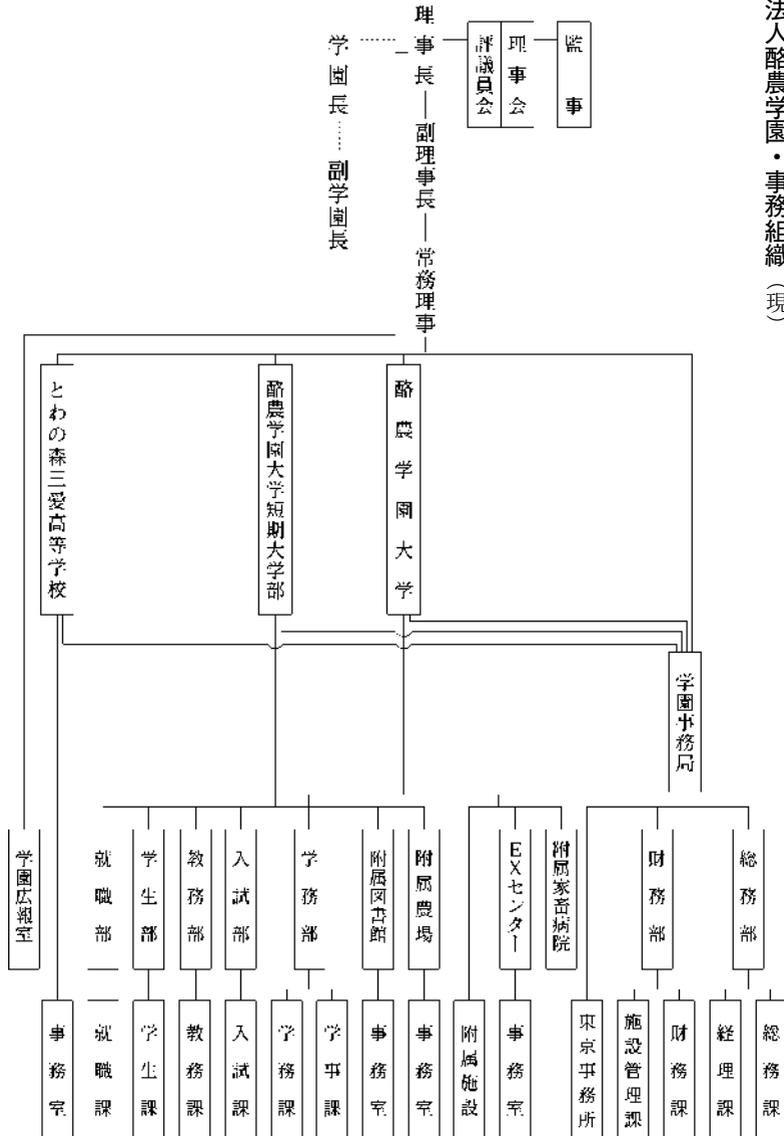
### 三 学校法人と寄付行為

その間、一九四九(昭和24)年一二月に私立学校法が公布され、戦後の私立学校教育に画期的な改革がもたらされ、学校経営の性格や位置づけが明確に示されて民法法人の特例として学校法人の設置が認められることになった。そのため一九五一(昭和26)年、財団法人を「学校法人」に変更し、再び寄付行為の大幅改訂を行った。

この寄付行為では、その目的や建学の精神はもちろん理事会が学園の意志決定の最高機関であることは従来と変わらないが、理事会、評議員会の構成、権限および理事、評議員の定数、選出方法、任期のほか理事の代表権などを具体的に定めた。同時に評議員の中から理事を選出したり、学園の教職員や卒業生より評議員を選出するなど、役員などの民主化を図ってきた。その特色は「理事、評議員はキリスト者、またはキリスト教教育に賛同するものに限る」と規定し、学園のキリスト教主義教育

第四章 酪農学園の組織と変遷

学校法人酪農学園・事務組織（現）



に対する意思の統一を図っている点にある。

この寄付行為はその後、理事、評議員数の大幅増員によって、ますます合議制民主化の輪を広げるなど、時代の推移、変遷とともに部分的改正をみることになったが、その基本精神は変わることなく現在に受け継がれている。

### 学校法人酪農学園寄附行為

#### 第一章 総

#### 則

##### (名称)

第一条 この法人は、学校法人酪農学園と称する。

##### (事務所の所在地)

第二条 この法人は、事務所を北海道江別市文京台緑町五八二番地に置く。

##### (目的)

第三条 この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教の精神に基づいて神、人、土を愛する

三愛精神を基調とした人格の完成を目指し、高邁な学識と技能を有する実学一如の有能な農業人並びに社会の人材を養成することを目的とする。

二 この法人は、前項のほか私立学校法第二六条の規定による事業を行う。

##### (設置する学校)

第四条 この法人が前条第一項に規定する目的を達成するために設置する学校は、次に掲げるものとする。

(一) 酪農学園大学

大 学

院 獣医学研究科

第四章 酪農学園の組織と変遷

(収益事業)

第五 条 この法人が行う第三条第二項の事業の種類は次のとおりとする。

- (一) 出版業
- (二) 種苗販売業
- (三) 土産品製造販売業
- (四) 食料品製造販売業
- (五) 酪農業

第二章 役員

	酪農学部	酪農学研究科
	酪農学部	酪農学
	獣医学部	農業経済学科
	環境システム学部	食品科学科
	獣医学部	食品流通学科
	経営環境学科	獣医学科
	地域環境学科	酪農経営科
	酪農学	普通科
	全日制課程	英語科
	とわの森三愛高等学校	
	酪農学園大学短期大学部	

(役員)

第六条 この法人の役員は理事及び監事とし、定数は次のとおりとする。

(一) 理事 一五人以上一八人以内

(二) 監事 二人以上三人以内

(理事の選任)

第七条 理事となる者は、次の各号に掲げる者とする。

(一) 酪農学園長、酪農学園大学長、酪農学園大学短期大学部学長及びとわの森三愛高等学校校長の職にある者三人以上四人以内

(二) この法人の評議員のうちから互選によって定められた者六人以上七人以内

(三) この法人に関係ある学識経験者のうちから評議員会の意見を聞いて理事会において選任された者六人以上七人以内

二 理事となる者は、キリスト者又はキリスト教教育に賛同する者とする。

三 第一項第一号及び第二号に規定する理事は、学園長、学長、校長又は評議員の地位を退いたときは、理事の職を失うものとする。

(理事)

第八条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を決定する。

(理事長)

第九条 理事のうち一人は、理事の互選により理事長となる。

二 理事長は、この法人を代表し、法人の事務を総括する。

(副理事長)

第一〇条 理事長を除く理事のうちより、理事の互選により、副理事長一人を選出することができる。

二 副理事長は、理事長事故あるとき、又は理事長が欠けたときはその職務を代行する。

(常務理事)

第一一条 理事長、副理事長を除く理事のうちより、常務理事二人以内を置く。

二 常務理事は、理事の互選により選出する。

三 常務理事は、理事長、副理事長を補佐し、この法人の事務を処理する。

常務理事が二人の場合は、事務を分担する。

四 理事長、副理事長共に事故あるとき、又は欠けたときは常務理事がその職務を代理し、又はその職務を行う。

常務理事が二人の場合は、あらかじめ理事長の指名した常務理事がその職務を代理し、又は代行する。

(理事代表権の制限)

第一二条 理事長以外の理事は、この法人の業務について、この法人を代表しない。

(理事会)

第一三条 理事会の組織運営は次のとおりとする。

(一) 理事会は、理事全員で組織する。

(二) 理事会は、理事長が招集する。

(三) 理事長は、理事現員の二分の一以上、又は評議員会から会議に附議すべき事項を示して理事会の招集を請求された場合は、その請求のあった日から七日以内に、これを招集しなければならない。

(四) 理事会に議長を置き、理事長をもつて充てる。

(五) 理事会は、理事現員の三分の二以上が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。但し、当該議事につき書面をもって、あらかじめ意思表示をした者は、出席とみなす。

- (六) 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、議長が決するところによる。
- (七) 前項の場合議長は、理事として議決に加わることができない。
- (八) 議長は、理事会開催の場所、日時、議決事項その他の事項について議事録を作成し、議長及び出席理事のうちから互選された理事二名以上が署名捺印し、常にこれを事務所に備え置かなければならない。

(理事会における議決事項)

第一四條 理事会で議決すべき事項は、次のとおりとする。

- (一) 寄附行為の変更
- (二) 理事の選任
- (三) 評議員の選任
- (四) 学園長、副学園長、学長、校長の選任に関する事項
- (五) 名誉理事長、顧問の委嘱
- (六) 予算、借入金（当該会計年度内の収入をもつて償還する一時の借入金を除く。）に関する事項
- (七) 予算外の義務負担に関する事項
- (八) 寄附金品の募集に関する事項
- (九) 収益事業に関する重要事項
- (一〇) 権利の放棄に関する事項
- (一一) 資産の処分に関する事項
- (一二) 合併
- (一三) 目的たる事業の不能による解散
- (一四) 残余財産の処分に関する事項

(五) その他重要事項

(理事会における議決の特例)

第一五条 次に掲げる事項については、理事現員の三分の二以上の賛成がなければならぬ。

- (一) 借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）に関する事項
- (二) 資産の処分に関する事項
- (三) 権利の放棄に関する事項
- (四) 寄附行為の変更
- (五) 合併
- (六) 目的たる事業の不能による解散
- (七) 残余財産の処分に関する事項

(常任理事会)

第一六条 理事長、常務理事及び第七条第一項第一号の理事をもって、常任理事会を組織する。

二 常任理事会は、理事長が招集して理事長が議長となる。

三 常任理事会は、理事会の決議に基づく事項のうち重要なものの実施について協議する。

(監事)

第一七条 監事は、評議員会において選任する。

二 監事は、理事又はこの法人の職員（この法人の設置する学校の教員その他の職員を含む。）と兼ねることができない。

(監事の職務)

第一八条 監事の職務は、次のとおりとする。

- (一) この法人の財産の状況を監査すること。

- (二) 理事の業務執行の状況を監査すること。
- (三) この法人の財産の状況又は理事の業務執行の状況について監査した結果不整の点のあることを発見したとき、これを文部科学大臣又は評議員会に報告すること。
- (四) 前号の報告をするため必要があるとき、理事長に対し評議員会の招集を請求すること。
- (五) この法人の財産の状況、理事の業務執行の状況について、理事会に意見を述べることを。

(役員任期)

第一九条 役員(第七条第一項第一号の規定により理事となる者を除く。)の任期は、四年とする。但し、補欠又は補充役員の任期は、前任者又は現任者の残任期間とする。

二 役員は、再任されることができる。

三 役員は、任期満了の後でも、後任者が選任されるまでは、なお、その職務を行う。

(役員補充)

第二〇条 理事又は監事のうち、その定数の五分の一をこえる者が欠けたときは、一カ月以内に補充しなければならぬ。

(役員報酬)

第二一条 理事及び監事の報酬は理事会において定める。

第三章 評議員会

(評議員)

第二二条 評議員は、評議員会を組織し、必要事項を議決するとともに、理事会の諮問に応ずる。

(評議員会)

第二三条 評議員会は、次に掲げる五〇人以上五六人以内の評議員をもって組織する。

- (一) この法人の職員のうちから選任された者一六人以上一八人以内
- (二) この法人の設置する学校（この法人の前身者が設置した学校を含む。）を卒業した者で年令二五歳以上の者のうちから選任された者九人以上一人以内
- (三) 酪農学園長、酪農学園大学長、酪農学園大学短期大学部学長及びとわの森三愛高等学校長の職にある者三人以上四人以内

(四) この法人に関係ある学職経験者二人以上二三人以内  
(評議員の選任)

第二四条 前条第一号に規定する評議員は、この法人の職員のうちから互選された者を、理事会において選任する。

二 前条第二号に規定する評議員は、この法人の設置する学校の同窓会が推薦する者を、理事会において選任する。

三 前条第四号に規定する評議員は、理事会において推薦し、評議員会が選任する。

四 評議員となる者は、キリスト者又はキリスト教教育に賛同する者とする。

五 前条第一号及び第三号に規定する評議員は、職員、学園長、学長又は校長の地位を退いたときは評議員の職を失うものとする。

(評議員の任期)

第二五条 評議員（第二三条第三号の規定により選任された者を除く。）の任期は四年とする。但し、補欠又は補充の評議員の任期は、前任者又は現任者の残任期間とする。

二 評議員は、再任されることができる。

三 評議員は、任期満了の後でも、後任者が選任されるまでは、なお、その職務を行う。

(評議員の補充)

第二六条 評議員のうち、その定数の五分の一をこえる者が欠けたときは、一カ月以内に補充しなければならない。

(評議員会)

第二七条 評議員会は、理事長が招集する。

二 評議員会は、評議員現員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。但し、当該議事につき書面をもって、あらかじめ意思表示をした者は、出席とみなす。

三 評議員会の議長は、会議の都度、評議員の互選で定める。

四 評議員会の議事は、出席評議員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

五 前項の場合議長は、評議員として議決に加わることができない。

六 理事長は、評議員現員の三分の一以上の評議員から会議に附議すべき事項を示して評議員会の招集を請求されたときは、その請求のあった日から一〇日以内に、これを招集しなければならない。

七 議長は、評議員会開催の場所、日時、議決事項、その他の事項について議事録を作成し、議長及び出席評議員のうちから互選された評議員二名以上が署名捺印し、常にこれを事務所に備え置かなければならない。

(議決事項)

第二八条 評議員会の議決事項は、次のとおりとする。

(一) 監事の選任

(二) この法人の業務について監事より報告あった場合の措置

(三) この法人に関係ある学職経験者よりの評議員の選任

(四) 寄附行為の変更

(五) 合併

## 第四章 酪農学園の組織と変遷

- (六) 目的たる事業の不能による解散
- (七) その他理事長において必要と認められた事項

### (諮問事項)

- 第二九条 次に掲げる事項については、理事長において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。
- (一) 予算、借入金（当該会計年度内の収入をもつて償還する一時の借入金を除く。）に関する事項
  - (二) 予算外の義務負担に関する事項
  - (三) 権利の放棄に関する事項
  - (四) 資産の処分に関する事項
  - (五) 寄附金品の募集に関する事項
  - (六) 収益を目的とする事業に関する重要事項
  - (七) 学園長、副学園長、学長、校長の選任に関する事項
  - (八) 名誉理事長、顧問の委嘱
  - (九) その他この法人の業務に関する重要事項

### 第四章 学園長、副学園長、学長及び校長

#### (学園長、副学園長)

第三〇条 この法人に学園長を置く。なお、必要に応じ、副学園長を置くことができる。

- 二 学園長、副学園長の任命は、理事長が評議員会の意見を聞き、理事会の承認を経て行い、任期を四年とする。

三 学園長は、この法人の教育業務を総括する。

- 四 副学園長は、学園長を補佐し、学園長事故あるとき、又は欠けたときは学園長の職務を行う。

(学長)

第三一条 この法人の設置する大学及び短期大学部に学長を置く。

二 学長の任命は、別に定める規定により、任期を四年とする。

三 学長は、大学又は短期大学の学務を統轄する。

(校長)

第三二条 この法人の設置する学校に校長を置く。

二 校長は、評議員会の意見を聞き、理事会の承認を経て理事長が任命し、任期を四年とする。

三 校長は、校務を統轄する。

第五章 名誉理事長及び顧問

(名誉理事長)

第三三条 この法人に名誉理事長を置くことができる。

二 名誉理事長となる者は、長年にわたり、この法人の理事長として功労のあった者とする。

三 名誉理事長の委嘱は、理事長が評議員会の意見を聞き、理事会の承認を経て行う。

四 名誉理事長の任期は役員に準ずる。

五 名誉理事長は、この法人に関する必要事項について理事長の諮問に応ずる。

(顧問)

第三四条 この法人に顧問を置くことができる。

二 顧問となる者は、この法人の功労者または学職経験者とする。

三 顧問の委嘱は、理事長が評議員会の意見を聞き、理事会の承認を経て行う。

四 顧問の任期は、役員に準ずる。

五 顧問は、この法人の運営に関する必要事項について理事長の諮問に応ずる。

第六章 資産及び会計

(資産)

第三五条 この法人の資産は、次のとおりとする。

- (一) この法人の組織変更のときの財産目録記載の財産
- (二) 資産から生ずる果実
- (三) 授業料、入学金及び検定料
- (四) 実験実習収入
- (五) 収益事業から生ずる収入
- (六) 寄附金品
- (七) その他の収入

(資産の区分)

第三六条 この法人の資産は、これを分けて基本財産、運用財産及び収益事業用財産の三種とする。

二 基本財産は、この法人の設置する学校に必要な施設及び設備又はこれらに要する資金とし、財産目録中基本財産の部に記載する財産及び将来基本財産に編入された財産とする。

三 運用財産は、この法人の設置する学校の経営に必要な財産とし、財産目録中運用財産の部に記載する財産及び将来運用財産に編入された財産とする。

四 収益事業用財産は、この法人の収益を目的とする事業に必要な財産とし、財産目録中収益事業用財産の部に記載する財産及び将来収益事業用財産に編入された財産とする。

五 寄附金品については、寄付者の指定のある場合には、その指定に従って基本財産、運用財産又は収

益事業用財産に編入する。

六 基本財産並びに運用財産中の不動産及び積立金は、これを消費し又は担保に供してはならない。但し、この法人の事業の遂行上やむを得ない事由があるときは、理事現員の三分の二以上の同意を得て、その一部に限り処分することができる。

七 この法人の設置する学校の経営に要する費用は、運用財産中の不動産及び積立金から生ずる果実、授業料、入学金、検定料その他の運用財産（不動産及び積立金を除く。）をもって支弁する。

（会計年度）

第三七条 この法人の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

（予算）

第三八条 この法人の予算は、学校の経営に関する会計（学校会計という。以下同じ。）及び収益事業に関する会計（収益事業会計という。以下同じ。）に分け、毎会計年度開始前に理事長において編成する。

（決算及び剰余金の処分）

第三九条 この法人の決算は、毎会計年度終了後二カ月以内に作成し、監事の意見を求めるものとする。

二 理事長は、決算を毎会計年度終了後二カ月以内に監事の意見を付して評議員会に報告し、その意見を求めるものとする。

三 学校会計の決算上剰余金を生じたときは、その一部又は全部を基本財産若しくは運用財産中の積立金に編入し、又は次会計年度に繰越しするものとする。

四 収益事業会計の決算上生じた剰余金は、その一部又は全部を学校会計に繰入れなければならない。

（解散）

第七章 解 散

第四〇条 この法人は、私立学校法第五〇条第一項第三号から第六号までに掲げる事由によるほか、評議員会の議を経、理事現員の三分の二以上の賛成あるときに解散する。

二 前項の事由による解散は、文部科学大臣の認可を受けなければその効力を生じない。

三 目的たる事業の不能による解散は、文部科学大臣の認定を受けなければその効力を生じない。

(残余財産の帰属者)

第四一条 この法人が解散した場合（合併又は破産による解散を除く。）における残余財産の帰属すべき者は、解散のときにおいて、他の学校法人その他教育の事業を行う法人のうちから、理事会において選定する。

#### 第八章 寄附行為の変更

(寄附行為の変更)

第四二条 この法人の寄附行為を変更するときは、評議員会の議を経、理事現員の三分の二以上の賛成を得て、文部科学大臣の認可を得なければならない。

#### 第九章 公示の方法その他

(公告の方法)

第四三条 この法人の公告は、酪農学園の掲示場に公告する。

(施行細則)

第四四条 この寄附行為の施行細則及びこの法人の設置する学校の運営に関する必要事項は、理事会において定める。

附 則

一 この法人の設立当時の役員は、次のとおりである。

理事長	佐藤善七	理事	白戸八郎
理事	黒澤酉蔵	同	岡村文四郎
同	青山永	同	ゴードンKチャップマン
同	樋浦誠	同	斎藤惣一
同	川村秀雄	同	平野一城
同	幡野直治	監事	佐治正一
同	佐藤貢	同	二瓶栄吾

二 この改正寄附行為施行のとき現に在任する理事、監事、評議員は、定数の改正にかかわらず、任期中引続き在任するものとする。

三 この寄附行為の改正は、昭和四〇年三月一八日から施行する。

昭和四七年	三月三〇日改正施行	平成二年	四月一日改正施行
昭和五〇年	四月一日改正施行	平成三年	四月一日改正施行
昭和五一年	六月三〇日改正施行	平成三年一〇月二八日改正施行	
昭和五二年	一月二六日改正施行	平成五年二月二日改正施行	
昭和五四年	二月二七日改正施行	平成七年三月一六日改正施行	
昭和五六年	四月一日改正施行	平成七年二月二日改正施行	
昭和五九年	四月一日改正施行	平成九年二月一九日改正施行	
昭和六〇年	四月一日改正施行	平成一一年二月二日改正施行	
昭和六三年	四月一日改正施行	平成一四年一〇月二八日改正施行	

#### 四 理事長・学園長の交代

**理事長** 一九五七（昭和32）年二月、佐藤善七理事長の急逝によって、黒澤酉藏が再び第四代理事長に就任した。黒澤は常に教育の重要性を訴えて翌五八年、酪農学園女子高校を設置し引き続いて一九六〇（昭和35）年には念願の酪農学園大学を創設したほか、学園財政の確立に努め多くの成果を収めた。

一九六六（昭和41）年一二月、黒澤に代わって佐藤貢が第五代理事長に就任した。佐藤は酪連、興農公社、北海道酪農協同株式会社および雪印乳業株式会社の社長、役員としての長年にわたる経験と豊かな国際感覚を生かして、学園経営の安定、財政の確立に取り組むとともに教育の充実、拡大に努めた。理事長職は二五年間に及びその間各学校の学科増設や大学院を設置したほか、三愛女子高校の移転や財政の長期安定方策を樹立し、老朽校舎、施設を増改築するなど学園の近代的発展に努めた。特に酪農学園大学附属高校と、とわの森三愛高等学校の統合など数々の難題に卓越した指導力を発揮するとともに学園の社会に対する地歩を固めるに至ったことは『学園史一』で触れているので、ここでは、佐藤貢の後を継いだ遊佐孝五および現理事長の平尾和義について触れておく。

**六代理事長に遊佐孝五** 一九九一（平成3）年五月三十一日の理事会・評議員会において佐藤貢理事長は任期満了につき退任し、名誉理事長に推戴された。代わって第六代理事長に遊佐孝五が選任された。副理事長に高田哲夫、常務理事に牛島純一、菊池利治が選任された。また、牛島は学園長（第四代）

を、菊池は事業部長を兼任することになった。佐藤貢は退任のあいさつで、「二五年間にわたり理事長の重責を担ってきたが、この間、幾度も苦難に耐え試練をも乗り越えて今日の酪農学園を築き、わが国の酪農の進展にいささかなりとも寄与し得たことは、神の御導きと皆様のご厚情の賜」と謝し、「退任に際し、最大の関心事は後任の遊佐理事長はじめ学園運営のための役員人事の決定だった」と安堵の色を見せた。

新理事長としての重責を担った遊佐孝五は一九二二（大正11）年札幌市に生まれ、一九四六（昭和21）年北海道大学農学部卒業、四七年より一九六一（昭和36）年まで酪農学園乳製品工場において実験、実習、研究、指導（酪農学園短期大学、同大学講師、工場長）に当たった、いわゆる酪農学園はえぬきの教員であった。この間、「国際キリスト教大学野幌キャンパス」構想の聴講生としてキリスト教の研究、修得に努めたほか、海外での研究・研修の体験も豊富であった。一九七三（昭和48）年七月から三期一二年間学長を務め、大学、短大の事務統合、大学院の設置、獣医学科の定員増、授業料問題の改善などを図るとともに、校舎、施設の充実など大学教育の推進と運営に積極的に取り組んできた。また、短期大学酪農学校長、酪農学園長を歴任するなど、長きにわたって学園運営の中核的役割を果たしてきた。農学博士。

遊佐理事長の就任あいさつ（抜粋）

私は戦後の昭和22（一九四七）年に酪農学園創立者黒澤西蔵先生に出会い、先生の日本再興にかける情熱

と信念に共鳴して本学園教員になって以来四〇余年、短大・大学・大学院の設立に参画して今日に至っており、選任されました以上、歴史と伝統があり、全国から高い評価を受けている酪農学園の発展のために全力をあげて努力する決意でございます。さて、理事長就任にあたり、一言申し上げます。

第一は、私学には私学独自の創立の教育理念、即ち建学の精神を有すと言うことです。本学園は昭和八（一九三三）年に創立されましたが、当時北海道は毎年冷害凶作に見舞われており、その時黒澤西蔵先生はじめ酪農民有志が相集い、デンマークを範とし、北方寒地農業の確立のため酪農畜産を取り入れた有機農業を振興すべきとし、そのためには農村青年教育が先決なりとして道庁などに働きかけ酪農義塾が創立されました。黒澤先生は塾長として全寮生と起居を共にして教育に当たられ、理事長には北海道長官佐上信一氏が就任されました。即ち、北海道農業の改革のため産・官・学協同の取り組みにより酪農学園が創立されたということであります。

この建学の理念は永遠に継承されるべきで、現在も、神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛精神を実践する人間教育と、実学教育を実施しております。実学教育といえば、学園の各教育部局がそれぞれ具体的に特色ある実学教育を実践し、一例をあげますと、大学獣医学科では一年に三六〇頭もの大動物解剖実習をはじめ、全国一の診療実習を行うなど、社会の要望に応える特色ある私学としての教育研究を推進しております。

第二は、国際交流の推進であります。今迄も韓国・カナダ・アメリカ・中国との交流を進めておりますが、今後はさらに、アジア・アフリカ・南米などの国々とも交流を進めたいと考えます。特に我国の方針であるJICAやODAによる国際協力との連携を図り、本学園の特色を生かし国際交流の実を上げる必要があります。

第三は、生涯教育の推進であります。本学園では既に大学内にエクステンションセンターを設置しており、生涯学習、公開講座をさらに推進して地域の要望に応えてゆく考えであります。また科学の進歩が非

常に早い今日、本学卒業生のみならず、社会で活躍している獣医師、教員、農業改良普及員などに対し、リカレント教育の実施も必要と考えます。既に高校教員には、毎年リカレント教育を実施して好評を得ており、これをさらに推進してゆきたいと考えます。

以上、酪農学園の教育研究構想の一端を申し上げましたが、これら学園の教育研究を「高校・短大・大学がさらに連携を強めて」充分に実施し、私学として特色ある酪農学園を永続的に発展させてゆくには、同時に学園の財政基盤の確立が重要必須であります。

現在、我国の高等教育を担っている私立大学・短大の比率は、それぞれ七五%、八四%にも及んでおります。昭和四五（一九七〇）年から開始された私立大学経常費補助金は、国も当初は五〇%補助の考えでありましたが、現在の補助率は僅か一五%以下という実体であり、私共として不満足と言わざるを得ません。しかし、私学は私学として独立独立歩の経営理念を持って進めなければならないと考えており、その意味から、私共理事会は、教職員の理解と協力を得て、建学の精神を具現化する教育を実施するためにも、財政基盤の確立に一層努力してゆく所存でございます。

### 七代理事長に平尾和義

二期八年、学園はえぬきの遊佐孝五理事長が一九九九（平成11）年六月三〇日をもって退任した。

代わって同年七月一日、七代理事長に平尾和義が就任した。平尾新理事長は酪農義塾開設年と同じ一九三三（昭和8）年に生まれ、一九五五（昭和30）年に北海道大学獣医学部を卒業し、同大学大学院獣医学研究科（修士課程）修了後、北海道農業共済組合連合会講習所、家畜診療所技師、根室生産連などの臨床現場を経て一九六九（昭和44）年に酪農学園大学へ。講師、助教授を経て一九七七（昭和52）年か

ら教授。この間、酪農学科長、附属図書館長、学園評議員など務める。一九八九（平成1）年酪農学園大学七代学長に就任し、多難な時期を二期・八年を務めたが、学長在任中の一九九五年から副理事長に就任した。また、家畜改良事業団（現ジェネティクス北海道）顧問、北海道家畜人工授精師協会会長、日本家畜人工授精師協会副会長、日本私立大学協会常務理事など多くの公職を持つ。獣医学博士。

なお、六代副理事長に高橋節郎が就任した。高橋副理事長は短期大学の創期生であり、現連合同窓会の会長である。教員、酪農自営、JA組合長、ホクレン専務理事など豊富な経験に加え、早くから学園評議員・理事として学園運営に参画してきた。

また常務理事に菊池利治が再任された。菊池は事務局次長、局長を歴任し、一九九一（平成3）年から常務理事の任にあり、学園運営に深くかかわってきた。

#### 平尾理事長の就任あいさつ（抜粋）

私は、皆様のお力添え、ご協力を得まして、学園創立者黒澤西蔵先生をはじめ、多くの先達が幾多の苦難のなか心血を注ぎ脈々として築かれた伝統を受け継ぎ、遊佐前理事長の理念と路線を踏襲して、常に建学の精神や、学園創立の原点に立ち返り、理事長として微力ながら職務遂行に最善の努力をし、ご期待に添えるよう全力を尽くす決意でございます。創立者の熱き思いと固い意志を大切に、また過去の一点に止まることなくこの精神と伝統を創造的に継承し、今日の時代や社会の変化に伴う新しい要請を柔軟、且つ敏感に受け止め、学生生徒から「酪農学園に学んで本当によかった」と思われ、広く社会一般から一層の理解と高い評価、支持を受ける教育機関、「学園づくり」を目指し努力することによって、時代を超えて永

遠に変わらない本学園の姿を、懸命に追い続けなければならぬことを心から願っております。

同時にまた、少子化、多様化、国際化への対応など学校経営冬の時代に入り、いよいよ私学の存続が問われ、生き残りをかける本格的な学校選別の厳しい時期にあつて、今こそ学園関係者全員が信頼と和のもとに一致団結し、「今、なすべきは何か」の問題意識の高揚と実践への意識改革が強く求められていると考えています。本学の教育理念を堅持し、永続的発展を図るためには、一層強固な一体的意志を前進させ、何にも増して一人ひとりの自己改革の自主的、積極的な取り組みが不可欠であります。大きな困難が待ち受け、今後も続くであろう私学の厳しい状況の中で、理事長はその先頭に立ち、最大の努力をいたしますが、誰かがやるだろうではなく、われわれの学園のため、自分自身も含め学生生徒のためにという意識を持ち、役員、組織全体が力を合わせて、様々な問題と戦い、これに立ち向い、実践することが学園発展の底力となることを確信しております。

昨年二月に決定した教育財務中期計画の教育環境整備は、当面する課題として受け止めています。この基本計画に従つて、「学術フロンティア事業」は既に実行に入り、本年度はさらに「ハイテクリサーチセンター」が設置され、活動を開始しようとしており、計画期間中には専門分野の教育研究の進展はもとより、全学園的教育面での積極的利用が期待されます。これらの事業を軸に、教育研究内容の一層の充実向上が図られ、大学短大・高校との連携強化、一貫教育を推進するため校地、施設、設備の活用は、今後の重点的、具体化すべき案件であり、懸案の高校完全統合、農場再編整備、学寮問題などにも積極的に取り組まなければならぬと考えております。また多くの課題が山積し、教育理念の実践力が求められている一方で、教育理念や情熱のみではなく、その形を現実整合させながら学園が常に生成発展するために、「経営」あることは自明であり、財政の健全化にも目を配り、一層の改善と努力が必要とされ、誠に責任の重大さを痛感している次第であります。

就任に当たり、このような諸課題解決に皆様のご理解、ご支援を重ねて心よりお願い申し上げます、ごあい

さつといたします。

**学園長** 学園は義塾の創設以来理事長を中心に、経営と教育を進めてきたが、当時は組織や機構も小さかったことなどから、こうした運営方式が時宜を得ていた。

戦後、法人組織の変更、学校の増設、特に教育の拡大に伴い、教育体制の確立と運営のため、その責任者を置く必要が生じてきた。

そのため、一九五〇（昭和25）年一二月、学園は学園長制度を制定し、初代学園長に黒澤西蔵を選任した。学園長に就任した黒澤は、先にも述べたが、教育の拡大、充実に努めるとともに、高校校長、短大、大学学長を歴任し、学園教育に大きな足跡を残した。

一九八二（昭和57）年二月、黒澤学園長の逝去に伴い、同年六月佐藤理事長が二代学園長を兼任した。一九八五（昭和60）年四月から副学園長の遊佐孝五が三代学園長に就任したが、一九九一（平成3）年遊佐の理事長就任に伴って同年七月牛島純一が四代学園長に就任した。牛島は一九二三（大正12）年に生まれ、一九四六（昭和21）年、北海道大学農学部畜産学科卒業。三井物産株式会社、北大副手・北海道酪農協同組合を経て一九四九（昭和24）年に移任し、国際キリスト教大学野幌キャンパス構想が持ち上がった際に遊佐らとともに研修に参加している。その後も短大、大学開設に尽力し、開設後は教育の質向上に中心的な働きをし、後に短大・大学学長、附属高等学校長、常務理事などを歴任した。獣医学博士。

一九九五（平成7）年七月、牛島の退任に伴って黒澤力太郎が五代学園長に就任し、現在に至っている。黒澤は一九一八（大正7）年生まれ、京都大学農学部を卒業し、一九四三（昭和18）年、機農学校の草創期から戦中・戦後の混乱期の教育に携わっており、多難な時代の酪農学園と歩みをともししてきた。機農高等学校長、短大、大学教授、酪農育英会理事長などを歴任し、酪農学園の教育充実に大きな足跡を残している。

この間、一九七九（昭和54）年六月、副学園長制度の発足により遊佐孝五が副学園長に選任され、一九八五（昭和60）年三月まで就任した。また、二代副学園長に山口博が一九九五（平成7）年から二〇〇三年六月まで就任した。

歴代役員（二〇〇三年七月）

理事長	酪農学園開設時
初代 佐上信一	一九四二・三・三一～一九四六・三・三一
第二代 黒澤西蔵	一九四二・三・三一～一九四六・三・三一
第三代 青山永	一九四六・三・三一～一九四九・五・一二
第四代 佐藤善七	一九四九・五・一二～一九五七・二・二
第五代 黒澤西蔵	一九五七・二・二～一九六六・一二・一九
第六代 佐藤貢	一九六六・一二・一九～一九九一・六・三〇
第七代 遊佐孝五	一九九一・七・一～一九九九・六・三〇
第七代 平尾和義	一九九九・七・一～現在

第四章 酪農学園の組織と変遷

初代	第二代	第三代	第四代	第五代	第六代	第七代	第八代	常務理事	初代	第二代	専務理事	初代	第二代	第三代	第四代	第五代	第六代	副理事長
川村秀雄	西本信雄	川村秀雄	菊地正一	小林地哲威	鈴木木信	濱本恒男	牛島純一	川村秀雄	樋浦秀雄	川村秀雄	樋浦秀雄	佐藤貢	川村秀雄	山本庸一	高田哲夫	平尾和義	高橋節郎	佐藤貢
一九五一・六・二〇	一九五八・七・二三	一九六五・四・一九	一九六七・六・一四	一九七七・七・一一	一九七九・六・一八	一九八三・六・三〇	一九八九・六・一	一九五一・六・二〇	一九五一・六・二〇	一九五〇・四・六	一九五〇・四・六	一九六五・四・一九	一九六五・四・一九	一九六六・二・一九	一九七九・七・一	一九八七・七・一	一九九五・七・一	一九六五・四・一九
一九六〇・四・一	一九六六・二・一九	一九七二・六・二一	一九七八・六・九	一九八三・六・二九	一九八八・三・三一	一九八九・五・三一	一九九四・三・三一	一九六〇・四・一	一九五六・七・一	一九六五・四・一九	一九六五・四・一九	一九六六・二・一九	一九六六・二・一九	一九七二・六・二一	一九八七・六・九	一九九五・六・三〇	一九九九・六・三〇	一九六六・二・一九
一九六〇・四・一	一九六六・二・一九	一九七二・六・二一	一九七八・六・九	一九八三・六・二九	一九八八・三・三一	一九八九・五・三一	一九九四・三・三一	一九六〇・四・一	一九五六・七・一	一九六五・四・一九	一九六五・四・一九	一九六六・二・一九	一九六六・二・一九	一九七二・六・二一	一九八七・六・九	一九九五・六・三〇	一九九九・六・三〇	一九六六・二・一九

第九代	菊池利治	一九九一・七・一	一〇	現在
初学園長	黒澤西蔵	一九五〇・一二・二五	二・六	一九八二・
第二代	佐藤貢	一九八二・六・三〇	三・三一	一九八五・
第三代	遊佐孝五	一九八五・四・一	六・三〇	一九九一・
第四代	牛島純一	一九九一・七・一	六・三〇	一九九五・
第五代	黒澤力太郎	一九九五・七・一	六・三〇	現在
副学園長	遊佐孝五	一九七九・六・一八	三・三一	一九八五・
初代	山口博	一九九五・七・一	六・三〇	二〇〇三・
酪農学園事業部長	西本信	一九六七・六・一四	六・三〇	一九八七・
初代	西本信	一九六七・六・一四	六・三〇	一九八七・
第二代	斎藤義孝	一九八七・七・一	一二・三一	一九九〇・
第二代	坂本与市	一九九一・一・一	六・三〇	一九九一・
第三代	菊池利治	一九九一・七・一	三・一六	一九九五・

# 第二部 学校再編と現況

## 第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合

### 一 各種学校

(1) 酪農学園自動車学校 終戦から一〇年を経てようやく落ち着きを見せ始めた農村にも農業の機械化が急速に進み、従前の馬を中心とした畜力が耕耘機に、耕耘機が小型トラクターに漸次替わるとともに、国も国民車構想を打ち出すなど自動車の普及は年を追って上昇を示していた。こうした時代のニーズにこたえるため、運転免許の取得を目的とする自動車学校の設置が理事会において決定され、諸手続を経て一九五五（昭和30）年二月八日、北海道知事の設置認可を得るとともに、学園用地内（現大学第一校舎の高台付近）に自動車コースおよび諸施設を整備し、七月一日、各種学校機農自動車学校として開校した。

七月開校当時の申込者は五六名を数えたが、途中脱落する者、満一八歳に達しないため受験不可能の者などもおり、初年度はわずか四〇名程度の受講者に終わった。

小型自動車とトラクター 初年度は普通自動車のみを教習に終わったが、農村の実情と生徒の希望などにより、小型自動車とトラクターを併せ行うこととし、一九五六（昭和31）年度より小型自動車および三輪車の教習を始めた。また、トラクターの練習は、機農高校の農業クラブなどの時間も活用し、



舗装された1968年ころのコース

が完成した。

免許取得法規の改正と閉校Ⅱ順調な歩みを続けてきた本校も、一大転機を迎えざるを得なくなった。一九七三（昭和48）年免許取得法規が改正になり、教習方法が大幅に変わって、路上運転教習が義務づ

着々と成果を上げるに至った。このため、一九五八年度よりは一般人の募集を中止し、学園内の希望者を対象にすることとした。また一九五九年度より所管を機農高等学校に移した。

コースの移転および新設Ⅱ一九六〇（昭和35）年の大学開設によって従来のコースは使用不可能となったため取りあえず機農高等学校農場内（林木育種所前）に、全長五〇〇mの練習コースを造成した。また、交通法規の改正により、六一年度より小型自動車の免許は無くなり、普通自動車のみとなった。大学生の入学希望者も増加したため、六三年には旧三愛女子高等学校隣接地に、一万五、〇〇〇㎡の新コースならびに事務所、車庫、講義室などを新設し職員の増員を行った。

こうした整備もあって、六四年以降は毎年三〇〇名を超す合格者を出すことができ、また同年六月校名を「酪農学園自動車学校」と改めた。さらに六八年には四、〇〇〇㎡のコースの舗装

けられることになった。同時に、公安委員会の指定自動車学校以外の学校での免許取得は、困難な状況になってきた。

こうした中で、指定校の認可を受けて存続することを検討したが、多くの条件を充足するのに困難な面があり一九七五（昭和50）年度をもって生徒募集を中止することにした。なお、一九七三年度から大型特殊車の教習を始め七〇名の免許取得者を出している。

このように一九七五年度をもって一切の業務を終了し、七六年六月三〇日閉校を決定（七七年一月三日認可）、ここに開校以来二一年の歴史を閉じた。しかし、学園内の学生、生徒に対して果たした教育的役割は大きなものがあり、同時に社会的要請にも十分こたえ、次表のとおり四、一〇〇名を超える卒業生を送ったことは、高く評価されることである。

歴代酪農学園自動車学校長

初代	高杉成道	一九五五・七・一	～	一九六〇・七・三一
第二代	黒澤力太郎	一九六〇・八・一	～	一九七五・三・三一
事務取扱	山花豊	一九七五・四・一	～	一九七五・六・一七
第三代	山花豊	一九七五・六・一七	～	一九七六・六・三〇

閉校時の教職員

石川健一 丹治昌宣 的場豊継 津田佳吾（兼務） 五十嵐巖（兼務） 鈴木明子（兼務）

第二部 学校再編と現況

年 度	自 動 車 科	トラクター科	合 計	卒業 生 数 の 状 況
1955(昭和 30)	28	9	37	
1956( 同 31)	55	14	69	
1957( 同 32)	49	54	103	
1958( 同 33)	38	30	68	
1959( 同 34)	31	39	70	
1960( 同 35)	55	59	114	
1961( 同 36)	82	32	114	
1962( 同 37)	160	30	190	
1963( 同 38)	237	37	274	
1964( 同 39)	262	56	318	
1965( 同 40)	325	87	412	
1966( 同 41)	268	57	325	
1967( 同 42)	270	40	310	
1968( 同 43)	239	49	288	
1969( 同 44)	303	(553)	303	
1970( 同 45)	324		324	
1971( 同 46)	301		301	
1972( 同 47)	279		279	
1973( 同 48)	116	(大特)58	174	
1974( 同 49)	26	(大特)12	38	
1975( 同 50)	6		6	
合 計	3,454	663	4,117	

(2) 酪農学園短期大学酪農学校 戦後の混乱が次第におさまり、経済統制の撤廃、農地の解放、乳

業界の再編成、外地からの基幹労働力の復帰によって、荒廃地や未墾地の開拓が進められる中において、酪農が大きく取り上げられ、酪農民に対する教育問題が起こってきた。

こうした状況に対し、創設以来酪農教育一筋の道を行ってきた学園では、通信教育によってこれに対応することになり、一九四八（昭和23）年四月、機農高等学校内に通信教育制の酪農科（二年修業）を発足させた。ところが、入学希望者は予想をはるかに超える一、二〇〇名にも及んだ。そのため学園では、この通信教育を機農高等学校より分離して、通信教育専門の独立した学校とし、通信教育の徹底を図ることにして、同年八月、「野幌高等酪農学校」（二月二七日北海道教育委員会認可各種学校を設置した。しかし校舎や諸施設の建築が間に合わず、教育業務は機農学校内で行われていたが、一九五〇年の校舎の落成に伴って移転した。初代校長は機農高等学校長の川村秀雄が兼ねた。

本校の設立状況や教育内容・各種講座については『学園史一』に詳述されているので割愛するが、この通信教育は、通信と集合教育（スクーリング）を組み合わせた教育方法を取り、酪農科と家庭科を設けた。

酪農科は毎月、テキスト「酪農講座」と補助テキストの「酪農技術講座」、さらには機関誌として「酪農学校」（後の「酪農の学校」）を配布した。生徒は本校における集合教育に出席して指導を受け、また希望者は学園農場において実習教育を受けられることにした。

家庭科は主として農村家庭の女性を対象に食品の調理、献立、作法、育児、衛生をはじめ、家庭経



短期大学酪農学校 (1965年)

営に関するテキスト(「家庭講座」)や機関誌(「家庭の学校」、それに加え関係図書を配布した。このほか、両科とも通信による質疑応答と添削、小作文、本学園講師による出張教育、学習会なども併せて行い、いずれも修業年限は二カ年とした。

全国各地に分校を開設しその後、時代の推移に対応し教育内容の改善、講師陣の充実、全国の酪農地帯に分校の設置に努めた結果、入学生徒数も著しく増加し、一九六〇(昭和35)年には道内四〇、府県一二〇の分校設置となった。この間、校舎を新築したり東京都に連絡事務所(酪農学園東京事務所)を開設、また、六一年には修業年限三カ年の酪農経営研究科を増設し、六四年六月校名を「酪農学園短期大学酪農学校」と改称した。

この通信教育は働きながら学ぶ農村青年の教育機関として定着した。北海道大学教授陣を中心に執筆された「酪農講座」は当時の難解な酪農技術を平易かつ懇切に解説するだけでなく、その内容、編集手法は画期的なものであり、それだけに道内はもとより全国的に普及されて入学希望者は驚異的に

増え、一時は七、〇〇〇名を超える入学者があった。しかし、一九六〇年代後期に至って農村の近代化、農業政策の変革が進められるに伴って、農村人口が減少し、一方、農村青年の高等学校進学志向が高まり本校への入学者は漸減をみるようになった。

そのため、一九七〇年、家庭科を廃止し、一九七二（昭和47）年には酪農経営研究科を農業経営科に改め、七三年、その修業年限も二カ年に短縮するなどの方策をとり、通信教育の再興に努めた。

その後本校は酪農科と農業経営科の二科を置いて、①教材と指導書、②現地スクーリング、③添削と質疑などを強化して生徒数は一、二〇〇名、地方分校数五〇校を数えるに至ったが、時代の変化はそのまま生徒数の減少となって影を落とした。

月刊「近代酪農」<sup>11</sup>このほか本校では、酪農家の生涯学習を目的に月刊「近代酪農」（後出の「酪農ジャーナル」）を発行し、内外の酪農事情、技術、経営、管理などの知識を中心に編集し、その中に酪農学園教育の特殊性を生かし、会員制による酪農総合誌として酪農の啓発に努めてきた。また、本校は開校時から出版部門を置き、多くの出版物を刊行してきた（別掲）。

一方、会員の要望にこたえ、本校の講師、優秀酪農家を随時派遣し研究会、講習会、座談会を開くなど酪農教育の浸透に意を用いてきた。

しかしながら、昭和五〇年代（一九七五―）に入って社会情勢も大きく変化し、特に地域では過疎化が進むにつれて地元高校への全入の傾向が強まってきた。さらに農業・酪農経営者の高学歴化、あるいは技術の高度化などの諸要因によって年々本校受講生が減少した。

これらの状況に危機感をもった理事会は幾度も協議を重ねた結果、通信教育部門の生徒募集を停止するとともに出版部門を新しく大学に設立されるエクステンションセンターに業務移行することを決定した。一九四八年以来四二年間におよぶ本校は実に九万名の卒業生を送り出し一九九〇（平成二）年三月三十一日をもって業務を停止してその幕を閉じた。閉校認可は一九九一（平成三）年一月一日であった。閉校に際し佐藤理事長（『酪農学園だより』59号）は次のようにあいさつした。

佐藤理事長あいさつ（抜粋）

本学園は四二年前の一九四八（昭23）年四月、戦後の混乱と疲弊した社会の中で、働きながら学ぶ農村青年教育の重要性を認識して通信教育酪農科を開設、建学の理念である三愛精神と実学教育を実践し、日本の農業・酪農を担う人材を養成し、今日までに九万人以上の通信教育卒業生を社会に送り、わが国の発展に寄与してまいりました。

しかしながら、近年に至り農業・酪農を取り巻く情勢は急速に変化し、本校の通信教育につきましても、農業・酪農経営者の高学歴化、技術の高度化、あるいは国際化、情報化の進展などの諸要因により、年とともに受講生が減少し、本校としても根本的な再検討の必要が生じてまいりました。

本学園ではこれら諸々の状況を分析検討の結果、今後は酪農学園大学との密接な連携を図り、より高度なレベルで社会のニーズにこたえてゆく体制が必要であるとの結論に至りました。

よって、一九八九（平成一）年三月の理事会・評議員会において審議の結果、同年四月をもって酪農学園短期大学酪農学校の通信教育受講生の募集を停止し、併せて同時期に酪農学園大学エクステンション・センターを発足させ、これとの連携を進めてゆくことに決定いたしました。

歴代酪農学園短期大学酪農学校長

初代	川村 秀雄	一九四八・八・一	一九六〇・四・一六
第二代	野喜一郎	一九六四・四・一	一九七二・六・二一
第三代	勝目 孝雄	一九六〇・四・一六	一九六四・三・三一
第四代	杉田 文雄	一九七二・六・二一	一九八〇・六・三〇
第五代	遊佐 孝五	一九八〇・六・三〇	一九八八・六・三〇
		一九八八・七・一	一九九一・三・三一

業務停止時の教職員

教諭	長野徳之	同	加藤 隆	同	津田佳吾	助教諭	奥山武美	教諭(嘱)	高尾幸吉
事務長	加藤正勝	主事	十倉 宏	同	柴田弘幸	同	山崎久美子		
東京事務所	香味 昭	同	天田輝久						

今後本学園として、わが国の酪農・農業の発展に尽くした本校の歴史と実績を基礎に置き、新しく発足している酪農学園大学エクステンション・センターにおいて、研究・国際交流・出版普及活動とともに、リカレント教育・生涯学習など各種研修活動をより高度に幅広く実施して社会の要望にこたえ、酪農学園の使命を果たしてゆく所存でございます。

なお、従来本校において通信教育の副教材として出版しておりました「近代酪農」誌を、大学エクステンション・センターへ移行したのを機会に、内容を充実し、「酪農ジャーナル」と改題して発行致しました。皆様には「酪農ジャーナル」誌をご購読の上ご支援くだされば幸いに存じます。

主要出版物一覧

◇酪農学園出版部刊

「グランドビー」デンマーク復興の偉人〈農村文庫1〉

著者 出納陽一

B 6判 222頁 非売品 1949年9月

「乳牛の衛生と看護」〈農村文庫2〉

著者 黒沢亮助

B 6判 249頁 非売品 1949年12月

「進む酪農」

著者 小森健治

B 6判 299頁 170円 1950年3月

「乳と蜜の流れる土」デンマーク農業

著者 野喜一郎〈農村文庫3〉

B 6判 248頁 非売品 1950年4月

「雨ニモマケズ」宮沢賢治の生涯

著者 小田邦雄〈農村文庫4〉

B 6判 253頁 非売品 1950年7月

「黄金の土」(Pay Dirt)

著者 J・I・ローデル(訳・赤堀香苗)

B 6判 368頁 280円 1950年10月

「我が家の農業経営設計」(第1集)

酪農学校 指導部編

150円 1951年

「農業経営設計簿」

酪農学校 指導部編

80円 1951年

「栽培の科学」

著者 手島寅雄

4×6判 250頁 150円 1951年

「酪農便覧」

著者 川村秀雄

B 6判変 291頁 200円 1951年7月

「模範農業経営記録」農場教育

100円 1952年7月

「水田酪農」

著者 高杉成道

B 6判 174頁 150円 1952年11月

「高倉さんの楽しい農業生活設計」

著者 川村秀雄

A 6判 154頁 140円 1953年1月

「農豚肉産」

第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合

- 著者 田垣住雄  
 B 6判 254頁 180円 1953年2月  
 「ハギ酪農」山野に生きる  
 著者 小原伸、高杉成道  
 B 6判 70頁 60円 1953年5月  
 「農業用語辞典」  
 北海道高等学校校長協会農業部会編  
 B 6変 301頁 200円 1953年5月  
 「農機具の使い方」——楽しい酪農講座——  
 著者 阿部友一／酪農学園出版部刊  
 B 6判 234頁 190円 1953年5月  
 「酪農の模範経営」(酪農家の体験集1)  
 著者 中曾根徳二 野喜一郎  
 B 6判 170頁 150円 1953年12月  
 「健土健民」一億飼料自給論  
 著者 黒澤西蔵  
 B 6判 142頁 120円 1954年3月  
 「畜舎とサイロ、尿溜、堆肥場の設計」  
 著者 川村秀雄  
 B 5判 246頁 550円 1955年8月  
 「宇都宮仙太郎」  
 著者 黒澤西蔵
- A 5判 322頁 550円 1958年1月  
 「酪農経営と飼料作物」  
 著者 高杉成道  
 A 5判 302頁 350円 1958年6月  
 「酪農技術図鑑」(前編)  
 総監修 川村秀雄 監修 黒沢亮助 三田村健太郎  
 西山太平 波多野正 町村敬貴 三井計夫 市岡朝祐  
 B 5判 190頁 880円 1960年2月  
 「酪農技術図鑑」(後編)  
 総監修 川村秀雄 監修 黒沢亮助 三田村健太郎  
 西山太平 波多野正 町村敬貴 三井計夫 市岡朝祐  
 B 5判 201頁 1960年2月  
 「乳牛の経済検定必携」  
 著者 中曾根徳二  
 B 6判(新書判) 186頁 260円 1960年7月  
 「田中正造」その生涯と思想  
 著者 満江巖  
 B 6判 353頁 450円 1961年8月  
 「スイスの酪農」  
 著者 厚海忠夫  
 B 5判 219頁 330円 1963年7月  
 「複式農業簿記帳簿」(上)

著者 石亀繁太郎

B 5判 140頁 500円 1968年

「複式農業簿記帳簿」(下)

著者 石亀繁太郎

B 5判 172頁 500円 1968年

「酪農必携」(上)(近代酪農部講座)

著者 川村秀雄

B 6判 183頁 350円 1968年

「酪農必携」(下)(近代酪農部講座)

著者 川村秀雄

B 6判 187頁 350円 1969年

◇酪農学園短期大学酪農学校刊

「近代農機」

短期大学酪農学校編

B 5判 200頁 1969年

目で見る『近代農機』構造と使い方

B 5判 206頁 700円 1969年

「近代牛舎図鑑」(施設、設備、器材)

A 4判 174頁 1700円 1970年1月

「酪農小辞典」

近代酪農編集部編

B 6判変(新書) 217頁 500円 1970年2月

「近代酪農必携 1971」(近代酪農講座)

近代酪農編集部編

B 6判 176頁 1971年1月

「乳質改善」

著者 大浦儀教

A 5判 174頁 1000円 1972年7月

「牧草の栽培学」

著者 高杉成道／酪農学園出版部刊

A 5判 492頁 1300円 1972年9月

「牛乳の理化学」

著者 遊佐孝五

A 5判 212頁 1000円 1973年4月

ホルスタイン「選択と改良」

著者 鈴木肇 平沢友志 柘田精一 門前道彦 山本善彦

A 6判 163頁 700円 1973年9月

ホルスタイン「改良と審査」

著者 伊藤雄一 伊藤晃 平沢友志 中村敬止 半本孝次 柘田精一 門前道彦

A 6判 151頁 900円 1974年7月

北から南から「牛舎百態」

北から南から「牛舎百態」

第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合

- 近代酪農編集部編  
A5判 206頁 1200円 1974年12月
- 「サイレージの技術」  
著者 兼子達夫  
A5判 112頁 750(1200)円 1975年9月
- 「乳牛舎と施設・設備」新築・改築・増築・管理の手引き  
著者 尾崎繁  
A5判 125頁 1100(1500)円 1978年3月
- 「アルファルファの栽培の理論と応用」  
著者 原田勇  
A5判 128頁 1500(1800)円 1981年2月
- 「一門一答」乳牛のホームドクター」  
著者 安藤由章 河田啓一郎 黒沢隆 小谷忠生 基田三夫 高橋清志 角田修男 中尾敏彦 中出哲也 沼田芳明  
A5判 224頁(特製本) 2000(2300)円 1982年2月
- 「一門一答」乳牛の育成と改良」  
著者 伊藤晃 河田啓一郎 河野則勝 佐藤末太郎 門前道彦
- A5判 164頁 1400円 1982年9月
- 「一門一答」乳牛の改良と審査」  
著者 伊藤晃 沼田芳明 平沢友志 門前道彦  
A5判 143頁 1400円 1983年2月
- 「家畜の飼料の病害虫」  
著者 岩田勉 坂本与市 長谷川勉 堀口治夫  
A5判 158頁(特製本) 1500(1700)円 1983年9月
- 「高泌乳のための飼養技術」  
著者 大原久友 大森昭一郎 津吉炯 瀬良英介 宅一夫  
A5判 147頁 1500円 1984年2月
- 「サイレージの理論と実際」  
著者 上原昭雄 萬田富治 箭原信男 高野信雄 宅一夫  
A5判 185頁 1500円 1984年9月
- 「牛受精卵移植の理論と実際」  
著者 高橋芳幸 小栗紀彦 鈴木達行 佐藤良樹 山科秀也 大竹通男 清家昇 石田和昭 入江達彦 富永敬一郎 内海恭三 伊藤晃 金川弘司  
A5判 181頁 1500円 1985年2月

「乳牛のストレス対策」

著者 大森昭一朗 佐々木康之 渡辺亨 近藤誠司

尾崎繁 河田啓一郎 榑崎 昇 岡本全弘 安宅一夫

A5判 190頁 2000円 1985年9月

「酪農におけるパーソナル・コンピュータ」(基礎と応用)

著者 堀内一男 砂子田哲 杉原永康 及川博 原田

節也 門間敏幸 島田明

B5判 155頁 2000円 1986年2月

「飼料の栄養特性と土壌・乳牛」

著者 平島利昭 菅原和夫 能代昌雄 村山三郎 篠

原功 原田勇／酪農学園出版部刊

B5判 134頁 2000(2300)円 1986年9

月

「サイレージバイブル」微生物のパフォーマンスとその制御

監修 高野信雄 安宅一夫 著者 高野信雄 菊地政

則 安宅一夫 名久井忠 萬田富治 野 英二 藤本

秀明 古川修／酪農学園出版部刊

A5判 124頁 1000円 1986年12月

「暮らしを豊かに」

著者 桑原イト子 今城裕子 廣川いさ子 太田アイ

子 大原久友 渡辺雅実 有賀秀子 後藤郁子 高橋

セツ子 今岡久人 原田勇／短期大学酪農学校刊

B5判 128頁 2000円 1987年2月

第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合

年 度	酪農科	家庭科	農業経営科	合 計
1949 (昭和24)	1,210			1,210
1950 (同25)	1,619			1,619
1951 (同26)	2,114			2,114
1952 (同27)	3,943	1,458		5,401
1953 (同28)	4,715	1,550		6,265
1954 (同29)	5,100	1,485		6,585
1955 (同30)	5,700	1,300		7,000
1956 (同31)	4,850	990		5,840
1957 (同32)	4,338	819		5,157
1958 (同33)	4,480	885		5,365
1959 (同34)	4,870	835		5,705
1960 (同35)	3,084	856		3,940
1961 (同36)	2,200	938	750	3,888
1962 (同37)	1,510	850	800	3,160
1963 (同38)	1,402	835	807	3,044
1964 (同39)	1,320	550	790	2,660
1965 (同40)	1,580	380	808	2,768
1966 (同41)	1,500	335	812	2,647
1967 (同42)	1,617	185	860	2,662
1968 (同43)	1,008	135	855	1,998
1969 (同44)	558	130	360	1,048
1970 (同45)	704	116	322	1,142
1971 (同46)	513		362	875
1972 (同47)	251		826	1,077
1973 (同48)	224		380	604
1974 (同49)	127		566	693
1975 (同50)	84		247	331
1976 (同51)	112		173	285
1977 (同52)	62		656	718
1978 (同53)	71		462	533
1979 (同54)	49		697	746
1980 (同55)	35		402	437
1981 (同56)	27		582	609
1982 (同57)	19		316	335
1983 (同58)	17		438	455
1984 (同59)	53		521	574
1985 (同60)	119		531	650
1986 (同61)	12		438	450
1987 (同62)	39		249	288
1988 (同63)	83		354	437
1989 (同64)	12		190	202
計	61,331	14,632	15,554	91,517

短期大学酪農学校卒業生数

## 二 両高等学校の統合（この項では高等学校を高校と略す）

一九八二（昭和57）年一二月、酪農学園常任理事会は、学園創設五〇周年に当たり「酪農学園の現状と将来」と題する現状分析と将来への方策について提言を行った。

その中で私学として存在する酪農学園を考えたととき、教学の発展に挺身することは言うまでもないが、法人基盤の確立、すなわち学園財政の健全自立化に対しても、この達成のために協力一致して努力する決意を持たなければならない。創立五〇周年を転機とし、今まで築いてきた歴史をしっかりと土台に据えながら、しかもやたらに過去にこだわらず、脱皮すべきは大胆に脱皮し、改善すべきは勇気を持って改善し、そして酪農学園の永続的発展へつなげる決断が必要である——という趣旨であった。つまり、入学生急減期への対応をいかにするかであった。

この提言に基づき、時間をかけて慎重な検討を行った結果、一九八七（昭和62）年一月一四日常任理事会は、四項目の提案を行った。その趣旨は永続的に学園教育を発展させるための財政的隘路を学園的協力の下に打開する方策として打ち出したものである。すなわち、

① 酪農学園大学附属高校では、入学生徒数を縮小して一学級の募集とし、その中で濃密な自営者養成教育を行う。

② さらに附属高校の実習農場は、酪農学園大学・北海道文理科短期大学附属農場と合併させて、その運営は大学・短期大学で行い、高校の生徒は合併農場で実習を行う。これにより、大学・短期大学

は附属高校の自営者養成教育に協力し、高校では農場運営に基づく大きな財政負担を軽減しようとするものである。

③ 三愛女子高校は、女子のみの教育を思い切って男女共学として生徒数の確保に努めることに決定した。この決定に基づき校名を「とわの森三愛高等学校」と改めるとともに、制服その他も改め、一九八八（昭和63）年四月新たな出発を目指す。

④ 以上の方策を進めた後、最終的には生徒数急減期前までに酪農学園大学附属高校と、とわの森三愛高校を一つの高等学校に総合させる。

それぞれの高校の持っている教育方針、教育課程、学科、定員、あるいは教育の特色の一つである附属高校の全寮教育など、なんら変更することなく対等に統合させようとするものである。

これにより、それぞれの高校の教育の基本は堅持しながら、一つの高校として合理的に運営し財政的な困難性を乗り切りたいというものであった。

この四項目の方策のうち、第三項目までは逐次実施に移されてきた。

**統合の基本的考え方**　しかし、第四項目の両高校の統合は、いざ具体化となると容易ではなかった。すなわち、附属高校では、一九四二（昭和17）年機農高校設立以来、多くの卒業生が母校を誇りとして強い絆で結ばれている。また、教育面においても、単にカリキュラムや実習教育だけでなく、それらを支えているもろもろのノウハウの中に言うにいわれぬ機微ともいえるものがあつた。

このことは、とわの森三愛高校でも状況は同じで、開校以来三〇年間女子教育に心血を注いできて

おり、同窓生相互の強いきずなおよび卒業生と教員のきずな、それに女子教育の中で真剣に取り組んできた三愛スピリットとでも言える多くのノウハウの蓄積がある。

また、この両高校は一方は農業の中でも特色の強い酪農自営者養成という全国を視野に入れた職業教育校であり、一方は地域市民、地域社会と密接に結びついた普通教育の高校である。

この二つの高校が統合した場合、互いの教育の特色は失われていかなる色合いを持つ高校になるのであろう——「木に竹を継ぐようなもの」という同窓生の意見も出るなど大きな不安が伴うのは当然であった。この点については、理事会は両高校の持つている教育の基本方針は、充実発展させることはあっても変えることなく進めなければならないと考えてきた。そのためにはある程度時間をかけた段階的統合を提示していた。

方針提示以来数年にわたる検討協議の末、一九八九（平成一）年五月三〇日の学園理事会評議員会において、この両高校統合は一九九一（平成三）年四月一日よりとすることが決定された。

以来、統合の具体化に向けて常任理事会、両校担当者間で積極的な準備作業が進められた。まず、八九年八月三〇日に両校合併に当たつての基本方針を、両校全教職員に発表した。これに基づき同年一〇月九日には学園長・両校校長とそれぞれの教員三名を委員とする九名からなる合併協議会が発足した。

#### 統合準備作業

一九八九年五月の学園理事会・評議員会で両高校の統合が決定されてから、同年一〇月には合併協議会が設けられ、九一年二月までの一年半の間に、二六回の会議が重ねられ、統合

に関する重要課題の処理に大きく貢献した。(協議会の構成は遊佐孝五学園長、牛島純一、井上昌保両校長、両高校から教諭六名の計九名で、神正士が委員長)

また、九〇年五月には、合併準備室(室長・井上校長)が設けられ、課題の処理に当たった。

統合課題について理解を深めるために、両高校全職員による職員合同協議会が三回開催されたり、教務関係事項とか生徒指導関係事項のような具体的な問題処理については、両高校の教務や生徒指導などの担当者が協議して、課題の処理に当たった。

**校名の決定** 一九九〇(平成?)年三月二四日には、統合後の校名を「とわの森三愛高等学校」とすることを理事会評議員会で決定した。

この校名についても慎重な検討がなされた。すなわち、この統合は既に述べたように両校のよって立つ基本をいささかも変えることなく、対等に合併統合させるものであり、校名についても一方の高校名となったが、決して一方の高校を閉校して、他方に吸収させるというものではなく、いうなれば両高校を閉じて、新しい高校に統合させるというものであった。その上で理事長の下で検討の結果、「とわの森三愛高等学校」と命名されたのである。

**正式に設置認可** 統合高校の設置認可申請は、まず、一九九〇年一月一九日に開かれた道の私学設置審議会で承認されたが、学校が大学法人であるため、寄付行為の変更については文部大臣の認可を得なければならぬので、文部大臣に進達され、ようやく翌九一年一月一日に認可されて、統合高校は酪農経営科、普通科、英語科の三学科で正式に発足する運びとなった。

### 統合は二段階方式

学校を統合する場合には、当初から生徒、職員を一つの校舎に統合するのが本来であるが、今回の場合は、現とわの森三愛高校が、生徒急増期収容対策として、臨時応急定員増実施中だったので、統合第一期は普通科・英語科、酪農経営科はそれぞれ現有校舎を使用し（前者を第一校舎、後者を第二校舎とする）、臨時応急定員増が解消された時点で、完全統合することになっていた。つまり、二段階方式の統合であった。

従って、組織としては一人の校長、事務長の下における一つの学校となるが、それぞれの校舎に教員室と教頭を置き、両者が相互に連携を密にしながらも、別個に授業を展開することになる。生徒会活動やクラブ活動は、言うまでもなく統合して行われる。

そのために、両方の生徒役員会が協議を始めたが、組織の一本化については、統合後になってしまふという見通しであった。

しかし、男子に関していえば、統合によって生徒数が増え、クラブ活動が一段と活発になると期待された。

**男子生徒は機農寮に** 附属高校は一九四二（昭和17）年の設立以来、全寮制の下で全人教育を実践してきたことは全国的にも稀有で、同校の大きな特色の一つであった。従って、旧機農寮（二七〇名収容）があるが、旧とわの森三愛高校には、女子寮（シオン寮、八四名収容）があっても、男子寮はなかった。統合を機に新入生から、普通科、英語科の男子入寮希望者は、機農寮に収容することになった。

PTAなど関係団体 PTAについては、統合とともに新しい統一組織になるが、一九九一年一月五日の合同役員懇談会を皮切りに、両方の役員会の議を経て、双方から統合PTA結成準備委員が選出され、結成総会にむけて協議が始められた。

クラブ活動後援組織についても、一本化が進められることになったが、これも現組織の役員を中心に進められた。

また、同窓会は、それぞれ伝統のある組織なので、従来の組織を主体としながら、連合する形のものを作るよう、両組織で検討がなされた。

**開校式および入学式** このような経緯を経ながら一九九一（平成3）年四月九日午前九時より、とわの森三愛高校礼拝堂にて開校式が行われた。開校式には酪農経営科の二・三年生、普通科・英語科の二・三年生八〇一名が出席し、伊藤茂生教頭の司会で進められた。

式典は井上昌保校長より統合までの経過報告が行われた後、佐藤貢理事長より統合とわの森三愛高校への期待の言葉が述べられた。最後に栄潤子宗教主任より祝福が捧げられ式典を終了した。また、生徒たちには紅白のシャープペンシルが記念品として配布された。

そして、統合第一回目の入学式が翌日の四月一〇日午前一〇時より礼拝堂で執り行われた。この入学式は酪農経営科第五〇回、普通科第三四回、英語科は第八回目に当たっている。

入学式は村山昭二教頭の司会で、五百五十余名の来賓・父母が四三六名の新入生を迎える形で進められた。新入生はパイプオルガンの奏楽と聖歌隊による賛美歌に導かれ、厳粛な思いでとわの森三愛

高校の第一歩を歩み始めた。

吉田真宗教主任より聖書朗読と祈祷が行われた後、井上校長より入学許可の宣言がなされた。

聖書はコリントの信徒への手紙五章の「古いものが過ぎ去り、新しいものが生じた」の個所が朗読された。

井上校長式辞と佐藤理事長あいさつの後、新入生代表の誓いのことばが酪農経営科の辻雄二より力強く宣言された。誓いのことばは「三愛精神の体得と二二世紀の国際社会を担う社会人への決意」が語られ、統合とわの森三愛高校の出発にふさわしいものであった。

#### 井上昌保校長の開校式式辞（抜粋）

ただ今の理事長先生からの開校の辞をもって、新年度から、統合「とわの森三愛高等学校」が開校しました。新しい歴史の始まりです。

承知の通り、「統合」というからには、母体となる学校が二つありました。

一つは、学園の祖校でほぼ半世紀の歴史を誇る酪農学園大学附属高等学校で、一九四二年に、野幌機農学校として創設され、わが国の酪農、酪農民教育の先駆者として、有機循環農法・実学教育・全寮制教育において実績を上げ、農業教育に大きな足跡を残してきました。もう一つは、普通科、英語科を擁していた共学とわの森三愛高等学校で、市内に女子高校をという江別市の要請で、一九五八年、三愛女子高等学校として開校され、学園の建学の精神「三愛精神」を、農業教育に限らないで、普通教育の教育理念にまで敷衍させ、人間教育の実績を上げてきました。

このように教育内容と組織運営、歴史と伝統が大きく異なる二つの学校を統合するのは、確かに容易な

ことではありませんでした。先生方や卒業生の中には、ポジティブに受けとめられない方もおりました。しかし、両校が、神を愛し、人を愛し、土を愛する「三愛精神」という建学の精神を堅持していたことが、決定的な統合の決め手になりました。性格を異にする学校でしたが、同じ「三愛精神」による教育だからこそ、統合できたのです。

相乗効果という言葉があります。二つのものの互いの良いところを生かしあつて、双方とも大きく発展する、という意味です。今回の統合は、必ずや伝統校二つの持ち味を生かしあつて、酪農経営科・普通科・英語科それぞれが相乗効果を上げるものと確信しています。昨年来、両校の生徒会がいち早く統合の目的・意義を理解して、生徒会の統合準備委員会を設置し、万端怠りなく、この開校式の後に開かれる生徒会合併式を準備してくれた事実が、そのことを約束してくれています。

さあ、新しい歴史の幕は切つて落されました。三愛精神の下に、今までの実績をしつかりと踏まえ、相乗効果を確信し、前に向かって力強く踏み出しましょう。

### 生徒会合併式 四月九日の開校式の後、生徒会の合併式が行われた。

前年度より生徒会執行部と生徒会顧問の教師により準備が進められていたが、両校の生徒会行事や日程の違い、さらに生徒会運営や会費、規約などの違いがあり、調整に困難があったが、一つの生徒会としてスタートさせるために生徒会役員の努力が傾注された。

合併式は、井上校長より合併までの労苦への感謝と合併を期してますます生徒会活動が活発になることを祈念するあいさつがされた後、菊田薫生徒会々長はじめ全生徒会役員の紹介と決意が語られた。

**校長の選任と教頭制** 九一年四月開校された新設「とわの森三愛高等学校」の校長人事は、同年

二月一三日開催された酪農学園理事会、評議員会において提案され、旧とわの森三愛高校長の井上昌保が初代校長に選任された。また、新しく統合高校が発足するに当たり、教頭制が敷かれることになった。

従来、附属高校では教頭制が採られていたが、とわの森三愛高校では校務運営委員長がその任に当たっていた。同じ学園にありながら教頭制が整備されていなかったのである。しかし、統合を機会に教頭選考規則を設け、この規則に従い統合高校の教頭職二名が選任された。

選任方法は、教頭推薦委員会によって第一校舎、第二校舎各一名の教頭候補者を推薦し、その候補者について各校舎の専任職員の信任投票で信任され、校長が任命するという方法である。

この選任方法によって、第一校舎(普通科・英語科)の教頭候補者として村山昭二(校務運営委員長、第二校舎(酪農経営科)の教頭候補者として伊藤茂生(実習科主任)が推薦を受け、それぞれ絶対多数の信任を得て、四月からの教頭職に任命されることになった。

### 設置趣意書(抜粋)

〈学校統合の趣旨ならびに目的〉

高校に進学できるいわゆる一五歳人口は、平成元(一九八九)年をピークに、一時的急増期から長期的激減期に転換し、高校とりわけ私立高校には、未曾有の危機が到来しようとしている。この危機を克服して、二一世紀への発展を確かなものとするためには、まずなによりも、高校自体の教育内容の充実と実績向上などの努力、財政運営上の合理化の努力が先決であるが、今日のような高学歴社会においては、本学園の

ように高校、短大、大学、大学院を有する学園としては、その利点を生かして、高校、短大・大学相互間の進学連携、教育連携を密にし、教育の総合的な成果を高めることが肝要である。先に述べた酪農学園将来計画推進委員会を中心とする学園の将来計画の推進は、このような基本的な考えに基づいて取り進められており、今回の酪農学園大学附属高等学校ととの森三愛高等学校との学校統合も、このような将来計画の一環として実施されるものである。

酪農学園大学附属高等学校は、その前身酪農義塾以来、約半世紀余にわたり、一貫して農場を主とする「実学教育」と協同友愛の精神を培う「全寮制教育」によって、酪農・農業自営者と指導者の養成に努め、現在、卒業生は、酪農義塾卒業も含めて、五、二六二名を数えるに至り、全国各地の農村ならびに農業関連企業・団体を中心に、酪農・農業の発展に貢献し、その活躍が高く評価されているところである。

ところが、わが国の産業構造の大きな変化による農業人口の減少、特に経営規模拡大に伴う酪農家戸数の減少は著しく、今日では、全国で約六六、〇〇〇戸、戸数最大時の七分の一にまで減少してしまった。その結果、酪農学園大学附属高等学校への入学者は、その教育実績の高い評価にもかかわらず、学校経営を可能にするだけの人数に至らず、ユニークな酪農自営・後継者教育は、存立の危機を迎えるに至った。

しかし、現存する酪農家の多くは、経営基盤も確立し、酪農の高度な知識と技術を体得した後継者の育成に熱意を持っており、それゆえに、高校にとどまらず、短大・大学へ進学させる傾向にある。現に、酪農学園大学附属高等学校における近年の入学生は、北海道のみならず、全国各地の酪農地帯から集まっており、その七割が酪農後継者として自営を希望し、なおかつ、卒業後はさらに農業系大学・短大に進学して、より高度な専門教育を受けた上で自営者となっているのが実情である。この現状からしても、酪農・農業を担う後継者を教育する使命は、依然として大きく、しかも高校と大学・短大との教育連携・一貫教育が強く求められているのである。

使命が大きくても、少数精鋭の入学生だけで一つの学校を経営することは容易なことではなく、他方、

普通科および英語科を擁するとわの森三愛高等学校としても、一五歳人口急減期に伴う危機を避けることができず、この大きな試練を克服して、なおその上に、三学科の教育実績を増し加えるために、熟慮、慎重審議の結果、学園内大学・短大との相互連携を前提として、両高校を統合して、その発展を期することにした次第である。

(平成二年九月)

歴代酪農学園大学附属(旧・酪農学園機農)高等学校長

初代	黒澤西蔵	一九四二・三・三一	一九四六・三・三一
第二代	川村秀雄	一九四六・四・一	一九五五・三・一六
第三代	黒澤西蔵	一九五五・三・一六	一九五六・七・一
第四代	樋浦誠	一九五六・七・一	一九六〇・三・三一
第五代	黒澤力太郎	一九六〇・四・一	一九七四・六・三〇
第六代	山花豊	一九七四・七・一	一九七六・一〇・三一
事務取扱	津田佳吾	一九七六・一・一	一九七七・三・四
第七代	津田佳吾	一九七七・三・四	一九八一・六・二五
第八代	山下正亮	一九八一・六・二五	一九八九・三・三一
第九代	牛島純一	一九八九・四・一	一九九一・三・三一

歴代とわの森三愛(旧三愛女子)高等学校長

初代	黒澤西蔵	一九五八・四・一	一九六一・三・三一
----	------	----------	-----------

第一章 各種学校の閉校と高等学校の統合

統合時の酪農学園大学附属高等学校教職員

同	同	同	教諭	教頭	宗主任	校長	校長			
小野木弘司	内藤啓貢	伊藤茂生	有田潤二	原田泉	吉田真	牛島純一				
	養護教諭						教諭			
坂本妙子	山谷繁男	山中桂郎	深澤秀則	中ノ目敏雄	杉山昇	甲斐猛				
夜警員	技師	主事	主事	主事	事務長					
柏倉宏造	佐々木九二人	稲垣義人	伊藤明美	照井俊秀	関戸キヨ子	深谷正男				

歴代とわの森三愛(新生)高等学校長

第二代	初代	第五代	第四代	第三代	第二代
村山昭二	井上昌保	井上昌保	辻村富士朗	伊藤幸太郎	宮古哲雄
一九九五・四	一九九一・四	一九八二・七	一九七四・四	一九七二・四	一九六一・四
一〇現在	一〇一九九五・三・三一	八〇一九九一・三・三一	一〇一九八二・七・七	五〇一九七四・三・三一	一〇一九七二・四・五



## 第二章 とわの森三愛高等学校

前章で述べたように一九九一（平成3）年三月、酪農学園大学附属高等学校（前・機農高等学校）と、とわの森三愛高等学校（前・三愛女子高等学校）が統合されて、新生「とわの森三愛高等学校」が誕生した。両高等学校の統合は産業構造の変化に伴う農家戸数の減少、就学人口の長期的激減期における私学の危機をいかに乗り切るかであった。両高等学校の特色ある教育を永続的に継承させる強い願いと他方、学園教育全体の維持推進のためにも両高等学校の財政基盤の早期確立が必要とされたからである。

この統合した二つの学校は、酪農学園の建学の理念「三愛精神」の実践・具現化において、実に大きな歴史的役割を果たしてきたといえよう。学園の父祖校というべき酪農経営科は、一九四二（昭和17）年に野幌機農学校として開校して以来、本道のみならず、わが国の農業とりわけ酪農教育に先駆的な役割を果たしてきた。ことに全寮制によるユニークな実学教育は時の文部省や教育関係機関からも注目を集め高く評価されていた。特に酪農経営科では、戦後開学した学園の短期大学とともに、酪農の専門教育機関として、まさに「土を愛する」実践を中心に「三愛精神」を展開したのである。

一方、一九五八（昭和33）年に江別市の要請を受け酪農学園女子高等学校として開校した普通科は、一九八三（昭和58）年に英語科を併設して、心を育てる教育を多角的に展開し、キリスト教による全人教育の実績を積み上げてきた。

酪農学園が女子高等学校を設置して普通教育に踏み切ったことは、「三愛精神」を農業教育に限ることなく、広く教育一般に適用させたということでは、学園の歴史的な決断だった。ことに普通教育では「人を愛する」の実践を中心に「三愛精神」が教育の全分野で普遍性を発揮したことが、その後の学園の大学や短期大学が多岐にわたる学科を擁するようになっていった。

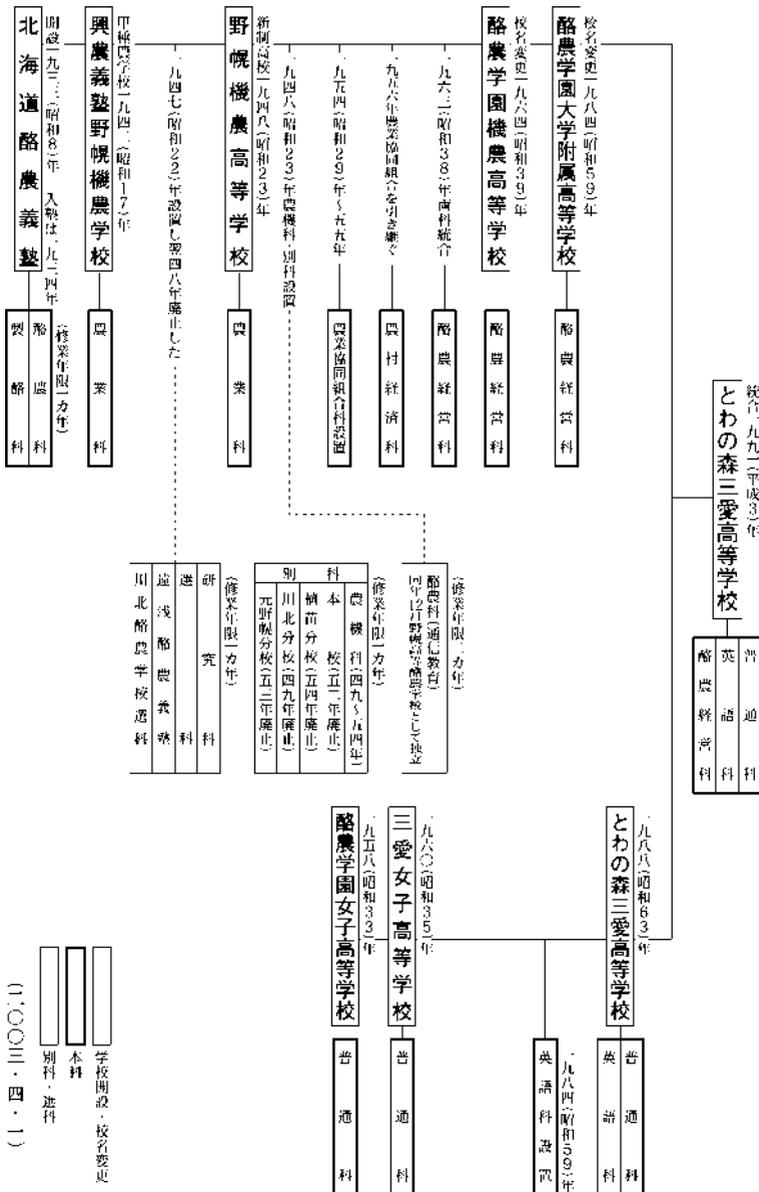
両校の統合はそれぞれの歴史と伝統を異にし、独自の教育目標を持つだけに、まさに苦渋の選択であつたともいえる。それだけに困難な課題を受け止めて統合実現に尽力した関係者の労苦は並々ならぬものであり、教職員がそれぞれに教育内容の充実や教育実績の向上に傾けてきた努力は忘れてはならない。

統合はいわゆる二段階方式がとられ、校名の決定、男女共学、農場統合による実習教育など学内各部署の連携協力を得ながら「三愛精神」の教育理念の下に、教職員が一致協力し、意欲的に新たな学境づくりに取り組んでいる。

現在、三愛精神の下に集う在校生は一、一〇〇名に及んでおり、長い歴史と伝統を持つ両高等学校の統合に至るまでの前身を図に示した。

第二章 とわの森三愛高等学校

本校の推移



## 一 建学の理念と教育活動

とわの森三愛高等学校は、キリスト教主義教育「三愛精神」を建学の精神として、毎週の学校礼拝を通して、全人教育に力を注いでいる。

(1) 教育目標として、下記の四項目を掲げている。

① 三愛精神に基づき、「共に生きる」生き方を自覚させるとともに、平和的・民主的な人間関係を育てる。  
② 国際的な視野と教養を習得させ、新しい時代を担うにふさわしい実践的な社会人・農業人を養成する。

③ 生徒会や農業クラブを通し、活動への創造的・積極的にかかわりの中で、自治意識を育てる。

④ 心身の健康の保持増進を図るとともに、自主的に進路を選択決定する能力と目的達成のための実力を養う。

(2) 建学の精神と教育目標の具現化として、次の四つの柱を教育活動として日常的に展開している。

① 愛の実践活動 ② 平和教育 ③ 国際理解教育 ④ 実学教育

(3) また、本校の教育活動が時代や地域からのニーズにこたえ、評価されていくために、寮教育の充実、クラブ活動の活性化、海外研修や留学生を迎えるなどの国際交流、酪農学園大学との教育連携、同窓生・父母との連携などを大切に行っている。

二〇〇三年度より英語科の生徒募集を停止し、普通科(普通コース・特進コース)と酪農経営科により、

教育活動を展開していくが、聖書を根幹に置きながら、一人ひとりの個性や人生が育まれる学校として歴史を刻んでいきたいとしている。

## 二 校名およびエンブレムの由来と校歌

**校名の由来** 校名の「とわの森三愛」には、二つの意味が含まれている。

つまり、「とわの森」である野幌原始林を背にして建つ本校は、同時に「永遠の真理」を語る聖書に基づく人間教育を追求し、真の平和と自由を愛する人間を育てるといふ本校建学の理念を言い表している。

また、「三愛」は、文字どおり、建学の精神である神・人・土を愛する「三愛精神」からであり、この二つの意味を持つて本校の特色を表している。

**エンブレムの由来** 中央に「とわの森三愛高等学校」が「T S H」としてデザイン化されている。

現代は、科学優先の時代で、自然（緑）が失われ、地球の砂漠化が進みつつある。いまこそ、生命の源（みなもと）としての自然（緑）をかけがえのないものとして守っていかねばならないという願いが込められている。



とわの森三愛高等学校・校歌

作詞＝井上 昌保

作曲＝中村 文夫

一、石狩川に 水満ちて 原始林

自然の恵み 身に享けて

三つの愛 青春の心に刻みつつ

いざ我ら 永遠の真理を求め 共に学ばん

二、艱難かんなんさえも 希望へと

心と技を 磨きつつ 人を導く 主の摂理

神からの 賜物たまひ 心して活かしつつ

いざ我ら 誠実なる 人倫の道 共に歩まん

三、時代の風は なお猛たけく

歴史を担たう 人として 世の習い

地の塩 世の光 心に固く秘め

いざ我ら 希望もて 世界の平和 共に創らん

Moderato.

1. いしかりーがわにみずみおと みどりあやなす  
 2. かんなんーさえもきぼうへと ひとをみぢく  
 3. じだいのーかぜはなおたけく もといきだま

げんしりん しせんの一めぐみ身にうけて われらつどわん  
 下のせつり こころとーわざをみがきつつ われらはげまん  
 川のならい れきしをーになうひととして われらきずかん

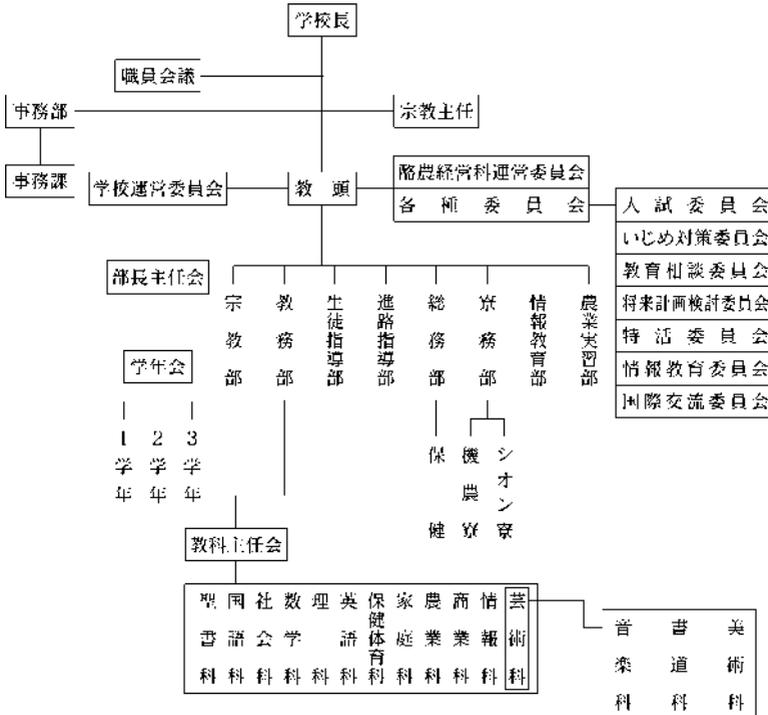
とわのもり 三 つの あいせいしんこの こころにー  
 とわのもり か みか らのたまも一の こころして  
 とわのもり 地 の し おー世のひかり こころにー

きざみつつ いざー われら とこしえの しんりをーちとめ  
 いかしつつ いざー われら まことなる いきかたのーのみち  
 かたく秘め いざー われら のぞみもて せかいのーへいわ

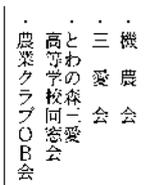
とよまな げん  
 とちにあゆ まん  
 とよにつく らん

第二章 とわの森三愛高等学校

本校の組織機構図



協力関係団体



**校歌** 統合によって新生した本校の校歌は井上昌保校長の作詞・中村文夫教諭の作曲によって一九九八（平成10）年一〇月、公にされた。本校を取り巻く豊かな地理的環境と建学の理念の「三愛主義」が基調となっている。

### 三 教育課程

(1) **普通科**〔特設進学コース・普通コース〕 本科は前身の酪農学園女子高等学校開設（一九五八年四月）からの学科で、聖書に基づく人間教育を重視してきた伝統ある学科である。この学科も時代とともに多様性が求められ一九九〇（平成2）年から特設進学コースを設けて二コース制で効率的な授業が展開されている。さらに二〇〇三年度からは新教育課程や二学期制を実施するなど教職員は新たな思いを持って建学の精神を基軸とする教育展開、指導を進めている。

特設進学コースⅡ本コースは、大学や短大など希望どおりの進学が実現するよう、スタッフ、カリキュラム、進学指導・講習、推薦制度など、志望校に合格するための体制を整え、多方面からバックアップする。

入学直後のHTS（ハウツースタディ）合宿で、学習の仕方を学ぶことからスタートさせ、進学という共通の目的を持った仲間たちとの出会いから向学心を引き出し担任をはじめ教師陣が、生徒一人ひとりの志望を理解し、綿密に進学指導を行い、効率的な学習を進めている。

そのためには、一年次から進学を踏まえたカリキュラムを編成し、英語、数学、国語、理科、社会

の時間が多く、二年次からは志望校受験に必要な科目を効率よく選択することができる。入試で重視される傾向にある英語は、特に授業科目数が多く、ネイティブ・スピーカーによる指導やLL教室を活用するなど生きた英語で国際化時代に対応できる生徒の育成を目指すとともに学力の総体的なアツプを図っている。

普通コース⇨本コースは学習はもちろん、クラブ活動や生徒会活動にも打ち込むことができる体制と環境を用意し、自分の好きなことや得意なことに情熱を燃やせるようにしている。また、生徒会活動やクラブ活動、ボランティア活動などに積極的に参加し努力することによって豊かな人間性も養われている。

さらに、多面的で充実した高校生活をベースに多様な進路を見据えた学習のために、二年次から進学コースと就職コースに分かれて履修できるようにしている。進学コースは、受験科目を意識したカリキュラムを編成しており大学・短大・看護学校・専門学校入学を目指す者には、必要に応じて放課後や長期休暇中の進学講習も行っている。

普通科 就職・進学コース

教科	科目	標準 単位	1年	2年		3年		教科	科目	標準 単位	1年	2年		3年	
				就職	進学	就職	進学					就職	進学	就職	進学
保健 体育	体 育	7~9	3	3	3	3	3	宗教	礼 拝		1	1	1	1	1
	保 健	2	1	1	1				聖 書		1	1	1	1	1
芸 術	音 楽		☆2	☆2	☆2	☆2	☆2	国 語	国 語 I	4	4				
	美 術		☆2	☆2	☆2	☆2	☆2		国 語 II	4		3	3		
	書 道		☆2	☆2	☆2	☆2	☆2		国語表現	2		2			
	ペ ン 字					1			現 代 文	4				4	3
英 語	英 語 I	4	4					地 歴	古 典 I	3			3		
	英 語 II	4			4				古 典 II	3				3	
	O C A	2		2	2	2			世界史A	2					
	O C B	2							世界史B	4	2	2	2	△3	
	Reading	4					5		日本史A	2				2	△3
	Writing	4							日本史B	4			○4	△3	
	総合英語								地 理 A	2	2				
	英語理解								公 民	現代社会	4				
	英語表現									政治経済	2		2		3
	外国事情									倫 理	2				3
英語一般							数 学	数 学 I		4	4				
LL 演習								数 学 II	3		3	4			
家庭一般			2	2	2	2		数 学 III	3						
生活一般								数 学 A	2	2					
商 業	簿 記			3		★2		学	数 学 B 2	2				△3	
	情報処理					★2			数 学 C	2					
	文書処理			2		★2			数学演習					2	△3
特別 活動	L. H. R	3	1	1	1	1	1	理 科	物理 I B	4					
	特 活 I	3	1	1	1	1	1		物 理 II	2					
	特 活 II			1		1			化学 I A	2				2	
	合 計		32	32	34	32	32		化学 I B	4			○4		
									化学 II	2				◎2	
									生物 I B	4	4				
									生 物 II	2				◎2	
									地 学 I A	2				2	◎2

○の科目より1科目選択

△ //

◎ //

☆ //

★ //

(注) 進学コースの選択について(2年→3年)…理科は3年間で2分野履修  
 日本史B→地歴・数学(世界史B or 日本史B or 日本史A or 数学B or 数学演習) and  
 理科(地学 I A)  
 化学 I B→地歴・数学(世界史B or 日本史A or 数学B or 数学演習) and 理科(化学  
 II or 生物II or 地学 I A)

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 普通科 特進コース

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年
芸 術	音 楽			☆2		宗 教	礼 拝		1	1	1
	美 術			☆2			聖 書		1	1	1
	書 道			☆2		国 語	国 語 I	4	4		
	ペ ン 字						国 語 II	4		4	
英 語	英 語 I	4	4				国語表現	2			
	英 語 II	4		4			現 代 文	4			4
	O C A	2	4				古 典 I	3		◆2	
	O C B	2			*2		古 典 II	3			▼3
	Reading	4			5		世界史A	2			
	Writing	4		2	2		世界史B	4		4	△3
	総合英語						日本史A	2			
	英語理解						日本史B	4	4		△3
	英語表現					地 理 A	2				
	外国事情					公 民	現代社会	4			
英語一般					政治経済		2			3	
LL 演習					倫 理		2			2	
家 庭	家庭一般			2	2		数 学	数 学 I	4	4	
	生活一般					数 学 II		3		3	
商 業	簿 記					数 学 III		3			▼3
	情報処理					数 学 A		2	2		
特 別 活 動	文書処理					数 学 B		2		◆2	△3
	L. H. R	3	1	1	1	数 学 C		2			△3
	特 活 I	3	1	1	1	数学演習					
理 科	特 活 II					物理 I B		4		◎4	
	合 計		34	34	32	物理 II		2			*2
	保 健 体 育	◆の科目より1科目選択						化学 I A	2		
		◎	〃				化学 I B	4	4		
		▼	〃				化学 II	2			*2
		*	〃				生物 I B	4		◎4	
		☆	〃				生物 II	2			*2
			〃				地学 I A	2			
	体 育	7~9	3	2	2	保 健	2	1	1		

◆の科目より1科目選択  
◎ 〃  
▼ 〃  
\* 〃  
☆ 〃

普通科・普通コース (2003年度入学生から)

教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	
英語	英語 I	3	4	4			国語	礼拝	3	3	1	1	1	
	英語 II	4	4		4			聖書	3	3	1	1	1	
	OC I (オーラル・コミュニケーション I)	2	2		○2			国語総合	4	5	5			
	OC II (オーラル・コミュニケーション II)	4	2			○2		国語表現 I	2	2			△-2	
	Reading	4	4			4		現代文	4	5		2		3
	英語演習		3			○3		古典	4	2		2		
	国際理解 I							古典講読	2	2				└2
	国際理解 II							国語演習 I						
	国際理解 III							国語演習 II						
家庭	家庭基礎	2					国語演習 III							
	家庭総合	4	4		2	2	世界史 A	2						
情報	情報 A	2	2	2			世界史 B	4	4	4				
	情報 C	2	4		○2	○2	日本史 B	4	4		4			
農業	簿記		4		○2	○2	地理歴史	地理 A	2					
	農業科学基礎						公民	倫理	2	2			2	
	課題研究						政治・経済	政治・経済(選)	2	4			4	
	総合実習						数学	数学 I	3	3	3			
	作物産							数学 II	4	3		3		
	畜産							数学 III	3					
	農業経営							数学 A	2	2	2			
	農業機械							数学 B	2	3				○3
	食品製造							数学 C	2					
	農業経済							理科	理科基礎	2	2			△-2
	農業選択						理科総合 A		2	2	2			
	総合実習(外)						理科総合 B		2	2				└2
							物理 I		3	4		○2	○2	
							化学 I		3	4		○2	○2	
						生物 I	3		3		3			
						物理 II	3							
特別 学習の時間	L H R	3	3	1	1	1	化学 II	3						
	(仮)総合	3~6	3	1	1	1	生物 II	3						
合計			93	31	31	31	体育	保健	7~8	7	2	2	3	
							保健	2	2	1	1			
							芸術	音楽 I	2	2	☆2			
						美術 I		2	2	☆2				
						書道 I		2	2	☆2				
						音楽 II		2	2		☆2			
						美術 II		2	2		☆2			
							書道 II	2	2		☆2			

△の科目より1科目選択

- ◎ //
- //
- ☆ //

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 普通科・特進コース (2003年度入学生から)

教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	
英語	英語 I	3	6	6			国語	礼拝	3	3	1	1	1	
	英語 II	4	4		4			聖書	3	3	1	1	1	
	OC I (オーラル・ コミュニケーション I)	2						国語総合	4	5	5			
	OC II (オーラル・ コミュニケーション II)	4						国語表現 I	2					
	Reading	4	4			4		現代文	4	5		2	3	
	英語演習		6		△3	△3		古典	4	2		2		
	国際理解 I		2		○2			古典講読	2	3				◎3
	国際理解 II		2			*-2		国語演習 I		2		○2		
家庭	家庭基礎	2	2			2	国語演習 II		2				*-2	
	家庭総合	4					国語演習 III		2				-2	
情報	情報 A	2					地理歴史	世界史 A	2					
	情報 C	2	2	2				世界史 B	4	4	4			
商業	簿記							日本史 B	4	7		4	◎3	
	農業科学基礎						地理 A	2						
	課題研究						倫理	2	2				2	
	総合実習						政治・経済	2	3				3	
	作物産						政治・経済(選)		3				◎3	
	畜産						数学	数学 I	3	3	3			
	農業経営							数学 II	4	3		3		
	農業機械							数学 III	3	2			*-2	
	食品製造							数学 A	2	2	2			
	農業経済							数学 B	2	2		○2		
	農業選択							数学 C	2	2				-2
	総合実習(外)						理科	理科基礎	2					
特別 活動	L H R	3	3	1	1	1		理科総合 A	2	2	1	1		
	学 習 の 時 間 な 学 習 の 時 間 な	3~6	3	1	1	1		理科総合 B	2					
合計			93	31	31	31		物理 I	3	3		△3		
								化学 I	3	2	1	1		
								生物 I	3	3		△3		
							物理 II	3	3			△3		
							化学 II	3	3			◎3		
							生物 II	3	3			△3		
							体育	7~8	7	2	2	3		
							保健	2	2	1	1			
							音楽 I	2	2		☆2			
							美術 I	2	2		☆2			
							書道 I	2	2		☆2			
							音楽 II	2						
						美術 II	2							
						書道 II	2							

○の科目より1科目選択

◎ //

\* //

△ //

☆ //



英語科の授業風景

## (2) 英語科

本科は、三愛女子高校時代の一九八四(昭和59)年四月に設置された。英語をさまざまな角度から徹底的に学び、主体的に学習する習慣をつけ、総合的な学力アップを図っている。今日ビジネスにおいても日常においても、英語力を必要とする場面がどんどん増えている。英語を学ぶことによつてより広く深く世界を知る国際感覚を持った人材育成を  
目指している。

本科は、三年間で英語は三五単位。英語を母国語とする専任教師による少人数指導で、「生きた英語」とじかに接し、その文化も学ぶものである。英語で聞いたり話したり、読んだり書いたり、ごく自然にできるようにしている。さらに、個別に使用できる視聴覚機器を備えたLL教室も整い、一年次の実用英語技能検定三級合格率は、ほぼ一〇〇%。同二級も高い合格率を誇っている。

また、米国の姉妹校からの留学生とともに学習したり、二年次のアメリカ英語研修旅行では、姉妹校(グレッシュム高校、サン・バーロー高校)の授業に参加したりしてきた。しかし、本科は二〇〇三(平成15)年度から募集を停止し、その定員は普通科の中に移して、その教育が生き続けている。

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 英語科

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年		
芸術	音楽			☆2		宗教	礼拝		1	1	1		
	美術			☆2			聖書		1	1	1		
	書道			☆2		国語	国語 I	4	4				
	ペン字						国語 II	4		3			
英語	英語 I	4					国語表現	2					
	英語 II	4					現代文	4			4		
	O C A	2					古典 I	3		3			
	O C B	2					古典 II	3			3		
	Reading	4					世界史 A	2		2			
	Writing	4					世界史 B	4			△3		
	総合英語		5				日本史 A	2					
	英語理解		5	4	5		日本史 B	4	4		△3		
	英語表現			3	5	地理 A	2						
	外国事情				2	公民	現代社会	4					
英語一般			2		政治経済		2			2			
LL 演習		2	2		倫理		2			2			
家庭	家庭一般			2	(2)	数学	数学 I	4	4				
	生活一般						数学 II	3				△3	
商業	簿記						数学 III	3					
	情報処理						数学 A	2	2				
	文書処理						数学 B	2					
特別活動	L. H. R	3	1	1	1		数学 C	2					
	特活 I	3	1	1	1		数学演習						
	特活 II						理科	物理 I B	4				
合計			34	34	32 (34)			物理 II	2				
								化学 I A	2				
						化学 I B		4					
						化学 II		2					
						生物 I B		4		4			
						生物 II	2						
保健体育	地学 I A	2				保健体育	体育	7~9	3	2	2		
							保健	2	1	1			

△の科目より1科目選択

☆ //



酪農経営科生による花壇植込み実習

### (3) 酪農経営科

本科は、一九四二(昭和17)年に開設された野幌機農学校の伝統を受け継いでいる。三愛精神に基づく全寮制教育により、仲間と協力しながら強い目的意識を持って酪農経営に取り組む

意欲的な人材を育てている。

モットーとする実学教育は、実際に役立つ知識や技術をしっかりと身につけるといふものである。大学と共用となった酪農場・牛舎・実験室などの施設・設備を活用して豊かな経験を積み、真の実力を培ってきている。昭和五〇年代後半(一九八〇)から徐々に少子化現象や酪農家戸数の減少が続くという厳しい現実の中で二〇〇一(平成13)年度から男女共学に踏み切り、この年は六名の女子生徒が入学するなど現実的な対応も評価されている。

本科は、一年次で、農業関連科目の基礎を学ぶと同時に、理科や数学、英語などの基礎学力の強化を図っており、近年は国立大学への進学者も出ている。二、三年次では、専門性を高め、コンピュータなどによる農業情報処理や生物工学(バイオテクノロジー)の基礎なども学習する。また、二年次の夏の農家委託実習は長い伝統を持っており、酪農家の経営は

もちろん生活をも体験させている。さらに、三年次のヨーロッパ酪農研修旅行など、広いネットワークを生かして国際感覚を身につけさすなどユニークな教育を展開している。

本科における実習教育は男女共学となつてからの実習の内容も大きく変化し、同時に、実習施設が大学の旧第一牛舎を改装し、機農ファームとして生まれ変わった。機農ファーム内に、実習教室や機械教室、男女の更衣室など実習に必要な関連施設を設置した。パドックをトラクター練習場、放牧地を栽培圃場とし、スイートコーンやジャガイモ・南瓜・小豆などを栽培している。

特に、牛舎実習は、大学施設のインテリジェント牛舎で行い、搾乳ロボット、フリーストール、ミルキングパーラー、バイオガスプラントと生徒にとっては、すばらしい学習環境が整った。

しかし、牛舎が一本化され、大学・短大と一緒に実習を行うため、高等学校の本格的な牛舎実習は後期からとなった。そこで、一年次の農業科学基礎の授業で牛舎実習を取り入れ、基礎的な牛舎管理はもとより、畜産の授業で学習したことを実際の現場で体験することができるようになった。また、三年次に行われていた委託実習が、二年次に移行し、二〇日間の日程で主として道東・道北の酪農家で実施されている。この委託実習は一九六五（昭和40）年に開始され、三八年の歴史を重ねてきた。

新しい取り組みとして、一年次の秋には、近郊の酪農家の協力を得て五泊六日の日程で農家体験実習も行い、さらに、二年次の春には、道南の酪農家の協力を得て、一週間の日程で実習を行っている。高校生活の集大成としてのヨーロッパ酪農研修旅行では、デンマークの酪農家で一週間の日程で酪農実習を行っている。

教科内実習では、二年次前期総合実習、一年次後期農業科学基礎において、農産加工室を中心に実習が行われている。特に、実習圃場で栽培され収穫した作物を使い、ジャムやジュース、豆腐、パン加工やタルトなどの菓子作りなど実習も行われている。さらに、三年次には食品加工が教科として新しくスタートし、ここでは、乳・肉製品の基本的な加工なども行われる。

そのほか、機農ファーム内に、ビニールハウスを二棟建て、そのうち一棟を大学と協同で使用し、花壇用の花を育てて、校舎周辺はもとより、学園内や国道一二号線の花壇へと幅広く活用している。

このように、実習については学園創設の教育理念でもあり、歴史が長く伝統となっている。しかし実習は、時代とともに歩み始めたばかりのものも混在しているが、酪農経営科の中心は実習であり、生徒にとってより良い充実した内容で展開できるように環境を整えている。

また、酪農経営に必要な自動車運転免許（普通・大型特殊）、ガス溶接・アーク溶接・毒劇物取扱者・危険物取扱者資格、簿記検定など、自営率九〇％という高い数値が示すように酪農経営に必要な各種免許・資格取得ができる教育環境を整えている。

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 酪農経営科

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年
英	英語 I	4	2			宗教	礼拝		1	1	1
	英語 II	4		2	3		聖書	1	1	1	
	O C A	2				国語	国語 I	4	3	2	
	O C B	2					国語 II	4			3
	Reading	4					国語表現	2			
	Writing	4					現代文	4			
	総合英語						古典 I	3			
英語理解					古典 II	3					
語	英語表現					地歴	世界史 A	2			2
	外国事情						世界史 B	4			
	英語一般					日本史 A	2				
	LL 演習					日本史 B	4				
家庭	家庭一般					地理 A	2	2			
	生活一般				2	現代社会	4				
商業	簿記		3			政治経済	2		3		
	情報処理					倫理	2				
	文書処理					数学	数学 I	4	4		
農	農業基礎		2				数学 II	3		2	2
	農業情報処理		2				数学 III	3			
	総合実習(内)		2	2			数学 A	2			
	総合実習(外)		(3)	(3)	(3)		数学 B	2			
	課題研究				2		数学 C	2			
	作物			2			数学演習				
	農業経営			2	2	理科	物理 I B	4			
畜産		2		2	物理 II		2				
飼料(栄飼)				2	化学 I A		2				
農業機械			2	2	化学 I B		4		2	2	
生物工学基礎			2		化学 II		2				
農業経済				2	生物 I B		4	2	2		
生物 II					生物 II		2				
特別活動	L. H. R	3	1	1	1	地学 I A	2				
	特活 I	3	1	1	1	保健体育	7~9	3	2	2	
	特活 II					保健	2	1	1		
	合計		32 (35)	32 (35)	32 (35)	芸術	音楽			☆2	
						美術				☆2	
						書道				☆2	
						ペン字					

☆の科目より1科目選択

酪農経営科 (2003 年度入学生から)

教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	教科	科目	標準 単位数	合計 単位数	1年	2年	3年	
英語	英語 I	3	3	3			宗教	礼 拜	3	3	1	1	1	
	英語 II	4	4		2	2		聖 書	3	3	1	1	1	
	OC I (オーラル・ コミュニケーション I)	2					国語	国語総合	4	3	3			
	OC II (オーラル・ コミュニケーション II)	4						国語表現 I	2	2		2		
	Reading	4						現 代 文	4	3		3		
	英語演習							古 典	4					
	国際理解 I							古典講読	2					
	国際理解 II							国語演習 I						
国際理解 III						国語演習 II								
家庭	家庭基礎	2	2			2	地理歴史	世界史 A	2	2			2	
	家庭総合	4						世界史 B	4					
情報	情報 A	2	2	2				日本史 B	4					
	情報 C	2					地 理 A	2	2	2				
商業	簿 記		2	2			公民	倫 理	2	2			2	
	農業科学基礎		4	4				政治・経済	2	2		2		
	課題研究		2			2	数 学	政治・経済(選)						
	総合実習		2		2			数 学 I	3	5	2	1	○2	
	作物産		4		2	2		数 学 II	4					
	畜産		4	2	2			数 学 III	3					
	農業経営		4		2	2		数 学 A	2	2	1	1		
	農業機械		2		2			数 学 B	2					
	食品製造		2			2		数 学 C	2					
	農業経済		2			2		理 科	理科基礎	2	2			2
	農業選択		2			○2			理科総合A	2				
総合実習(外)		(6)	(2)	(2)	(2)	理科総合B			2					
特別 学 習 の 時 間	L H R	3	3	1	1	1	物 理 I		3					
	(仮)総合	3~6	3	1	1	1	化 学 I		3	3	3			
合計			99	31	31	31	生 物 I		3	3			3	
							物 理 II		3					
							化 学 II		3					
							生 物 II	3						
							体 育	7~8	7	2	2	3		
							保 健	2	2	1	1			
							音 楽 I	2	2		☆2			
							美 術 I	2	2		☆2			
							書 道 I	2	2		☆2			
							音 楽 II	2						
						美 術 II	2							
						書 道 II	2							

○の科目より1科目選択

☆ //

四年間主要行事（二〇〇三年度）

〈四月〉

- 始業礼拝
  - 入学式・入寮式
  - 身体・体力測定・内科・歯科検診
  - 全校入学記念礼拝②
  - シオン寮新入生歓迎会
  - 機農寮新入生歓迎会食
  - 新入生歓迎会
  - H T S 合宿（二日間）
  - クラス役員任命式
  - 学年委員合宿（二日間）
  - P T A 総会
  - 農業クラブ年始総会
- 〈五月〉
- 開校記念日
  - 就職合宿（二日間）
  - 開校記念礼拝
  - 壮行会（札幌地区大会）
  - 生徒総会
  - 酪農学園大学・短大部入試説明会
  - 危険物取扱者試験（酪農経営科）

〈六月〉

- 壮行会（全道大会）
  - 前期中間試験（四日間）
  - 農業クラブ意見発表・技術競技校内大会
  - 花の日礼拝
  - 愛の実践活動
- 〈七月〉
- 球技大会（二日間）
  - キャンパスツアー（一学年）
  - 志望校体験ツアー（二、三学年）
  - 酪農経営科二年委託実習（約二週間）
  - 壮行会（全国大会）
  - 夏休み開始
  - 教務補習・夏期講習（約四日間）
  - 地区 P T A（日高・道南）
  - 農業クラブ南連意見発表競技大会
- 〈八月〉
- 地区 P T A（東北・関東・西日本地区）
  - 地区 P T A（十勝・釧路・根室・網走地区）
  - 平和礼拝 I
  - 農業クラブ全道意見発表大会

毒劇物取扱者試験

〈九月〉

平和礼拝Ⅱ

進路出陣式

学校祭（三日間）

学校見学会（中学生による）①

終業礼拝

〈一〇月〉

始業礼拝

強歩遠足

芸術鑑賞

学校見学会（中学生による）②

二年普通科修学旅行（六日間）

〈十一月〉

酪農経営科三年研修旅行（約二週間）

キリスト教教育週間

酪農経営科一年体験実習（六日間）

〈十二月〉

アドベントⅠ

後期中間試験（四日間）

アドベントⅡ

アドベントⅢ

シオン寮クリスマス

機農寮クリスマス

クリスマス礼拝

進学講習（五日間）

学園クリスマス

〈一月〉

進学講習

三年・英語科二年学年末試験（三日間）

スキー授業（二年）

〈二月〉

予餞会

卒業記念礼拝・機農寮退寮式

シオン寮退寮式

入学試験

〈三月〉

卒業式

学年末試験（三日間）

英語科二年米国研修了礼拝

入学手続（二日間）

一日入学

## 五 統合「一〇周年記念式典」

酪農学園の同じキャンパスにあった二つの高等学校を統合し、新生・とわの森三愛高等学校が誕生したのが一九九一（平成3）年であった。以来、普通科・英語科・酪農経営科の三学科編成で一〇年が経過した。その間、多くの卒業生が巣立ち、各分野で活躍している。また、学校においてもクラブ活動、進路関係、ボランティア活動などに積極的に参加し多くの実績を残してきた。

本校ではこの統合一〇周年を記念し、PTA、とわの森三愛高等学校同窓会、機農会、三愛会の賛同を得て、二〇〇一（平成13）年一〇月一三日「一〇周年記念行事」を実施した。それに先立って九月一二日、一般公開の演劇公演（わらび座による「龍姫」の一般公開があり、六〇〇人を超える観客が集まった。また、同年一月一六日に行われたパイプオルガンの夕べには七〇〇人近くの聴衆が本校の礼拝堂を埋め尽くすなど、本校教育への関心の高さをうかがわせた。

そして、メインイベントとなる一〇周年記念式典・祝賀会は一〇月二三日に行われ、式典には八百人余りが参加した。式は礼拝形式で進められ、平尾和義理事長に続いて、村山昭二校長が「この一〇年間を顧みつつ、さらに国際社会にこたえる人材を育てる教育を展開する」と式辞を述べた。式典は厳粛な雰囲気の中で進められ、吹奏楽団による演奏で終了した。

また、祝賀会は三〇〇人の参列者を招き（会場・シェラトンホテル札幌）町村信孝元酪農学園後援会長の祝辞、本校紹介のビデオ上映、バトン部によるパフォーマンス、教員有志による弦楽四重奏など、華

やかで、和やかな中にも格式ある祝賀会を終えた。

村山昭二校長の式辞（抜粋）

振り返れば、酪農経営科の前身であります野幌機農学校が設置されましたのは、一九四二年でありますので、五九年の歴史を数えております。また、普通科・英語科の前身であります酪農学園女子高等学校（後に三愛女子高等学校に校名が変わっておりますが）が開校されましたのは、一九五八年でありますので、四三年の経過をたどっております。

一九九一年、両校とも建学の精神が『神を愛し、人を愛し、土を愛する』という「三愛精神」であったことからスムーズな学校統合が行われました。

否、むしろ、「健土健民」を根幹としての酪農後継者養成の実学教育・全寮制教育と、「三愛精神」を具現化とする愛の実践活動・平和教育・国際理解教育が一体化された、二一世紀の歴史を担うべき国際人を養成する器の大きな高等学校としてスタートいたしました。

まさしく、聖書が語る『新しいブドウ酒を新しい革袋に入れる』の教えを実践するための学校統合でありました。

私ども、この一〇年の歩みを顧みつつ、さらに、時代や地域、国際社会からのニーズにこたえ得る社会人・国際人を世に送り出すための教育を展開するために、まい進しなければならぬと決意を新たにしております。

特に、本学園の創立者であります黒澤西蔵先生が親しまれておりました聖書の一節であります、「患難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」が示しているように、患難を乗り越えてこそ希望が与えられることを確信し、二一世紀を歩んでいきたいと思えます。

## 六 修学・研修旅行

本校の教育の大きな特色の一つに普通科の平和教育を学習する修学旅行と酪農経営科のヨーロッパ酪農研修旅行が挙げられる。これらは統合以前からの長い伝統に培われたもので、貴重な学びと体験を旨としている。

**普通科修学旅行** 本校の普通科の修学旅行は、伝統的に「歴史と平和を学ぶ」をテーマに計画実施してきた。特に、「三愛精神」の具現化としての「平和教育」を創立期より大切にし、平和礼拝や平和強調週間などを年間計画の中に位置づけており、普通科の修学旅行はこの平和週間と連動する中で、組み立てられている。以前は、奈良・京都・広島を修学旅行のコースとしていたが、現在は、奈良・京都・沖縄をコースに定め、事前学習・事前調査を大切にし準備を整えている。

特に、沖縄では、キリスト教短期大学のチャペルで平和礼拝を捧げ、戦跡を見学しているが、平和礼拝では金城重明牧師によって、沖縄戦体験を通しての戦争の悲惨さと平和の尊さを学んでいる。戦跡は、ガラビ壕や糸数壕、ひめゆりの塔、摩文仁の丘などを見学しているが、ひめゆりの塔では全校生徒が祈りを込めて折った千羽鶴を捧げてきた。また、大戦後に戦災孤児保護を目的で設置された養護施設「愛隣園」を訪ね、平和献金と本校生徒が栽培した「じゃがいも」を捧げている。

旅行期間中は、毎日の班長会議の中で、反省や確認などを繰り返して行われ、班長を中心とした生徒の理解と協力の中で、実り多い修学旅行を展開している。

ヨーロッパ酪農研修旅行 本校酪農経営科のヨーロッパ酪農研修旅行は、酪農学園機農高等学校時代の一九八四（昭和59）年から始められた。それまでの修学旅行は、関西・九州一周であり、気候・風土および文化遺産・風物を学び、高校生活の中で多くの役割を果たしてきた。

しかし、本州・九州の出身の生徒も年々増加しており、さらに、吸収力の旺盛な年代に酪農学園建学の精神のрутツともいえるデンマークを訪ね、国際的な視野に立ち、北欧の先進的な酪農を学ぶことが必要であるとの保護者の声もあり、修学旅行の在り方について検討されてきた。その結果、一九八四年一月一日～一月十八日、九日間の日程で第一回欧州酪農研修旅行が実施され、山下正亮校長を団長とし、五十嵐巖、杉山昇、伊藤敦司、引率の下、六〇名の生徒が参加した。

出発に当たり、山下校長は、「創立者黒澤先生は北海道を東洋のデンマークにする夢があったために夢中でやってこられた。グルンドビーに習って愛神、愛人、愛土の三愛精神を酪農学園の基礎としたのは、不毛の地を肥沃に変えた魂を重んじるからである。」のこゝばを紹介し、「その原点に帰れ」を掲げての研修旅行となった。この研修旅行で、デンマークのグルンドビー大聖堂、マリング農学校、ロスキレ食肉学校などの見学を行い、さらにドイツホルスタイン州の乳製品工場見学やドイツ赤牛協会を訪ね、ドイツ農業の一端にも触れた。また、ローマ、パリでのサンピエトロ寺院、ルーブル美術館などの見学を通して古代文化を肌で感じることもできた。

その後、回を重ね研修旅行が成熟するに従い、「見る研修」から「する研修」へ変革しようとの気運が高まり、一九九八（平成10）年に、酪農経営科運営委員長の内生藏啓貢を団長とし、中ノ目敏雄引率

の下、三二名の生徒がデンマークフオーレ近郊の酪農家での五日間のファームステイが初めて実施された。

この研修旅行は二〇〇二年に、アメリカ同時多発テロにより中止があったが、二〇〇三年度で第一九回目を数えており本科教育の大きな特色といえる。

## 七 図書館とメディアセンター

### 図書館

#### 蔵書数

000 総記 二、一四〇冊(四・七%) 100 哲学宗教 三、四〇三冊(七・五%) 200 歴史科学 五、八一六冊(二二・九%) 300 社会科学 五、七九〇冊(二二・八%) 400 自然科学 三、六三五冊(八・〇%) 500 工学技術 一、六四九冊(三・七%) 600 産業 二、七四〇冊(六・二%) 700 芸術体育 四、六一七冊(二〇・二%) 800 語学 一、八三四冊(四・一%) 900 文学 一三、六〇七冊(三〇・〇%) 計四五、二三一冊(二〇〇%)

※二〇〇一年度第二校舎図書室と統合

#### 本校の図書館活動

一九九一年 蔵書(二七、〇九七冊) 「観照の森」二七集発行 学校祭 古代エジプトの研究

一九九二年	蔵書(二七、六二五冊)	「観照の森」二八集発行	学校祭	古代ギリシア文明
一九九三年	蔵書(二七、六七三冊)	「観照の森」二九集発行	学校祭	映画村
一九九四年	蔵書(二六、一二七冊)	「観照の森」三〇集発行	学校祭	アインシュタインの全て
一九九五年	蔵書(二六、七七四冊)	「観照の森」三一集発行	学校祭	メルヘンワールド
一九九六年	蔵書(二七、三〇九冊)	学校祭	宇宙	
一九九七年	蔵書(二七、七七八冊)	学校祭	日本全国名所案内	映画上映会
一九九八年	蔵書(二八、二〇二冊)	学校祭	'98人物伝 古本市	映画上映会
一九九九年	蔵書(二八、六七六冊)	学校祭	赤毛のアンの世界	映画上映会
二〇〇〇年	蔵書(二九、二二〇冊)	学校祭	WE LOVEデイズニー	映画上映会
二〇〇一年	蔵書(四四、七一〇冊)	学校祭	ピーターラビットINとわの森	
二〇〇二年	蔵書(四五、二三一冊)	学校祭	十人十色壁新聞	古本市

### メディアセンター

- ・二〇〇二年度四月より開設
- ・生徒用クライアントPC四〇台、教員用PC一台を接続
- ・常時接続のインターネット環境と生徒一人一人に対してのアカウント配布
- ・メディアセンターからの情報発信のための環境も完備

- ・二〇〇三年度からの教科「情報」に対応したネットワーク環境
- ・将来的に本校と地域との連携のために一般開放講座も予定

## 八 クラブ活動

機農高等学校時代の相撲部、三愛女子高等学校時代のマンドリン部など、統合以前の両校には伝統と実績のあるクラブが数多くあった。統合してからのクラブ活動の現状は体育系クラブは男女別で独立しているクラブのバスケット、バレーボール部など、女子のソフトボール部など、男子の柔道部、男子・女子一緒の陸上部など一六のクラブがある。

文化系クラブは女子部門の琴部、茶道部、家庭科、男女一緒のYCAなど一四あり、ほかに酪農学園クリスマス礼拝などで演奏活動をしているハンドベル部、酪農経営科の生徒全員が加入している学校農業クラブがある。

**人間性・体力・自立心を養う** クラブの加入は任意だが、高校生活をより充実させようと加入する生徒、中学校時代の技量をさらに高めようと特定のクラブに加入する生徒、先輩・後輩・他クラスの生徒との交流を望み入部する生徒などさまざまな動機で入部し活動に励んでいる。クラブ活動をあつ種の学校宣伝に用いている私学もある中で、本校は各クラブを分け隔てることなく扱い、クラブ指導においても、運動には素人の教師でもビデオ学習・他校の試合観察・合同練習・合宿などを通して生徒と一体となってより高い目標を設定し地道で継続的な活動を続けている。

クラブ運営の中で、備品や施設を調えるのに生徒会予算だけでは限度があるので教師と生徒は工夫を凝らしている。例えば工場や家庭での不要物を修理塗装しての再利用、廃車を用いてのグラウンド整備、融雪期のコートの雪割り、生徒負担をできるだけ軽減するために、学校車を運転しての遠征、技術を駆使して生徒のスポーツ用品修理、大会参加時の器具運搬など目に見えない裏方の仕事が限りなくある。また、教員は日・祝日、長期休暇期間も返上してクラブ指導を続けている。

**農業クラブ**（酪農経営科） 酪農経営科の生徒は入学後、全員、農業クラブ（農業関係の教育を受ける高校生が参加している全国組織）に加入し、作物班、家畜班、機械班、情報処理班のいずれかに所属する。教科で学んだことを基に自発的な課題研究に取り組み、成果を競う意見発表・技術競技大会があり、例年、全道、全国レベルで優秀な成績を挙げている。また、花を育てて、札幌盲学校の生徒たちと花壇づくりをしたり、福祉施設にフラワーボックスをプレゼントするなど、地域との交流や奉仕活動も活発である。

**朗報相次ぐ** クラブ活動をする生徒や顧問にとつての目標は、まず地区予選で一勝、入賞、次に全道大会出場、そして全国大会であり、全国制覇である。

統合後に高体連、高文連主催の大会で全道大会に出場したクラブは次のとおりである。

全国大会出場はソフトボール部、ソフトテニス部、バドミントン部、女子バスケットボール部、男子バレーボール部、空手道部、体操部、卓球部、陸上部、女子バレーボール部、琴部、美術部、吹奏楽部、書道部。

他の大会ではバトン部、ハンドベル部が全国大会に出場した。また、毎年全国大会に出場している農業クラブは意見発表の部で全国制覇を果たした。

二一世紀最初のオリンピックであるソルトレイクシティ冬季五輪大会が二〇〇二年二月八日より開催されたが、本校出身の飯田蘭（一九九八年三月卒）が、女子スノーボード・スラローム種目の日本代表に見事選考された。オリンピック選手輩出は本校にとって初の快挙であり、この朗報に学校は大きな喜びに沸き返った。飯田は一六位に終わったが、卒業生はもちろんのこと、在校生にも大きな夢と自信を与えた。

#### 体育系クラブ

〔男子〕 柔道部、バスケットボール部、空手部、ソフトテニス部、バレエボール部、剣道部、卓球部、野球部、サッカー部、テニス部、陸上部

〔女子〕 ソフトボール部、バスケットボール部、空手部、体操部、バドミントン部、剣道部、卓球部、バレエボール部、ソフトテニス部、テニス部、陸上部

#### 文化系クラブ

YCA、軽音楽部、書道部、放送部、演劇部、琴部、吹奏楽部、マンガ部、合唱部、茶道部、ハンドベル部、美術部、家庭科クラブ、写真部、バトントワリング部

クラブ活動の近年の主な成績

一九九九年度Ⅱ「高体連全道大会」女子バスケットボール部三位、女子バドミントン部北海道準優勝（全道三位）、女子ソフトボール部準優勝、卓球・個人（全国大会出場）、琴部・高等学校文化連盟主催日本楽器の部（全国大会出場）、農業クラブ・農業鑑定部門（二名全国大会出場）

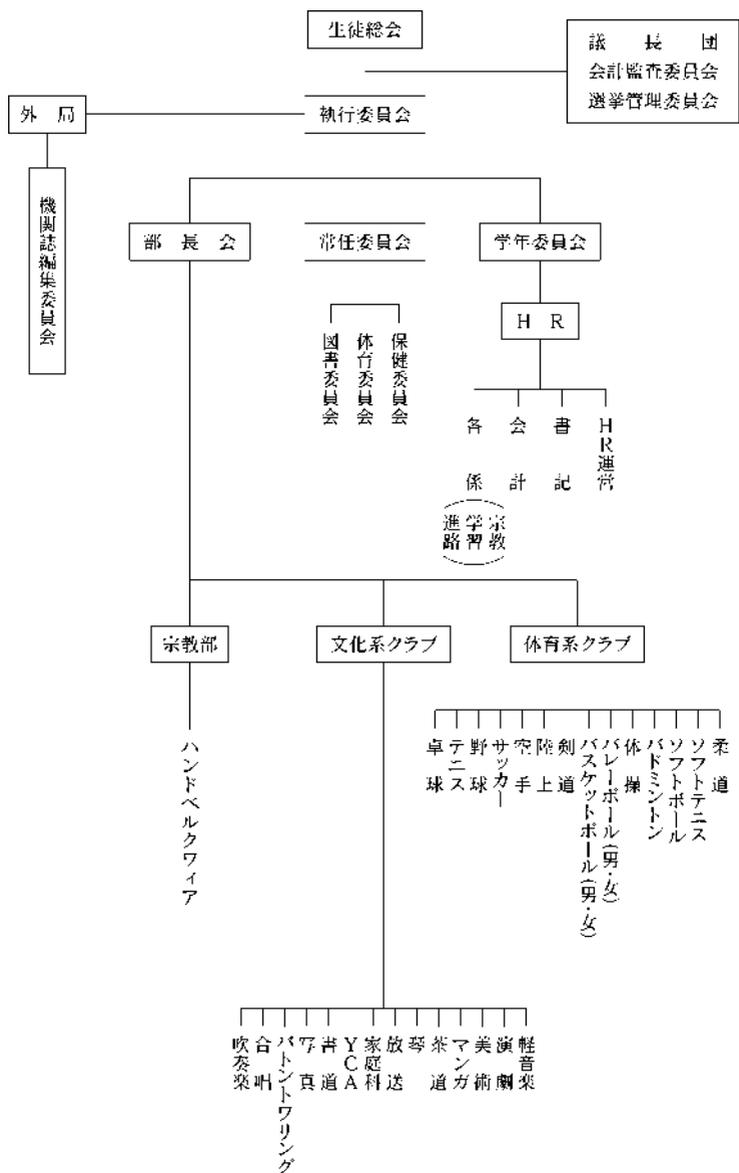
二〇〇〇年度Ⅱ「高体連全道大会」女子バドミントン部北海道大会団体二位・全道大会団体三位、女子ソフトボール部優勝（全国大会出場）、農業クラブ南北海道代表（二名）、「全国大会出場」女子ソフトボール部、琴部、バトントワリング部（個人）、美術部（個人）

二〇〇一年度Ⅱ「高体連全道大会」男子バレーボール部三位、女子バスケットボール部三位、女子ソフトテニス部団体三位・ダブルス五位（ニペア全国大会出場）、女子バドミントン部北海道大会二位・ダブルス二位（全国大会出場）、体操部女子一部団体総合二位・一部個人総合三位（全国大会出場）、女子ソフトボール部優勝（全国大会出場）、バトントワリング部個人二位（全国大会出場）、琴部「日本音楽部門」（全国大会出場）、吹奏楽部全道大会金賞

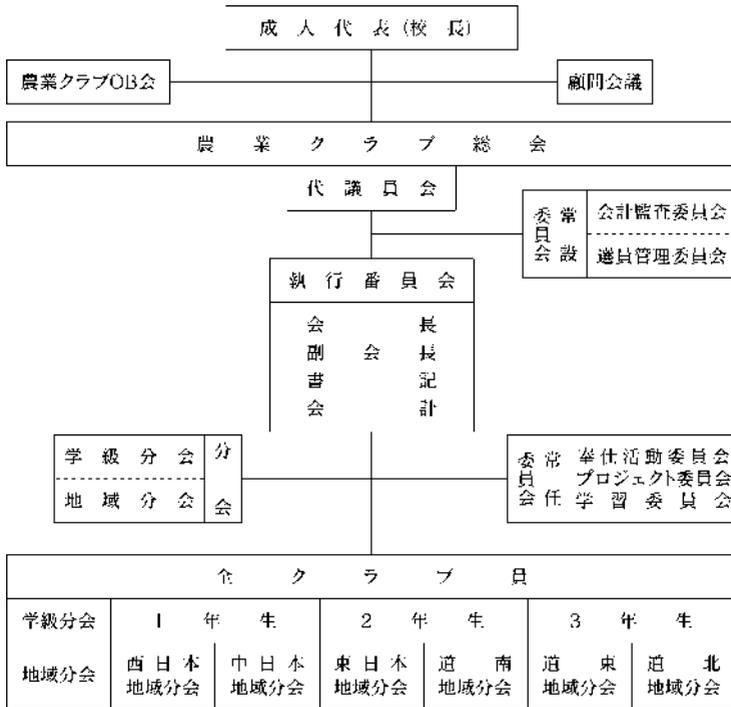
二〇〇二年度Ⅱ「高体連全道大会」男子バレーボール部、女子バスケットボール部、女子ソフトテニス部団体二位・ダブルス三組（全国大会出場）、女子バドミントン部北海道大会団体二位、体操部女子一部団体総合優勝（全国大会出場）、女子ソフトボール部優勝（全国大会準優勝）、バトントワリング部団体一位・個人一位（全国大会出場）、放送部「NHK杯放送コンテスト」七位（全国大会出場）、琴部「日本音楽部門」（全国大会出場）、農業クラブ意見発表会優秀賞、農業鑑定優秀賞、吹奏楽部全道大会金賞

第二章 とわの森三愛高等学校

生徒会組織図



農業クラブ組織図



《常任委員活動と教科授業》

奉仕活動委員会	各分会活動(学級・地域)					
プロジェクト委員会 (学習委員会)	酪農経営班	情報処理班	作物研究班	家畜研究班	農業機械班	
	意見発表	情報処理競技	農業鑑定競技	乳牛畜産競技	農作業機械班	
教科	1年農業基礎	S P 班 活 動				
	2年総合実習 (後期)	酪農経営班	情報処理班	作物研究班	家畜研究班	農業機械班
	3年課題研究	酪農経営班	情報処理班	作物研究班	家畜研究班	農業機械班



入浴終了	二〇時〇〇分	巡回点呼	二〇時二五分
夕食 準備	一八時五〇分	学習時間	二〇時三〇分
夕食	一九時〇〇分	就寝準備	二二時四〇分
後片付け	一九時一五分	就寝	二二時〇〇分
門限(点呼)	一九時〇〇分	※テスト期間⇨特別時間割	

① 外出 放課後および休日につき、夕食時間までに帰寮する。(一九時〇〇分門限)

② 特別外出 父母など、寮外での面談する場合、舎監長(舎監)の許可を受け届出用紙を出す。二〇時五〇分までを帰寮最終時間とする。

③ 外泊 自宅以外の外泊は原則として認めない。ただし親戚など、保護者の許可を得て、外泊先登録届を提出した家庭の宿泊は認める。

室内遊戯など、その他の禁止事項

① 室内遊戯許可 囲碁、将棋、トランプ、携帯TVゲーム(ただし、自由時間のみ)

② 不許可 麻雀、花札、その他一切の賭博的行為の遊戯具

③ その他の禁止物 アイロン(寮備え付け使用)、電気ポット、扇風機、ノートパソコンなど高価な品物  
携帯テレビ、自転車、オートバイ、携帯電話など

このほか、施設設備の利用、居室内管理、健康管理、私物管理など共同生活を行う上での基本的な

順守事項が定められている。

◇学寮の月経費（二〇〇二年度）

寮費 二四、五〇〇円 食費 二八、二五〇円 計五二、七五〇円

\*入寮費六〇、〇〇〇円は入寮時のみ納入となっている。

シオン寮日課と入寮の心得（抜粋） シオン寮は通学に不便な者や遠隔地からの者を対象に三愛女

子高校時代から開設されている。さらに、二〇〇一年から男女共学になった酪農経営科の女子寮としての役割りも果たしている。特に、シオン寮寮務部長（教員）、専任寮監数名を置き、共同生活のため規則を守り規律ある日常生活が課せられている。

《平日日課》

日課	時間	門限
起床	六時三〇分	一八時〇〇分
点呼	六時四〇分	一八時〇〇分
清掃	七時〇〇分	一九時三〇分
朝食	八時〇〇分	二二時〇〇分
登校	八時〇〇分	二二時三〇分
帰寮	一一時〇〇分	二二時三〇分
消灯	一二時三〇分	二四時〇〇分
		夕食
		学習
		厨房当番
		ゴミ集め
		受験生消灯

\*この日課表は基本的な生活時間であり、クラブ関係者については若干異なっている。曜日により夕礼拝や集会があり、寮においても教育的配慮がされている。

入寮心得は大きくは次の五項目に集約されている

- ① 服装・持ち物・履物は質素にし、寮の施設、設備を大切にす。
- ② 共同生活のため、自己のもの、他のものの区別をつけ身の周りの整理整頓と金品の管理を徹底する。
- ③ 共同生活のため、当番作業を誠実に勤めること。
- ④ 規則を守り、日課に沿って規律ある生活すること。
- ⑤ 心身共に健康を保つように自己管理に努めること。

◇学寮の月経費(二〇〇二年度)

寮費 二五、五〇〇円 食費 二八、二五〇円 計五三、七五〇円

また、入寮費の六〇、〇〇〇円は入寮時のみ納入となっている。

## 第二章 とわの森三愛高等学校

### 野幌機農高等学校（附属高等学校）生徒数の推移

（本科：農業科、農業協同組合科、農村経済科、酪農経営科）

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1942（昭和17）	120	—	120	120	—
1943（同18）	120	—	135	249	—
1944（同19）	120	—	126	360	96
1945（同20）	120	—	126	373	119
1946（同21）	120	—	124	364	99
1947（同22）	120	—	89	299	90
1948（同23）	120	—	38	206	49
1949（同24）	120	337	97	252	64
1950（同25）	120	334	92	261	83
1951（同26）	120	236	90	264	81
1952（同27）	120	202	89	283	87
1953（同28）	120	235	87	306	108
1954（同29）	120	370	147	350	95
1955（同30）	120	219	90	308	86
1956（同31）	120	207	100	313	121
1957（同32）	120	274	89	266	74
1958（同33）	120	250	145	315	81
1959（同34）	150	233	152	375	84
1960（同35）	150	238	137	401	124
1961（同36）	150	162	96	360	122
1962（同37）	150	356	126	326	110
1963（同38）	90	424	143	354	83
1964（同39）	90	345	148	407	115
1965（同40）	135	353	143	423	134
1966（同41）	135	321	141	423	139
1967（同42）	135	292	121	394	132
1968（同43）	135	349	131	386	137
1969（同44）	90	308	94	334	110
1970（同45）	90	217	106	321	123
1971（同46）	90	132	73	263	85
1972（同47）	90	134	72	243	99
1973（同48）	90	140	68	207	67
1974（同49）	90	162	75	208	62
1975（同50）	90	172	72	210	60
1976（同51）	90	143	66	209	72
1977（同52）	90	179	100	233	66
1978（同53）	90	197	101	257	60
1979（同54）	90	177	97	287	94

野幌機農高等学校生徒数の推移（つづき）

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1980（昭和55）	90	165	94	276	92
1981（同56）	90	106	69	241	92
1982（同57）	90	97	64	209	78
1983（同58）	90	83	59	185	63
1984（同59）	90	100	64	178	60
1985（同60）	90	84	62	170	50
1986（同61）	90	97	63	174	58
1987（同62）	90	96	70	180	49
1988（同63）	90	116	78	200	57
1989（平成1）	90	81	49	183	65
1990（同2）	90	89	64	173	66
1991（同3）	90	61	43	146	43
1992（同4）	90	73	49	151	57
1993（同5）	45	49	40	132	43
1994（同6）	45	38	31	119	48
1995（同7）	45	37	26	92	35
1996（同8）	45	36	34	89	30
1997（同9）	45	42	39	95	23
1998（同10）	45	39	35	105	30
1999（同11）	45	39	28	94	34
2000（同12）	45	31	25	82	31
2001（同13）	40	44	36	85	24
2002（同14）	40	38	33	86	23
2003（同15）	40	45	39	101	
計	—	—	—	—	4,562

（研究科、選科、別科、農機科の卒業生数）

	研究科	選科	別科	農機科	小計
1948（昭和23）	7	27	—	—	34
1949（同24）	—	—	30	—	30
1950（同25）	—	—	32	7	39
1951（同26）	—	—	32	9	41
1952（同27）	—	—	66	16	82
1953（同28）	—	—	3	11	14
1954（同29）	—	—	35	17	52
1955（同30）	—	—	—	29	29
計	7	27	198	89	321

第二章 とわの森三愛高等学校

三愛女子高等学校（とわの森三愛高等学校）生徒数の推移  
普通科

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1958（昭和 33）	200	221	103	103	—
1959（同 34）	200	240	124	216	—
1960（同 35）	200	200	107	315	86
1961（同 36）	200	183	95	317	117
1962（同 37）	200	412	203	393	96
1963（同 38）	250	616	265	549	83
1964（同 39）	250	711	257	714	195
1965（同 40）	250	534	296	805	257
1966（同 41）	250	586	288	827	245
1967（同 42）	250	689	312	885	285
1968（同 43）	300	484	295	883	283
1969（同 44）	300	396	260	841	287
1970（同 45）	300	470	290	832	283
1971（同 46）	300	402	281	828	248
1972（同 47）	300	452	303	871	282
1973（同 48）	300	446	290	875	274
1974（同 49）	300	499	303	883	290
1975（同 50）	300	444	237	805	275
1976（同 51）	300	496	285	799	277
1977（同 52）	300	509	261	764	221
1978（同 53）	300	579	270	766	241
1979（同 54）	300	575	251	722	218
1980（同 55）	300	620	254	709	217
1981（同 56）	300	554	225	681	224
1982（同 57）	300	497	213	630	209
1983（同 58）	300	652	245	620	186
1984（同 59）	260	652	241	635	177
1985（同 60）	260	556	173	591	191
1986（同 61）	260	702	253	627	204
1987（同 62）	300	629	252	646	153
1988（同 63）	300	1,035	392	830	208
1989（平成 1）	350	1,024	391	956	203
1990（同 2）	350	1,049	365	1,049	332
1991（同 3）	350	1,002	372	1,029	304

三愛女子高等学校生徒数の推移（つづき）

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1992（平成 4）	300	884	286	959	311
1993（同 5）	300	915	287	886	321
1994（同 6）	300	1,104	332	863	255
1995（同 7）	300	1,259	442	1,026	257
1996（同 8）	260	1,116	331	1,053	297
1997（同 9）	260	1,123	313	1,026	390
1998（同 10）	260	1,096	288	886	298
1999（同 11）	305	1,107	330	880	283
2000（同 12）	305	1,115	326	893	252
2001（同 13）	295	1,264	317	928	301
2002（同 14）	285	1,246	376	967	287
2003（同 15）	325	1,389	326	957	
計	—	—	—	—	10,400

英語科

	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1984（昭和 59）	40	42	13	19	—
1985（同 60）	40	49	12	33	—
1986（同 61）	40	54	15	40	14
1987（同 62）	40	56	17	42	11
1988（同 63）	40	81	30	62	12
1989（平成 1）	40	87	30	77	17
1990（同 2）	40	46	21	76	28
1991（同 3）	40	55	20	68	27
1992（同 4）	40	71	24	61	19
1993（同 5）	40	76	17	53	16
1994（同 6）	40	73	24	59	17
1995（同 7）	40	89	32	73	16
1996（同 8）	40	53	19	75	26
1997（同 9）	40	53	24	73	29
1998（同 10）	40	68	28	71	20
1999（同 11）	40	51	22	72	22
2000（同 12）	40	59	25	74	27
2001（同 13）	40	63	31	73	20
2002（同 14）	40	41	15	66	23
2003（同 15）	—	—	—	41	
計	—	—	—	—	344

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 教職員数の推移 (旧) 機農・大学附属高等学校

1948 (昭和 23) 年度～1980 (昭和 55) 年度 (1942～1947 資料焼失)

年 度	本 務							兼 務			合計	
	校長	教諭	助教諭	養護 教諭	助手	事務	事務外	計	教諭	講師 助手		計
1948 (昭和 23)	1	15	4	1	6	3	8	38	15	6	21	59
1949 (同 24)	1	14	4	1	9	3	20	52	13	4	17	69
1950 (同 25)	1	15	1		7	4	15	43	6	1	7	50
1951 (同 26)	1	17	5		6	3	14	46	3	4	7	53
1952 (同 27)	1	17	5		8	3	15	49	2	4	6	55
1953 (同 28)	1	18	4		5	3	19	50	2	7	9	59
1954 (同 29)	1	21	3		7	4	14	50	3	5	8	58
1955 (同 30)	1	18			7	2	18	46	2	7	9	55
1956 (同 31)	1	13			4	2	14	34		6	6	40
1957 (同 32)	1	14			2	2	14	33		7	7	40
1958 (同 33)	1	15		1	5	2	13	37		7	7	44
1959 (同 34)	1	18		1	12	5	17	54		5	5	59
1960 (同 35)	1	19		1	14	4	13	50		3	3	53
1961 (同 36)	1	19		1	17	6	10	54		5	5	59
1962 (同 37)	1	19	2	1	16	7	17	63		5	5	68
1963 (同 38)	1	17	2	1	17	5	16	59		5	5	64
1964 (同 39)	1	18	2	1	12	5	13	52		6	6	58
1965 (同 40)	1	17	1	1	7	6	15	48		5	5	53
1966 (同 41)	1	20		1	4	6	15	47		5	5	52
1967 (同 42)	1	20		1	4	6	15	47		7	7	54
1968 (同 43)	1	20		1	4	6	13	45		5	5	50
1969 (同 44)	1	19			9	6	16	51	3	2	5	56
1970 (同 45)	1	19		1	8	6	16	51		4	4	55
1971 (同 46)	1	19		1	7	7	18	53	1	3	4	57
1972 (同 47)	1	18	1	1	6	6	16	49		3	3	52
1973 (同 48)	1	18	1	1	6	6	15	48		3	3	51
1974 (同 49)	1	19	1	1	3	7	14	46		8	8	54
1975 (同 50)	1	19	1	1	3	6	12	43		7	7	50
1976 (同 51)	1	20	1	1	3	6	4	35		4	4	39
1977 (同 52)	1	20		1	4	5	2	33		4	4	37
1978 (同 53)	1	20	1	1	3	5	2	33		5	5	38
1979 (同 54)	1	20	1	1	3	7	2	35		4	4	39
1980 (同 55)	1	21		1	3	6	3	35		5	5	40

教職員数の推移（つづき）

1981（昭和56）年度～2003（平成15）年度

	校 長	教 諭	助教諭	養護教諭	助 手	職 員	計
1981（昭和56）	1	21	1	1	2	9	35
1982（同 57）	1	22	1	1	2	9	36
1983（同 58）	1	19	1	1	2	9	33
1984（同 59）	1	19	1	1	2	9	33
1985（同 60）	1	19	1	1	1	9	32
1986（同 61）	1	19	1	1	1	9	32
1987（同 62）	1	19	0	1	2	9	32
1988（同 63）	1	15	0	1	0	9	26
1989（同 2）	1	15	0	1	0	7	24
1990（同 2）	1	12	0	1	0	7	21

## 第二章 とわの森三愛高等学校

## 教職員数の推移 (旧) 三愛・とわの森高等学校

1958 (昭和 33) 年度～1980 (昭和 55) 年度

年 度	本 務								兼 務		合計
	校長	教諭	助教諭	養護 教諭	助手	事務	事務外	計	講師	計	
1958 (昭和 33)	1	5	1	1	—	1	1	10	5	5	15
1959 (同 34)	1	8	1	—	1	2	—	13	1	1	14
1960 (同 35)	1	8	2	1	1	2	—	15	4	4	19
1961 (同 36)	1	7	2	—	3	3	—	16	12	12	28
1962 (同 37)	1	11	1	—	1	3	2	19	14	14	33
1963 (同 38)	1	11	2	—	—	3	2	19	13	13	32
1964 (同 39)	1	21	4	—	1	4	3	34	8	8	42
1965 (同 40)	1	21	2	—	—	4	3	31	8	8	39
1966 (同 41)	1	25	3	1	1	7	3	41	9	9	50
1967 (同 42)	1	25	3	1	1	6	4	41	8	8	49
1968 (同 43)	1	24	2	1	—	5	5	39	15	15	53
1969 (同 44)	1	25	2	1	1	5	6	41	15	15	56
1970 (同 45)	1	26	3	1	—	5	6	42	14	14	56
1971 (同 46)	1	27	1	1	—	6	8	44	14	14	58
1972 (同 47)	1	28	2	1	1	6	7	46	14	14	60
1973 (同 48)	1	28	3	1	1	6	7	47	14	14	61
1974 (同 49)	1	30	1	1	1	6	7	47	13	13	60
1975 (同 50)	1	34	—	1	—	6	9	51	12	12	63
1976 (同 51)	1	33	—	1	—	6	8	49	13	13	62
1977 (同 52)	1	34	—	1	—	6	5	47	11	11	58
1978 (同 53)	1	34	—	1	—	6	5	47	13	13	60
1979 (同 54)	1	36	—	1	—	6	5	49	14	14	63
1980 (同 55)	1	37	—	1	2	7	6	54	14	14	68

教職員数の推移（つづき）

1981（昭和56）年度～1990（平成2）年度

	校 長	教 諭	助教諭	養護教諭	助 手	職 員	計
1981（昭和56）	1	37	0	1	2	13	54
1982（同 57）	1	36	0	1	2	12	52
1983（同 58）	1	34	0	1	3	11	50
1984（同 59）	1	34	0	1	2	12	50
1985（同 60）	1	35	0	1	2	10	49
1986（同 61）	1	35	0	1	2	11	50
1987（同 62）	1	34	0	1	2	9	47
1988（同 63）	1	36	0	1	2	8	48
1989（平成 1）	1	39	0	1	2	7	50
1990（同 2）	1	42	0	1	2	8	54

第二章 とわの森三愛高等学校

教職員数の推移 とわの森三愛高等学校

年 度	校長	教諭	助教諭	養護教諭	助 手	職 員	計
1991 (平成 3)	1	54	0	2	1	13	71
1992 (同 4)	1	54	0	2	1	12	70
1993 (同 5)	1	53	0	2	1	9	66
1994 (同 6)	1	52	0	2	1	9	65
1995 (同 7)	1	55	0	2	1	9	68
1996 (同 8)	1	54	0	2	1	9	67
1997 (同 9)	1	53	0	2	1	9	66
1998 (同 10)	1	52	0	1	1	9	64
1999 (同 11)	1	52	0	1	1	8	63
2000 (同 12)	1	50	0	1	1	8	61
2001 (同 13)	1	51	0	1	1	8	62
2002 (同 14)	1	52	0	1	1	8	63
2003 (同 15)	1	52	0	1	1	8	63

(2003. 5. 1)

第二部 学校再編と現況

現教職員 (二〇〇三年四月)

職名	氏名	教科
校長	村山昭二	教
教頭	河部忠夫	社会
宗教主任	柴橋伴夫	社会
同	榮忍	聖書
同	横川容子	聖書
同	梅津敏	国語
同	竹田弥生	国語
同	辻佳江	国語
同	東條めぐみ	国語
同	八木啓太	国語
同	前田俊哉	国語
同	石川和哉	社会
同	伊藤敦司	社会
同	風岡利尚	社会
同	久保木昭崇	社会
同	真田昭好	社会
同	守田純子	社会
同	石橋紀彦	数学

教諭

職名	氏名	教科
同	佐藤文彦	数学
同	藤島浩二	数学
同	福田憲太郎	数学
同	龍田聡己	数学
同	荒川光夫	理科
同	小野恒弘	理科
同	大光慎太郎	理科
同	中ノ目敏雄	理科
同	松浦武光	理科
同	蒔田弥生	理科
同	赤尾全廣	保健体育
同	播磨良信	保健体育
同	妹尾将義	保健体育
同	田村敬子	保健体育
同	矢端信介	保健体育
同	山田和弘	保健体育
同	中山文夫	音楽
同	大北直子	美術
同	新井昭雄	英語
同	垣内恵子	英語
同	柿崎明子	英語



## 第三章 酪農学園大学短期大学部

短期大学は一九四九（昭和24）年に酪農学園大学部として開学し、翌五〇年に酪農学園短期大学となり、一九六四（昭和39）年に農業教育として極めてユニークな季節制の第二コースを設置し、一九七四（昭和49）年には、女子のための生活科学専攻課程を設けた。

一九八四（昭和59）年には第二コースの学生募集が停止されたが、翌八五年に女子のための教養学科を新設し、既設の酪農科と併せて校名も北海道文理科短期大学と改めた。さらに、一九九〇（平成2）年四月より「経営情報学科」を新設したが、一九九八（平成10）年四月より「教養学科」ならびに「経営情報学科」の学生募集を停止し、併せて校名を酪農学園大学短期大学部に変更し、既設の「酪農科」を「酪農学科」と名称を改めた。

また、本学の教育理念は、キリスト教の精神によって人間教育を行い健全な思想に基づいた真理を科学的・実的に追求し、もって、神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛の精神に徹する社会的に有為な人材を養成することを目的としている。

『学園史一』および本書第一部で開設の経緯や初・中期の教育内容について詳述しているので本章では主として教養学科を新設し、校名を北海道文理科短期大学に変更した一九八五年から今日の短期大学部酪農学科に至るまでについて記す。

### 一 三学科体制とその後の変遷

このように長い伝統を持つ酪農科に、新たに女子のための教養学科、そして三番目の学科として、経営情報学科が加わり、念願の「都市と農村の調和」を標榜する総合短期大学となった。

念願の三学科体制が名実ともに整った一九九三(平成5)年の入学式で、坂本与市学長は四一一名の新入生に次のように式辞を述べた。

#### 坂本与市学長の入学式式辞(抜粋)

本学は、開学以来四三年の伝統を持つ酪農科と、開設九年目を迎える教養学科、さらに開設四年目を迎える経営情報学科の三学科を擁し、「都市と農村の調和」を標榜する総合短期大学であります。

さて、本日、私は諸君に申し上げておきたいことが三点あります。

第一点目は、実学教育であります。本学の実学教育とは、実際と学問とが一丸となつて会得されるもので、単なる実利主義ではない。しかも実学教育は、諸君の認識や自覚を待たずに、日々これを先行させていかねばならない現実があります。従つて本学では、机の上の学問にとどまらず、いつも目を開いて、手足を動かして「体全体で汗して学ぶ」という教育の柱が一本立っているということを銘記しておいてほしいのであります。

第二点目は、本学の建学の精神であります。すなわち「神を愛し、人を愛し、土を愛する」という精神であります。これは、今から一〇〇年以上も前のこと、敗戦国デンマーク復興のプリンシプルでありました。

この三愛精神は、内村鑑三が最初に日本に紹介し、賀川豊彦らによって広く伝えられてきたといわれています。北海道では、酪農の先覚者・宇都宮仙太郎がウイスコンシン大学で、この情報に接し、その後、黒澤西蔵らとともに、雪印の前身である酪連が創設されるのですが、やがて、本学創立の精神として受け継がれてきたものであります。この三愛の精神は、本学園の永遠不滅の教育理念であります。

第三点目は、変わるものと変わらざるもの、とについてであります。本学は創立以来、一貫して酪農教育を展開してきたわけですが、昭和六〇年から、伝統ある酪農教育のキャンパスを、農業以外の分野を目指す若者たちを迎えて広く地域社会に開放してきたのであります。

このことは、本学の大英断によるものであり、酪農学園の創立者たちが、本学の創立記念史の中に述べているように、「あらゆる教育を通じて、日本の農村や産業を発展に導くことが酪農学園の重大使命である」ことにほかならないのであります。

本来、大学や学問、あるいは人間社会においては、変わってはならないものと、変わらなければならぬものがあります。本学の場合、変わってはならないものとは、前に述べた二点。すなわち、地の果てにまでも及ぶべき建学の精神と、実学教育の柱であります。変わらなければならぬものは、時代の進展とともに、これに即応した研究教育体制と専門領域の開拓であります。

変ってはならない事柄については、われわれは、常にそれを受け入れる冷静さが欲しいのであります。また、変えるべき事柄については、これを変えてゆくための勇氣と力が欲しいものであります。そして、われわれは常に、この両者を見分ける「知恵」を日々養いたいものであります。

### (1) 教養学科の設置と変遷

一九八五(昭和60)年、校名を酪農学園短期大学から北海道文理科短期大学に改めて女子の教養学科がスタートした。学科には秘書コース、生活文化コース、教養コースを

設け、きめ細かい指導で実社会で即対応できる人材を養成してきた。

この学科の教育の目標の一つは「都市と農村との融合」ということであった。酪農を中心的なイメージとして存立する本学に、都市（農村以外）からの女子だけを入学させる学科は注目を集めた。しかも校名を「北海道文理科短期大学」と改めるなど、この学園にとつては極めて画期的なことであった。初年度の入学生は七三名と少なかったが年々微増し、ピーク時の一九九三（平成5）年には定員一〇〇名に四六〇名の志願があった。入学以来学生に対して求めたことは、実践的な学問の追求であり、三愛精神の具現化であった。カリキュラムにおいては、「乳と乳製品」「寒地の農業」などといったほかの女子短期大学にはない科目を配置して、本学の特色を持った教育課程を展開した。この学科の目指したものは、学園の「実学教育」の伝統に立って、社会に生きる人の育成ということであった。坂本学長が言う都市と農村の融合ということも酪農学園の中の女子教養学科が掲げる目標という意味では十分にうなづける。

教養学科の教育上の工夫は、カリキュラムにあることは当然だが、それらは多数の担当者によって進められることでもあり、また授業以外の面でも種々配慮された。

まず一年次の担任を学科の専任教師全員に割り当てるため「総合演習Ⅰ」をつくり、その単位を必修させたことである。また、この「総合演習」という名称は、この当時教養学科だけが用いた名称であるが、「総合演習Ⅰ」は、入学時の出席番号順に機械的に割り当てるので、演習の内容は教師各自の専門とは関係なく、自由にテーマを選んで行った。教員には二年のゼミ「総合演習Ⅱ」に加えて一年

のゼミを担当するということには負担はあったが、これによって学生の把握が可能となった。また一年生のゼミで行う小旅行や文集の編集などは本学ではユニークな活動であった。

「総合演習Ⅱ」は二年生で開講したがこの活動中にゼミ旅行も計画された。

そのほか、学科行事としては、体育大会、卒業記念パーティー、ミュージカル鑑賞などがあり、体育大会は学生の自主的運営によって行うという形式をとったが、実際には担当教員の指導の下に行われた。

教養学科は一九九八（平成10）年四月から募集を停止し、その定員は、大学「環境システム学部」の中に移されて新しいスタートを切ったが、この女子の「教養学科」の経営や実践の経験も学部へ移されて生き続けている。

卒業生数は一、三〇〇名以上に達し、各分野で責任ある仕事に携っている。本学園の教育理念の下で自らの青春の一時期を過した者たちである。

#### 歴代教養学科学科長

坂本与市（一九八五～八六） 尾崎 巖（一九八七～九八）

授業科目	単位数
<b>秘書・情報科目群</b>	
簿記学	2
会計学	2
社会と情報	2
企業論	2
国際理解	2
秘書実務	2
事務管理	2
マスコミュニケーション論	2
事務機器演習Ⅱ	1
コンピュータ演習	2
<b>人間環境科目群</b>	
自然環境論	2
北方文化論	2
生活経営論	2
消費者教育論	2
食物科学	2
食生活論	2
住環境論	2
環境と衛生	2
社会福祉論	2
日本文化演習Ⅰ	1
日本文化演習Ⅱ	1
食物科学実習Ⅰ	1
食物科学実習Ⅱ	1

授業科目	単位数	開講学科
他学科受講科目	北海道開発論	2 酪農科
	野生動植物	2 酪農科
	国際経済論	2 経営情報学科
	貿易実務	2 経営情報学科

- ・他学科受講科目を履修した場合は、修得単位のうち4単位までを共通選択科目群の単位として、卒業資格修得単位数に算入する。
- ・卒業必要単位数 64 単位以上

授業科目	単位数
<b>教養科目</b>	
キリスト教	2
キリスト教文化論	2
英語Ⅰ	2
体育実技	1
文学Ⅰ	2
歴史学	2
社会と政治	2
社会と経済	2
社会と法律	2
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
英語Ⅱ	2
フランス語	2
自然科学概論	2
体育講義	1
<b>教養科目または専門科目</b>	
<b>必修科目群</b>	
総合演習Ⅰ	2
総合演習Ⅱ	2
秘書学概論	2
日本語表現法	2
事務機器演習Ⅰ	1
人間関係論	2
日本文化論	2
生活科学概論	2
消費者経済論	2
<b>共通選択科目群</b>	
文学Ⅱ	2
英語表現法	2
時事英語	2
日本語	2
英米文学	2
英会話Ⅰ	2
英会話Ⅱ	2
社会心理学	2
乳と乳製品	2
卒業研究	2

(2) 経営情報学科の設置と変遷 教養学科に続く第三の学科新設への検討が一九八六(昭和61)年から開始された。教養学科の誕生後間もない時期であり、三学科体制による充実と発展への気運が高まっていた。新しい学科に対するおおよそのコンセプトは大きく二つに分類された。一つは生物物理的展開であり、もう一つが情報系への志向であった。前者については、その後多少の曲折を経て酪農科のカリキュラム改訂(一九八八年)に折り込まれ、応用生物コースとして実現をみた。

情報系への志向は、急速に展開する情報化社会へ向けて、これに対応できる人材の育成が社会的要請になりつつあったことと、北海道内においては情報に関連する学部、学科が少なかったことからある。

新学科構想は将来計画委員会の下に形成された新学科検討小委員会での討議や文部省との度重なる接渉の過程で骨格は次第に固まりつつあった。すなわち、一般企業を対象とする経営学や管理論あるいは工学的立場からの情報学が単に学科内の教育にとどまらず、全く新しい角度から酪農の科学や実践にも照明を与えるものであることが期待されたのである。

図書、機器備品、建物施設などを中心とする財政面からの計画は、事務局を中心に精力的に進められる一方で、スタッフの構成は北海道大学など多くの大学、短大からの支援で形成されていった。

経営情報学科(定員一〇〇名男女)の第一次申請は一九八八(昭和63)年六月末日、第二次申請は翌一九八九年の七月末日であった。また、スタッフと学科目などの最終調整である補正申請は同年一月上旬に完了し、設置認可の報は同年一二月一五日に届いた。「苦労が多かっただけにクリスマスまでのビツ

グなプレゼントとなった。」(横山節麿)

最初の推薦入試の受付期間はほぼ一〇日間と短いものであったが、予想を超える志願者があり、以後の第一期、第二期学力入試を通過すると志願者は定員の約三倍になった。

主な教育内容は、新たな企業経営についての知識と技術を系統的に学び、さらに経営にとって表裏一体の関係にある情報の収集、整理、伝達など情報の価値の創造のために、コンピュータを軸として実学主義によって学習することにある。これによって、卒業後は企業内で中堅的機能を担い、地域の経済社会に貢献し得る人材の育成を目標としている。

主要な専門教育科目は下記のとおりである。

経営学系科目Ⅱ 経営学総論、企業経済論、日本経営史、協同組合論、経営管理総論、生産管理論、市場調査、管理工学、簿記原理、会计学、経営分析論

経済学系科目Ⅱ 商学総論、経済原論、国際経済論、統計学、北海道開発論、民商法概説、産業心理学、人間関係論

情報学系科目Ⅱ 情報処理論、電子計算機概論、情報数学、情報処理システム、同実習、プログラムミングⅠ、Ⅱ、Ⅲ、同実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ワープロ実習

実務系科目Ⅱ 秘書概論、秘書実務、英語表現法、英会話、国語表現法、総合演習

入学式に先立つ学科会議では次の事項が決定された。

1 一年目にワープロ特別講習を実施する。

- 2 一年後期でコンピュータ特別講習を実施する。
  - 3 就職対策として、初年度から各企業を訪問し、人材育成目標、教育内容などの周知を図る。
  - 4 欠席、遅刻などを厳格にし、礼儀作法についても配慮していく。
- ワープロ特別講習は、ほぼ一〇〇%の学生が受講しており、また常に開放されているコンピュータ室で自主的に練習を重ねる学生も多い。就職対策としての企業訪問も夏期休暇中にすべてが完了する。二年目に入ると、研究や就職活動などを通して、教員と学生とのより深い交流が始まる。特色あるスタッフとの研鑽により、三愛主義をベースとして、忍耐力、創造力、そして意欲あふれる学科の形成のために、総力を傾注してきたが、一九九八(平成10)年募集を停止し、大学の新学部「環境システム学部」の開設と連動しながら定員や学科機能、教員らは移行した。

歴代経営情報学科学科長

横山節磨(一九九〇～九四) 齋藤 暁(一九九五～九八)

授業科目	単位数
経営・会計システム科目群	
会計学	2
品質管理論Ⅱ	2
コンピュータ会計演習	1
原価計算論	2
組織管理論	2
生産システム工学	2
経営分析論	2
情報システム科目群	
情報数学	2
応用プログラミング論	2
応用プログラミング論演習	1
情報システム論	2
情報システム論演習	1
COBOL 言語演習	1
情報システム応用論	2
情報システム応用論演習	1
高度情報技術概論	2
国際ビジネス科目群	
英語Ⅱ	2
英語表現法	2
ビジネス英語	2
英会話Ⅰ	2
英会話Ⅱ	2
国際経済論	2
貿易実務	2

授業科目	単位数	開講学科
他学科受講科目		
植物生態学	2	酪農科
野生動植物	2	酪農科
乳と乳製品	2	教養学科
自然環境論	2	教養学科

- ・他学科受講科目を履修した場合は、修得単位のうち4単位までを共通選択科目群の単位として、卒業資格修得単位数に算入する。
- ・卒業必要単位数 64 単位以上

授業科目	単位数
教養科目	
キリスト教文化論	2
キリスト教文化論Ⅰ	2
英語	2
体育実技	1
文学	2
経済学	2
フランス語	2
数学Ⅰ	2
数学Ⅱ	2
歴史学	2
体育講義	1
法学	2
自然科学概論	2
教養科目または専門科目	
必修科目群	
経済原論	2
簿記原論	2
簿記演習	1
経営学総論	2
品質管理論Ⅰ	2
電子計算機概論	2
経営科学概論	2
ワードプロセッサ演習	1
企業形態論	2
プログラミング論	2
プログラミング論演習	1
経営管理総論	2
総合演習	2
共通選択科目群	
商学総論	2
秘書実務	2
国語表現法	2
マーケティング論	2
統計学	2
産業心理学	2
北海道産業論	2
日本経営史	2
企業経済論	2
協同組合論	2
民法概説	2
卒業研究	2

## 二 短期大学部酪農学科

一九四九（昭和24）年の開学以来、五十余年の伝統を持つ酪農学科（酪農科）は、幾多の試練を克服して、建学の理念の「三愛精神」、「健土健民」、「実学」を堅持し地域のリーダーとして活躍する酪農家や農業関係団体の専門技術者を多数輩出してきた。しかしながら、この十数年間は激動の時代だったと言える。一八歳人口の減少と高校生の短大離れの傾向に加えて、酪農業を取り巻く環境がより厳しさを増して、受験者数が減少してきたために二度の大きな転換期を迎えた。

その第一は、一九九四（平成6）年度にカリキュラムを改訂し、酪農を指さない、生物一般に興味を持つ学生に対応したコースの充実を図ってきた。それ以前も非酪農系の学生に対応するため、酪農科学コースとともに応用生物コースを設けていたが、より魅力的な科目配列で、修学の便を図るために必修科目群の見直しをした。同時に各コースに新設科目を配した新たなカリキュラムをスタートさせたことよって、これまで酪農に偏りがちだった学科教育を、環境、生物工学など学生がより興味を示す分野にも幅を広げ、全国各地からこれまで以上に多くの受験生を集めることができるようになった。

第二の転換期は、このカリキュラムでの新たな教育展開をもってしても、一八歳人口の減少と高校生の短大離れの傾向に歯止めをかけることが難しく、教養学科、経営情報学科の二学科が大学へ改組転換されることに合わせて、本学科も幕を閉じることが学科会議や教授会で話し合われたのである。

これらのことから、理事会は酪農科の定員を五〇名に縮小し、酪農自営者を育成し、かつ学部への編入を可能にする学科へと変身存続することを決定した。

その決定によって応用生物コースは廃止され、酪農自営者養成を主眼としたカリキュラムを編成し、一九九八年度からスタートさせた。

また、本学科の日常の教育研究活動は大学酪農学科と協力して行い、一九九八（平成10）年度から学科会議も合同で開催している。

改組後初めての卒業生の進路を見ると、学部編入する学生は多かったものの、酪農自営者はわずかに六名と一割に過ぎなかった。また、学生の間から履修できる教科目に幅が少なすぎるなどの声が挙がったことから、すべての学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、酪農を中心とした農業を志して入学してきた学生にとっては農業関連の教科が、生物が好きでその学習を志して入学してきた学生にとっては生物関連の教科がそれぞれ中途半端で物足りないという、カリキュラムに対する不満が寄せられた。

これを解決するため、二〇〇一（平成13）年度に大幅なカリキュラムの改訂と単位認定の弾力化を行うとともに、本学の学生が大学の開講科目から単位が取得できるように酪農学部と単位互換協定を締結した。さらに講義およびゼミナールは、大学酪農学科の科目と同じ名称で同じ教員によって行われており、内容は非常に濃く、大学と同等のレベルとなっている。現在、次のゼミナールが置かれている。

動物生産システムⅡ家畜栄養学・家畜繁殖学・家畜管理学・家畜行動学・生物学・家畜飼料学・家畜遺伝学・家畜育種学・環境昆虫学

植物生産システムⅡ土壤植物栄養学・飼料作物学・草地学・農業工学・農業微生物学・植物育種学・資源植物学

環境情報システムⅡ畜産システム工学・酪農天然物化学・教育心理学・微生物利用学・キリスト教学（キリスト教N.G.O論）・食物利用学・酪農経営学

附属農場Ⅱ乳牛飼養学

**附属農場における実習教育** 附属農場で展開される酪農実習は、本学における教育の重要な柱である実学教育の一翼を担っている。

附属農場の経緯Ⅱ附属農場の変遷については他の項でも触れているのでここでは概要について述べておく。酪農学部実習農場の設置は酪農大学の開設と合わせて一九四九（昭和24）年であり、翌五〇年の短期大学の開設に伴って短期大学実習農場が設置された。さらに一九六〇（昭和35）年、大学の開設とともに大学・短期大学実習共同農場の発足となった。しかし、一九六四（昭和39）年、農場再編に伴って酪農学園中央農場が発足し、そのため、大学と短期大学農場に分離され、短期大学は中央農場に再編成されたが、約一〇年を経た一九七三（昭和48）年に再び大学・短期大学附属農場となった。

一九八八（昭和63）年には附属高等学校実習農場と合併（第一牛舎、第二牛舎）され、二〇〇〇（平成12）年には農場の再編により施設が新設（インテリジェント牛舎、バイオガスプラント、バンカーサイロなど）され



酪農学科生によるトウモロコシの播種 (2003.5)

た。  
実習内容Ⅱ附属農場が担当している短期大学の实習科目は、酪農実習Ⅰおよび酪農実習Ⅱ(委託農家実習)である。酪農実習Ⅰは、一九七五(昭和50)年までは中央農場(旧中央農場第二農場、後の附属農場第一牛舎)で展開され、元野幌農場も実習農場として活用されていた。その後学園農場の再編成に伴い大学の实習と同じ場での実習形態になった。

酪農実習Ⅰは、附属農場において、基礎的な農作業を中心に実習することを通して、酪農(農業)への興味を持たせ、初歩技術を学び、研究心と観察力を養うことを目的として、労働作業を主眼においている。実習の内容は、一般実習と特別実習に区分され、二単位で行っている(大学は一単位)。一般実習は圃場管理と牛舎実習からなっている。

圃場管理Ⅱ圃場・牛舎周辺の環境整備、トウモロコシの播種、除草、粗飼料の收穫・調製など

牛舎実習Ⅱ搾乳の実際、乳牛の体格測定、乳牛管理作業など。実習内容は大学の实習とほぼ同じであるが、九八年の入学定員減に伴って隔週実習から毎週実習になり、実習時間数は倍増した。特別実習は、旧来から続けられている早朝牛舎実習などの集中実習である。早朝実習は、五時三〇分からの搾乳実習が一週間継続して行われる。

歴代酪農学科（酪農科）学科長

横山節磨（一九八五～八八） 土橋慶吉（一九八九～九二） 市川 舜（一九九三～九六）

水野直治（一九九七～二〇〇二） 佐々木均（二〇〇三～）

取得資格など

〔取得資格〕家畜人工授精師（講習会合格の場合）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位を修得した者）

〔受験資格〕毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）、農業改良普及員（卒業後二年以上の実務経験者）

授業科目	単位数
家畜育種・繁殖学実習	1
家畜衛生学実習	1
酪農施設・機械学実習	1
酪農情報処理演習	1
畜産物利用学実習	1
海外実習	4
<b>関連科目</b>	
酪農場の微生物学	2
園芸学	2
作物保護学	2
ガーデニング	2
バイオテクノロジー	2
暮らしのサイエンス	2
農業協同組合論	2
生産物マーケティング論	2
<b>総合科目</b>	
総合演習	1
酪農演習	1
演習Ⅰ	1
演習Ⅱ	1
特別実習Ⅰ(技能)	1
特別実習Ⅱ(技術)	1
卒業研究	4
<b>自由科目</b>	
他大学等互換科目	
計	110

酪農学科

科目	卒業必要単位数
教養科目	12単位
専門科目	28単位
実験実習科目	9単位
関連科目	6単位
総合科目	4単位
自由科目	
合計	65単位以上

各々の科目区分の卒業に要する最低修得単位数を満たし、かつ合計単位数に不足する6単位をいずれかの科目区分から修得しなければならない。

授業科目	単位数
<b>教養科目</b>	
キリスト教文化論	1
基礎英話	1
酪農英話	2
コミュニケーション・イングリッシュⅠ	2
コミュニケーション・イングリッシュⅡ	1
体育実技	1
健康管理学	2
生物物理学	2
生物化学実験	1
畜産化学実験	2
コンピュータ演習	1
農村社会学	2
経済社会学	2
政治学	2
教統計学	2
<b>専門科目</b>	
酪農概論	2
酪農経営マネジメント	2
酪農経営論	2
農場管理の新戦略	2
作物栽培学	2
作物生理学	2
土壌・植物栄養学	2
草地・飼料作物学	2
酪農施設・機械学	2
反芻家畜生理学	2
家畜管理理学	2
家畜栄養学	2
家畜育种学	2
家畜繁殖学	2
家畜解剖学	2
家畜衛生学	2
酪農環境論	2
畜産物利用学	2
<b>実験実習科目</b>	
酪農実習Ⅰ	2
酪農実習Ⅱ	4
土壌植物栄養学実験	1
草地・飼料作物学実習	1
家畜飼養管理学実習	1

短期大学部 酪農学科 (単位の太字数字は必修単位数)

第三章 酪農学園大学短期大学部

		歴代酪農学園大学短期大学部(旧・酪農学園短期大学、北海道文理科短期大学)学長									
初代	副学長	樋浦 誠	一九四九・四・一	一九六三・一二・七							
第二代		黒澤 西蔵	一九六三・一二・七	一九六六・三・三一							
第三代		佐藤 貢	一九六六・四・一	一九六九・一二・一四							
事務取扱		橋本 吉雄	一九六九・一二・一四	一九七〇・三・一八							
第四代		橋本 吉雄	一九七〇・三・一八	一九七一・一・三							
事務取扱		桜井 豊	一九七一・一・四	一九七一・一・七							
事務取扱		遊佐 孝五	一九七一・一・七	一九七一・二・二四							
事務取扱		高杉 成道	一九七一・二・二四	一九七一・六・一八							
事務取扱		沼田 芳明	一九七一・六・一八	一九七一・一二・三							
事務取扱		中曾根 徳二	一九七一・一二・三	一九七一・一二・二三							
事務取扱		土橋 慶吉	一九七一・一二・二三	一九七三・三・三一							
事務取扱		久米 小十郎	一九七三・三・三一	一九七三・七・六							
第五代		遊佐 孝五	一九七三・七・六	一九八五・三・三一							
第六代		牛島 純一	一九八五・四・一	一九八九・三・三一							
第七代		坂本 与市	一九八九・四・一	一九九七・三・三一							
第八代		安宅 一夫	一九九七・四・一	現在							
初代		黒澤 亮助	一九六三・一二・七	一九六八・三・二三							
第二代		橋本 吉雄	一九六八・三・二四	一九七〇・三・一八							

卒業生の動向（最近5カ年） 短期大学部

学 科 別	年 度	卒業者数	進 路 状 況				
			就 職	自 営	進 学	実 習	その他
酪 農 学 科	1998	153	29	24	44	6	50
	1999	58	12	9	16	6	15
	2000	61	14	9	18	6	14
	2001	60	12	8	17	6	17
	2002	65	19	10	22	2	12
教 養 学 科	1998	108	34	0	6	1	67
経 営 情 報 学 科	1998	120	41	11	10	1	57

卒業生の動向 一九九八年度、改組により教養学科・経営情報学科が廃止され、同時に酪農学科も定員を縮小した。この結果、二〇〇二年度の卒業生は六五名となり、卒業後の進路は就職する学生よりも進学・自営の割合が多い。

第三章 酪農学園大学短期大学部

酪農学科（酪農科1コース）募集定員の（ ）付数字は2コースと合算したもの						学生数の推移
年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数	
1949（昭和24）	30	—	39	—	—	
1950（同25）	30	—	40	—	16	
1951（同26）	30	—	44	—	30	
1952（同27）	30	—	44	—	37	
1953（同28）	30	—	55	—	36	
1954（同29）	30	—	86	134	47	
1955（同30）	30	—	56	131	59	
1956（同31）	30	—	60	105	46	
1957（同32）	30	—	62	102	59	
1958（同33）	30	—	100	148	55	
1959（同34）	30	—	100	186	91	
1960（同35）	30	—	63	157	78	
1961（同36）	30	—	116	180	55	
1962（同37）	50	—	62	166	92	
1963（同38）	50	—	60	125	54	
1964（同39）	(50)	—	31	94	54	
1965（同40）	(50)	—	58	95	25	
1966（同41）	(50)	171	73	137	46	
1967（同42）	(50)	114	79	159	67	
1968（同43）	(50)	149	108	186	78	
1969（同44）	(50)	156	107	210	88	
1970（同45）	(50)	146	95	198	83	
1971（同46）	(50)	104	98	207	85	
1972（同47）	(50)	78	71	184	79	
1973（同48）	(50)	72	91	180	59	
1974（同49）	(150)	119	107	211	74	
1975（同50）	(150)	120	124	248	100	
1976（同51）	(150)	207	145	282	115	
1977（同52）	(150)	220	149	296	119	
1978（同53）	(150)	353	162	327	138	
1979（同54）	(150)	251	147	314	152	
1980（同55）	(150)	230	146	304	143	
1981（同56）	70	230	143	293	136	
1982（同57）	100	240	192	290	143	
1983（同58）	150	261	186	291	115	
1984（同59）	150	270	167	331	129	
1985（同60）	150	319	166	348	160	
1986（同61）	150	326	189	354	136	
1987（同62）	150	305	172	374	177	

酪農学科（酪農科1コース）（つづき）

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1988（昭和63）	150	299	167	350	161
1989（平成1）	150	307	162	337	146
1990（同2）	150	310	164	335	154
1991（同3）	140	352	160	325	150
1992（同4）	140	364	160	325	145
1993（同5）	140	332	163	331	145
1994（同6）	140	360	162	332	144
1995（同7）	140	358	164	342	158
1996（同8）	140	513	160	334	157
1997（同9）	140	588	160	329	163
1998（同10）	140	280	63	224	153
1999（同11）	50	223	64	127	58
2000（同12）	50	142	63	127	61
2001（同13）	50	140	71	136	60
2002（同14）	50	112	66	138	65
2003（同15）	50	96	67	133	
計	—	—	—	—	5,176

酪農学科（酪農科2コース）

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1964（昭和39）	—	—	111	111	—
1965（同40）	—	—	105	196	—
1966（同41）		123	114	286	77
1967（同42）		113	101	297	95
1968（同43）		123	107	306	93
1969（同44）		178	115	314	81
1970（同45）		144	116	313	86
1971（同46）		110	98	306	85
1972（同47）		89	79	285	93
1973（同48）		86	83	264	79
1974（同49）		97	90	237	57
1975（同50）		82	79	254	64
1976（同51）		124	94	261	83
1977（同52）		180	136	296	62
1978（同53）		169	124	331	75
1979（同54）		171	121	351	93
1980（同55）		102	77	309	105
1981（同56）	80	96	74	264	95

### 第三章 酪農学園大学短期大学部

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1982 (昭和 57)	50	—	50	199	71
1983 (同 58)	—	—	37	149	58
1984 (同 59)	—	—	—	80	42
1985 (同 60)	—	—	—	34	34
計	—	—	—	—	1,528

#### 製造科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1962 (昭和 37)	50	—	51	51	—
1963 (同 38)	50	—	39	95	45
1964 (同 39)	—	—	32	78	38
1965 (同 40)	—	—	—	30	28
計	—	—	—	—	111

#### 教養学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1985 (昭和 60)	—	124	73	73	—
1986 (同 61)	100	163	99	169	69
1987 (同 62)	100	167	104	199	92
1988 (同 63)	100	159	109	212	96
1989 (平成 1)	100	173	112	223	109
1990 (同 2)	100	290	127	241	101
1991 (同 3)	90	252	114	248	125
1992 (同 4)	90	277	112	230	113
1993 (同 5)	90	460	124	235	107
1994 (同 6)	90	403	102	224	121
1995 (同 7)	90	237	106	208	97
1996 (同 8)	90	188	83	190	105
1997 (同 9)	90	226	117	196	74
1998 (同 10)	—	—	—	110	108
計	—	—	—	—	1,317

経営情報学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1990 (平成 2)	100	298	113	113	—
1991 (同 3)	100	396	117	229	103
1992 (同 4)	100	507	118	237	114
1993 (同 5)	100	513	124	241	109
1994 (同 6)	100	431	127	250	107
1995 (同 7)	100	357	139	275	126
1996 (同 8)	100	314	124	262	119
1997 (同 9)	100	328	125	258	119
1998 (同 10)	—	—	—	123	120
計	—	—	—	—	917

第三章 酪農学園大学短期大学部

短期大学部教職員数の推移

1950（昭和25）年度～1980（昭和55）年度

年 度	本 務							兼 務			合計
	学長	教授	助教授	講師	助手	職員	計	教員	職員	計	
1950（昭和25）	1	3	1	5	9	12	31	—	—	—	31
1951（同26）	1	3	2	4	9	11	31	—	—	—	31
1952（同27）	1	2	7	1	11	17	39	—	—	—	39
1953（同28）	1	2	5	3	11	17	39	—	—	—	39
1954（同29）	1	3	2	4	6	26	42	3	—	3	45
1955（同30）	1	3	4	4	6	5	23	9	—	9	32
1956（同31）	1	3	3	5	10	23	45	5	—	5	50
1957（同32）	1	3	2	6	8	4	24	5	—	5	29
1958（同33）	1	3	3	9	14	13	43	4	1	5	48
1959（同34）	1	3	3	9	14	13	43	4	1	5	48
1960（同35）	1	3	2	7	8	12	32	1	1	2	34
1961（同36）	1	4	2	8	9	10	33	13	—	13	46
1962（同37）	1	6	2	11	5	13	37	11	19	30	67
1963（同38）	1	13	—	17	6	11	47	36	22	58	105
1964（同39）	1	8	2	7	—	7	24	23	22	45	69
1965（同40）	1	3	1	5	—	6	16	21	—	21	37
1966（同41）	1	3	—	5	—	9	18	28	—	28	46
1967（同42）	1	4	—	5	—	9	18	8	—	8	26
1968（同43）	1	3	—	6	—	11	20	23	—	23	43
1969（同44）	1	4	2	5	—	12	24	27	—	27	51
1970（同45）	1	4	3	4	1	18	31	25	—	25	56
1971（同46）	—	8	4	3	2	20	37	30	16	46	83
1972（同47）	—	8	4	3	2	20	37	25	32	57	94
1973（同48）	—	9	3	4	1	21	38	35	41	76	114
1974（同49）	1	7	3	4	2	16	33	37	61	98	131
1975（同50）	1	6	2	5	3	16	33	40	75	115	148
1976（同51）	1	6	3	4	4	16	34	46	82	128	162
1977（同52）	1	6	3	4	3	16	33	51	80	131	164
1978（同53）	1	6	3	4	2	18	34	53	85	138	172
1979（同54）	1	5	3	4	3	17	33	54	88	142	175
1980（同55）	1	5	3	4	4	18	35	53	86	139	174

短期大学部教職員数の推移（つづき）

1981（昭和56）年度～2003（平成15）年度

年 度	学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	職 員	計
1981（昭和56）	(1)	5	5	4	3	18	35
1982（同 57）	(1)	4	4	5	2	18	33
1983（同 58）	(1)	4	5	5	2	18	34
1984（同 59）	(1)	7	4	5	1	17	34
1985（同 60）	(1)	10	6	6	1	14	37
1986（同 61）	(1)	12	6	7	1	13	39
1987（同 62）	(1)	6	6	8	1	12	33
1988（同 63）	(1)	9	6	8	1	13	37
1989（平成 1）	1	11	7	5	1	13	38
1990（同 2）	1	16	9	7	1	13	47
1991（同 3）	1	17	10	6	0	15	49
1992（同 4）	1	15	11	5	0	13	45
1993（同 5）	1	16	13	3	0	12	45
1994（同 6）	1	15	14	4	0	10	44
1995（同 7）	1	16	12	4	0	9	42
1996（同 8）	1	14	13	3	0	11	42
1997（同 9）	(1)	13	14	2	0	11	40
1998（同 10）	(1)	12	13	2	0	9	36
1999（同 11）	(1)	4	5	1	0	3	13
2000（同 12）	(1)	4	5	1	0	3	13
2001（同 13）	1	4	5	1	0	3	13
2002（同 14）	1	6	3	1	0	3	13
2003（同 15）	1	5	3	2	0	3	13



## 第四章 酪農学園大学

酪農学園大学の開設の経緯については第一部で記し、その教育内容については『学園史一』に詳述されているのでここでは三学部・七学科設置過程や現在の教育組織の体制および施設設備の概要を記すことにする。

**教育組織の変容** わが国唯一の酪農専門大学である本学は、一九三三（昭和8）年をもって始まる

酪農学園の歴史の中で、酪農教育の集大成、酪農学研究のメッカとして一九六〇（昭和35）年開学した。開学時には、酪農学部酪農学科を擁するのみであった本学も、その後一九六三（昭和38）年には農業経済学科を開設、翌一九六四年には獣医学科を開設した。一九七五（昭和50）年には大学院獣医学研究科「修士課程」を開設し、一九八一（昭和56）年には大学院獣医学研究科「博士課程」ならびに酪農学研究科「修士課程」、一九九一（平成3）年には、酪農学研究科「食生産利用科学専攻博士課程」を設置した。

一九八八（昭和63）年四月より食品産業における技術革新と高度専門化に対応するため、豊かな専門知識と専門技術を兼ね備えた人材を養成することを目的として食品科学科（二〇〇一年四月より食品科学専攻、健康栄養学専攻の二専攻）を設置した。一九九四（平成6）年四月には食品産業界の新しい変化と拡大に対応できる研究開発と人材の養成を目的とした食品流通学科を新設した。

また、一九九五（平成7）年四月より酪農学研究科に新たな修士課程を開設した。翌九六年四月より獣医専門分野の教育研究の高度化および多様化した社会的要請に対応することを目的として酪農学部獣医学科を獣医学部獣医学科に改組転換し、初めて複数学部による教育運営を進めた。次いで一九九八（平成10）年四月より、環境保全社会形成の上で、健全な地域の中堅・中小企業の発展と地域社会の活性化とその担い手の創造を目的とした環境システム学部経営環境学科および地域環境学科を開設し、三学部による教育体制とした。

さらに二〇〇三年度からは生活習慣病に対する食の重要性が問われ、機能性の高い食品開発や成分と健康とのかかわりにこたえられる分野として酪農学研究科に食品栄養科学専攻「修士・博士課程」を新設し、今日に至っている。これらの学部学科の新増設、改組転換と併せてスタッフ・施設なども漸次増強整備しつつ、それぞれが個別専門分野の教育研究を推進している。

なお、一般教養課程を担う教養科は一九六三（昭38）年に農業経済学科と共に開設された。開設初期は特に学生の学力向上に主眼を置き、その後スタッフ・カリキュラムも充実し、人文科学・社会科学・自然科学三分野、語学、体育の諸領域に全学共通の教育を担ってきたが、一九九一年大学設置基準の大綱化により改組転換が図られ、学部の充実・学部の新設・増設に伴い一九九八年をもってその幕を閉じた。

このように開学以来幾多の変遷をたどってきたが、教育理念は一貫してキリスト教の精神によって人間教育を行い健土健民の思想に基づいた真理を科学的・実的に追求し、もって、神を愛し、人を

愛し、土を愛する三愛の精神に徹する社会的に有為な人材を養成することを目的とし、わが国唯一の酪農専門教育を担う高等教育機関として社会の要請にこたえ、酪農を中心とした農学・食品科学・経済学・獣医学の教育を通して人材育成に大きな成果と使命を果たしてきた。

本学志願者は開学以来全国都道府県にくまなく分布している。一九九〇（平成２）年四月には予想を上回る志願者の大幅な増大、国際化時代を迎えた酪農における高生産安定経営の確立、食品産業界の量から質への生産転換など、時代の変化と諸課題解決に対応するため、期間を付した入学定員増加の措置を行うことよって志願者の要望にこたえらるとともに、教育研究の充実向上を図り、酪農科学領域の諸課題解決、発展に貢献してきた（酪農学科・農業経済学科・食品科学科 計一一〇名定員増、二〇〇〇年廃止、五五名恒常定員化）。

**教育サービスの強化** 教育体制の整備が進む中、一九九三年三月には、大学設置の理念・目的に即した特色ある教育研究水準の一層の充実向上と、これらを支える管理運営などの活性化を図るため、教育活動、研究活動、管理運営の各領域にわたり、総合的、体系的にその現状と課題を把握し、酪農学園大学自己点検・評価報告書第一号をまとめた。その後、各学部においても教育・研究推進のため学生の授業評価、外部評価を含む自己点検報告書がまとめられ、FD（授業方法の改善）の開発研究をはじめ、授業改善のさまざまな試みと教育力の向上に真剣な努力が続けられている一方、他学科開講科目の受講、他大学との単位互換協定などを結び、教育内容の充実に努めている。

またこれら教育運営・組織の変化に対応し、教育活動を支え、学生への教育サービス機能の向上を

図るため、一九九五（平成7）年四月には、学務関係事務組織を入試部（入試課）・就職部（就職課）・教務部（教務課、学務課）・学生部（学生課）の四部五課に改組し、学科周辺事務を再編して学務事務組織との連携を強化した。学務関係事務組織は一九九八（平成10）年に中央館に移転した図書館の跡（学生サービスセンターと改称）に移った。その後、事務組織の点検が行われ、二〇〇一（平成13）年に学部・学科事務と大学・短大の総括事務の強化を目的として学務部学務課と学務部学事課が設置された。

情報化教育の進展と事務能率向上のために一九九七（平成9）年に学内LANが構築され、当初企画推進部の所管であったが、企画推進部閉鎖に伴い学務部に移され、二〇〇三（平成15）年から図書館業務となっている。

**施設設備の整備** さらに本学の特色ある教育研究内容を生かし、積極的な外部資金の導入にも力を注ぎ、学外からの委託研究のほか、文科省の学術研究高度化推進（補助）事業に応募して一九九八（平成10）年大学院獣医学研究科「家畜の感染症、生産病の分子・遺伝子レベルでの病態解析と診断・治療法の開発」（学術フロンティア）、一九九九（平成11）年大学院酪農学研究科「酪農における情報と物質リサイクルシステムの開発研究」（ハイテクリサーチセンター事業）、一九九三（平成5）年大学院獣医学研究科「環境汚染物質・感染病原体分析監視システムの開発研究」（ハイテクリサーチセンター事業）などが採択され、活発な先端的研究活動が展開され、これに伴い施設設備も次第に充実してきた。

教育環境の整備は、年次計画に従い実施されているが、遅れていた学生のキャンパス生活の充実や課外活動向上のための施設なども年を追って逐次整備されるようになった。キャンパス生活の充実につ

いては中央館一、二階ロビーの設置や全学的な喫煙室の設置による分煙システムの確立が挙げられる。課外活動については部室棟の改修、学生合宿所の建設、中央館に学生ホールの付設、弓道場新設のほか、格技・サークル会館（仮称）が建設中で、充実した学生生活が送れるよう配慮している。

なお、一九八九（平成1）年から実施した主要な教育計画とこれに伴う施設設備の整備状況は、次のとおりである。

一九八九（平成1）年	四月	大学院獣医学研究科獣医学専攻博士課程設置	獣医四号館建設
一九九〇（平成2）年	四月	酪農学部臨時定員増実施	附属農場研究棟建設 食品加工実習室建設
一九九一（平成3）年	四月	大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻博士課程設置	
一九九二（平成4）年	八月	大動物臨床センター建設	
一九九三（平成5）年	八月	獣医実験動物施設設置	
一九九四（平成6）年	四月	酪農学部食品流通学科設置	食品流通館建設
	一二月		学生課外活動部屋改修
一九九五（平成7）年	四月	大学院酪農学研究科修士課程増設	
		学務関係事務組織改組	
一九九六（平成8）年	四月	獣医学部設置	学生合宿所建設
一九九七（平成9）年	九月	学内LAN構築	
一九九八（平成10）年	四月	環境システム学部設置	中央館建設、RI実験研究棟増築

一九九九（平成11）年 四月 附属農場再編

インテリジェント牛舎着工  
（二〇〇一年一〇月建設完了）

二〇〇〇（平成12）年 四月

酪農学部食品科学科に食品科学専攻・  
健康栄養学専攻設置

二〇〇三（平成15）年 四月

大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻  
修士博士課程設置

中央講義棟建設  
研修館建設

附属家畜病院（仮称・建設中）  
格技・サークル会館（仮称・建設中）

歴代酪農学園大学学長

初代	樋浦 誠	一九六〇・四・一	一九六四・三・三一
第二代	黒澤 酉蔵	一九六四・四・一	一九六六・三・三一
第三代	佐藤 貢	一九六六・四・一	一九六九・二・一四
事務取扱	橋本 吉雄	一九六九・二・一四	一九七〇・四・七
第四代	橋本 吉雄	一九七〇・四・七	一九七二・一・三
事務取扱	桜井 豊	一九七二・一・七	一九七二・一・七
事務取扱	遊佐 孝五	一九七二・一・七	一九七二・二・二四
事務取扱	高杉 成道	一九七二・二・二四	一九七二・六・一八
事務取扱	遊佐 孝五	一九七二・六・一八	一九七二・二・三
事務取扱	桜井 孝五	一九七二・二・三	一九七二・二・二三
事務取扱	久米 小十郎	一九七二・二・二三	一九七二・三・三一

事務取扱	牛島純一	一九七二・四・一	一九七三・三・三一
事務取扱	久米小十郎	一九七三・三・三一	一九七三・七・六
第五代	遊佐孝五	一九七三・七・六	一九八五・三・三一
第六代	牛島純一	一九八五・四・一	一九八九・三・三一
第七代	平尾和義	一九八九・四・一	一九九七・三・三一
第八代	安宅一夫	一九九七・四・一	二〇〇一・三・三一
第九代	大谷俊昭	二〇〇一・四・一	一〇現在
副学長			
初代	黒澤亮助	一九六三・二・七	一九六八・三・二三
第二代	橋本吉雄	一九六八・三・二四	一九七〇・三・一八

歴代宗教主任

神塚アーサー	(一九六〇～六六)	小沢一雄	(一九六七)	管井大果	(一九六八)	神塚アーサー	(一九六九)
山畑勝美	(一九七〇～八九)	菅沼英二	(事務取扱)	(一九九〇)	菅沼英二	(一九九一～九二)	
山口博	(一九九三～〇〇)	高橋一	(二〇〇一～)				

歴代教養科科长

高見稔	(一九六三～六四)	山下勝	(一九六五～六六)	池田実	(一九六七)	川村健弥	(一九六八～七四)
菅沼英二	(一九七五～八〇)	川村健弥	(一九八一～八八)	九津見明	(一九八九～九二)		
太田一男	(一九九三～九四)	加藤勲	(一九九五～九七)				

## 一 酪農学部

一九六〇（昭和35）年酪農学部酪農学科が開設され、今年で四三年の歳月を経た。この間、一九六三（昭和38）年に農業経済学科、一九六四（昭和39）年に獣医学科が増設された。それから約二〇年間、大卒は基礎づくりと経済的安定を図らなければならない忍耐の時期が続いた。その後ようやく第二期の発展期を迎えることができ、酪農学を体系的にも完成させ、発展する経済と複雑化する社会の要求にこたえるために、一九八八（昭和63）年に食品科学科、続いて一九九四（平成6）年に食品流通学科をわが国で初めて設置した。食品流通学科の完成年度を迎える時に、酪農学部の教育・研究理念と、目標を次のように再構築した。

酪農学部の教育・研究理念は「三愛精神」と「健土健民」の思想を基本とし、酪農、食システムの科学と実際を研究・教育することにより、健全な人間の養成を図り、経済社会の発展と人類の福祉の向上に寄与すること、とした。さらにこの理念を実現するために、本学部の教育・研究目標を自然環境の保全と生物資源の循環・再生、食料の生産・加工、流通・消費にかかわる専門分野において自然科学と社会科学が有機的に結合する総合学科として体系付けられた学部であり、その教育・研究理念の具現化のために次の四つの目標を明快に掲げている。

一・酪農学、農業経済学、食品科学、食品流通学を通ずる学際的教育・研究により酪農、食システムの持続的、安定的発展に努める。二・幅広く深い教養と専門的知識および総合的な判断力を培い、

健全で人間性豊かな人材を育成する。三、実学教育により、国際的・地域的視野に立つて行動できる創造的かつ実践的人材を育成する。四、環境の変化に即し、組織的対応を通じて地域経済社会の発展に貢献する、としている。

歴代酪農学部学部長

安宅一夫（一九九六） 鮫島邦彦（一九九七～〇二） 岡本全弘（二〇〇三～）

(1) 酪農学科 一九六〇（昭和35）年四月、一八〇名の新入生を迎えてスタートした酪農学科は、校舎、施設などに不備な点は多かったが、同年九月、鉄筋三階建の校舎（現第一校舎）をはじめ、その後多くの施設を整備するなど、関係者の努力によって、今日の大学を確立することができた。また、教育、研究のスタッフも、幸いに短期大学との兼任により、研究室の大学移行もスムーズに行われた。この酪農学園大学の開学と同時に設置された酪農学科の目的、使命は大学の目的、使命そのものである。

酪農学科は酪農に関する諸生産科学の研究・教育を主眼に設置されたもので、その責任を果たすため、土壌の科学、飼料作物の栽培、家畜の飼養管理、乳肉製品の科学、さらに、酪農微生物や酪農機械学から酪農経営に至る幅広い分野にわたり、酪農科学の教育、研究に努めてきた。

この間幾度もカリキュラムの改訂を行ってきたが、最も大きな改訂は、一九八八（昭和63）年食品科

学コースを発展させた食品科学科が開設され、乳製品製造学研究室、肉製品製造学研究室、食品栄養化学研究室および農業微生物学研究室の四研究室の移行に伴うものであった。

その後も社会状況に合わせて変化してきたが、本学科が普遍の目的としているのは人間と土・草・牛を主題とする酪農専門の教育研究機関であることである。特に酪農の実際を生かし、科学的に探求する実学教育を通じて、生命ある地球に有為な健土・環境の再生養成と、それを担う人材・健民の養成を目的としている。

現在、本学科は動物生産、植物生産および環境情報の三つの専門科学コースを設けている。

動物生産科学コース⇨酪農場の乳牛を中心に、肉牛および中小の動物(家畜)生産に関する科学と技術、特にその栄養と飼料、生理、育種、繁殖、行動と管理、動物保護と福祉および酪農の生産物である乳肉の利用法などの研究と人材教育を進めている。

植物生産科学コース⇨特に食糧飼料生産の基盤である土壌・草地と水の理化学、家畜ふん尿の利用、作物・植物の栽培、その栄養と生理、病理と昆虫、作物の育種と植物バイオテクノロジーおよび農業機械などの研究と人材教育を進めている。

環境情報科学コース⇨酪農場の生命体を地球環境のモデルとして、文化と文明の吟味、特に人間の食糧、健康、生産緑地、農村と都市、海洋河川湖沼や森林などの環境の再生養成、酪農を題材とする経営および情報処理などの研究と人材教育を進めている。

また、現在は次の二四の専攻を置いている。

家畜栄養学、家畜飼料学、家畜繁殖学、家畜管理学、家畜行動学、農業微生物学、家畜遺伝学、家畜育種学、乳牛飼養学、土壤植物栄養学、飼料作物学、草地学、農業工学、植物育種学、食物利用学、畜産システム工学、環境昆虫学、微生物利用学、生物学、酪農天然物化学、教育心理学、キリスト教学（キリスト教NGO論）、資源植物学、酪農経営学

このように酪農学科は設置以来四四年間にわたり、既に四〇期七、六二〇名の卒業生を社会に送ったが、これらの卒業生は、酪農自営者として、あるいは酪農関係の官公庁や団体、さらに、飼料、乳製品、食品、畜産関係の諸会社および高校、中学の教師として全国にわたって活躍している。

#### 歴代酪農学科科長

高杉成道（一九六三～六六） 遊佐孝五（一九六七～七三） 松井幸夫（一九七四～七六）  
原田 勇（一九七七～八〇） 平尾和義（一九八一～八四） 榑崎 昇（一九八五～八八）  
堀内一男（一九八九～九二） 榑崎 昇（一九九三～九四） 安宅一夫（一九九五） 川上克己（一九九六～〇〇）  
小山久一（二〇〇一～）

#### 取得資格など

〔取得資格〕高等学校教諭一種（理科・農業）、中学校教諭一種（理科）、食品衛生責任者、家畜人工授精師、学芸員（放送大学との単位互換性に基づく必要単位取得者）

〔受験資格〕農業改良普及員、毒物劇物取扱責任者（一般・農業用）

〔任用資格〕食品衛生管理者、食品衛生監視員、飼料製造管理者

授 業 科 目	単位数
ドイツ語 I	2
ドイツ語 II	2
ドイツ語 III	2
ドイツ語 IV	2
フランス語 I	2
フランス語 II	2
フランス語 III	2
フランス語 IV	2
中国語 I	2
中国語 II	2
中国語 III	2
中国語 IV	2
日本語 I (外国人留学生対象科目)	2
日本語 II (外国人留学生対象科目)	2
<b>第二類 (専門基礎および関連科目等)</b>	
第一群	
無機化学	2
有機化学	2
生物化学	1
分子生物学	2
天然物化学	2
微生物学	2
微生物学実験	1
第二群	
分析化学 I	2
分析化学 II	2
機器分析学 I	2
機器分析学 II	2
食品化学	2
食品微生物学	2
食品製造学	2
公衆衛生学	2
環境衛生学	2
環境昆虫学	2
植物栄養学	2
植物栄養学実験	1
植物病理学	2
植物病理学実験	1
応用昆蟲学	2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教 養 科 目)</b>	
第一群	
キリスト教神学 I	1
キリスト教神学 II	1
キリスト教神学 III	1
キリスト教神学 IV	1
歴史社会学	2
社会学	2
哲学	2
政治学	2
経済学	2
心理学	2
文学	2
第二群	
微積分	2
線形代数	2
統計学 I	2
統計学 II	2
生物物理学 A	2
生物物理学 B	2
生物物理学実験	1
化学実験 I	2
化学実験 II	2
化学実験 I	2
化学実験 II	2
物理化学 I	2
物理化学 II	2
第三群	
体育実技 I	1
体育実技 II	1
体育実技 III	1
運動実技	2
第四群	
英語 I	2
英語 II	2
英語 III	2
英語 IV	2
英文学	2
英文学実験	2
英語演習 I	1
英語演習 II	1

酪農学部 酪農学科 (単位数の太字は必修単位数)

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
家畜飼料学	2
家畜疾病学	2
家畜衛生学	2
家畜衛生学実験	1
乳肉利用学	2
乳肉利用学実習	1
海外酪農実習	2
反芻家畜学	2
養豚学	2
家禽学	2
第二群	
飼料作物学各論	2
草作物地学	2
作物栽培学	2
作物栽培学各論	2
植物バイオテクノロジー論	2
作物育種学実験	1
植物生理学	2
環境気象学	2
実験計画法	2
泌乳牛生理学	2
動物行動学	2
酪農場生産技術論	2
家畜繁殖学各論	2
精子・卵子論	2
環境伝学	2
農業機械学	2
農業機械学実習	1
酪農機械学	2
畜産環境化学	2
農簿記・経済学	2
簿記・社会学	2
コンピュータ利用論	2
コンピュータ演習	1
酪農情報処理演習	1
農畜産物市場論	2
農業協同組合論	2
酪農計画論	2
第四類(綜合科目)	

授 業 科 目	単位数
応用昆虫学実験	1
園芸学汎論	2
日本国憲法	2
社会教育学	2
生活健康学	2
健康管理学	2
食物栄養学	2
食物栄養学実習	1
食品保存学	2
微生物利用学	2
物理学通論	2
物理学通論実験	1
生物学通論	2
生物学通論実験	1
地学通論	2
地学通論実験	1
化学通論	1
第三類(専門科目)	
第一群	
酪農概論	2
酪農科学概論	2
酪農実習Ⅰ	1
酪農綜合基礎実験	1
酪農実習Ⅱ	4
酪農経営学	2
農業工学	2
農業工学実験	1
土壌学	2
飼料作物学	2
飼料作物学実験	1
家畜育種学	2
家畜育種学実験	1
家畜繁殖学	2
家畜繁殖学実験	1
家畜管理学	2
家畜管理学実習	1
家畜栄養学	2
家畜栄養学実験	1
家畜解剖学	2
家畜解剖学実験	1
家畜生理学	2
家畜生理学実験	1

授 業 科 目	単位数
演 習 I	1
演 習 II	1
演 習 III	1
卒 業 論 文	4
<b>第五類 (自 由 科 目)</b>	
他 学 部 他 学 科 科 目	
他 大 学 等 互 換 科 目	
<b>第六類 (資 格 関 連 科 目)</b>	
職 業 指 導 I	2
職 業 指 導 II	2
博 物 館 各 論 I	2
博 物 館 各 論 II	2
博 物 館 実 習	3

授業科目	必修 単位数	選 択 単位数	単位数 合 計
計	63	235	298
科 目	卒業必要 単 位 数		
第一類 (教養科目)	38 単位		
第二類 (専門基礎 および関連科目等)	14 単位		
第三類 (専門科目)	50 単位		
第四類 (総合科目)	3 単位		
第五類 (自由科目)			
合 計	132 単位以上		

※ 第一類から第四類までの卒業に要する最低修得単位数を満たし、かつ、合計単位数に不足する 27 単位を第一類から第五類より修得しなければならない。

※ 教職に関する科目(各学科共通)は 299 頁に掲載。

(2) 農業経済学科

大学における酪農の諸科学は、従来生産技術的側面からの研究を主流として推し進められてきたが、これに社会科学の側面からの研究・教育を加えようというのが、農業経済学科の開設であった。本学で二番目に古い本学科の開設までの経過は、一九六二(昭和37)年七月一六日の学園理事会においてその設置が決定し、続いて九月二九日「酪農学園大学酪農学部農業経済学科増設に関する協議書」を文部大臣あてに提出した。

協議書の骨子は① 農業基本法の制定に基づき農業構造が進められようとしている現況において、新しい農業指導者の養成が国家的要請となっている。② 学科開設時期一九六三年四月一日。③ 定員一

〇〇名(総定員四〇〇名)で、短期大学卒業生の編入学希望者のため、一学年のみでなく二、三学年の同時開設を要請した。

一二月二〇日この設置が承認され一九六三(昭和38)年四月開講したが、新入生は一学年一〇八名、三学年二八名の計一三六名であった。

農業経済学学科では、国家の永続的発展の基礎は農業にあるという観点に立つて、農業を基礎とした国民経済の在り方、および日本の農業の健全な発展にとつての酪農・畜産の意義づけを行うことを目的として開設されたが、現在はその根本においては同じだが、「都市と農村の調和を求めて」をキャッチフレーズに、国民経済と日本農業について正しい理解を持ち、的確に問題を解決できる判断力と深い知識を身につけた、意欲的で行動力のある農業・農村のリーダーや今日の市場経済の担い手となる若者の育成を使命としている。今日、緊急課題とされている人口問題、食糧危機、農業環境問題なども、本学科の大きなテーマであり、農業経済学の体系的修得はもちろん、農業経済学を手がかりに、社会の全容を認識する能力をも培っている。

本学科はゼミ形式の教育を重視する方針から、全学生が二年次の基礎演習を経た後、三年次からゼミナール(研究室)に所属する。一つのゼミナールに所属するのは約一二名で、仲間や担当教員とともにコミュニケーションを深め、協力し合い、学外調査など関心のある分野をより深く探求していく方法である。

現在、学生全員が所属する一四の研究室は、その専門性や学ぶ分野によって二つのコースに分かれ

ており、将来の進路を見据え、志望の職種をより確実なものにするために、より高い専門性を身に付けるためである。

農業・農政コース（Aコース）は農業生産・農業経営・農業政策にかかわる学習をより専門的に追求し、地域のリーダー（営農、改良普及員、公務員、教員など）を目指す。Ⅱ農村計画論研究室、農業会計学研究室、酪農畜産営農システム研究室、農業政策学研究室、農業経営学研究室、健康科学研究室

経済・市場コース（Eコース）は農業経済学をベースに、国民経済や社会科学の一般学習を深め、市場経済の担い手（農協職員・公務員、会社員など）を目指す。Ⅱ数量経済学研究室、国際経済学研究室、情報経済論研究室、農畜産物市場論研究室、食料経済史研究室、協同組合論研究室、農業史研究室、農業市場論研究室

このように、本学の農業経済学科は、農学系大学の中にあっても、特色ある教育を展開しており、全国的に高く評価され、入学生の半数以上が道外在住者で占められている。また一九六三（昭和38）年設置以来の卒業生も四、三五八名を数えるに至ったが、これらの卒業生は農業自営者を除いて、そのほとんどが全国の会社、団体、官公庁に就職している。

歴代農業経済学科長

- 中曾根徳一（二九六三～六四） 桜井 豊（二九六五～六六） 岩元典一（二九六七～六八）  
久米小十郎（二九七三～七六） 桜井 豊（二九七七～七八） 三田保正（二九七九～八四）

岩井正敏（一九八五～八六） 五十嵐涼二（一九八七） 岩元典一（一九八八） 大谷俊昭（一九八九～九四）  
工藤英一（一九九五～〇〇） 村岡範男（二〇〇一～）

取得資格など

〔取得資格〕 高等学校教諭一種（農業・公民）、中学校教諭一種（社会）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位取得者）、社会教育主事

〔受験資格〕 農業改良普及員、毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）

酪農学部 農業経済学科 (単位数の太字は必修単位数)

授 業 科 目	単位数
英 語	II 2
英 語	III 2
英 語	IV 2
ド イ ツ 語	I 2
ド イ ツ 語	II 2
ド イ ツ 語	III 2
ド イ ツ 語	IV 2
フ ラ ン ス 語	I 2
フ ラ ン ス 語	II 2
フ ラ ン ス 語	III 2
フ ラ ン ス 語	IV 2
中 国 語	I 2
中 国 語	II 2
中 国 語	III 2
中 国 語	IV 2
日 本 語	I 2
(外国人留学生対象科目)	
日 本 語	II 2
(外国人留学生対象科目)	
英 語 演 習	I 1
英 語 演 習	II 1
ド イ ツ 語 演 習	I 1
ド イ ツ 語 演 習	II 1
フ ラ ン ス 語 演 習	I 1
フ ラ ン ス 語 演 習	II 1
中 国 語 演 習	I 1
中 国 語 演 習	II 1
<b>第二類 (専門基礎および専門関連科目)</b>	
第一群(農業経済学基礎科目)	
農 業 經 済 学 概 論	I 2
農 業 經 済 学 概 論	II 2
食 料 經 済 論	2
農 業 と 環 境	2
農 業 思 想 史	2
第二群(農業経済学関連科目)	
農 業 実 習	I 1
農 業 実 習	II 4
特 別 農 業 実 習	1
畜 産 学	I 2
畜 産 学	II 2
土 壌 学	2
作 物 栽 培 学	I 2
作 物 栽 培 学	II 2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類(教養科目)</b>	
第一群	
キ リ ス ト 教 学	I 1
キ リ ス ト 教 学	II 1
キ リ ス ト 教 学	III 1
キ リ ス ト 教 学	IV 1
經 済 学	A 2
經 済 学	B 2
政 治 学	2
法 学	2
社 会 学	2
哲 学 と 思 想	A 2
哲 学 と 思 想	B 2
心 理 史	2
歴 史 学	2
文 芸 学 術	2
芸 術 学	A 2
地 理 学	B 2
日 本 史 概 説	2
世 界 史 概 説	I 2
世 界 史 概 説	II 2
地 誌	2
第二群	
微 分 積 分 学	2
線 形 代 数	2
統 計 学	I 2
統 計 学	II 2
生 物 学	A 2
生 物 学	B 2
化 学	I 2
化 学	II 2
物 理 学	I 2
物 理 学	II 2
生 物 学 実 験	1
化 学 実 験	1
第三群	
体 育 実 技	I 1
体 育 実 技	II 1
体 育 実 技	III 1
運 動 の 科 学	2
第四群	
英 語	I 2

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
経 済 政 策 論	2
北 海 道 産 業 論	2
物 流 経 済 論	2
産 業 心 安 理 学	2
食 品 安 全 論	2
ア メ リ カ 経 済 論	2
国 際 法	2
環 境 保 全 産 業 論	2
ヨ ー ロ ッ パ 経 済 論	2
第三群	
情 報 処 理 論	2
デ ー タ 利 用 論	2
経 済 統 計 学	2
コ ン ピ ュ ー タ 基 礎	2
コ ン ピ ュ ー タ 応 用 I	2
コ ン ピ ュ ー タ 応 用 II	2
第四類 (総 合 科 目)	
基 礎 演 習	1
演 習 I	2
演 習 II	2
農 業 者 特 別 演 習 I	1
農 業 者 特 別 演 習 II	1
経 済 学 特 別 演 習 I	1
経 済 学 特 別 演 習 II	1
農 業 経 済 学 特 論 I	1
農 業 経 済 学 特 論 II	1
卒 業 論	4
経 済 英 語 演 習	1
第五類 (自 由 科 目)	
他 学 部 他 学 科 科 目	
他 大 学 等 互 換 科 目	
第六類 (資 格 関 連 科 目)	
職 業 指 導 I	2
職 業 指 導 II	2
博 物 館 各 論 I	2
博 物 館 各 論 II	2
博 物 館 実 習	2

授 業 科 目	単位数
農 業 機 械 学	2
乳 製 品 製 造 学	2
肉 製 品 製 造 学	2
森 林 と 環 境	2
日 本 の 漁 業	2
海 外 農 業 実 習	2
バ イ オ テ ク ノ ロ ジ ー 概 論	2
第三群 (農 業 経 済 学 関 連 科 目 II)	
経 済 学 基 礎 理 論 A	2
経 済 学 基 礎 理 論 B	2
財 政 学	2
金 融 学	2
経 済 史	2
会 計 学 I	2
会 計 学 II	2
民 商 法	2
日 本 国 憲 法	2
経 営 学 総 論	2
第三類 (専 門 科 目)	
第一群	
農 業 政 策 学 I	2
農 業 政 策 学 II	2
農 業 経 営 学 I	2
農 業 経 営 学 II	2
農 業 市 場 学 I	2
農 業 市 場 学 II	2
協 同 組 合 学	2
農 村 社 会 学	2
第二群	
ア グ リ ビ ジ ネ ス 論	2
農 業 協 同 組 合 論	2
農 業 法	2
畜 産 経 営 論	2
農 村 計 画 論	2
農 シ ス テ ム 論	2
海 外 農 業 論	2
マ ー ケ テ ィ ン グ 論	2
貿 易 論	2
消 費 者 経 済 論	2
商 業 論	2
生 活 論	2
食 品 産 業 論	2

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	38	232	270
科 目			卒業必要 単位数
第一類（教養科目）			42 単位
第二類（専門基礎および専門関連科目）			38 単位
第三類（専門科目）			36 単位
第四類（総合科目）			11 単位
第五類（自由科目）			
合 計			127 単位以上

※ 教職に関する科目(各学科共通)は  
299 頁に掲載。

### (3) 食品科学科

酪農学科は、開設以来、わが国唯一の酪農専門教育を担う学科として、理論と実践を両輪とする実学教育の実績に高い評価を受け、年々志願者が増加してきた。このような全国的な期待にこたえるために、一層の充実発展を目標に努力を積み重ねてきたが、新たに学科の教育体制を分離して食品科学科を増設することになり、一九八八（昭和63）年四月の開設を目指して文部省に学科設置申請を提出していたが、一九八七年一二月二三日に認可を受けた。年末の慌ただしい時期であったが、直ちに学生の募集を開始した。広報活動の不十分さは否めなかったものの、関係者の素早い対応により、定員八〇名に対して予想を超える約五〇〇名の応募者を広く全国から得ることができ、一

九八八年四月、一〇三名の新入学生を迎えた。

本学科は、酪農学科より移行した乳製品製造学、肉製品製造学、食品栄養化学（旧食品化学）の三研究室と新設された応用微生物学と基礎部門強化のための応用生化学の二研究室から構成された。

このように酪農学部教育の充実のために新設された食品科学科は、酪農・畜産により生産される乳肉資源を主にしながらも広範囲にわたる食品素材の開発や高度加工、品質管理、保蔵、消費流通までを含んだ応用科学としての食品科学の研究領域を確立し、急激に発展している食品産業界の要請にこたえることのできる有為な人材を養成することを目的としている。

この目的を達成するために基礎学に裏付けされた理論を学び、実学による知識の応用と技術の習得ができるようにカリキュラムが一九九二（平成４）年、一九九五（平成７）年、二〇〇〇年の三回にわたって改定されている。

さらに、二〇〇一年から食品科学科に食品科学攻と健康栄養学専攻の二専攻を設け食と人の分野にかかわる専門性をより鮮明にした教育を展開している。

しかし本学科教育の特徴は、ただ単に目先の新しさや華やかさを求めるのではなく、酪農学園設立当初からの理念を守るところにある。すなわち、自然界の秩序を守り、農学を基礎とした調和のとれた応用科学を教育するところに他大学に見られないユニークさがある。

研究室は現在、食品科学専攻が六、健康栄養学専攻には八研究室がある。

食品科学専攻Ⅱ肉製品製造学研究室、乳製品製造学研究室、食品栄養化学研究室、応用微生物研究室、

応用生化学学研究室、食品物性学研究室

健康栄養学専攻Ⅱ食品学研究室、食品加工学研究室、食品衛生学研究室、臨床栄養学研究室、栄養指導論研究室、給食管理学研究室、栄養学研究室、調理学研究室

乳製品製造実験実習室Ⅱ乳製品製造実験実習施設は実習として使用していた江別の乳製品工場の売却により、その代替のために一九六三（昭和38）年乳製品製造学研究室の附属施設として設置された。当初の機器は市乳、バターなどの製造設備だけであった。一九七〇年代中ころから一九八〇年にかけて、岩井機械工業株式会社の好意により周辺機器の交換を行い、さらに、プレート式殺菌機、濃縮機、シエル&チューブ熱交換機、サージタンクなどの多額の寄贈を受け、設備が充実してきた。

一九七九（昭和54）年にはホクレンからナチュラルチーズ開発と試作の委託を受けその費用を全額投入してチーズ製造の施設・設備を行うなど、順次整備がなされ、閑散としていた施設内も現在では手狭の様相を呈している。

このように乳製品製造学研究室附属実習施設は、施設整備に二四年間の歳月をかけて完成したが、これにより教育機関において自他共に認める日本一の実習環境が整えられた。「これもひとえに工場の売却など、創設者黒澤先生を始め多くの良き理解者による支援の賜と感謝している」（安藤功一）。本施設は、ミニ生産レベルで学習できる実学教育のトレーニングセンター機能も有している。二〇〇三年四月から、本学学生の実習教育に止まらず高齢者と学生の雇用現場と広く社会に研修施設として解放し機能させる一方、生産された乳製品の社会との接点を模索しつつ永続的な実学教育の実践と教育の

質的向上を図っている。

食品加工実習室Ⅱ一九六五（昭和40）年に酪農学科に肉製品製造学研究室が開設され、翌年に札幌市の中島中学の校舎古材を利用して同実習室が建設された。この実習室は、入り口や窓枠などもすべて木造であったために、風や雪、埃が入り、厳冬期の実習では床に流れる洗浄水が凍りスケートリンクのようになることもしばしばであるなど食品を生産する実習室としては極めて粗末なものであった。

こんな実習場であったが、実習風景や食肉製品の製造に関するTV番組にはしばしば登場し卒業生には懐かしい場所の一つであった。この木造の実習室は約二〇年以上使用したところ、実習室の老朽化にあわせるように、酪農学科より食品科学科が分離開設され、一九九〇（平成2）年に新実習室が建設され、冬期の実習など随分恵まれた環境となった。二〇〇一（平成13）年学科に健康栄養学専攻が開設されたのに合わせて「肉製品製造実習室」は、「食品加工実習室」に名称を変更した。現在この実習室は、食品科学科の食品科学専攻の二年目学生と四年目学生の肉製品製造学実習、健康栄養学専攻の三年目学生の食品加工実習、酪農学科四年目学生の乳肉利用学実習、短大部二年目学生の畜産物利用学実習に、また一部であるが獣医学科五年目学生の公衆衛生学実習でも利用されている。

本実習室では、このように授業を中心に利用されているが、酪農学園大学ブランドの各種の食肉加工製品を製造するために、週一〜二度ゼミの学生諸君が活躍している。

歴代食品科学科学科長

鮫島邦彦（二九八八～九二） 塩見徳夫（一九九三～九六） 安藤功一（一九九七～〇〇） 中村邦男（二〇〇一～）

食品科学専攻の取得資格など

〔取得資格〕 高等学校教諭一種（理科・農業）、中学校教諭一種（理科）、食品衛生責任者、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位を修得した場合）、社会教育主事

〔任用資格〕 食品衛生管理者（実務に就いた場合届出）、食品衛生監視員（地方公務員に就いた場合届出）

〔受験資格〕 フードスペシャリスト（フードスペシャリスト協会認定校）、農業改良普及員、毒物劇物取扱責任者

（一般・農業・特定品目）

健康栄養学専攻取得資格など

〔取得資格〕 栄養士、食品衛生責任者、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位取得者）、社会教育主事

〔任用資格〕 食品衛生管理者（実務に就いた場合届出）、食品衛生監視員（地方公務員に就いた場合届出）

〔受験資格〕 管理栄養士、フードスペシャリスト（フードスペシャリスト協会認定校）、農業改良普及員、毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
ド イ ツ 語 III	2
ド イ ツ 語 IV	2
フ ラ ン ス 語 I	2
フ ラ ン ス 語 II	2
フ ラ ン ス 語 III	2
フ ラ ン ス 語 IV	2
中 国 語 I	2
中 国 語 II	2
中 国 語 III	2
中 国 語 IV	2
日 本 語 I (外国人留学生対象科目)	2
日 本 語 II (外国人留学生対象科目)	2
<b>第二類 (専門基礎科目)</b>	
無 機 化 学	<b>2</b>
生 物 有 機 化 学	<b>2</b>
微 生 物 学	<b>2</b>
生 物 工 学 概 論	2
物 理 化 学	2
生 物 学 通 論	2
生 物 学 通 論 実 験	1
物 理 学 通 論	2
物 理 学 通 論 実 験 I	1
物 理 学 通 論 実 験 II	1
地 学 通 論 I	2
地 学 通 論 II	2
地 学 通 論 実 験 I	1
地 学 通 論 実 験 II	1
情 報 処 理 論	2
コ ン ピ ュ ー タ 演 習	1
消 費 者 行 動 論	2
資 源 再 利 用 論	2
公 害 防 止 論	2
食 品 流 通 論	2
食 品 係 法 令 の 研 究	2
食 糧 経 済 論	2
<b>第三類 (専門科目)</b>	
乳 製 品 製 造 学	<b>2</b>
肉 製 品 製 造 学	<b>2</b>
食 品 化 学	<b>2</b>
食 品 物 性 学	<b>2</b>

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教養および専門基礎科目)</b>	
<b>第一群 (思想と社会)</b>	
キ リ ス ト 教 学 I	<b>1</b>
キ リ ス ト 教 学 II	<b>1</b>
キ リ ス ト 教 学 III	<b>1</b>
キ リ ス ト 教 学 IV	<b>1</b>
国 際 化 社 会 と 政 治 学	2
現 代 社 会 と 法 律 学	2
日 本 国 憲 法 学	2
社 会 経 済 学	2
哲 学 思 想 史	2
科 学 史	2
心 理 学	2
歴 史 学	2
文 芸 学 術	2
<b>第二群 (科学と情報)</b>	
微 分 積 分 学	2
線 形 代 数	2
コ ン ピ ュ ー タ 操 作 学	2
統 計 学	2
生 物 学 A	2
生 物 学 B	2
生 物 学 実 験 I	1
化 学 実 験 II	2
化 学 実 験 I	1
物 理 学 実 験	2
<b>第三群 (健康管理)</b>	
運 動 の 科 学	2
体 育 実 技 I	<b>1</b>
体 育 実 技 II	<b>1</b>
体 育 実 技 III	1
<b>第四群 (言語と国際理解)</b>	
英 語 I	<b>2</b>
英 語 II	<b>2</b>
時 事 英 語 I	<b>2</b>
時 事 英 語 II	<b>2</b>
科 学 英 語 I	2
科 学 英 語 II	2
ド イ ツ 語 I	2
ド イ ツ 語 II	2

酪農学部 食品科学科 食品科学専攻 (単位数の太字は必修単位数)

授業科目	単位数
<b>第五類 (自由科目)</b>	
他学部他学科科目	
他大学等互換科目	
<b>第六類 (資格関連科目)</b>	
職業指導 I	2
職業指導 II	2
博物館各論 I	2
博物館各論 II	2
博物館実習	3

授業科目	必修単位数	選択単位数	単位数合計
計	56	170	226
科目		卒業必要単位数	
第一類 (教養科目)		38 単位	
第二類 (専門基礎科目)		24 単位	
第三類 (専門科目)		53 単位	
第四類 (総合科目)		11 単位	
第五類 (自由科目)			
合計		126 単位以上	

※ 教職に関する科目(各学科共通)は 299 頁に掲載。

授業科目	単位数
応用生化学	2
食品微生物学	2
食品栄養学	2
公衆衛生学	2
食品衛生学	2
乳製品製造学実習	1
肉製品製造学実習	1
食品化学総合実験 I	1
食品栄養化学実験	1
生化学実験	1
食品微生物学実験	1
食品化学総合実験	1
乳食科	2
食肉科	2
食品分析学	2
食品機能論	2
微生物利用学	2
栄養生化学	2
タンパク質化学	2
発酵食品学	2
調理学概論	2
調理学実習 I	1
調理学実習 II	1
動物資源生産学	2
農産資源利用学	2
植物資源生産学	2
食品原料学	2
水産資源利用学	2
食品包装資材論	2
食品包装工学	2
食品機械工学	2
生産管理論	2
食品品質管理論	2
<b>第四類 (総合科目)</b>	
農学概論	2
食品科学概論	2
食品製造実習	1
総合演習 I	1
総合演習 II	1
環境科学概論	2
食生活論	2
フードコーディネータ	2
卒業論文	6

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
ドイツ語 I	2
ドイツ語 II	2
ドイツ語 III	2
ドイツ語 IV	2
フランス語 I	2
フランス語 II	2
フランス語 III	2
フランス語 IV	2
中国語 I	2
中国語 II	2
中国語 III	2
中国語 IV	2
日本語 I (外国人留学生対象科目)	2
日本語 II (外国人留学生対象科目)	2
<b>第二類 (専門基礎科目)</b>	
第一群 (社会・環境と健康)	
公衆衛生学	2
社会福祉概論	2
健康管理概論	2
第二群 (人体の構造と機能 及び疾病の成り立ち)	
医学概論	2
解剖生理学概論	2
解剖生理学各論	2
生化学概論	2
生化学各論	2
病理学	2
運動生理学	2
微生物学	2
解剖生理学実験・実習 I	1
解剖生理学実験・実習 II	1
生化学実験・実習 I	1
生化学実験・実習 II	1
第三群 (食べ物と健康)	
食品工学	2
食品加工学	2
食品衛生学	2
調理学	2
食品学実験・実習 I	1
食品学実験・実習 II	1
食品加工学実習	1

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教養および専門基礎科目)</b>	
第一群 (思想と社会)	
キリスト教文学 I	1
キリスト教文学 II	1
キリスト教文学 III	1
キリスト教文学 IV	1
国際化社会と政治	2
現代社会と法律	2
社会学	2
経済学	2
哲学と思想	2
心理学	2
歴史学	2
文芸学	2
第二群 (科学と情報)	
微積分学	2
線形代数	2
コンピュータ操作	2
統計学	2
生物学 A	2
生物学 B	2
生物学実験 I	1
化学 I	2
化学 II	2
化学実験 I	1
物理学	2
情報処理学	2
生物有機化学	2
無機化学	2
第三群 (健康管理)	
運動の科学	2
体育実技 I	1
体育実技 II	1
体育実技 III	1
第四群 (言語と国際理解)	
英語 I	2
英語 II	2
時事英語 I	2
時事英語 II	2
時事英語 I	2
時事英語 II	2

酪農学部 食品科学科 健康栄養学専攻 (単位数の太字は必修単位数)

第二部 学校再編と現況

授 業 科 目	単位数
臨 床 心 理 学	2
介 護 ・ 看 護 論	2
小 児 栄 養 学	2
栄 養 と 免 疫 学	2
栄 養 生 理 学	2
第二群 (食品産業系科目)	
食 品 分 析 学	2
食 品 包 装 資 材 論	2
消 費 者 行 動 論	2
食 品 原 料 学	2
食 品 物 性 学	2
食 品 微 生 物 学	2
食 品 品 質 管 理 論	2
食 糧 経 済 論	2
第三群 (社会福祉系科目)	
児 童 発 達 心 理 学	2
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 論	2
社 会 福 祉 論	2
児 童 福 祉 論	2
高 齢 者 福 祉 論	2
リ ハ ビ リ テ ー シ ョ ン 論	2
第四群 (総合科目)	
食 品 科 学 概 論	2
フ ー ド コ ー デ ィ ネ ー ト 論	2
食 生 活 論	2
卒 業 論 文	6

授業科目	必修 単位数	選 択 単位数	単位数 合 計
計	104	125	229
科 目	卒業必要 単 位 数		
第一類(教養および 専門基礎科目)	34 単位		
第二類(専門基礎分 野)	40 単位		
第三類 (専門分野)	44 単位		
第四類 (専門科目 (専攻系別))	12 単位		
合 計	130 単位以上		

授 業 科 目	単位数
調 理 学 実 験 ・ 実 習 I	1
調 理 学 実 験 ・ 実 習 II	1
食 品 衛 生 学 実 験 ・ 実 習	1
<b>第三類 (専 門 科 目)</b>	
第一群 (基礎栄養学)	
栄 養 学 概 論	2
栄 養 学 実 験 ・ 実 習 I	1
第二群 (応用栄養学)	
栄 養 学 各 論 I	2
栄 養 学 各 論 II	2
栄 養 学 各 論 III	2
栄 養 学 実 験 ・ 実 習 II	1
第三群 (栄養教育論)	
栄 養 教 育 論	2
栄 養 指 導 概 論	2
栄 養 カ ウ ン セ リ ン グ 論	2
栄 養 指 導 論 実 習 I	1
栄 養 指 導 論 実 習 II	1
第四群 (臨床栄養学)	
臨 床 栄 養 学 概 論	2
臨 床 栄 養 学 各 論	2
臨 床 栄 養 管 理 論	2
高 齢 者 臨 床 栄 養 学	2
臨 床 栄 養 学 実 験 ・ 実 習 I	1
臨 床 栄 養 学 実 験 ・ 実 習 II	1
第五群 (公衆栄養学)	
公 衆 栄 養 学 概 論	2
公 衆 栄 養 学 各 論	2
公 衆 栄 養 学 実 習 I	1
第六群 (給食経営管理論)	
給 食 管 理 論	2
食 品 流 通 論	2
給 食 管 理 実 習 I	1
第七群 (総合演習)	
総 合 演 習 I	1
総 合 演 習 II	1
第八群 (臨地実習)	
給 食 管 理 実 習 II	1
臨 床 栄 養 学 実 習 I	1
臨 床 栄 養 学 実 習 II	1
公 衆 栄 養 学 実 習 II	1
<b>第四類 (専門科目 (専攻系別))</b>	
第一群 (臨床系科目)	

(4) 食品流通学科 一九九三(平成5)年七月に申請していた食品流通学科は同年一月二日に文部省より認可され、翌一九九四(平成6)年四月に開設した。

本学科は食に関し実態経済に即した効率的、体系的、総合的な商業的基礎知識を持つ流通・経済活動のできる人材養成を目的としている。

今日、社会環境の大きな変化から、食品の構造、流通、外食部門を含む食品産業界では、情報関連学科および技術を組み合わせた新しい食品流通システムの開発研究とこれに携わる人材養成が必要とされている。

特に、わが国最大の食糧生産地である北海道の農畜水産物における生産活動と販売活動を包括した消流・物流管理の理論と技術の開発は地域産業活性化の鍵となるものである。既にアグリビジネスの各分野で実績を上げている農業経済学科や酪農学科および食品科学科との連携によって食の生産と消費をつなぐ過程を対象とした効果的な人材養成の道が開かれ、学部全体として体系化された教育研究の充実強化が図られることになった。

本学科の名称および教育内容はユニークであり、国内はもとより世界でも同種の学科や学部はなく、このために、学士号名もわが国初めての食品流通学士となった。

学科開設当初の入学定員は八〇名(純定員五〇名および臨時定員三〇名)であったが、臨時増募定員半減化政策のため二〇〇〇(平成12)年度入学生から定員七〇名となった。編入生受け入れなどにより四年合計で常時三五〇名前後の学生が在学している。本学科には次の一〇研究室がある。食品流通学研

研究室、経営分析学研究室、経済学研究室、食品品質管理学研究室、食品包装学研究室、流通経済学研究室、物流管理学研究室、環境経済学研究室、消費経済学研究室、健康科学研究室、流通情報システム研究室。教育課程の内容は、将来の国際化に対応し得る人材の養成を考慮したものとなっている。一方、一九九八（平成10）年三月に、第一期生九三名が卒業し、引き続き第二期生一〇〇名、第三期生一〇二名がそれぞれ卒業し、関連業界で活躍している。主な業種は製造業、卸小売業、金融、旅行会社、協同組合官公庁、教員などである。

歴代食品流通学科学科長

鮫島邦彦（一九九四） 森田潤一郎（一九九五～九六） 山本博信（一九九七～九八）

森田潤一郎（一九九九～〇〇） 芝崎希美夫（二〇〇一～〇二） 田村 實（二〇〇三～）

取得資格など

〔取得資格〕高等学校教諭一種（公民・商業）、中学校教諭一種（社会）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位取得者）、社会教育主事

〔受験資格〕農業改良普及員、毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）

※本学科では、学科主催の就職講座を開講し次の資格取得をバックアップしている。小売商（販売士）一・二・三級  
一 通関士、ビジネス実務法務三級

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
ド イ ツ 語 I	2
ド イ ツ 語 II	2
フ ラ ン ス 語 I	2
フ ラ ン ス 語 II	2
中 国 語 I	2
中 国 語 II	2
日 本 語 I (外国人留学生対象科目)	2
日 本 語 II (外国人留学生対象科目)	2
<b>第二類 (専門基礎科目)</b>	
第一群 (経済・政策関係)	
流 通 経 済 論	2
近 代 経 済 ・ 流 通 史	2
経 済 地 理	2
経 済 政 策 論	2
財 政 学	2
金 融 学	2
企 業 経 済 論	2
中 小 企 業 論	2
食 品 経 済 論	2
経 済 統 計 学	2
国 際 経 済 論	2
水 産 経 済 論	2
第二群 (法 律 関 係)	
民 法 I	2
民 法 II	2
商 法 I	2
商 法 II	2
食 品 関 係 法	2
流 通 関 係 法	2
国 際 法	2
第三群 (語 学 関 係)	
商 業 英 語	2
時 事 ・ 英 文 講 読	2
<b>第三類 (専 門 科 目)</b>	
第一群 (経営・管理・情報関係)	
経 営 学 総 論	2
経 営 管 理 論	2
簿 記 会 計 学 I	2
簿 記 会 計 学 II	2
経 営 分 析 論	2
生 産 管 理 論	2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教 養 科 目)</b>	
第一群 (人 文 ・ 社 会)	
キ リ ス ト 教 学 I	1
キ リ ス ト 教 学 II	1
キ リ ス ト 教 学 III	1
キ リ ス ト 教 学 IV	1
政 治 学	2
社 会 学	2
経 済 学 A	2
経 済 学 B	2
哲 学 と 思 想	2
哲 学 と 思 想	2
心 理 学	2
法 学	2
日 本 国 憲 法	2
地 理 学 A	2
地 理 学 B	2
地 理 学 誌	2
日 本 史 概 説	2
世 界 史 概 説 I	2
世 界 史 概 説 II	2
日 本 代 経 済 論	2
現 代 経 済 論	2
第二群 (理 系 基 礎)	
微 分 積 分 学	2
線 形 代 数	2
統 計 学 I	2
統 計 学 II	2
生 物 学	2
化 学 概 論	2
農 学 概 論	2
第三群 (保 健 ・ 体 育)	
運 動 の 科 学	2
体 育 実 技 I	1
体 育 実 技 II	1
体 育 実 技 III	1
第四群 (外 国 語)	
英 語 I	2
英 語 II	2
英 語 III	2
英 語 IV	2
英 語 演 習 I	1
英 語 演 習 II	1

酪農学部 食品流通学科

第二部 学校再編と現況

授 業 科 目	単位数
卒 業 論 文	4
<b>第五類 (自由科目)</b>	
他学部他学科科目	
他大学等互換科目	
<b>第六類 (資格関連科目)</b>	
職 業 指 導 I	2
職 業 指 導 II	2
博 物 館 各 論 I	2
博 物 館 各 論 II	2
博 物 館 実 習	3

授業科目	必修 単位数	選 択 単位数	単位数 合 計
計	74	157	231
科 目	卒業必要 単 位 数		
第一類 (教養科目)	38 単位		
第二類 (専門基礎科目)	26 単位		
第三類 (専門科目)	64 単位		
第四類 (演習・ 実習・卒論科目)	4 単位		
第五類 (自由科目)			
合 計	132 単位以上		

※ 教職に関する科目(各学科共通)は  
299 頁に掲載。

授 業 科 目	単位数
販 売 管 理 論	2
人 事 管 理 論	2
流 通 情 報 論	2
情 報 処 理 論	2
消費者情報システム論	2
食 品 情 報 調 査	2
プ ロ グ ラ ミ ン グ	2
コ ン ピ ュ ー タ 演 習	2
第二群 (食品産業・食品関係)	
食 品 産 業 論 I	2
食 品 産 業 論 II	2
食 生 活 論	2
食 品 科 学 概 論	2
食 品 原 料 学	2
食 品 加 工 概 論	2
畜 産 製 造 学	2
食 品 質 管 理 論	2
食 品 包 装 資 材 論	2
環 境 経 済 論	2
食 品 衛 生 学	2
食 品 科 学 基 礎 実 験	1
第三群 (市場・流通・消費関係)	
食 品 流 通 論 I	2
食 品 流 通 論 II	2
マ ー ケ テ ィ ン グ 論	2
市 場 調 査 論	2
物 流 管 理 論	2
国 際 貿 易 論	2
地 域 産 業 論	2
農 畜 産 物 市 場 論	2
国 際 食 品 市 場 論	2
食 品 卸 ・ 小 売 商 業 論	2
産 業 心 理 学	2
消 費 経 済 論	2
消 費 者 行 動 論	2
販 売 特 講 I	2
販 売 特 講 II	2
経 営 特 講	2
第四類 (演習・実習・卒論科目)	
演 習 I	2
演 習 II	2
企 業 実 習	2

## 二 獣医学部

酪農学部獣医学科は、一九六四（昭和39）年入学定員四〇名の学科として開設された。獣医学科の目指すものは酪農学園の基本理念である三愛精神・健土健民・実学教育に基づいて産業動物臨床に従事し、酪農家を支援する実践的獣医師の養成にある。

一九七五（昭和50）年には入学定員を一二〇名に変更し、獣医師法の一部改正により七八年から二年の修士課程教育を積み上げる獣医六年教育を実施したが、学校教育法の一部改正によって一九八四（昭和59）年には学部一貫六年教育に移行した。さらに一九九〇（平成2）年には、学部一貫六年教育修了学生を受け入れるため大学院を改組し、医学教育と同じく、標準修業年限四年の獣医学研究科獣医学専攻博士課程を設置し一九九四（平成6）年三月にその完成をみた。

このような経過の中で、教育制度上の相違や教育内容の独自性からも同一学部内農学系他学科との間の教育運営上の非効率性を改善し、個体生物学の総合化、形態学、機能学、病態学、臨床、さらに応用動物学などがシステムとして機能する六年一貫した学部教育体系の下に教育研究の高度化を図り、社会が求める獣医師の養成にこたえる必要がでてきた。

このことから獣医学科の学部への改組転換が協議され、学部設置によって、教育の基本理念はもちろん、入学定員、収容定員を変更することなく、現有の教員組織、施設、設備を基に一九九七（平成9）年四月実施を目指してきたが、教育研究実績が評価されて一九九六（平成8）年十二月二日、獣医学

科の学部への改組転換が認可され、獣医学部が設置された。

本学獣医学部は北海道大学・麻布大学についてわが国三番目であった。

#### 歴代獣医学部学部長

平棟孝志（一九九六） 種池哲朗（一九九七～〇〇） 加藤清雄（二〇〇一～〇二） 岩井 法（二〇〇三～）

(1) 獣医学科 少し長くなるが獣医学科開設に至る前史について記しておきたい。わが国の酪農も一九五九、六〇（昭和34、35）年ころには急速に発展し、酪農家戸数、飼養頭数など著しく増加するに至った。そのため、これら農村においては獣医師の需要が急増してきた。

当時、全国各大学の獣医学科系の卒業生は年間七〇〇名を数えたが、その大多数は公衆衛生部門、製薬会社、あるいは愛玩動物関係の職場に就職し、地味な農村に就職する獣医師の数は極めて少く、また、せっかく就職しても二、三年の間に転出する者が多かった。

このような状況の下で黒澤西蔵学園長は、「真に酪農民のことを考え、苦勞多く経済的に恵まれなくとも、農村で活躍する信念ある獣医師を教育養成することは学園の使命でもある」と考えていた。こうした中で理事会は獣医学科の増設を決定し、一九六三（昭和38）年九月文部省に対し①農業機構の改善に伴う酪農振興政策によって乳牛頭数が急増しているのかかわらず、この酪農にかかわる獣医師が不足しており、酪農民より獣医師の養成が求められている現況にあつて、本大学に獣医学科を増設

することは国の農業政策にこたえるものであるという趣旨の「酪農学園大学酪農学部獣医学科増設に関する協議書」を提出した。

しかし、そのころ日本獣医師会、北海道獣医師会などでは「大学の獣医学教育年限の延長、教育内容の充実を内容とした、獣医師の少数精鋭主義」を議決して、この運動に取りかかった折りであったため、本学の獣医学科設置については反対の立場をとった。これに対し黒澤西藏学園長は数次にわたって、本道酪農と獣医師の現況について説明し、その協力を要請したが、容易に獣医師会側の協力を得ることができなかった。

こうした中に、一九六四（昭和39）年一月二七日、文部省よりその設置が承認されたため、学園は再び「獣医師会の期待にこたえるような獣医師の養成に努めるので、その協力をお願いしたい」と申し入れ、固い決意のもとに一九六四年四月獣医学科としての第一歩を踏み出したのである。

その後産業動物の獣医師をはじめ、多数の獣医師を養成して酪農・畜産界に輩出したほか、伴侶動物、公衆衛生などの分野はもとより国内外へ有為な人材を輩出し、さまざまな分野で社会的責務を十分果たしてきた。

しかし、今日の獣医学は、産業動物（牛・馬・豚・鶏）、伴侶動物（犬・猫・その他）などの動物を対象とする診療分野および食品を中心とした公衆衛生・環境衛生などの疫学と自然保護分野において、また、医学・薬学・生物学・生化学など、境界領域のライフサイエンスの一部門としても、ますます重要性が高まってきている。特に、最近では、大動物のプロダクションメデイシン（生産予防医学）や受精卵移

植、小動物の移植治療（人工水晶体・関節・血管）および疾患モデル動物の開発、それを利用しての病因解明と診断・治療法の開発などに見られるように、高度先端医療やバイオメディカルサイエンスの担い手として獣医師の活躍が期待されている。

これらの社会的要請にこたえるためにも学部六年一貫教育を目指し、低学年次に履修する専門基礎および専門関連科目、専門科目を充実してきた。また、今日、獣医師の多様な場からの要請に対応し、高学年次における専門科目の高度化、多様化を図っている。

科目は、大きく六つのグループに分かれ、それぞれに明確な目標を有している。

生命科学グループⅡ応用科学としての獣医学に不可欠な基礎的な生命科学を理解する

環境と獣医学グループⅡ疾病の原因の究明や発症予防のために求められる、さまざまな環境を理解する疾病と予防グループⅡ疾病の原因や発症過程、その予防を理解する

語学グループⅡ専門研究の理解をはじめ、今日の国際的な情報交換などに欠かせない外国語を理解する形態と機能学グループⅡ的確な診断、治療に必要なさまざまな動物の形態と機能を理解する

診断と治療グループⅡ原因、診断、治療、予防に関する専門知識を総合的に実践する能力を養う

本学科は現在次の教室を置いている。

獣医内科学教室、獣医内科学第二教室、獣医外科学教室、獣医外科学第二教室、獣医解剖学教室、獣医臨床繁殖学教室、獣医生理学教室、獣医衛生学教室、獣医伝染病学教室、獣医薬理学教室、獣医微生物学教室、実験動物学教室、獣医病理学教室、獣医生化学学教室、獣医公衆衛生学教室、獣医寄

生虫学教室、放射線獣医学教室、獣医毒性学教室、附属家畜病院、哲学研究室、化学研究室、バイオ  
メディアカルイングリッシュ研究室

歴代獣医学科学科長

牛島純一（一九六五～六六） 山下正亮（一九六七～七八） 沼田芳明（一九七九～八六）

河田啓一郎（一九八七～八八） 阿部光雄（一九八九～九四） 平棟孝志（一九九五～九六）

種池哲朗（一九九七～〇〇） 加藤清雄（二〇〇一～〇二） 岩井 滋（二〇〇三～）

取得資格など

〔取得資格〕 食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位修得者）

〔任用資格〕 食品衛生管理者（実務に就いた場合届出）、食品衛生監視員（地方公務員に就いた場合届出）、飼料製造管理者（実務に就いた場合届出）、その他、十種類の任用資格があります。

〔受験資格〕 獣医師国家試験、毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）、エックス線作業主任者、農業改良普及員

授 業 科 目	単位数
ロシア語 II (放送大学開講科目)	2
スペイン語 I (放送大学開講科目)	2
スペイン語 II (放送大学開講科目)	2
英語演習 I	1
英語演習 II	1
<b>第二類(専門基礎および専門関連科目)</b>	
第一群	
細胞認識化学	1
糖脂質化学	1
免疫疫学	2
生物物理学	1
放射線生物学	1
分子生物学	1
臨床獣医学入門	1
生体情報伝達科学	1
分子遺伝学	1
生命科学入門	1
科学英語	2
バイオメディカル・イングリッシュI	2
バイオメディカル・イングリッシュII	2
生物統計学	1
産業動物行動学	2
小動物行動学	2
生物の進化と多様性 (放送大学開講科目)	2
細胞生物学	2
(放送大学開講科目)	
光と物質 (放送大学開講科目)	2
第二群	
酪農実習 I	1
酪農実習 II	4
獣医学産法規	1
獣医学概論 I	1
獣医学概論 II	1
野生動物学	2
北海道酪農史	2
環境文化論	2
畜産学	2
家畜管理	2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類(教養科目)</b>	
第一群	
キリスト教	I 1
キリスト教	II 1
キリスト教	III 1
キリスト教	IV 1
政治学	2
法学	2
社会学	2
経済学	2
哲学と思想	A 2
哲学と思想	B 2
心理学	2
歴史学	2
文学	2
芸術学	2
第二群	
数学	I 2
数学	II 2
統計学	2
第三群	
生物学	2
生物実験	1
化学実験	2
物理実験	1
物理学	2
第四群	
体育実技	I 1
体育実技	II 1
体育実技	III 1
運動の科学	2
第五群	
基礎英語	I 2
基礎英語	II 2
ドイツ語	I 2
ドイツ語	II 2
フランス語	I 2
フランス語	II 2
中国語	I 2
中国語	II 2
ロシア語	I 2
(放送大学開講科目)	

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数	授 業 科 目	単位数
実 験 動 物 学	1	畜 産 製 造 学	2
実 験 動 物 学 実 習	1	畜 産 畜 育 種 学	2
獸 医 衛 生 学	2	土 壤 学	2
獸 医 衛 生 学 実 習	1	飼 料 作 物 学	2
獸 医 公 衆 衛 生 学 総 論	1	農 酪 農 業 經 済 学	2
獸 医 公 衆 衛 生 学 実 習	2	農 畜 産 物 市 場 論	2
獸 医 食 品 ・ 環 境 衛 生 学	2	家 畜 栄 養 学	2
獸 医 公 衆 衛 生 学 実 習	2	文 化 人 類 学	2
魚 病 学	1	(放 送 大 学 開 講 科 目)	
<b>第四群</b>		<b>第三類 (専 門 科 目)</b>	
總 合 臨 床 学 I	2	<b>第一群</b>	
總 合 臨 床 学 II	2	獸 医 解 剖 学	2
總 合 臨 床 学 III	1	獸 医 解 剖 学 実 習	2
總 合 臨 床 学 IV	2	獸 医 組 織 学	2
總 合 臨 床 学 V	2	獸 医 組 織 学 実 習	2
總 合 臨 床 学 VI	2	動 物 発 生 学	1
總 合 臨 床 学 VII	2	獸 医 生 理 学 総 論	2
總 合 臨 床 学 VIII	2	獸 医 生 理 学 各 論	2
總 合 臨 床 学 IX	2	獸 医 生 理 学 実 習	2
總 合 臨 床 学 X	2	獸 医 生 化 学	2
總 合 臨 床 学 実 習 I	1.5	獸 医 生 化 学 実 習	1
總 合 臨 床 学 実 習 II	1.5	獸 医 藥 理 学	3
總 合 臨 床 学 実 習 III	1.5	獸 医 藥 理 学 実 習	1
總 合 臨 床 学 実 習 IV	1.5	獸 医 放 射 線 学	1
總 合 臨 床 学 実 習 V	1.5	獸 医 放 射 線 学 実 習	1
總 合 臨 床 学 実 習 VI	1.5	毒 性 学	1
總 合 臨 床 学 実 習 VII	1.5	毒 性 学 実 習	1
總 合 臨 床 学 実 習 VIII	1.5	<b>第二群</b>	
<b>第四類 (専 修 教 育 科 目)</b>		獸 医 病 理 学 総 論	2
<b>第一群</b>		獸 医 病 理 学 各 論	2
獸 医 解 剖 学 特 論	1	獸 医 病 理 解 剖 学 実 習	1
獸 医 生 理 学 特 論	1	獸 医 病 理 組 織 学 実 習	2
獸 医 生 化 学 特 論	1	<b>第三群</b>	
獸 医 藥 理 学 特 論	1	獸 医 細 菌 学	2
獸 医 病 理 学 特 論	1	獸 医 細 菌 学 実 習	1
獸 医 微 生 物 学 特 論	1	獸 医 ウ イ ル ス 学	2
獸 医 寄 生 虫 病 学 特 論	1	獸 医 ウ イ ル ス 学 実 習	1
獸 医 内 科 学 特 論 I	1	獸 医 伝 染 病 学	3
獸 医 内 科 学 特 論 II	1	獸 医 伝 染 病 学 実 習	1
獸 医 内 科 学 特 論 III	1	獸 医 寄 生 虫 病 学 I	1
獸 医 外 科 学 特 論 I	1	獸 医 寄 生 虫 病 学 II	1
獸 医 外 科 学 特 論 II	1	獸 医 寄 生 虫 病 学 実 習	1
獸 医 臨 床 繁 殖 学 特 論	1		

第二部 学校再編と現況

授 業 科 目	単位数
獣医衛生学特論	1
獣医公衆衛生学特論	1
実験動物学特論	1
放射線獣医学特論	1
獣医伝染病学特論	1
獣医毒性学特論	1
第二群	
獣医学総合講義	<b>1</b>
獣医学演習	<b>3</b>
研究室実習	<b>2</b>
卒業業論	<b>6</b>
熱帯獣医学	1
学外実習	1
病院実習	1
R I 実習	1
<b>第五類(自由選択科目および資格関連科目)</b>	
博物館各論Ⅰ	2
博物館各論Ⅱ	2
博物館実習	3

授業科目	必修 単位数	選 択 単位数	単位数 合 計
計	136	131	267
科 目	卒業必要 単 位 数		
第一類(教養科目)	30単位 ※8単位以上		
第二類(専門基礎お よび専門関連科目)	33単位		
第三類(専門科目)	90単位		
第四類(専修教育科目)	21単位		
合 計	182単位以上		

※ 第一類30単位以上、第二類33単位以上とは別に、第一類および第二類にまたがり修得しなければならない単位数である。

### 三 環境システム学部

酪農学園大学三番目の学部、環境システム学部は一九九七（平成9）年一二月に設置認可となり、経営環境学科、地域環境学科を擁し翌一九九八（平成10）年四月開設された。

本学部は、本学が長年にわたり展開してきた農学領域における物質循環系を基盤とする環境教育をさらに発展させて環境と社会・人間活動を取り巻く外部世界、自然、生態系、地域、社会、経済など諸々の環境が相互に関係する諸環境を一つのシステムとしてとらえ、社会科学的、学際的教育研究を推進することによって、新しい「環境調和・共生型の社会・産業・生活システム」を構築し得る総合的な知見、判断力、想像力に富む実践的担い手、人材を育成することを目的として開設された。

また、環境に関し人文・社会・自然科学系学問の境界領域の教育研究を指向し、環境科学の確立、活力ある地域社会の形成に寄与するとともに、わが国の経済社会の発展に貢献できるとしている。

環境システム学部は、経営環境学科（入学定員一四〇名）および地域環境学科（入学定員一四〇名）の二学科から構成され、教育課程編成、内容面でそれぞれ相互に関係をもち、社会科学系環境教育を推進することにより、学部の全体性を維持し、教育目標を達成している。

#### 歴代環境システム学部学部長

太田一男（一九九八～〇〇） 加藤 勲（二〇〇一～）

(1) 経営環境学科

経営学、経営管理学を中心に、企業を取り巻く諸環境を国際、社会、企業、経営・経済、情報などの多角的側面から環境を客観的に理解した上で、経済の発展や雇用の創出の鍵となる企業経営のセンスとノウハウを持った中核的人材の育成を目指している。そのためには諸側面から、総合的に学習するため、経営環境科目群、経営管理科目群が配置され、環境に対し正しい視座を持ち、企業を取り巻く社会、経済環境の特質、課題を深く考究する。企業経営を総体として理解し、運営形態や発展方向について学習することにより、実務的管理能力を養い、後継者、起業家、企業経営者としての実務能力を培うことができるとしている。

本学科が特に重要視しているのが基礎力を充実させることと、企画力や実践力の養成である。そのため講義形式の授業だけではなく、実際にフィールドへ出て体験する各種の実習や特別講義など、多彩な内容で授業を展開している。

海外事情演習Ⅱ海外の環境保全の取り組みや、そのための社会システム、ビジネスの在り方などを実際に現場で学ぶ(二年後期)。

企業実習Ⅱ多彩な分野の多くの企業に協力をいただき、生産・販売・流通など実際の活動の場で仕事を体験、研究テーマのステップアップとする(三年後期)。

起業演習Ⅱ自分たちで会社を設立することを想定し、その事業内容や運営方法などをシミュレーションする(三年後期)。

中小・ベンチャー企業論特別講義Ⅱ今日、注目を集めるさまざまな企業で実際に携わる企業人を招き、

経営方針や経営思想・展望・そこで求められる人間像などを直に学び、社会への意識を高める（三年後期）。

本学科には現在次の研究室を置いている。

経営環境論研究室、簿記・会計学研究室、地域経済論研究室、情報数学研究室、環境・市場論研究室、経営学研究室、情報システム研究室、中小企業論研究室、生物学研究室、情報工学研究室、農業・食料政策研究室、マーケティング研究室、経営管理論研究室、北方文学研究室、英米文化論研究室

歴代経営環境学科学科長

中原准一（一九九八～二〇〇〇） 斎藤 瞭（二〇〇一～二〇二二） 金子佳弘（二〇〇三～）

取得資格など

〔取得資格〕 高等学校教諭一種（公民・商業）、中学校教諭一種（社会）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位修得者）、社会教育主事

〔受験資格〕 毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）、農業改良普及員

授 業 科 目	単位数
ド イ ツ 語 I	2
ド イ ツ 語 II	2
ド イ ツ 語 III	2
ド イ ツ 語 IV	2
フ ラ ン ス 語 I	2
フ ラ ン ス 語 II	2
フ ラ ン ス 語 III	2
フ ラ ン ス 語 IV	2
中 国 語 I	2
中 国 語 II	2
中 国 語 III	2
中 国 語 IV	2
日 本 語 I (外国人留学生対象科目)	2
日 本 語 II (外国人留学生対象科目)	2
<b>第二類 (専門基礎科目)</b>	
第一群 (語学力育成科目)	
コミュニケーション・イングリッシュI	1
コミュニケーション・イングリッシュII	1
コミュニケーション・イングリッシュIII	1
コミュニケーション・イングリッシュIV	1
経済・経営英語講読I	1
経済・経営英語講読II	1
ビジネス英語	2
第二群 (表現力育成科目)	
文章表現演習	1
人間関係とコミュニケーション演習	1
プレゼンテーション演習	1
第三群 (情報基礎科目)	
コンピュータ演習	1
情報システム概論	2
ソフトウェア基礎	2
情報処理基礎	2
情報数 理	2
経済・経営統計活用演習	1
第四群 (自然環境基礎科目)	
環境科学概論	2
環境汚染と微生物学	2
環境生態学	2
<b>第三類 (専門科目)</b>	
第一群 (社会経済・総合科目)	
経営環境論	2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教養科目)</b>	
第一群 (人文・社会系科目)	
キリリスト教 学 I	1
キリリスト教 学 II	1
キリリスト教 学 III	1
キリリスト教 学 IV	1
経 済 学 A	2
経 済 学 B	2
法 学	2
政 治 学	2
社 会 学	2
社 会 史	2
哲 学 と 思 想	2
哲 学 と 思 想	2
文 学	2
心 理 学	2
芸 術 学	2
地 理 学	2
日 本 国 憲 法	2
日 本 史 概 説	2
世 界 史 概 説	2
地 誌	2
第二群 (理系基礎科目)	
微 分 積 分 学 I	2
微 分 積 分 学 II	2
線 形 代 数	2
統 計 学	2
化 学	2
生 理 学	2
物 理 学	2
地 学	2
第三群 (保健・体育科目)	
体 育 実 技 I	1
体 育 実 技 II	1
体 育 実 技 III	1
運 動 の 科 学	2
第四群 (外国語科目)	
英 語 I	2
英 語 II	2
英 語 III	2
英 語 IV	2
英 語 演 習 I	1
英 語 演 習 II	1

環境システム学部 経営環境学科 (単位数の太字は必修単位数)

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数	授 業 科 目	単位数
第七群 (簿記・会計科目)		社 会 環 境 論	2
簿 記 原 理 I	2	国 際 関 係 論	2
簿 記 原 理 II	2	国 際 経 済 論	2
会 計 学	2	日 本 経 済 論	2
原 価 計 算	2	産 業 技 術 ・ 政 策 論	2
経 営 分 析	2	持 続 型 農 業 論	2
財 務 管 理 論	2	食 品 産 業 論	2
第八群 (環境経営管理科目)		流 通 ・ サ ー ビ ス 産 業 論	2
環 境 ビ ジ ネ ス 論	2	市 場 論	2
環 境 経 営 と 会 計	2	第二群 (地域社会・産業科目)	
環 境 マ ー ケ テ ィ ン グ	2	地 域 産 業 創 出 論	2
環 境 管 理 特 講	2	都 市 ・ 田 舎 社 会 論	2
第四類 (総 合 科 目)		地 方 自 治 ・ 財 政 論	2
基 礎 演 習 I	1	地 域 計 画 ・ 開 発 論	2
基 礎 演 習 II	1	第三群 (地域社会・文化科目)	
海 外 事 情 演 習	1	消 費 者 行 動 論	2
企 業 実 習	2	比 較 文 化 論	2
起 業 演 習	1	北 海 道 の 生 活 と 文 化	2
ラ イ フ ス タ イ ル 研 究	1	北 方 文 学	2
成 長 産 業 ・ 企 業 研 究	1	第四群 (環境政策・法律科目)	
専 門 演 習 I	1	環 境 経 済 ・ 政 策 論	2
専 門 演 習 II	1	環 境 関 係 法 規	2
専 門 演 習 III	1	環 境 監 査 ・ ア セ ス メ ン ト	2
卒 業 論 文	4	民 法	2
第五類 (自 由 科 目)		商 法	2
他 学 部 他 学 科 科 目		労 働 法	2
他 大 学 等 互 換 科 目		第五群 (経営戦略科目)	
第六類 (資 格 関 連 科 目)		経 営 学 総 論	2
職 業 指 導 I	2	経 営 管 理 論	2
職 業 指 導 II	2	企 業 形 態 論	2
社 会 教 育 計 画 I	2	経 営 戦 略 論	2
社 会 教 育 計 画 II	2	事 業 構 想 論	2
社 会 教 育 課 題 研 究 I	2	中 小 ・ ベ ン チ ャ ー 企 業 論	2
社 会 教 育 課 題 研 究 II	2	中 小 ・ ベ ン チ ャ ー 企 業 論 特 講	2
開 発 教 育 論	2	国 際 経 営 論	2
社 会 教 育 行 政 と 活 動	2	第六群 (部門戦略科目)	
ボ ラ ン テ ィ ア 活 動 ・		組 織 と リ ー ダ ー シ ッ プ	2
N P O ・ N G O 論	2	人 事 労 務 管 理 論	2
博 物 館 各 論 I	2	生 産 管 理 論	2
博 物 館 各 論 II	2	マ ー ケ テ ィ ン グ 管 理 論	2
博 物 館 実 習	3	物 流 管 理 論	2
		貿 易 実 務	2
		経 営 情 報 論	2

(2) **地域環境学科** 本学科は、地域の環境保全および活性化を目指す教育・研究を進め、地域を取り巻く諸環境をグローバル、かつ多角的にとらえ、地域社会の再生・活性化の鍵となる活力ある地域社会・生活文化の構想、設計、指導に当たる人材育成を目的としている。さらには、地球規模での多面的な環境問題の実際を理解し、地域に立脚し環境と人間、人間活動の在り方を学際的、総合的に学習するため、社会科学系、自然科学系、人文科学系の三つの科目群を配置し総合的カリキュラムを通じて地球的規模の環境問題と地域環境問題、あるいは自然環境と社会環境の相互の体系的な理解を深めている。

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	22	238	260
科 目			卒業必要 単 位 数
第一類 (教養科目)			38 単位
第二類 (専門基礎科目)			10 単位
第三類 (専門科目)			48 単位
第四類 (総合科目)			6 単位
第五類 (自由科目)			
合 計			124 単位以上

※ 第一類から第五類までの卒業に要する最低修得単位数を満たし、かつ、合計単位数に不足する22単位を第二類から第五類より修得しなければならない。

※ 教職に関する科目(各学科共通)は299頁に掲載。

地域の環境問題に対し、環境と調和・共生する社会・生活・文化システムを構築するための理論、企画設計および政策を理解し、地域、環境の科学を総合的に学習することにより、環境問題に対し実際の解決能力を持つ中核的指導者を育成している。

本学科には次の研究室を置いている。

国際環境関係論研究室、地域環境保全学研究室、身体環境学研究室、環境科学研究室、地域国際関係論研究室、地理情報学研究室、環境生態学研究室、地方自治研究室、環境文化論研究室、キリスト教学研究室、ポリモーファスイングリッシュ研究室、環境とエントロピー研究室、税・財政法学研究室、資源再利用学研究室、OAシステム学研究室、教育学研究室

なお、両学科とも、地球規模の環境情報を学習理解し、言語能力、情報処理能力を養成するために、国際コミュニケーション科目群、情報科目群を配置し、実学教育の一環として演習、フィールドワーク、体験学習を重視する。講義によっては、各分野から専門家を招き特別講義、小人数による授業などを実施し、履習モデルにより、学生の興味と進路に応じた修学指導を行い、教育効果を図っている。

また、外国人留学生、特にアジア圏諸国からの留学生、帰国生徒、社会人を積極的に受け入れ、日本人学生との交流を通じ相互に理解を深め、一部には外国人専任教員の配置をするなど、地球国際化時代に対応した教育内容を充実する計画である。

歴代地域環境学科学科長

太田一男（一九九八） 村野紀雄（二九九九～〇〇） 森川 純（二〇〇一～〇二） 岩井 洋（二〇〇三～）

取得資格など

〔取得資格〕 高等学校教諭一種（公民）、中学校教諭一種（社会）、食品衛生責任者（講習会受講者）、学芸員（放送大学との単位互換協定に基づく必要単位修得者）、社会教育主事

〔受験資格〕 毒物劇物取扱責任者（一般・農業・特定品目）、農業改良普及員

第四章 酪農学園大学

授 業 科 目	単位数
ド イ ツ 語 II	2
ド イ ツ 語 III	2
ド イ ツ 語 IV	2
フ ラ ン ス 語 I	2
フ ラ ン ス 語 II	2
フ ラ ン ス 語 III	2
フ ラ ン ス 語 IV	2
中 国 語 I	2
中 国 語 II	2
中 国 語 III	2
中 国 語 IV	2
日 本 語 I	2
(外国人留学生対象科目)	
日 本 語 II	2
(外国人留学生対象科目)	
<b>第二類 (専門基礎および関連科目)</b>	
第一群 (プラティカル・イングリッシュ)	
コミュニケーション・イングリッシュ I	1
コミュニケーション・イングリッシュ II	1
コミュニケーション・イングリッシュ III	1
コミュニケーション・イングリッシュ IV	1
時 事 英 語 I	2
時 事 英 語 II	2
第二群 (情 報 科 目)	
コンピュータ基礎理論	2
情報リテラシー基礎演習	1
情報リテラシー応用演習	1
データベース演習	1
社会環境科学系GIS	2
自然環境科学系GIS	2
応 用 G I S	2
情報ネットワーク論	2
リモートセンシング基礎	2
第三群 (環境基礎科目)	
環境保全思想の系譜 I	2
環境保全思想の系譜 II	2
地球生物多様性概論	2
環 境 経 済 学	2
環 境 化 学	2
科 学 史	2
福 祉 学	2
地 球 環 境 科 学 概 論	2
進 化 生 態 学	2

授 業 科 目	単位数
<b>第一類 (教 養 科 目)</b>	
第一群	
キ リ ス ト 教 学 I	1
キ リ ス ト 教 学 II	1
キ リ ス ト 教 学 III	1
キ リ ス ト 教 学 IV	1
法 史 学	2
歴 史 学	2
経 済 学	2
社 会 学	2
哲 学 と 思 想	2
哲 学 と 思 想 A	2
日 本 国 憲 法	2
日 本 国 史 説 説	2
世 界 史 概 説	2
心 理 学	2
政 治 学	2
地 球 学	2
地 球 誌 学	2
文 芸 学 術	2
第二群	
化 学	2
微 分 積 分 学 I	2
微 分 積 分 学 II	2
生 物 学	2
物 理 学	2
線 形 代 数	2
統 計 学	2
第三群	
体 育 実 技 I	1
体 育 実 技 II	1
体 育 実 技 III	1
運 動 の 科 学	2
第四群	
英 語 I	2
英 語 II	2
英 語 III	2
英 語 IV	2
英 語 演 習 I	1
英 語 演 習 II	1
ド イ ツ 語	2

環境システム学部 地域環境学科 (単位数の太字は必修単位数)

第二部 学校再編と現況

授業科目	単位数
環境汚染と微生物学	2
野生生物保護管理	2
農業環境科学概論	2
海洋・河川・湖沼学	2
持続型農業論	2
数理生態学	2
森林菌類	2
第四群 (人文環境科目)	
環境倫理学	2
環境文化論	2
キリスト教環境論Ⅰ	2
キリスト教環境論Ⅱ	2
地球環境保全と教育	2
北方圏の人と文化	2
自然体験論	2
北方文化学	2
アイヌ文化論	2
第四類 (総合科目)	
地域実習	1
海外実習	1
環境基礎実習	1
基礎演習	1
専門演習Ⅰ	1
専門演習Ⅱ	1
専門演習Ⅲ	1
卒業論文	4
第五類 (自由科目)	
他学部他学科科目	
他大学等互換科目	
第六類 (資格関連科目)	
社会教育計画Ⅰ	2
社会教育計画Ⅱ	2
社会教育課題研究Ⅰ	2
社会教育課題研究Ⅱ	2
開発教育論	2
社会教育行政と活動	2
博物館各論Ⅰ	2
博物館各論Ⅱ	2
博物館実習	3

授業科目	単位数
エネルギーの物理学	2
自治と環境問題	2
環境法概説	2
国際協力と平和	2
ITと環境問題	2
第三類 (専門科目)	
第一群 (地域環境科目)	
地域理解	2
地域環境科学	2
地球環境政治学	2
環境緑地概論	2
地域計画・開発論	2
地域環境保全計画論	2
環境アセスメント	2
公害対策論	2
公衆衛生学	2
地域交通環境論	2
地域環境論	2
地域景観とアメニティ	2
第二群 (社会環境科目)	
資源管理論	2
再利用論	2
社会環境システム論	2
国際経済論	2
国際関係論	2
環境私法	2
ボランティア活動・NPO・NGO論	2
環境監査論	2
国際環境機構論	2
アフリカ論	2
メディア論	2
環境政策論	2
環境公法	2
消費行動論	2
環境税財	2
第三群 (自然環境科目)	
生物多様性特論	2
地球環境科学特論	2
土壌と水の科学	2
エントロピーと環境	2
動物生態学	2
環境ホルモンの影響と体内代謝	2

#### 第四章 酪農学園大学

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
教職入門		2	2
教師論		2	2
教育原理		2	2
教育心理学		2	2
特殊教育学		2	2
教育社会学		2	2
生涯学習論		2	2
教育課程論		2	2
理科教育法Ⅰ		2	2
理科教育法Ⅱ		2	2
農学科教育法Ⅰ		2	2
農学科教育法Ⅱ		2	2
社会科教育法Ⅰ		2	2
社会科教育法Ⅱ		2	2
公民科教育法Ⅰ		2	2
公民科教育法Ⅱ		2	2
商業科教育法Ⅰ		2	2
商業科教育法Ⅱ		2	2
道德教育の研究		2	2
特別活動の研究		2	2
教育方法論		2	2
生徒指導論		2	2
教育相談の研究		2	2
総合演習		2	2
教育実習		5	5
		(中1種免)	
教育実習		3	3
		(高1種免)	
計		56	56

#### 教職に関する科目（各学科共通）

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	19	253	272
科 目		卒業必要 単位数	
第一類（教養科目）		38 単位	
第二類（専門基礎 および関連科目）		23 単位	
第三類（専門科目）		52 単位	
第四類（総合科目）		5 単位	
第五類（自由科目）			
合 計		124 単位以上	

※ 第一類から第五類までの卒業に要する最低修得単位数を満たし、かつ、合計単位数に不足する6単位を第二類から第五類より修得しなければならない。

#### 四 大学院研究科

本学の大学院は、現在酪農学研究科酪農学専攻（修士課程Ⅱ八一年）、酪農学研究科フードシステム専攻（修士課程Ⅱ九五年）、酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程Ⅱ九一年）、酪農学研究科食品栄養科学専攻（修士課程・博士課程Ⅱ〇三年）獣医学研究科獣医学専攻（博士課程Ⅱ八一年）の二研究科五専攻がある。

その経緯は一九七五（昭和50）年三月二五日、獣医学研究科獣医学専攻（修士課程）として設置認可され、同年四月に開院したのにはじまる。これは、学術の進歩は獣医学の分野においても顕著なものがあり、畜産、酪農や公衆衛生の面においても、獣医師には精深な学識と高度の技術が要求される時代となり、大学の教育、研究もこれに対応でき得る態勢が必要となってきた。

一方、一九七八（昭和53）年、獣医師法の改正に伴う大学院修士積み上げ方式による六年制教育、そして八四年の学校教育法改正によって獣医学教育の年限延長（六年制）実施が明らかになっており、それに対応するためでもあった。

二研究科五専攻を置く本学大学院は、食料生産、情報、食品開発および獣医学各分野の最先端の研究に取り組んでいる。

研究科には修士課程と博士課程が設置されており、修士課程は広い視野にたつて精深な学識を授け、専攻分野における研究能力や高度の専門性を要する職業などに必要な能力を涵養し、博士課程は自立

した研究活動の展開に必要な高度な能力と豊かな学識を有する研究者の育成を目的としている。

充実した施設・設備、各研究科および学部スタッフとの連携、各業界との情報交換や技術提携、学术交流協定締結機関との海外交流などが大学院での学習に大きく役立っており、研究成果を国内外での学会、あるいは誌上発表する大学院生も少なくない。また、教員の研究・教育補助および学部学生の勉学奨励のために、博士課程院生をティーチングアシスタント学生として採用する学生生活への支援体制も充実してきた。毎年、修士・博士号を取得した多数の有為な人材を農業・食糧・健康・福祉・環境・教育・研究の諸分野に輩出してきている。各専攻学科目は次のとおりである。

**酪農学研究科酪農学専攻**（修士課程）

作物生産科学Ⅱ 土壤植物栄養学・病理・害虫学・飼料作物学・酪農機械学

家畜生産科学Ⅱ 家畜繁殖学・遺伝・育種学・家畜栄養学・家畜管理学・酪農生物科学

酪農情報学Ⅱ 酪農経営情報学・農業経営学・酪農政策学・農業市場学

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	10	61	71

**履修基準**

修士課程に必要な単位数は30単位以上とする。

(1)必修科目

大講座学科目の授業科目 8単位  
特別研究論文 10単位

(2)選択科目

必修科目以外の授業科目12単位以上

ただし、演習・実験はその特論と合わせて履修すること。

専 門 教 育 科 目	
授 業 科 目	単位数
<b>作物生産科学</b>	
土壌植物栄養学特論	2
土壌植物栄養学特別演習	2
土壌植物栄養学特別実験	1
病理・害虫学特論	2
病理・害虫学特別演習	2
病理・害虫学特別実験	1
飼料作物学特論	2
飼料作物学特別演習	2
飼料作物学特別実験	1
酪農機械学特論	2
酪農機械学特別演習	2
酪農機械学特別実験	1
<b>畜産生産科学</b>	
家畜繁殖学特論	2
家畜繁殖学特別演習	2
家畜繁殖学特別実験	1
遺伝・育種学特論	2
遺伝・育種学特別演習	2
遺伝・育種学特別実験	1
家畜栄養学特論	2
家畜栄養学特別演習	2
家畜栄養学特別実験	1
家畜管理学特論	2
家畜管理学特別演習	2
家畜管理学特別実験	1
酪農生物化学特論	2
酪農生物化学特別演習	2
酪農生物化学特別実験	1
<b>酪農情報学</b>	
酪農経営情報学特論	2
酪農経営情報学特別演習	2
農業経営学特論	2
農業経営学特別演習	2
酪農政策学特論	2
酪農政策学特別演習	2
農業市場学特論	2
農業市場学特別演習	2
特別研究論文	10

大学院酪農学研究科酪農学専攻（修士課程）  
（単位数の太字は必修単位数）

酪農学研究科フードシステム専攻 (修士課程)

食品機能システムⅡ食品生化学・食品栄養化学・食品物性・特性学

食品開発システムⅡ微生物科学・乳利用学・食肉利用学

食料政策システムⅡ食料政策論・食品流通論・食品産業論

経営管理システムⅡ経営管理論・流通情報システム論・消費経済論

専 門 教 育 科 目	
授 業 科 目	単位数
食品流通論総合研究	4
食品流通論特別研究	10
食品産業論特別研究	2
食品産業論特別演習	2
食品産業論特別調査	2
食品産業論総合研究	4
食品産業論特別研究	10
<b>経営管理システム</b>	
経営管理論特別研究	2
経営管理論特別演習	2
経営管理論特別調査	2
経営管理論総合研究	4
経営管理論特別研究	10
流通情報システム論特別研究	2
流通情報システム論特別演習	2
流通情報システム論特別調査	2
流通情報システム論総合研究	4
流通情報システム論特別研究	10
消費経済論特別研究	2
消費経済論特別演習	2
消費経済論特別調査	2
消費経済論総合研究	4
消費経済論特別研究	10
論	文

授業科目	必修 単位数	選 択 単位数	単位数 合 計
計		240	240

**履修基準**

修士課程に必要な単位数は30単位以上とする。

(1)必修科目

所属する講座の授業科目 20単位  
論文

(2)選択科目

必修科目以外の授業科目10単位以上

ただし、演習、実験・調査はその特論と合わせて履修すること。

専 門 教 育 科 目	
授 業 科 目	単位数
<b>食品機能システム</b>	
食品生化学特論	2
食品生化学特別演習	2
食品生化学特別実験	2
食品生化学総合研究	4
食品生化学特別研究	10
食品栄養化学特論	2
食品栄養化学特別演習	2
食品栄養化学特別実験	2
食品栄養化学総合研究	4
食品栄養化学特別研究	10
食品物性・特性学特論	2
食品物性・特性学特別演習	2
食品物性・特性学特別実験	2
食品物性・特性学総合研究	4
食品物性・特性学特別研究	10
<b>食品開発システム</b>	
微生物科学特論	2
微生物科学特別演習	2
微生物科学特別実験	2
微生物科学総合研究	4
微生物科学特別研究	10
乳利用学特論	2
乳利用学特別演習	2
乳利用学特別実験	2
乳利用学総合研究	4
乳利用学特別研究	10
食肉利用学特論	2
食肉利用学特別演習	2
食肉利用学特別実験	2
食肉利用学総合研究	4
食肉利用学特別研究	10
<b>食料政策システム</b>	
食料政策論特別研究	2
食料政策論特別演習	2
食料政策論特別調査	2
食料政策論総合研究	4
食料政策論特別研究	10
食品流通論特別研究	2
食品流通論特別演習	2
食品流通論特別調査	2

#### 第四章 酪農学園大学

酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程）

植物資源生産学・動物資源生産学・食資源開発利用学・応用食品化学・微生物利用学・食生産経済学

専 門 教 育 科 目	
授 業 科 目	単位数
<b>食品加工特性分野</b>	
食品加工特性学特論Ⅰ	2
食品加工特性学特論Ⅱ	2
食品加工特性学演習Ⅰ	2
食品加工特性学演習Ⅱ	2
食品加工特性学特別実験	2
<b>食品栄養機能分野</b>	
食品栄養機能化学特論Ⅰ	2
食品栄養機能化学特論Ⅱ	2
食品栄養機能化学演習Ⅰ	2
食品栄養機能化学演習Ⅱ	2
食品栄養機能化学特別実験	2
<b>健康栄養分野</b>	
健康栄養学特論Ⅰ	2
健康栄養学特論Ⅱ	2
健康栄養学演習Ⅰ	2
健康栄養学演習Ⅱ	2
健康栄養学特別実験	2
<b>共 通 分 野</b>	
食品生理活性物質利用論	2
食品生理活性物質機能論	2
総 合 研 究	4
特 別 研 究	10
論	文

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	14	34	48

**履修基準**

修士課程の修了に必要な単位数は、30単位以上とする。

(1)必修科目

所属する分野の授業科目

- 総合研究 10 単位
- 特別研究 4 単位
- 論文 10 単位

(2)選択科目

必修科目以外の授業科目 6 単位以上

ただし、演習、実験はその特論と合わせて履修すること。

大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻（修士課程）

専 門 教 育 科 目	
授 業 科 目	単位数
植物資源生産学Ⅰ	2
植物資源生産学Ⅱ	2
動物資源生産学Ⅰ	2
動物資源生産学Ⅱ	2
食資源開発利用学Ⅰ	2
食資源開発利用学Ⅱ	2
応用食品科学Ⅰ	2
応用食品科学Ⅱ	2
微生物利用学Ⅰ	2
微生物利用学Ⅱ	2
食生産経済学Ⅰ	2
食生産経済学Ⅱ	2
食生産利用科学総合演習Ⅰ	1
食生産利用科学総合演習Ⅱ	1
食生産利用科学総合演習Ⅲ	1
特 別 研 究	4

授業科目	必修 単位数	選択 単位数	単位数 合計
計	7	24	31

**履修基準**

博士課程の修了に必要な単位数は、必修科目以外に1分野の授業科目4単位を修得し、11単位以上とする。

大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻（博士課程）（単位数の太字は必修単位数）

酪農学研究科食品栄養科学専攻（修士課程・博士課程）  
食品加工特性学・食品栄養機能化学・健康栄養学・食品生理活性物質利用論・食品生理活性物質機能  
論

専門教育科目		
	授業科目	単位数
専門分野	基礎獣医学演習Ⅰ	4
	基礎獣医学演習Ⅱ	4
	基礎獣医学演習Ⅲ	4
	基礎獣医学研究実験	12
	臨床獣医学演習Ⅰ	4
	臨床獣医学演習Ⅱ	4
	臨床獣医学演習Ⅲ	4
	臨床獣医学研究実験	12
	応用獣医学演習Ⅰ	4
	応用獣医学演習Ⅱ	4
	応用獣医学演習Ⅲ	4
	応用獣医学研究実験	12
	形態機能学特殊講義	2
	臨床獣医学特殊講義	2
応用獣医学特殊講義	2	
予防獣医学特殊講義	2	
国際獣医情報学特殊講義	2	

授業科目	必修単位数	選択単位数	単位数合計
計		82	82

**履修基準**

専門分野は、1分野の授業科目 24単位を必修とする。

**大学院獣医学研究科獣医学専攻（博士課程）**

専門教育科目		
授業科目	単位数	
<b>食品加工特性分野</b>		
食品加工特性学特別講義Ⅰ	1	
食品加工特性学特別講義Ⅱ	1	
食品加工特性学特別演習	1	
<b>食品栄養機能分野</b>		
食品栄養機能化学特別講義Ⅰ	1	
食品栄養機能化学特別講義Ⅱ	1	
食品栄養機能化学特別演習	1	
<b>健康栄養分野</b>		
健康栄養学特別講義Ⅰ	1	
健康栄養学特別講義Ⅱ	1	
健康栄養学特別演習	1	
論	文	

授業科目	必修単位数	選択単位数	単位数合計
計		9	9

**履修基準**

博士課程の修了に必要な単位数は、6単位以上とする。

(1)必修科目

所属する分野の授業科目 3単位

(2)選択科目

他の分野の特別講義から 3単位以上

**大学院酪農学研究科食品栄養科学専攻（博士課程）**

獸医学研究科獸医学専攻（博士課程）

基礎獸医学Ⅱ 獸医解剖学・獸医生理学・獸医生理学・獸医生化学・獸医薬理学・獸医病理学・獸医寄生虫学・獸医

微生物学

臨床獸医学Ⅱ 獸医内科学・獸医外科学・獸医臨床繁殖学・生産動物総合臨床学

応用獸医学Ⅱ 獸医伝染病学・獸医衛生学・獸医公衆衛生学・放射線獸医学・実験動物学・獸医毒性学

歴代酪農学研究科研究科長

平尾和義（一九八一～八四） 榑崎 昇（一九八五～八八） 堀内一男（一九八九～九二）

鮫島邦彦（一九九三～九八） 塩見徳夫（一九九九～）

歴代獸医学研究科研究科長

沼田芳明（一九八一～八六） 河田啓一郎（一九八七～八八） 阿部光雄（一九八九～九四）

平棟孝志（一九九五～九六） 森田千春（一九九七～〇〇） 種池哲朗（二〇〇一～）

## 五 附属施設・機関

### (1) 酪農学園大学・短期大学部附属農場

学園にはかつて多くの酪農場が存在していたが、統廃合を繰り返して、キャンパス内には大学と附属高等学校（旧機農高等学校）農場の二農場となった。さらに一九八八（昭和63）年には、それが合併し、大学・短大附属農場となった。大学農場は一九四九（昭和24）年機農高等学校の農場の一部を母体として酪農学園大学部実習農場として設立された。その後キャンパス内の農場は幾多の変遷を経て統合され、大学・短期大学部附属農場として現在に至っている。また、大学院酪農学研究科ハイテクリサーチセンター事業に伴う施設の一新など農場も大きく変遷している。

農場の再編と牛舎の焼失 一九七五（昭和50）年酪農学園中央農場の廃止に伴いキャンパス内の農場は大学と高校の附属農場に再編され、翌年大学農場の牛舎は増改築された旧中央農場第二牛舎へ移転した。しかし、一九七九（昭和54）年九月四日、実習中に第二牛舎二階の乾草収納庫より出火し成牛舎を焼失し教職員、学生ともども大きな衝撃を受けたが幸いにも学生や乳牛に被害はなく、牛舎内の主要な備品も搬出することができた。この際多くの学生や教職員が深夜まで献身的に消火後の作業を行った。また、高校生からは乳牛の管理作業に多大の協力を得た。さらに、全道各地で酪農自営している卒業生や近隣の酪農家から乾草の提供を受けるなど、牛舎の焼失は悲しい出来事であったが、学園内外の方々から受けた有形無形の協力は、酪農学園における農場の役割と農場教育の歴史の重さを

改めて感じさせられるものであった。

農場の変遷Ⅱ合併に際して、農場内部においては、職員の勤務体制、二つの牛舎の管理運営法、学生・生徒の実習方法など多くの課題があった。また、大学内においても、農場は学校経営面からみるとコストがかかり、大学にとって農場の規模拡大には異論もあった。しかし農場の合併は、二つの牛舎を効率的に使うことで内容の濃い実習ができ、また、高校生が実習を通して多くの農場スタッフと接することによって教育効果を高めることになった。

農場教育Ⅱ農場実習は、農場の日常管理作業に合わせながら労働を中心に展開している。「手鎌による草刈り、トウモロコシの手播きと手刈り収穫、ホー除草、乾草作業など学生にとっては苦痛な作業であるが、実習は、初歩的な作業を通して、酪農（農業）への興味・関心を深めることを目的にしている」（野英二）。実学教育の面からも手作業から入り、やがて作業精度を高めることが圃場作業の基本である。また、一〇数年前の牧草収穫は乾草のみであり、乾草調製時に降雨が予想されると半乾きの牧草を小堆積し、良質粗飼料の生産に努めていた。近年の牧草収穫は、乾草からロールベルサイレージへと移行し圃場管理は機械化による体制が確立されたが実習のメインイベントであった乾草収穫作業が見られなくなった。

農用地Ⅱ合併による附属高等学校からの農地移管や道立食品加工研究センター用地の売却などにより、一九九一（平成3）年の附属農場用地は八三・四haであったが、馬術部馬場移転により〇・六haを学生部が使用することとなったため、総面積は八二・八ha、キャンパス内の農地は法人事業部よりの借地

七・七haを含めて五六・三haであった。インテリジェント牛舎の建設用地は第二牛舎の運動場を活用したため、農地の減少を最低限にとどめた（見本圃〇・七ha）。二〇〇三（平成15）年における作付けはオーチャードグラス（二・六ha）、チモシー（二七・三ha）、アルファルファ（七・八ha）、トウモロコシ（二四・三ha）が主なところである。

七〇年代の大学農場は、一般酪農家に対して決して模範になるような経営内容ではなく、その存在感も薄いものであった。しかし教職員が一体となって、技術のレベルアップを目指してきた成果は生産牛一頭当たりの乳量に表れている。七〇年代五、〇〇〇kg前後であったものが、八八年には八、〇〇〇kg、九七年には九、〇〇〇kgに達した。

施設・設備の整備Ⅱ一九九〇（平成2）年に第二牛舎の堆肥場と第二堆肥場を整備し、翌九一年には附属農場教育研究棟が新築されたが、計画の一部は凍結された。また、乾草収納庫も整備した。一九九三（平成5）年には第一牛舎尿溜を、翌九四年に尿溜用電気整備をした。未完成のまま推移した教育研究棟は二〇〇〇年に未完成部分の追加工事がなされ完成した。

また、一九九九（平成11）年には大学院のハイテク・リサーチ・センター事業により乳牛ふん尿循環研究センターを整備し、二〇〇〇（平成12）年当初からふん尿の嫌気発酵を開始し、バイオガスによる発電をするともに附属農場の牛舎群を新築し、従来の第一牛舎と第二牛舎から引越した。

インテリジェント牛舎の建設Ⅱ最新の機能を備えたインテリジェント牛舎が二〇〇〇（平成12）年一月完成し本格的に稼働した。この新システム牛舎は酪農学園大学・大学院および同短期大学のハ

イテク・リサーチ・センター整備事業の一環として計画された主要施設である。同事業では「酪農における情報と物質のリサイクルシステムの開発研究」というテーマの下に「酪農情報の管理と利用」「酪農における物質循環」「機能性食品」の三分野を研究するが、前二者がインテリジェント牛舎と関係している。

この新システムの牛舎群ならびに附属施設はフリーストール牛舎、育成舎、自動搾乳システム牛舎、哺育牛舎、貯蔵粗飼料研究センター（バンカーサイロおよび飼料調製室）、酪農機械実験・整備センター（格納庫）である。なお、これらの施設にはバイオガス発生発電装置、乳牛情報測定記録装置、搾乳ロボットシステムなどが収容されている。新牛舎システムは、従来の牛舎の機能にコンピュータで制御した高度な情報通信システムと牛舎管理システムを付加した牛舎であり、インテリジェント牛舎と呼ぶのにふさわしいところから名付けられた、いわゆる「IT牛舎」である。この牛舎を活用することによって学生はもとより酪農界に質の高い研究情報を提供しようとするものである。

インテリジェント牛舎の最新技術Ⅱこの牛舎は最新の既存技術を網羅しており、その基本となる技術は個体識別技術である。これにより牛舎内を自由に移動する牛の個体を要所所で識別し、自動測定したデータをコンピュータに取り込むことが可能になった。

自動測定項目は多岐にわたるが、例えば搾乳室では個体番号を識別し、乳量を記録し、乳温やミルクの電気伝導度の異常を検知し、警告を発して記録する。また、乳質に異常のある牛は、正常な牛のミルクと混ざらないように別系統の搾乳を指示する。ミルクパイプの中のセンサーにより乳量を感じ

し、過搾乳にならないように自動的に搾乳を中止する。

搾乳室からの帰路には体重計があり、自動的に体重を測定し、健康や栄養状態の指標にもなる。牛舎内での運動量も自動計測し、発情発見の目安になる。もちろん、育種情報や発情や妊娠などの繁殖情報、病気や故障の治療法・治療歴などの電子カルテ、乳量・乳成分の変動などの生産情報、飼料や栄養状態の情報など、多彩な情報を管理するとともに学内ネットワークとも接続している。

精密試験ストールでは試験牛が何時何分に何kgの飼料を摂取したのかを記録する。また、牛舎内の監視カメラの映像も記録し解析できるようになっており、牛の行動を高い位置から観察できるような観察通路も備えている。

自動搾乳システム牛舎では、自発的に搾乳ロボットにより搾乳されるので、上記の情報に加えて各牛の搾乳記録や種々のチェックリストなどが提供される。また、個体に応じた飼料給与やミルクの自動サンプリングなどもできる。同様に哺育中の子牛は哺乳ロボットにより個体に応じた哺乳がなされ、哺乳記録が提供され、整腸剤などの自動投与もできる。

各牛舎で排泄されたふん尿はふん尿槽に集められ、地下パイプを通じてバイオガスをプラントに送られる。バイオガスを回収し、発電機を運転して電気と八〇℃の温水を得ることができるようになっている。バイオガスを回収し、発電機を運転して電気と八〇℃の温水を得ることができるようになっている。

ハイテク・リサーチ・センターでは前記のような牛舎内外の情報の収集・管理に加え、各圃場からの飼料生産量やサイレージの生産量、飼料の給与量、ふん尿の発生量、液肥の生産量や散布量など物

質の循環量や土壌の状態、昆虫や微生物の関与などまで幅広く研究される。インテリジェント牛舎は、こうした研究に便利なように配慮されている。

なお、一九九九（平成11）年と翌二〇〇〇年には自走式フォレージハーベスター、消化液運搬・インジェクション装置、飼料混合給与装置、除ふん装置なども整備され、附属農場の施設・整備は一新された感がある。

#### 歴代附属農場農場長

- 高松三守（一九六〇～六一） 中曾根徳二（一九六二～六八） 森田 修（一九六九）  
久米小十郎（一九七〇～七二） 原田 勇（一九七二） 西埜 進（一九七三～七六） 横山節麿（一九七七～八四）  
井上錦次（一九八五～八七） 原田 勇（一九八八～九〇） 高橋清志（一九九一～九二）  
堀内一男（一九九三～九六） 岡本全弘（一九九七～〇二） 菊池直哉（二〇〇三～）

施設名	建設年 (西暦)	面積体積	備 考
フリーストール牛舎	2000	1439.6 m <sup>2</sup>	搾乳牛(フリーストール)、乾乳牛(ルースバーン)、分娩房、ホスピタルエリア、精密試験牛床、監視カメラ
ミルキングパーラー	2000	754.2 m <sup>2</sup>	ヘリンボーン(10頭シングル)、クラウドゲート、自動体重計、OA室
自動搾乳システム牛舎	2000	518.4 m <sup>2</sup>	搾乳ロボット、自動バーンスクレイパー、監視カメラ、自動体重計
育成牛舎	2000	432.0 m <sup>2</sup>	
哺育牛舎	2000	170.2 m <sup>2</sup>	搾乳ロボット、哺育ペン
バンカーサイロ	2000	397.4 m <sup>2</sup>	390 m <sup>3</sup> ×3基
		265.0 m <sup>2</sup>	390 m <sup>2</sup> ×2基
飼料調製室	2000	197.9 m <sup>2</sup>	
格納庫	2000	428.0 m <sup>2</sup>	
乳牛糞尿循環センター	1999	337.0 m <sup>2</sup>	発酵槽(250 m <sup>3</sup> )、ガスタンク(15 m <sup>3</sup> )、脱硫装置、コージェネ型発電装置(30 kW×2基)、スラリーストアー(2,100 m <sup>3</sup> )、自動運転・監視装置
教育研究棟施設			
教育研究棟(旧)	1960	496.1 m <sup>2</sup>	研究室、実験室、演習室、他
教育研究棟(新)	1991	600.1 m <sup>2</sup>	研究室、実験室、演習室、会議室、職員室、他
教育研究棟(新、増築)	2000	200.0 m <sup>2</sup>	実験室、資料室、演習室
合計		800.1 m <sup>2</sup>	
農場講義室	1983	265.7 m <sup>2</sup>	講義室、更衣室、トイレ、シャワー室
実習資材庫	1983	155.5 m <sup>2</sup>	
収 納 庫			
第1収納庫	1984	298.9 m <sup>2</sup>	機械整備、農機具、2棟
第2収納庫	1956	408.2 m <sup>2</sup>	車両、農作業機械、実習室、(木造)
第3収納庫	1976	129.6 m <sup>2</sup>	車両、農作業機械(D型)
第4収納庫	1968	159.7 m <sup>2</sup>	農作業機械、資材(木造)
	1974	129.6 m <sup>2</sup>	〃 (D型)
牧草乾燥室	1970	201.7 m <sup>2</sup>	乾燥機SF式設置
乾草収納庫	1991	291.6 m <sup>2</sup>	PH型ハウス 10.8×27.0
洗車場	1985	81.0 m <sup>2</sup>	
燃料タンク	1975	400 ℓ	
第1牛舎			
成牛舎	1979	440.4 m <sup>2</sup>	

第四章 酪農学園大学

施設名	建設年 (西暦)	面積体積	備考
育成舎	1979	265.2 m <sup>2</sup>	
牛乳処理室	1979	41.0 m <sup>2</sup>	
事務室	1979	41.0 m <sup>2</sup>	
飼料室(A・B)	1979	84.4 m <sup>2</sup>	
サイロ	1979	209.9 m <sup>2</sup>	4.8×11.6
〃	1979	236.9 m <sup>3</sup>	4.8×13.09
〃	1979	236.9 m <sup>3</sup>	4.8×13.09
堆肥場	1979	109.2 m <sup>2</sup>	10.45×10.45
堆肥場	1990	800.0 m <sup>2</sup>	40.0×20.0
尿溜	1976	107.5 m <sup>3</sup>	5.5×8.5×2.3
尿溜	1993	200.0 m <sup>3</sup>	二層式
飼料タンク	1978	3 t	
第2牛舎			
育成舎	1965	439.5 m <sup>2</sup>	
育成舎	1984	226.1 m <sup>2</sup>	
牛乳処理室	1965	20.1 m <sup>2</sup>	1990 (内部改造)
堆肥場	1965	288.0 m <sup>2</sup>	1990 (床増改築、屋根新築)
尿溜	1965	104.0 m <sup>3</sup>	1990 (補修)
農場管理棟	1984	252.0 m <sup>2</sup>	管理室、飼料室、講義室3、予備室、宿直室、シャワー室

第二部 学校再編と現況

機 械 面	取 得 年	規 格 形 式	台 数	主要農機具 (圃場関係)
動力関係				
トラクター	1997	ジョンディア 130 ps	1	
〃	1996	ジョンディア 110 ps	1	
〃	1999	ジョンディア 100 ps	1	
〃	1978	フォード 79 ps	1	
〃	'81 '82	シバウラ 73 ps	2	
〃	2000	イセキ 65 ps	1	
〃	1975	フォード 62 ps	1	
〃	1968	ジョンディア 60 ps	1	
〃	1968	コマツ 43.4 ps	1	
〃	1976	イセキ 22 ps	1	
耕起整地関係				
プラウ	'79 '83 '95	TYH-20-22*1、TYB18-20、RQY242F	3	
ロータリーハロー	'79 '79 '96	2300B、2000B、BXE2805 H3LB	3	
アップカッターロータリー	2000	コバシ KRU-3L		
ブレイクハロー	2000	石村鉄工 VBKH-9		
ディスクハロー	'83 '96	スター2024B、MOH2820	2	
鎮 圧 機	1966	円筒型	1	
サブソイラー	1984	ニプロ MC-500	1	
耕 運 機	1989	ヤンマーYS120D	1	
深耕ロータリー	1986	コバシ GL-201	1	
トレンチャー	1997	OM-1000	1	
施肥播種関係				
スラリースプレッダー	1999	EL48-4D-3200	1	
マニユアスプレッダー	1986	NK-514	1	
ダンプマニア	'90 '91	DH4371WY、DH4572WY	2	
バキュームカー	1981	S-330	1	
ブロードカスター	1993	スターTBC1600	1	
ブ ーム ソ ア	1997	MBS-8010	1	
グラスシーダー	1989	プリリオン SSPT-1201	1	
真空播種機	1994	田端 TV-4WR1	1	
中耕除草防除関係				
ロータリーカルチ	1984	ニプロ RK-302	1	
スプレヤー	'95 '99	BSM85E、ハッタ簡易型	2	
牧草収穫関係				
ディスクモア	'88 '95	NH-462、MDM-1300	2	
モアコンディショナー	'79 '93 '99	ターラップ (TSC210、336 型)、ジョンディア (JD-136)	3	
ジャイロテッター	'86 '88 '99	MGT-4800、4810、CTY5400	3	
ジャイロレーキ	'94 '97	TGR-5220、6410	2	

第四章 酪農学園大学

機 械 面	取 得 年	規 格 形 式	台 数
ヘイベラー	1981	JD-336	1
ローレベラー	1991	JD-550DX	1
ベールグラブ	1991	ヤンマーC15-SBG16-HT	1
ラッピングマシン	'91 '96	ヤンマーC37Fw12S、Fw15SA2B	2
ペールデストリビューター	1991	ヤンマーC37-T12	1
サイレージ収穫関係 自走ハーベスター	1999	JD6650、(ロータリークropp、 ピックアップユニット)	1
フォレージハーベスター	1994	JD3950	1
フォレージプロア	'79 '87	KB-57、WBI 型	2
運 搬 関 係 ハイダンプワゴン	1999	スター	1
四輪トレーラー	'88 '98	HT-46B	2
ト ラ ッ ク	'97 2000	イズズ (2t)、イズズエルフ (3.5t)	2
パワーショベル	1994	コマツ PC30-6	1
そ の 他 作 業 機 ガーデントラクター	1991	シバウラ GT-14	1
フレールカッター	1988	B-468	1
スノープロア	'99 2000	SB2403E、MSB2440	2
ニプロ芋掘り機	1987	D-653S(B)	1
整 備 関 係 器 具 発 電 機	1987	TSN-20PT	1
電 気 溶 接 機	'69 2001	MA-200D、ミニ YM180SL-5	2
エアコンプレッサー	1990	日立ベビコン	1
高圧クリーナー	1987	ゼネラルマシン K-35A	1
タッピングボール盤	1989	NST-14B	1
アセチレン溶接機	1989		1

第二部 学校再編と現況

機 械 名	取得年	規 格 形 式	台数	主要農機具 (牛舎機械器具)
インテリジェント牛舎				
フリストールバーン情報測定記録装置	2000	特注構成	1	
子牛群飼育用自動哺乳装置	2000	特注構成	1	
精密試験室データ収録システム	2000	特注構成	1	
ミルクングパーラー	2000	ヘリングボーン10頭単列ユニ バーサル	1	
バルククーラー	2000	土谷 TYH-RTI J40/ TYH-RT-15	2	
アイスビルダ及びプレートクーラー	2000	土谷 TCG-N40/SR-15	1	
パイプライン	2000	ユニバーサル OSAA-4-20	1	
シャトルストローク	2000		1	
ミニローダー	2000	コマツ SK07-3 キャビン付	1	
体重計	2000	nedap W-2000	1	
自動搾乳システム牛舎				
搾乳ロボット	2000	レリー社アストロノート	1	
バルククーラー及び予備タンク	2000	TYH-RTI J20	1	
アイスビルダ及びプレートクーラー	2000	土谷 TCG-N40/SR-15	1	
体重計	2000	nedap W-2000	1	
シャトルストローク	2000		1	
バーンスクレッパ	2000		1	
育成牛舎				
シャトルストローク	2000		1	
飼料調整室				
ショベルローダー	2000	川崎 50ZA	1	
TMR ミキサ	2000	ナイト 3030TR 計量器付	1	
サンプット				
攪拌機	2000	AE-7、カッティングナイフ付	2	
圧送ポンプ	2000	P-E	1	
油圧発生装置	2000		1	
第一牛舎関係				
パイプラインミルク	1979	オリオン OCR-50	1	
乳牛体重計	1992	クロマコーダ	1	
保定枱	1990	ジョイカル	1	
送風機	'89 '90	スイデン SKF-80	2	
精液凍結保存容器	1987	ダイヤ DR-17	1	
冷凍庫	1989	サンヨー-HF-37CH(A)	1	
クリフト水中攪拌機	1992	SR 4400-414 型	1	
自走式ロータリーモア	1999	パロネス GM64A-M	1	
第二牛舎関係				
動物用電子体重計	1990	ツルーテスト	1	
送風機	'90 '92	スイデン SKF-80	1	

第四章 酪農学園大学

機 械 名	取得年	規 格 形 式	台数
電 気 溶 接 機	1988	土谷	1
電 気 噴 霧 機	1988	HS 型	1
高 圧 洗 浄 機	1990	WaP.L-3000DLX	1
除 雪 機	1990	コバシ ST-10	1
自走式ロータリーモア	1996	パロネス GM64A-M	1

## (2) 酪農学園大学・短期大学部附属図書館

本学における図書館の歴史は一九四九(昭和24)年七月、開設された酪農大学部に始まる。当時の記録によると大学部が所蔵していた図書は六、四七四冊(和書四、一二二洋書二、三三二)となっているが、この中には、一九四二(昭和17)年、学園が設置した機農学校(高校)と共用のものも多く含まれていた。一九五〇年、酪農学園短期大学の設置によって大学部が吸収廃止されるに及び、この図書の一部は短期大学に引き継がれた。たまたま、「学校図書館法」の制定、施行により図書館の整備や図書の拡大が進められ、一九五五(昭和30)年、短期大学校舎内に二六八㎡の図書館を開設し、和洋書五、三三八冊を収蔵した。一九六〇年、酪農学園大学の設置によって同年九月、この図書館を大学校舎内に移し、大学、短大共用図書館として大学本館(現第一校舎)三階に二九〇㎡(事務室二八、書庫一二二、閲覧室一四〇)を施設し、図書一万六、六〇二冊を所蔵した。

その後、大学、短大の学科増設などによって学生数も二、三〇〇名と大幅に増加し、蔵書数も五万冊に達したため、一九七五(昭和50)年、大学院獣医学研究科修士課程の開設に伴い鉄筋コンクリート二階建を新築し、大学、短大附属図書館として九月一日、開設した現学生サービスセンター)。この図書館はその建築、設備など近代的なもので、総建坪九八二㎡(二階四二五、二階五五七)、閲覧室一九〇席(三二二席)。書庫収蔵能力一〇万冊(二九六㎡)のほか、参考図書、新聞雑誌コーナー、事務室、館長室、会議室、情報管理から職員休憩室、ポイラー室などが完備されており、閲覧室からは広大な石狩平野が展望でき、また後方には野幌原始林を身近に見ることができると恵まれた環境にあった。

しかし、大学の発展に伴って機構の見直しや新学科の設置、ことに環境システム学部開設によって施設の活用や見直しがされ、さらには蔵書数ならびに学生数が増加して狭くなり、新たな図書館の建設案が検討されてきた。一九九八(平成10)年の夏に学生ホール、ロビー、環境システム学部研究室、図書館を包括する一〇階建の中央館が完成して図書館は三〜六階に移転した。これによって新図書館は従来のおぼ二倍の規模となり利便性が大きく向上した。

さらに、二〇〇〇年秋には七階フロアにパソコンとその周辺機器およびインターネット環境を整備したオープンPCフロアを開設し、図書館内の情報メディア部門として、学生の利用が急増している。利用者サービスの向上の視点からこれまで行ってきた一般市民・卒業生への開放、開館時間の延長、定期試験時の休日開館、蔵書検索端末(OPAC)の機能更新、文献複写のメールでの受付開始、放送大学受講者増加に対応してAVブースの増設、文献検索CD-ROMのWeb版への移行などに加え、二〇〇二年四月から図書館の利用規程を一部改正し、貸出冊数の制限を緩和した。また二〇〇一年秋には資料紛失を防止することにより不明本の数を減らし、利用者の信頼を高めること、および正確な入館者数を知ることが目的として、ブックディテクションシステム(BDS…資料持ち出し防止装置)を導入した。

大学における情報の集積・発信の中心である図書館の今後の目標として、総合的メディアセンターへの方向性の模索が欠かせないものと思われる。大学内の他部署、あるいは学外の他図書館との連携を保ちながら電子ジャーナルの導入、ホームページの充実を進め、幅広い利用者の希望にこたえる図

書館づくりが進められている。

大学紀要Ⅱ高い学問水準を維持し、教員の学術、研究を促進するとともにその成果を発表するため、開学の翌一九六一（昭和36）年「酪農学園大学紀要」第一巻一号を創刊した。

その後一九六五（昭和40）年一〇月、酪農学園大学、同短大より選出された教職員によって「大学紀要委員会」が組織され、「大学紀要」の原稿選定、編集、刊行に当たってきたが、逐年、研究内容の充実によって寄稿者も次第に増加し、一九七四（昭和49）年より毎年一回発行を続けてきた。しかし、投稿論文数の増加や学科増に伴う研究分野の拡大により、一九七八（昭和53）年一二月発行の第七巻二号をもって合冊形式を終了し、翌一九七九年一〇月発行の第八巻一号から「酪農学園大学紀要・人文社会科学編Ⅱ Journal of the College of Dairying, Cultural and science」と「酪農学園大学紀要・自然科学編Ⅱ Journal of the College of Dairying, Natural science」の分冊形式となった。

一九八八（昭和63）年一〇月発行の第一三巻一号から「酪農学園大学紀要・人文社会科学編Ⅱ Journal of Rakuno Gakuen University, Cultural and Social Science」と「酪農学園大学紀要・自然科学編Ⅱ Journal of Rakuno Gakuen University, Natural Science」と名称を変更して、現在に至っている。

なお、二〇〇三年四月発行の第二七巻一号までの投稿論文数は、総計七四四編でその他学位論文要旨も二七〇編となっている。

現在、事務局を大学附属図書館内に置き、関係大学や農業試験場などに配布している。

現施設の概要（竣工 一九九八年四月一日）

延床面積合計（旧図書館書庫含む）四、七九一・三八 $\text{m}^2$

三階（九六八・七五 $\text{m}^2$ ）…閲覧スペース、事務室、作業室、職員休憩室等

四階（九六八・七五 $\text{m}^2$ ）…閲覧スペース、物品庫

五階（九六八・七五 $\text{m}^2$ ）…閲覧スペース、製本室・製本準備室、物品庫

六階（九六八・七五 $\text{m}^2$ ）…閲覧スペース、AVブース、AVブース、インターネット、CD-ROMコーナー、グルー

プ学習室、館長室、事務室、作業室、物品庫

七階（四八四・三八 $\text{m}^2$ ）…パソコン利用フロア

旧図書館書庫（現学生サービスセンター）四三二・〇〇 $\text{m}^2$ …（一）三階 各一四四・〇〇 $\text{m}^2$

### 歴代図書館館長

牛島純一（一九六〇） 山下淳志郎（一九六一～六四） 高杉成道（一九六五～六六）

川村健弥（一九六七～六八） 原田 勇（一九六九～七〇） 牛島純一（一九七一～七六）

松井幸夫（一九七七～八〇） 川上善三（一九八一～八六） 平尾和義（一九八七～八八）

小幡光正（一九八九～九二） 青柳 剛（一九九三～九四） 岩井 滋（一九九五～九六）

山本克博（一九九七～〇〇） 平賀武夫（二〇〇一～〇二） 林 正信（二〇〇三～）

第二部 学校再編と現況

図書館統計

項目／年度	1977 (昭和 52)	1980 (昭和 55)	1985 (昭和 60)	1990 (平成 2)	1995 (平成 7)	1996 (平成 8)
奉仕対象者 (学生・教職員他)	2,577	2,687	2,824	3,240	4,189	4,259
職員数	8	10	11	12	13	15
専任	8	8	8	9	8	9
臨時	0	2	3	3	5	6
蔵書冊数	69,000	85,000	128,681	179,080	222,866	231,321
雑誌	1,118	1,510	1,693	2,367	2,685	2,685
和雑誌	862	1,134	1,282	1,823	2,146	2,146
洋雑誌	256	376	411	544	539	539
年間開館日数	270	283	247	269	273	284
入館者数			51,460	66,162	88,421	89,760
利用 (貸出) 者数	3,459	3,015	3,856	5,900	7,974	8,787
利用 (貸出) 冊数	5,000	5,000	7,254	11,154	15,246	16,337
相互利用件数	349	684	2,215	1,971	4,376	4,641
依頼	323	583	1,832	1,634	2,696	2,527
受付	26	101	383	337	1,680	2,114

項目／年度	1997 (平成 9)	1998 (平成 10)	1999 (平成 11)	2000 (平成 12)	2001 (平成 13)	2002 (平成 14)
奉仕対象者 (学生・教職員他)	4,215	4,213	4,335	4,486	4,785	4,785
職員数	15	20	20	16	14	12
専任	8	8	8	8	8	8
臨時	7	12	12	8	6	4
蔵書冊数	239,475	251,484	259,956	270,477	279,647	289,041
雑誌	2,793	2,831	2,976	3,037	3,082	3,235
和雑誌	2,257	2,288	2,419	2,483	2,542	2,686
洋雑誌	536	543	557	554	540	549
年間開館日数	282	245	286	284	282	288
入館者数	87,954	102,679	143,778	163,362	184,749	220,011
利用 (貸出) 者数	7,529	7,851	10,176	9,921	11,110	12,177
利用 (貸出) 冊数	14,684	15,808	19,313	18,813	21,495	24,962
相互利用件数	4,153	3,508	4,831	5,796	6,620	5,885
依頼	1,948	1,660	2,229	2,910	3,247	3,575
受付	2,205	1,848	2,602	2,886	3,373	2,310

(3) 酪農学園大学エクステンションセンター

高度情報化社会、国際化、生涯学習の進展、ハイテクノロジーなど、大きく変貌を遂げつつある社会への学園としての対応策については、学園理事会、大学・短大合同教授会などの諸機関において精力的に検討が進められてきたが、これらに対する機能を総合的に推進するものとして、一九八九(平成1)年四月 酪農学園大学エクステンションセンターが正式に発足した。

当センターの主な業務は、一、生涯学習 二、国際交流 三、普及・出版 四、研究・研修活動の四本柱となっているが、特に三の普及・出版については、短期大学酪農学校においておよそ四〇年の歴史を有する月刊誌「近代酪農」の編集・出版業務が引き継がれ、重要な事業部門を形成することになった。

発足時は、① 国際的視野に立つて酪農に関する情報を提供する月刊誌「酪農ジャーナル」(「近代酪農」改題)をはじめとする農業関係書籍の出版、② 市民教養講座・酪農公開講座などの公開講座の開催、③ 学術交流協定に基づく協定締結校との交流事業、の三点であったが、一九九三(平成5)年から新たに④ 委託研究などの受託窓口業務が加わり、いわゆる四本柱の下、業務を推進している。

普及・出版Ⅱ「酪農ジャーナル」本誌が一九九七(平成9)年に創刊五〇周年を迎え、大学が出版する普及刊行物として全国的にも例を見ない歴史と伝統を有している。その内容も国際的視野に立った酪農に関するものばかりでなく、卒業生や在校生の父母をも視野に入れたカレッジレポートを掲載するなど多岐にわたっている。

別冊（臨時増刊号）として「くらしのサイエンス」、「酪農経営日誌」などを毎年提供してきたが、本学の持つ多彩性を広くアピールしていた「くらしのサイエンス」は業務見直しに伴い、二五号をもって一九九九年（平成11）年で休刊となった。

他の別冊としては、「酪農ジャーナル」創刊四五周年を記念して「黄金の土」を一九九二年（平成4）年に復刻・出版し、一九九七年（平成9）年には創刊五〇周年を記念した「日本酪農の歩み」を出版したほか、「90年代の日本酪農」（一九九〇）、「日本型酪農のデザイン」（一九九三）、「マニユアマニユアル'96」（一九九五）、「21世紀への酪農新技術」（一九九六）、「酪農家のための土づくり講座」（二〇〇三）など一四点を出版し、新しい情報の提供に努めている。

公開講座Ⅱ一般市民向けとして一九八九（平成1）年から始まった恵庭市民教養講座に加え、新たに野幌公民館を会場とする江別市民教養講座を一九九〇（平成2）年から開講した。恵庭市民教養講座は業務見直しのため、一九九〇年で閉講したが、江別市民教養講座は毎回多くの市民が受講し、好評のうちに継続している。

また、一九九四年（平成6）年からは石狩町（市）民公開講座が加わり、現在も継続している。その間、道新文化センターとの提携で、一九九四年（平成6）年から五年間、講座を開講した。さらには道新提携講座を発展させた「わんわん学校」を一九九七年（平成9）年から開講した。酪農関係者向けに年一回開講される酪農公開講座は、一九九九年（平成11）年で第三〇回を迎え、道内にとどまらず南は九州各県まで日本各地で、その都度地元生産者団体・酪農学園の同窓生の協賛により、多くの受講者を集めて

開催されている（別掲）。そのほか、酪農ミニ講座を各地で開催している。

また、リカレント教育の一環として、道内高校の理科・農業科担当教員を対象とした「理科実験講座」を一九八八（昭和63）年から毎年夏休みに北海道教育委員会の後援を得て開講し、本学卒業生を含む多数の現役教員に、本学教員の持つ多彩な教育研究情報を提供し、高校での授業に役立てられている。さらには、現場の獣医師を対象とした「大動物臨床教育セミナー」を一九九七（平成9）年から開催している。将来を見越した企画として、北海道牛乳普及協会などの主催によって、道内の小学五・六年生四〇名を集めて行われる「元気！ ミルク大学」を本学の教職員・学生の全面的協力を得て一九九七年から開校し毎回定員を超える申し込み状況にある。

国際交流Ⅱ現在九カ国の一三大学、二研究機関と学術交流協定（二六協定）を締結し、教員の交流・学術出版物の交換などを行っている（別掲）。一九九三（平成5）年からは韓国安城産業大学校（現韓京大 学校）と合同で、日韓酪農セミナーを開催してきたが、一九九九（平成11）年からは新たに台湾の嘉義技術学院と屏東科技大学が加わり、アジア酪農会議として持ち回りで開催している。

一九九八（平成10）年から学生の海外短期酪農・農業実習を企画し、カナダ・アメリカ・デンマーク・ニュージーランドに派遣している。

また、協定先のほか、私立大学協会、日本獣医師会、JICAなどから毎年多数の研究員、研修員を受け入れている。

委託研究・委託研修Ⅱ受託数は一九九三年に窓口となって以来着実に増加し、二〇〇二年には委託

研究三二件、委託研修二件となっている。

事務所の移設はこれらの業務は、発足した一九八九（平成1）年から一九九一年までは短期大学酪農学校で行われていたが、一九九一年一〇月から法人事務局跡に移し、さらに中央館の完成に伴って現在の本館一階に移動した。

**歴代エクステンションセンター所長**

平尾和義（一九八九～九〇） 平棟孝志（一九九一～九二） 中原准一（一九九三～九四）

横山節麿（一九九五～九六） 堀内一男（一九九七～〇〇） 永幡 肇（二〇〇一～〇二）

松中照夫（二〇〇三～）

第四章 酪農学園大学

学術交流協定締結先一覧（9カ国・13大学・2研究機関、16協定）

国名	協定先	締結年月日
カナダ	アルバータ州立大学農学部	1985. 8. 1
	オールズ・カレッジ	1998. 5. 7
U.S.A	オハイオ州立大学獣医学部・農学部	1988.11.17
	オハイオ州立大学食品農業環境科学部	1998.12.17
	コーネル大学	1991. 6. 3
中国	内モンゴ農業大学	2002. 3. 6
	新疆農業大学	1997. 7.31
	内モンゴ民族大学	2002. 2.16
ポーランド	ワルシャワ農業大学	1994. 5.19
韓国	国立韓京大学校	1994.10.14
	韓国食品開発研究院	2001.10.31
デンマーク	デンマーク国立農業研究所	1995. 2.15
中華民国 (台湾)	国立屏東科技大学	1998. 8.31
	国立嘉義大学	2001. 8. 9
ドイツ	ハノーバー獣医科大学	2001. 1.22
フィリピン	東フィリピン大学獣医学部	2002. 2. 4

酪農公開講座開催一覧

開催年月日	場 所	開催回数	主 題	派遣講師	参加者
一九七〇・一二・二一～二二	中標津町	第一回	酪農経営の基本に立ち返つて	七名	五〇
一九七一・一一・二九～三〇	稚内市	第二回	宗谷酪農の発展方向をさぐる	六	一一二
一九七二・一一・二〇～二一	釧路市	第三回	西紋西部地区酪農の将来をさぐる	六	四五
一九七三・五・八～九	帯広市	第四回	土・草・牛を健やかに	四	九〇
一九七四・二・五～六	長万部町	第五回	酪農経営の基本課題	四	八五
一九七五・一・二七～二八	紋別・北見市	第六回	酪農経営の試練と対応	五	二六〇
一九七六・一一・二九	網走市	第七回	酪農経営の体質強化をめざして	五	一二〇
一九七七・一〇・一二	中頓別町	第八回	北の国から	六	二一一
一九七八・一〇・二六	猿払村	第九回	西紋酪農における技術戦略と展開	六	一五一
一九七九・一二・五	興部町	第一〇回	九州における酪農経営の技術展開	五	一〇〇
一九八〇・一二・二〇	千歳市	第一一回	と人間	三	一三七
一九八一・一二・二五	標茶町	第一二回		三	一二〇
一九八二・一二・一八	大樹町	第一三回		四	一四〇
一九八三・一二・六	中標津町	第一四回		三	一二〇
一九八四・九・一	札幌市	第一五回		三	七四〇
一九八五・一一・三〇	滝上町	第一六回		三	二〇〇
一九八五・一〇・五	札幌市	第一七回		三	一〇〇
一九八六・一一・二六	鹿児島市	第一七回		三	一五〇

第四章 酪農学園大学

第一八回	福岡市	一九八六・一一・二八	健土健民	三	二〇〇
第一九回	瀬棚町	一九八七・一一・二五	健土健民	四	一〇〇
第二〇回	別海町	一九八八・六・七〇八	自由化における農村経済基盤を考 える	六	一三七
	東藻琴村	一九八九・一一・二七		四	一六〇
第二一回	浜中町	一九九〇・一〇・六	浜中町における産業振興の展望	四	一六〇
第二二回	江別市	一九九一・一一・二九	21世紀の農業者への手紙	四	四七六
第二三回	歌登町	一九九二・一一・一一	持続的酪農経営への展望	四	二〇四
	千葉県	一九九三・三・九	【千葉県酪農公開講座】21世紀への 酪農デザイン	二	二五〇
第二四回	山形県米沢市	一九九三・一一・二四	21世紀への酪農デザイン	四	二五二
	岩手県葛巻町	一九九三・一一・二六		四	一七〇
第二五回	広島県三次市	一九九四・一一・二二	日本酪農21世紀へのステップ	三	一五〇
	岡山県旭町	一九九四・一一・二四		三	九〇
第二六回	愛媛県野村町	一九九五・一一・二五	酪農新時代への招待	三	二四〇
	徳島県土成町	一九九五・一一・一六		三	一一〇
第二七回	長野県豊科町	一九九六・一一・二六	酪農新時代へのパスポート	三	一〇〇
	群馬県前橋市	一九九六・一一・二八		三	一八〇
第二八回	青森県東北町	一九九七・一一・一一	21世紀に向けたミルクづくり	三	八三
	秋田県大館市	一九九七・一一・一二		三	八〇
第二九回	宮城県宮崎市	一九九八・一一・一八	21世紀に向けての持続的酪農経営	三	一一三

第三〇回	熊本県泗水町	一九九八・一一・二〇	三	六八
	宮城県大和町	一九九九・一二・八	三	一八七
	福島県郡山市	一九九九・一二・一〇	三	一〇一
第三一回	岐阜県岐阜市	二〇〇〇・一一・二八	三	一〇七
	愛知県幸田町	二〇〇〇・一一・二九	三	一四〇
第三二回	帯広市	二〇〇一・一〇・二五	二	四六
	中標津町	二〇〇一・一〇・二六	二	九四
第三三回	鹿児島県栗野町	二〇〇二・一一・二七	二	一五三
	福岡県久留米市	二〇〇二・一一・二九	二	六三

21世紀酪農の将来展望をさぐる

乳牛における微生物の功罪

#### (4) 酪農学園大学附属家畜病院・大動物臨床センター

大学では獣医学科の設置に伴い、その臨床実験、実習のため附属家畜病院を一九六八（昭和43）年開設した。この病院は病畜舎を含めて三五七㎡の木造二階建てで、この中に臨床二講座を設けて臨床教育を行ってきたが、その対象はもっぱら学園内で飼養している家畜、家禽に置いていた。

しかし、年々、獣医学の高度化、獣医技術の改革が進む中で、学園周辺も急速に都市化して犬、猫などの愛玩動物の診療数も増加し、臨床獣医学の分野が大幅に変化してきた。そのため、大学ではこれに対応して、一九七五（昭和50）年九月獣医学科第一校舎鉄筋コンクリート三階建の中に、診療治療室六九八㎡を併置し、旧病棟を合わせ一、〇五五㎡をもって附属家畜病院として新生した。

当時、附属病院の中には、家畜内科、家畜外科、臨床繁殖の三診療科を置いて増え続ける診療頭数

に対応していたが、その後内科一・二、外科一・二、病理、さらに一九九二（平成４）年に待望の大動物臨床センターが開設して七診療科体制となり医療施設も大幅に改善された。

現在、全国に獣医学科を置いている大学は一六校を数えるが、その中であつて本学の附属家畜病院は小動物と大動物家畜を主体とした診療を行つており、年間診療総頭数は二〇〇〇年以降は、全国一である（一三、九一七頭・二〇〇二年）。特に大動物の診療頭数は四、五一九頭（二〇〇二年三月）と二番目の岩手大学一、四四七頭を大きく引き離している。また、これらは貴重な教材となつて臨床獣医学の教育、研究に貢献しており特色のある獣医活動を続けている。

なお、最近の診察の状況は別掲のとおりである。

大動物臨床センターⅡ一九九二（平成４）年八月、大動物の入院および実習施設として大動物臨床センターが完成した。本学科の設置趣旨である酪農産業に広く貢献できる獣医師を養成するために開学以来大動物をできるだけ多数利用する実学教育を目指して努力してきた。しかし、これまでの入院および実習畜舎は三四〇㎡と手狭でプレハブ建築を増築して対応していた。

新築の施設は一、四一七㎡でこれまでの施設も改修して実験豚舎および隔離畜舎として利用することになり（総工費約二億九千万円）、入院用の設備は格段に充実した。この大動物臨床センターの完成を記念し、九月八日、日本獣医師会常務理事の五十嵐幸男氏による「産業動物獣医分野のあゆみと将来展望」のテーマで講演会も実施した。センターの建設場所はこれまで肉牛研究会と馬術部の部室のあつた場所で、獣医学科の一〇四号館とも至近距離にある。

この建物の特徴は畜舎部分がホールを境にして診療室、実習室、手術室と隣接しており、人と動物の動きを最少限にして診療と実習の効率化を図った点にある。

附属動物病院建設着工は近年、動物医療、臨床教育ならびに学術研究の面で多様化が進み、獣医師療の高度化と卒後教育、普及活動が求められるようになったことから、一層の充実を図るために、二〇〇四(平成16)年四月の開業を目指し、総面積七、八一三㎡と、国内の大学附属動物病院としては最大規模の新病院の建設を進めている。牛海綿状脳症(BSE)などの家畜の疾病やボルナ病などの人獣共通感染症が問題になっている中、診療、研究、教育の総合施設を目指す一方、野性動物の保護、診療、研究も行う計画である。

#### 歴代家畜病院院長

- 沼田芳明(一九七一～七二) 河田啓一郎(一九八〇) 其田三夫(一九八一～八二)  
 河田啓一郎(一九八三～八四) 其田三夫(一九八五～八六) 新山雅美(一九八七～八八)  
 河田啓一郎(一九八九～九〇) 大友勘十郎(一九九一～九四) 中尾敏彦(一九九五～九六)  
 小谷忠生(一九九七～〇〇) 新山雅美(二〇〇一～)

第四章 酪農学園大学

年度別の診療頭数

(単位：頭数)

年度	馬	牛	豚	緬山羊	犬	猫	その他	診療総頭数
1976	81	457	172	10	285	181	3	1,189
1992	25	456	1	1	2,809	970	49	4,311
1993	19	1,160	2	7	2,412	810	32	4,442
1994	20	2,348	8	6	2,674	739	112	5,907
1995	26	2,819	27	12	2,806	677	69	6,436
1996	18	4,063	17	4	4,213	948	106	9,369
1997	116	5,216	823	0	5,520	1,001	85	12,761
1998	61	5,813	846	0	5,545	874	122	13,261
1999	58	7,044	921	0	6,315	963	148	15,449
2000	84	8,745	1,191	0	6,435	680	143	17,278
2001	248	5,782	1,233	0	6,989	896	90	15,238
2002	70	4,215	816	0	7,946	678	192	13,917

年度別の診療収入

(単位：千円)

年度	馬	牛	豚	緬山羊	犬	猫	その他	診療収入計
1992	271	2,757	1	11	20,082	5,756	121	28,998
1993	208	5,836	7	16	18,614	4,441	70	29,192
1994	353	8,546	43	35	22,667	5,114	458	37,216
1995	628	11,236	146	28	25,408	4,041	181	41,668
1996	501	14,660	119	15	33,498	5,593	256	54,642
1997	1,522	14,398	114	0	50,368	6,447	293	73,142
1998	2,891	9,919	116	0	63,790	7,630	709	85,054
1999	729	10,137	109	0	74,461	8,510	676	94,622
2000	2,007	20,340	101	0	79,958	6,299	632	109,337
2001	2,654	22,270	90	0	85,270	7,992	460	118,736
2002	1,363	15,407	72	0	97,454	6,302	391	120,989

## 六 学生生活

### 学生生活

大学は人口一八五万を擁する国際都市札幌市に近接し、緑豊かな自然の中に産業、文化の街として発展を遂げている江別市に位置し、市の南西部の丘陵地に野幌の広大な原始林（道立野幌自然公園）を背景とした西野幌文教地区にある。日本でも最大級の広大なキャンパスは自然に恵まれた閑静な環境にあり、道立図書館、北海道教育研究所、札幌学院大学、北海道浅井学園大学、北海道情報大学、開拓記念館など多くの教育機関や公私立学校が林立している。

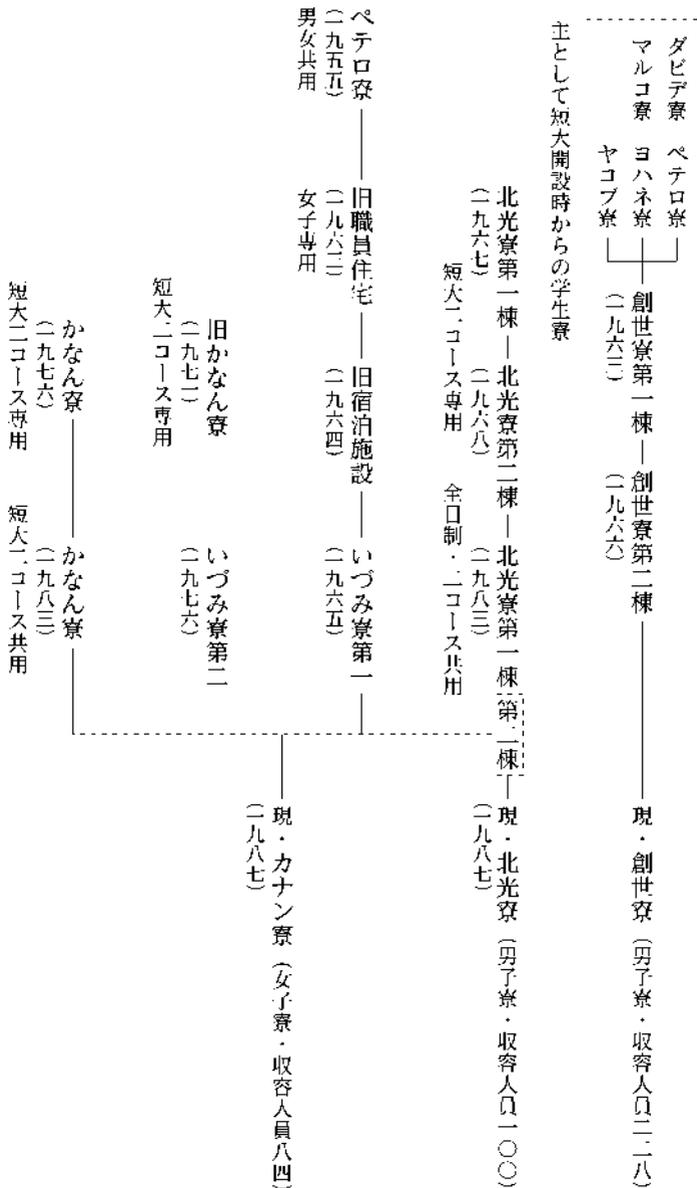
こうした環境の中で多くの学生が、学理、技術の研究体得と、大学人としての人間形成を目指して研さんに努めている。

**学生寮** 大学における学生寮の歴史は大学部、短大の開設とともに始まり、大きく変化しながら今日に至っている。

すなわち、本学学生の多くは教育の特性から、道内各市町村や府県のいわゆる遠隔地出身者によつて占められ、自宅からの通学者は極めて少なく、ほとんどが下宿、借間生活の余儀ない状況にあった。そのため、大学部や短大では、機農高校より移譲を受けた農場寮など木造五棟を活用して学生寮としてきた。

その後、一九六〇（昭和35）年の大学設置および学科の増設に伴い学生数は逐年増加した。しかし、当時本学を含む札幌市厚別、江別市西野幌の文教地区には、多くの学校が新設されたため、学生数も

学生寮の推移



急増し、学生の住居確保は困難となってきた。

大学ではこうした状況に対応するため、一九六二（昭和37）～一九六七（昭和42）年にわたり、創世寮の二棟（男子、収容人員二三八名）と、いづみ寮（女子、収容人員二〇名）を逐次新設して、大学、短大の学生を収容した。また、短大第二コースの学生のため北光寮二棟（男子、収容人員二〇四名）と、かなん寮（女子、収容人員二五名）を設置してきた。

しかし、その後短大・大学の学科の新設、あるいは再編に伴い、また、寮の老朽化も重なって統合の経緯（図示）をたどって、現在、男子寮として創世寮および北光寮、女子寮としてカナン寮の三つの寮となっている。

これらの学生寮は学生の「福利厚生のための施設」であるとともに大学教育の理念に基づき、キリスト教主義による共同生活を通じて、人格の錬成と学究生活の充実を図るという教育目的を持つての設置であった。

学園の大自然を背景に校舎に隣接し、学生部の管理の下に寮監、寮母のほか専門の栄養士を置き、寮生より選出された委員による寮生委員会を設けて寮運営を行ってきた。

しかし、寮母制度は創世寮は一九九〇（平成2）年度、カナン寮は一九九三（平成5）年度までで廃し、現在は、昼間のみ非常勤職員（各寮一名）を事務室に配置して夜間は寮生だけの居住体制となっている。

一方、食事は、創世寮が三食、北光寮・カナン寮が二食を管理栄養士一名（専任職員）調理員一四名（専任職員六名、非常勤職員八名）で提供している。

寮の主な行事として、創世寮の五〇km強歩・各寮の寮祭・スポーツ大会・各種レクリエーションなどが寮生委員会を中心として行われている。また寮生活動の特記事項として、一九九九（平成11）年一月、創世寮・北光寮・カナン寮の献血活動に対して三寮それぞれに日本赤十字社より感謝状が贈呈された。一九九九（平成11）年の延べ献血者数は四二七名であった。

**活発化する課外活動** 大学は学生の自己形成の場であり、その自主性を養うため正課のほかに課外活動がある。この課外活動は体育系部・サークルと文化系部・サークルの二つからなっており、現在合わせて八九団体が登録され、各団体には教職員による顧問を配している。

体育系部・サークルⅡ心身の鍛練を通じて人の和を学ぶこととしている。体育系部・サークルは開学時にはソフトテニス部・剣道部・馬術部・男子バスケットボール部・ラグビー部・山岳部の六団体であったが、現在は五二団体（別表）に増えている。

文化系部・サークルⅡ教室における理論を実践的体験を通じて深めるクラブをはじめ、研究会、同好会的なものも多い文化系部・サークルは、開学時にはわずか合唱団一つにすぎなかったが、現在は三七団体（別表）になっている。

教育研究施設に比べて課外活動施設はかなり老朽化が進んでおり、必ずしも恵まれた環境にあるとはいえない。そのような中においてクラブ・サークル数の増加や好成績を収める団体、個人が増えてきており、ここ十数年間で著しく発展、活発化してきた。

特に近年、女子学生の増加に伴い、各競技種目において女子選手が目覚ましい活躍をしており、一

九九五（平成7）年度の北海道地区大学体育大会において女子総合優勝を勝ち取り、初めて優勝旗を本学にもたらした。

また、本学の課外活動団体に所属せず、学外において活動している学生も、国民体育大会の北海道代表選手として活躍し、さらに近年は国内の大会にとどまらず、各種国際大会にも出場し活躍する選手が出てきた。長い伝統を持つ馬術部は国内の諸大会で輝かしい成績を収めてきたが、一九九五年の日韓馬術大会の日本選手団員に選ばれた道谷貴広、そして本学初のオリンピック選手、里見結子（九八年・長野オリンピック女子アイスホッケー日本代表選手）らの活躍が特筆されよう。

また、文化系のクラブも定期発表会や機関紙の発行にとどまらず各種コンテストなどで好成績を収める団体が増えてきた。特異な例だが、在学時には肉牛研究会に籍をおき、酪農への夢をふくらませたタレントの田中義剛は中札内村に農場を開いて、後輩に夢を与えている。

第四章 酪農学園大学

体育系 (52 団体)		
部・サークル名	設 立	部員数
ソフトテニス部	1960・4	21
剣道部	1960・4	36
馬術部	1960・4	38
男子バスケットボール部	1960・4	44
ラグビー部	1960・4	33
山岳部	1960・4	2
硬式野球部 (旧・準硬式野球部として発足。 1975・6月に硬式野球部に移行)	1960・6	40
男子バレーボール部	1961・4	24
柔道部	1961・4	29
バドミントン部	1961・5	48
ワンダーフォーゲル部	1964・4	18
フェンシング部	1965・4	2
スキー部	1966・3	5
ウエイトリフティング部	1966・4	10
サッカー部	1967・4	33
陸上競技部	1968・4	32
応援団	1969・5	0
少林寺拳法部	1969・9	33
日本拳法部	1973・11	11
ゴルフ部	1974・4	12
フルコンタクト空手部	1975・5	12
アメリカンフットボール部	1975・9	20
空手道部	1975・11	9
アーチェリー部	1976・4	15
弓道部	1976・5	50
水泳部酪泳会	1977・4	29
合気道部	1977・9	29
硬式テニス部	1978・4	21
ハザードクラブ	1978・9	25
熱気球愛好会	1980・10	22
アイスホッケー部	1981・6	29
アウトドアライフ研究会	1983・12	33
正道空手部	1984・12	32
フリーウェイスポーツクラブ	1985・2	39
軟式野球部	1989・5	30
ソフトボール部	1989・6	34
女子バスケットボール部	1990・4	18
フリースタイルスキークラブ	1990・5	90
基礎スキーサークル VIRAGE	1991・10	18
女子バレーボール部	1991・12	20
North Paddler	1992・11	16

課外活動団体名 (二〇〇三年五月現在)

体育系 (52 団体)		
部・サークル名	設 立	部員数
TABLE TENNIS CLUB	1993・5	27
Ally-oop	1994・4	0
ハンドボール部	1994・6	24
ビリヤードサークル Number 9	1994・7	25
フットサルサークル「R-Foot」	1999・5	23
ラクロス部	1999・11	33
TEAM 素潜り	2001・5	9
ボクシング部	2001・7	12
準硬式野球部	2002・4	19
自転車部	2002・7	8
フリークライミングサークル「ピクピク同志団」	2002・11	9

文化系 (37 団体)		
部・サークル名	設 立	部員数
合唱団	1960・5	6
軽音楽同好会	1961・4	46
写真部	1962・4	47
乳牛研究会	1962・4	25
絵画研究会	1964・4	5
肉牛研究会	1967・6	21
音楽研究会	1971・4	37
生命哲学研究会	1973・4	5
落語研究会	1973・7	1
野生動物生態研究会	1977・5	27
近代演劇	1977・6	17
キリスト者学生会	1978・5	4
吹奏楽団	1979・5	52
旅行サークル “The travelers”	1980・10	39
ブルーグラス研究所	1980・11	18
漫画倶楽部	1983・6	21
創作文化研究会	1990・1	0
フロンティア 21	1990・2	26
手話サークルもみじの会	1991・6	27
RPG 研究会	1991・10	2
FISHING CLUB	1991・11	12
食と農を考える会	1991・12	1
酪農学園ボランティアクラブ	1992・5	5
星のサークルー昇一	1992・5	14
ESS	1993・5	30
酪農学園 YOSAKOI サークル “祭”	1997・7	157

#### 第四章 酪農学園大学

文化系 (37 団体)		
部・サークル名	設 立	部員数
酪農茶道部	1998・4	22
環境サークル `GEN`	1998・8	33
AURO エコサークル	1999・4	0
中小家畜研究会	1999・5	29
本気で教師を目指す会	1999・11	0
酪農囲碁将棋研究会「飛翔」	2000・5	18
野菜サークル (V.R)	2000・5	12
植林研究会	2000・11	25
プロレス研究会 G.K.F	2000・11	0
昔遊びサークル「荒くれ Kids」	2001・7	30
温泉サークル	2002・10	17

### 奨学資金制度

本学学生の奨学金は、日本育英会の奨学金制度を発足以来多くの学生が依存してきた。一九九八(平成10)年には制度が一部変わり第一種奨学生に加え、きぼう21プラン奨学生(第二種)が大幅に増員され、貸与月額についても第一種は二年ごとに変更される固定金額に対し、きぼう21プランは四種類より希望額を選択する方法となり、二〇〇〇(平成12)年度は第一種二八九名、第二種七六名、きぼう21プラン四二四名となっている。

また、短期大学部学生については第一種九名、きぼう21プラン七名となっており、大学院生は一種二三名、きぼう21プラン一八名となっている。

酪農育英会奨学金の貸与を受けているものは、大学四六名、大学院一名となっている。本学独自の「酪農学園大学(同短期大学部)奨学金貸与制度」は、一九八八(昭和63)年より実施され、卒業後貸与を受けた年数の三倍の年数内に返還することを条件に貸与してきたが、さらに二〇〇三年度からは無利子として卒業後一〇年以内の返還に改正し、学生の便宜を図っている。

奨学金制度とは別に、一九八六(昭和61)年度より授業料免除制度が施行され、一九九四(平成6)年度からは私費外国人留学生も対象としてきた。また、一九九五(平成7)年の阪神大震災により被害を受けた新入生・在学生に対して当年度の学校納入金すべての免除を行ってきた。これらの奨学金の貸与、給付を受けるには単に経済的理由のみならず、学業成績も優秀でなければならないという条件がある。

### 健康管理と医療互助会

学生の健康管理は、短大開設時の一九五〇(昭和25)年から、当時の機農

高校校医に依託していたが、一九六一（昭和36）年、同校内に学生診察室を設け高校、短大、大学の学生の診療救急処置に当たった。そして、一九六七（昭和42）年学園内に職員、学生のための医務室が設置された。それ以後、学生の利用率が年々増加し、一九八六（昭和61）年四月、それまで学園所属であった看護師を学生部所属とし、学生の健康管理をより充実させる方向に転換した。その後、何度かの移転を経て一九九八（平成10）年、現在の学生サービスセンターの一階に移転した。このことによつて、徐々に学生の医務室利用率は上昇し、現在は学生の心身の健康相談はもとより、常備薬投与、外傷処置、週一回の医師による健康相談などに成果を上げている。

**学生相談室** 一九七五（昭和50）年から学生相談室を設け主に心の面の病や悩みを相談できるようにした。二〇〇〇年度からは月一度の専門医と常時滞在するカンセララーが対応している。

また、大学は学生に対する医療費の負担をできるだけ軽減するため、学園の全学生、生徒の加入による医療互助会制度を早くから採り入れて会員の医療費の一部を補助している。

**学生会館** 一九六五（昭和40）年建設された学生会館は木造二階建一、五五五㎡で、当時としては広大な建築物であった。この中には三〇〇名収容の大講堂、中・小集会室のほか、生活協同組合の経営する食堂、理髪室などがあり、学生、教職員の話し合いの場となり、また、集会室の利用などにより学生自治活動の中心にもなっていた。その後、学生数の増に伴つて学内施設の整備拡大や生活協同組合の移転があり、近年は主としてクラブ・サークルなどの部室や会議に活用されている。

**中央館ロビー・学生ホール** 一九九八（平成10）年三月に完成した中央館一・二階は、学生が自由

にくつろげるロビーとなっている。一階は軽食堂を併設した飲食の場として、二階は各種の表彰式や小規模の講演会などが行える談話室とクラブのミーティングや作品展示が可能な場所を併設し、日常の学生生活に十分な機能と空間を備えている。

学生ホールは、音楽系サークルなど各種クラブ・サークルの発表の場として、また大学祭、映画上映、中規模の講演会など、学生が自由に利用できる施設となっている。

**酪農学園生活協同組合**（略称・学園生協） 短期大学開学によって学生部厚生補導課管理の下に、学生の福利厚生のための事業として食堂部、購売部、理髪部の三部で始められ、学生委員の協力を得て運営されてきた。その後、事業は逐次拡大し一九六五（昭和40）年四月、消費生活協同組合法による酪農学園生活協同組合に発展し、さらに一九八七（昭和62）年二月には待望の「酪農学園ホール」の完成に伴い移転した。

現在、学園生協は学園の教職員および学生を組合員とし、大学の福利厚生事業の一つとして内容も充実させ、また食堂、購売、書籍、理髪の四部門を経営している。一九八七（昭和62）年一二月たくぎんCD機、九二年一一月に野幌郵便局のATM三台が設置されるなど学生の日常生活全般にわたっている。特に食堂は学生の需要を満たす施設が付近になく、日常生活に占める比重は極めて大きいものがある。

第四章 酪農学園大学

酪農学部 酪農学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1960(昭和 35)	100	265	180	180	—
1961( 同 36)	100	444	180	351	—
1962( 同 37)	100	405	176	525	—
1963( 同 38)	100	331	167	691	168
1964( 同 39)	100	361	161	688	161
1965( 同 40)	100	367	190	708	146
1966( 同 41)	160	376	194	720	167
1967( 同 42)	160	442	194	735	127
1968( 同 43)	160	451	180	767	172
1969( 同 44)	160	489	204	794	175
1970( 同 45)	160	407	180	762	164
1971( 同 46)	160	369	183	763	164
1972( 同 47)	160	288	196	779	156
1973( 同 48)	160	224	219	835	184
1974( 同 49)	160	283	206	850	175
1975( 同 50)	160	361	218	876	174
1976( 同 51)	160	610	224	917	205
1977( 同 52)	160	755	210	917	194
1978( 同 53)	160	1,099	207	913	220
1979( 同 54)	160	667	216	894	210
1980( 同 55)	160	525	206	874	213
1981( 同 56)	160	519	223	866	197
1982( 同 57)	160	539	218	877	215
1983( 同 58)	160	470	233	886	193
1984( 同 59)	160	406	208	889	183
1985( 同 60)	160	542	212	910	211
1986( 同 61)	160	811	226	915	228
1987( 同 62)	160	857	225	918	203
1988( 同 63)	160	779	192	894	209
1989(平成 1)	160	679	192	884	227
1990( 同 2)	160	856	164	815	231
1991( 同 3)	160	935	205	799	191
1992( 同 4)	180	1,080	193	814	190
1993( 同 5)	180	1,083	194	829	185
1994( 同 6)	180	1,059	170	828	219
1995( 同 7)	165	1,010	175	797	199

七  
学  
生  
数  
の  
推  
移

第二部 学校再編と現況

酪農学部 酪農学科 (つづき)

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1996(平成 8)	165	1,663	171	785	210
1997(同 9)	165	1,439	169	767	184
1998(同 10)	165	1,128	171	775	182
1999(同 11)	165	842	206	822	207
2000(同 12)	155	951	170	785	188
2001(同 13)	155	789	170	759	191
2002(同 14)	155	673	184	753	206
2003(同 15)	155	698	173	725	
計	—	—	—	—	7,624

酪農学部 農業経済学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1963(昭和 38)	100	134	126	136	—
1964(同 39)	100	81	72	225	22
1965(同 40)	100	119	90	295	33
1966(同 41)	100	190	128	384	78
1967(同 42)	100	164	126	413	58
1968(同 43)	100	245	133	469	66
1969(同 44)	100	202	146	525	92
1970(同 45)	100	169	128	525	90
1971(同 46)	100	161	119	514	100
1972(同 47)	100	138	109	496	121
1973(同 48)	100	77	135	477	88
1974(同 49)	100	104	131	501	106
1975(同 50)	100	164	157	535	65
1976(同 51)	100	265	131	568	127
1977(同 52)	100	312	144	560	108
1978(同 53)	100	417	160	584	122
1979(同 54)	100	330	144	587	113
1980(同 55)	100	312	144	599	140
1981(同 56)	100	294	126	561	141
1982(同 57)	100	309	140	542	124
1983(同 58)	100	280	142	537	111
1984(同 59)	100	260	140	549	109
1985(同 60)	100	295	146	569	124

#### 第四章 酪農学園大学

##### 酪農学部 農業経済学科 (つづき)

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1986(昭和 61)	100	353	147	567	109
1987(同 62)	100	351	136	576	134
1988(同 63)	100	360	138	567	124
1989(平成 1)	100	514	141	576	124
1990(同 2)	100	655	128	564	126
1991(同 3)	100	823	158	577	128
1992(同 4)	150	960	156	603	141
1993(同 5)	150	903	155	614	117
1994(同 6)	150	847	139	641	152
1995(同 7)	130	623	140	628	154
1996(同 8)	130	630	137	606	146
1997(同 9)	130	486	141	588	136
1998(同 10)	130	417	141	585	116
1999(同 11)	130	246	137	587	136
2000(同 12)	110	239	146	581	121
2001(同 13)	110	240	138	575	134
2002(同 14)	110	209	127	550	122
2003(同 15)	110	221	134	537	
計	—	—	—	—	4,358

##### 酪農学部 食品科学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1988(昭和 63)		492	103	103	—
1989(平成 1)	80	649	97	201	—
1990(同 2)	80	581	95	297	—
1991(同 3)	80	745	120	419	92
1992(同 4)	120	793	129	454	93
1993(同 5)	120	792	120	485	100
1994(同 6)	120	906	124	513	117
1995(同 7)	105	835	118	515	133
1996(同 8)	105	1,000	110	492	121
1997(同 9)	105	829	110	499	120
1998(同 10)	105	610	113	506	120
1999(同 11)	105	391	112	509	128
2000(同 12)	90	435	113	497	126

第二部 学校再編と現況

酪農学部 食品科学科 食品科学専攻

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2001(平成 13)	50	277	87	456	141
2002(同 14)	50	267	70	384	101
2003(同 15)	50	244	70	349	
計	—	—	—	—	1,392

酪農学部 食品科学科 健康栄養学専攻

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
2001(平成 13)	40	61	22	22	—
2002(同 14)	40	200	41	63	—
2003(同 15)	40	147	41	112	
計	—	—	—	—	—

酪農学部 食品流通学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1994(平成 6)	80	438	100	100	—
1995(同 7)	80	679	92	197	—
1996(同 8)	80	741	96	303	—
1997(同 9)	80	440	93	399	93
1998(同 10)	80	325	90	392	100
1999(同 11)	80	151	89	374	102
2000(同 12)	70	205	89	349	80
2001(同 13)	70	164	107	358	77
2002(同 14)	70	127	83	356	79
2003(同 15)	70	157	100	358	
計	—	—	—	—	531

#### 第四章 酪農学園大学

##### 獣医学部 獣医学科

(注) 1996年度から学部改組により、獣医学部獣医学科となる

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1964(昭和 39)	40	72	47	47	—
1965( 同 40)	40	100	63	111	—
1966( 同 41)	40	156	66	173	—
1967( 同 42)	40	288	71	247	38
1968( 同 43)	40	393	68	270	41
1969( 同 44)	40	460	74	293	61
1970( 同 45)	40	597	68	295	75
1971( 同 46)	40	530	64	279	66
1972( 同 47)	40	615	70	284	58
1973( 同 48)	40	800	88	301	68
1974( 同 49)	40	1,008	74	306	61
1975( 同 50)	120	1,430	147	391	65
1976( 同 51)	120	1,898	142	467	92
1977( 同 52)	120	2,061	141	508	71
1978( 同 53)	120	2,790	144	574	137
1979( 同 54)	120	1,915	145	586	140
1980( 同 55)	120	1,386	142	585	148
1981( 同 56)	120	1,090	153	592	136
1982( 同 57)	120	1,039	141	599	147
1983( 同 58)	120	1,058	155	606	137
1984( 同 59)	120	1,223	142	610	155
1985( 同 60)	120	1,215	141	593	143
1986( 同 61)	120	1,145	140	587	152
1987( 同 62)	120	1,210	151	582	—
1988( 同 63)	120	1,337	141	722	—
1989(平成 1)	120	1,379	140	856	134
1990( 同 2)	120	1,713	144	868	141
1991( 同 3)	120	2,305	144	867	143
1992( 同 4)	120	2,599	149	874	143
1993( 同 5)	120	3,053	143	875	139
1994( 同 6)	120	2,921	147	880	125
1995( 同 7)	120	2,964	151	909	141
1996( 同 8)	120	3,557	140	907	149
1997( 同 9)	120	3,623	141	899	145
1998( 同 10)	120	4,253	137	895	142

第二部 学校再編と現況

獣医学部 獣医学科 (つづき)

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1999(平成 11)	120	3,519	137	887	151
2000(同 12)	120	3,243	137	876	136
2001(同 13)	120	3,376	141	883	147
2002(同 14)	120	3,550	135	864	132
2003(同 15)	120	3,331	140	874	
計	—	—	—	—	3,959

環境システム学部 経営環境学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1998(平成 10)	140	334	150	150	—
1999(同 11)	140	324	156	302	—
2000(同 12)	140	324	162	457	—
2001(同 13)	140	286	180	623	126
2002(同 14)	140	254	148	622	124
2003(同 15)	140	256	162	629	
計	—	—	—	—	250

環境システム学部 地域環境学科

年 度	入学定員	志願者数	入学者数	在籍者数	卒業者数
1998(平成 10)	140	668	151	151	—
1999(同 11)	140	642	164	324	—
2000(同 12)	140	517	155	482	—
2001(同 13)	140	434	156	636	148
2002(同 14)	140	347	143	632	159
2003(同 15)	140	354	155	617	
計	—	—	—	—	307

## 八 学生の進路状況

一九九七(平成9)年度以降就職協定が廃止され、就職活動の環境変化として、一九九八年より企業のホームページ活用によるインターネット上での求人活動が取り入れられ始め、二〇〇二(平成14)年には約九割の企業がこの方式を採用している。

経済状況の悪化から採用企業、採用数とも減少し、新卒採用は「質」にこだわる厳選採用が中心となった。このため、早い時期により良い学生を確保するため、企業が内定を出す時期は年々早まり、二〇〇三年には五月ころが四年生の内定のピークとなった。このような環境の中で、学生は低学年から卒業後の進路選択をじっくり考え、自分の目標を見いだし大学生活を過ごすことが一層重要となってきた。

本学の過去三年間の、就職希望者に対する就職者の割合は二〇〇〇年度・八五・八%、二〇〇一年度・九五・四%、二〇〇二年度・九一・三%で推移しているが、一方、少子高齢化に伴い高等教育機関への進学率が上がり、本学でも学生の質の多様化が進んでいる中で、一般にいわれる卒業時までに進路を決定出来ないため一時的な仕事(いわゆるフリーター)につく学生もいる。

就職支援としては、教職員連携のもと学科ガイダンスや各種就職講座、個人面談指導、企業セミナーなどを実施しているが、早期に社会人としての職業観を育成する新たな教育展開が求められる。

なお、短大改組により設置した環境システム学部 of 二学科は、二〇〇一年度より卒業生を送り出し

卒業生の動向（最近5カ年） 大学

学 科 別	年 度	卒業生数	進 路 状 況				
			就 職	自 営	進 学	実 習	その他
酪 農 学 科	1998	182	70	19	18	5	70
	1999	207	89	18	17	12	71
	2000	188	88	26	7	11	56
	2001	191	87	15	12	7	70
	2002	206	90	18	19	15	64
農 業 経 済 学 科	1998	116	50	16	1	2	47
	1999	136	82	14	2	2	36
	2000	121	58	17	3	2	41
	2001	134	57	24	2	5	46
	2002	122	51	16	1	5	49
食 品 学 科	1998	120	65	3	8	0	44
	1999	128	75	0	9	1	43
	2000	126	75	2	11	0	38
	2001	141	88	3	7	1	42
	2002	101	65	1	10	1	24
食 品 流 通 学 科	1998	100	71	2	4	0	23
	1999	102	61	2	1	1	37
	2000	80	59	0	2	0	19
	2001	77	50	0	2	0	25
	2002	79	48	1	2	0	28
獣 医 学 科	1998	142	106	0	8	0	28
	1999	151	102	0	14	0	35
	2000	136	101	0	13	0	22
	2001	147	105	2	6	1	33
	2002	132	93	0	15	1	23
経 営 環 境 学 科	2001	126	78	8	1	0	39
	2002	124	64	7	3	0	50
地 域 環 境 学 科	2001	148	70	2	5	0	71
	2002	159	63	4	15	1	76

その他：期限付教員、科目等履修生、研究生、専門学校、一時的仕事等

ており、これまで卒業生が活躍してきた職域に加え、今後幅広い業種での活躍が期待される。

大学院修了者の進路状況は、酪農学研究科は、修士課程・博士課程とも民間企業・教員・公務員等の就職のほか博士課程への進学や大学院での研究活動の継続等となっている。また、獣医学研究科博士課程修了者は、大学教員や研究員・研究機関への就職のほか大学院での研究活動の継続等となっている。

## 九 開学記念式典と記念行事

短期大学開学三〇周年・大学二〇周年記念式典と行事 短期大学開学三〇周年・大学二〇周年の記念式典は一九八〇（昭和55）年八月三〇日午前一〇時から短大・大学体育館において、教職員や同窓生、時任正夫日本私立大学協会北海道支部、日本キリスト教学校教育同盟代表、フレッド・ウォルフ教授（カナダアルバータ州代表）ら合わせて約三〇〇名の来賓を迎えて執り行われた。

式は礼拝形式で松井幸夫の進行、山畑勝美宗教主任の司式で執り進められた。

会場に讚美歌が流れ、聖書朗読の後同短大・大学発展の礎となった物故者に牛島純一が代表して祈祷が捧げられた。

遊佐孝五学長は「短大・大学は建学の精神の具現、特色ある実学教育の確立など、本学の存立が根本から問われ、困難と試練の洗礼を受けたときもあつたが、学園の理事者、ならびに大学・短大の教職員はそれぞれ学生諸君と忍耐強く話し合いを進めながら多くの危機を乗り越えて今日に至つたこと

を顧りみたととき、今さらながら感慨無量のものがある。この記念すべき年は、あたかも一九八〇年代の幕開けの年であり、わが国が二一世紀に向け激動する国際社会の中でいかに信頼を得、いかに存続してゆくかが問われている重大なときであり、同様に私立大学再構築の年でもある。私共は建学の理念の具現のためさらに努力することを誓うものである」と述べ、当時、学生運動の厳しい状況を顧みながらの式辞であった。

また、高齢のため出席できなかった黒澤西蔵学園長からのメッセージを佐藤貢理事長が代読した後「遠くアルバート州からウォルフ博士の来日・来学を謝し、今後両大学の発展を祈念する」と英語で語りかけた。

続いて、知事、市長、キリスト教学校教育同盟、日本私立大学協会、同短大協会各代表の祝辞があり、さらに高橋節郎同窓会連合会長から「懐かしい寮教育を思い起こし、真実の教育こそ、生涯心のささえとなる。同窓会生として母校の発展に協力を惜しまない」とあいさつがあった。

また、祝賀会は同日午後五時から札幌国際ホテルで持たれ卒業生ら四二三名の出席者でにぎわった。祝賀会第一部は土橋慶吉の司会で、遊佐学長、佐藤理事長のあいさつに次いで祝辞に移り、まず短大・大学初代学長の樋浦誠から「建学の精神を果たして、神第一に」と生きぬいてきただろうか」という内省の問いかけがあった。大学同窓会会長の石田貞夫は「園長が言われた使命感、樋浦先生からの〈努力、協調、となり人への愛〉の教えに生きたい」との決意が祝辞として述べられた。

最後に、梅津元昌全国獣医学関係大学代表者協議会会長から「内村鑑三先生の〈デンマークの話〉

から敗戦の意義を教えられたが、このデンマークにゆかりのある三愛精神をぜひとも生きぬく大学であってほしい」との励ましの祝辞があった。次に高橋セツ子より文部大臣、北海道知事ほか多数の方々から寄せられた祝電が披露された。祝宴に入るに先立ち、生出正美三愛畜産センター所長(短大九期生、大学二期生)の祈祷がなされた。

第二部の司会は市川舜が担当し、佐藤理事長から園長直筆の「愛神愛人愛土」の色紙などがウォルフ教授にプレゼントされ、またスピーチは、大学部創期生で同窓会連合会関東支部長古田修吾、大学一期生で九州支部長泉哲夫、同期の道議・小田部善次からあった。

閉会の乾杯では土谷長松土谷製作所社長が万歳三唱の音頭をとり、記念事業実行委員会を代表し、原田勇が謝辞と一層の精進の決意を述べて、祝賀会が閉じられた。なお、記念行事の一環として「記念誌」(B5判二〇頁)が刊行された。

#### 短期大学開学四〇周年・大学三〇周年記念式典と行事 短期大学開学四〇周年・大学三〇周年の記念式典

典が一九九〇(平成2)年九月一四日午前一〇時から黒澤記念講堂において開催された。式は礼拝に始まり、平尾和義大学学長、坂本与市短期大学学長の「過去への感謝と将来への決意」の式辞に次いで、遊佐孝五学園長による永眠者への追悼の祈祷があった。奨励者にはアメリカより元宗教主任のアーサー神塚牧師を招き、牧師は酪農学園草創期の先達の熱い心と使命を語り、聴衆に深い感銘を与えた。次いで横路孝弘北海道知事、岡英雄江別市長をはじめ、関係機関代表者からそれぞれ本学への高い評価と期待の丁重な祝辞があり、最後に佐藤貢理事長のあいさつで式を閉じた。会場は来賓と教職員の

ほか約七〇〇名もの学生が出席し盛会であった。

午後一時からは記念講演会が同講堂にて開催された。講師は小林道彦北海道酪農協会専務理事で「夢を求めて夢を追う」と題して創立者黒澤西蔵の求めた夢について平易な言葉で約六〇〇名の聴衆に語りかけた。

また、同日午後六時三〇分から記念祝賀会が開催された。来賓、教職員二〇〇余名が参加し、学生ほかのアトラクションを楽しみながら語り合い、草創期に思いを馳せ、穏やかな中にも将来の飛躍を胸に閉会した。

一連の記念行事では「今、大地に生きる」という本学の建学の精神に真にふさわしいメインテーマが掲げられた。それに沿って約三カ月前から記念演奏会、学術講演会（日本学術会議北海道地区会議と共催）を開催してきた。また、大学愛唱歌・短大愛唱歌が広く募集（大学同窓会校友会と共催）され、一九九二年の愛唱歌選考まで続けられた。

記念演奏会は札幌交響楽団を招き、七月六日午後六時三〇分から江別市民会館大ホールで「札幌 I N E B E T S U」と銘打って開催された。小松一彦氏の指揮の下にモーツァルトの「フィガロの結婚」序曲、シベリウスの「交響曲第二番ニ長調」その他が演奏され、一、〇〇〇余名がこの名曲に聴きいった。

翌七月七日には学術講演会が小林好宏北海道大学教授、勝井義雄札幌学院大学教授を招いて黒澤記念講堂で開催され二百名余が出席、メインテーマにふさわしい講演がなされ、学生からも高度な質問

がされるなど有意義な会となった。

さらに、同年九月に「記念誌（今、大地に生きる）」（B5判一〇四頁）が刊行された。

短期大学部開学五〇周年・大学四〇周年記念式典と行事 短期大学部開学五〇周年および大学四〇周年記念式典が二〇〇〇（平成12）年五月二六日午後二時から、黒澤記念講堂で盛大に行われた。

永幡肇の司会、山口博大学宗教主任の司式により礼拝形式で進められ、最初に参加者全員で讚美歌を斉唱。続いて聖書を朗読、祈祷を行った後、安宅一夫大学短期大学学長が式辞を述べた。

この中で、安宅学長は「本学の教育は創立者の理想実現のため今、その途についたばかりである。過去半世紀の歴史を反省し、さらに半世紀前に酪農民の手によって創設された酪農学園の苦難の歴史を確認し、これから始まる新世紀・一〇〇〇年紀に向かって、今年を一つのマイルストーンとし、新しい苦難に絶え、練達を生み、理想を実現すべく、全教職員が心を新たに、光輝く魅力ある大学・短大建設のために、さらに努力することを誓うものである」と宣言した。

この後、黒澤力太郎学園長が永眠者追悼祈禱を行い、堀達也北海道知事（代読）、小川公人江別市長、森本正夫日本私立大学協会副会長、和野内崇弘日本私立短期大学協会副会長らの祝辞があった。

最後に、平尾和義理事長が「私たちは今、改めて本学の創造の時代と現在を謙虚に比較し、深い反省と周到な計画の下に先達が築いてきた伝統を二一世紀に継承、発展させる義務がある。また、これまでの伝統の上に時代の要請にこたえる諸改革を進めていかなければならない」と、厳しさが増す大学運営を全役職員の英知を結集して乗り越える決意を示した。

午後五時三〇分からは会場を札幌市のシエラトンホテル札幌に移して記念祝賀会を開催した。記念事業実行委員長の篠原功が開会の言葉を述べた後、安宅学長があいさつ。その後、来賓として北村直人衆議院議員、町村淳子町村信孝衆議院議員令夫人、遊佐孝五前酪農学園理事長、高橋節郎同窓会連合会会長（副理事長）が祝辞を述べた。

引き続き、酪農学園大学短期大学同窓会より記念品の贈呈があり、高橋一短大宗教主任の祈祷、堂垣内尚弘元北海道知事の祝杯で祝宴に入った。祝宴では短大、大学各同窓会長の紹介、酪農学園同窓会連合会支部長の紹介およびスピーチ、また酪農学園大学の新しいシンボルマークが披露された。最後に金川幹司北海道酪農協会会長が乾杯を行い、鮫島邦彦酪農学部長の閉会の言葉で祝賀会を締めくくった。

なお、この記念式典に合わせて午前中にホームカミングデーが行われ、特別講演会としてクレスコ株式会社の岡田勉取締役社長（酪農学科二期生）が「期待される酪農学園―海外事業の体験から」をテーマに講演を行った。また、一連の記念行事として同年一〇月一七日黒澤記念講堂で本学農業経済学科一七期生の松下正良（国連工業開発機関東京投資・技術移転促進事務所次長）が「グローバル新時代に生きる」をテーマに講演した。

さらに一月二四日には賀川豊彦の子息で酪農讃歌を作曲した賀川純基を招いての講演があり、講演後、合唱団と吹奏楽団による酪農讃歌演奏があった。講演の中で父・豊彦が特に気に入ったのは「乳房持つ神、我と共に」というところで、それは「乳と蜜の流れる郷里カナン、神様は乳と蜜で民を

養われる。乳房持つ神は母のような神、神の愛・恵み」という意味だとの説明があつた。

翌二五日午後三時からシエラトンホテル札幌で記念シンポジウム「酪農学園創設者たちのまぼろしから」を開催。高橋節郎が「樋浦誠のまぼろし」、安宅一夫が「宇都宮仙太郎のまぼろし」、佐藤巖が「佐藤善七・貢のまぼろし」、そして黒澤信次郎は「黒澤酉蔵のまぼろし」をテーマに講演した。なお「記念誌」(A4判一七八頁)が二〇〇一年(平成13)年三月に刊行された。

教職員数の推移 1960（昭和35）年度～1980（昭和55）年度

年 度	本 務							兼 務			合計
	学長	教授	助教授	講師	助手	職員	計	教員	職員	計	
1960(昭和35)	1	13	4	9	10	19	56	7	—	7	63
1961(同36)	1	15	2	14	8	13	53	14	—	14	67
1962(同37)	1	22	2	11	5	19	60	31	13	44	104
1963(同38)	1	23	8	14	3	22	71	50	11	61	132
1964(同39)	1	24	7	18	3	47	100	37	—	37	137
1965(同40)	1	21	10	15	5	48	100	29	1	30	130
1966(同41)	1	25	10	17	7	46	106	30	1	31	137
1967(同42)	1	19	9	16	4	58	107	29	1	30	137
1968(同43)	1	23	7	14	9	54	108	36	1	37	145
1969(同44)	1	22	9	20	9	58	119	37	8	45	164
1970(同45)	1	22	15	18	8	56	120	31	13	44	164
1971(同46)	—	21	17	15	11	57	121	33	10	43	164
1972(同47)	—	21	18	16	11	59	125	37	13	50	175
1973(同48)	—	23	15	20	8	63	129	39	16	55	184
1974(同49)	1	25	14	21	4	62	127	37	26	63	190
1975(同50)	1	32	20	18	8	64	143	33	24	57	200
1976(同51)	1	29	24	16	7	72	149	33	27	60	209
1977(同52)	1	31	23	13	13	70	150	38	30	68	218
1978(同53)	1	33	21	18	9	70	152	37	39	76	228
1979(同54)	1	34	22	17	10	68	152	38	40	78	230
1980(同55)	1	34	23	18	9	67	152	39	40	79	231

一〇 教職員数の推移と現教職員

第四章 酪農学園大学

1981（昭和56）年度～2003（平成15）年度

年 度	大 学						
	学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	職 員	計
1981（昭和56）	1	38	20	20	10	67	156
1982（同 57）	1	45	18	21	11	65	161
1983（同 58）	1	44	18	23	11	62	159
1984（同 59）	1	40	26	21	7	61	156
1985（同 60）	1	34	27	20	7	60	149
1986（同 61）	1	35	28	23	8	60	155
1987（同 62）	1	46	27	26	8	61	169
1988（同 63）	1	49	27	27	7	67	178
1989（平成1）	1	57	28	22	7	71	186
1990（同 2）	1	57	31	21	9	69	188
1991（同 3）	1	63	29	27	4	67	191
1992（同 4）	1	66	30	25	7	69	198
1993（同 5）	1	68	28	24	7	71	199
1994（同 6）	1	68	28	26	6	70	199
1995（同 7）	1	70	32	27	5	63	198
1996（同 8）	1	64	34	25	2	57	183
1997（同 9）	1	66	43	16	0	53	179
1998（同 10）	1	65	48	14	3	58	189
1999（同 11）	1	69	54	16	4	62	206
2000（同 12）	1	69	52	16	3	62	203
2001（同 13）	1	76	49	15	7	59	207
2002（同 14）	1	79	51	16	8	64	219
2003（同 15）	1	80	49	18	6	67	221

(2003.5.1)









第二部 学校再編と現況

就職部 就職課		学生部 学生課	学務部 学務課	
課長 近雅宜	課長 (同) 山保千都子	課長 (同) 高橋秀一	課長 (同) 脇島和宏	主事 小林めぐみ
	(同) 走出成子	主事 佐々木淳	主事 金子千恵	同 渡辺敏子
	(同) 千田喜美子	同 西田智	同 加福幸枝	同 北山陽
	(同) 小島友子	同 奥寺好子	同 川口梢	
	(嘱託) 梅田美恵子	主事補 吉田陽平		
	調理員 長谷川慶子	看護師 岡田富子		
	栄養士 山形郷美	主事 岡田富子		
		同 西田智		
		同 奥寺好子		
		主事補 吉田陽平		
		同 西田智		
		同 奥寺好子		
		同 吉田陽平		
		同 岡田富子		
		同 山形郷美		
		同 長谷川慶子		
		同 梅田美恵子		
		同 小島友子		
		同 千田喜美子		
		同 走出成子		
		同 山保千都子		
		主事(嘱託) 加藤正勝		
		技師 (嘱託) 坂本勲		
		技師 岡崎良生		
		同 上野光敏		
		同 山本自子		
		同 頭川恵子		
		同 菊地眞紀子		
		同 伊藤眞美		
		同 廣岡亨		
		同 窪田系生		
		主事 照井俊秀		
		主事 伊藤明美		
		同 林多喜夫		
		同 瀧谷耕一		
		同 後藤哲也		
			図書館	
			学科附置施設	
			附属農場	

第四章 酪農学園大学

エクステンションセンター

主 事務  
事 長

(嘱託) 同 同 同 同  
加藤 松田 真浦 山田 高山 塩出  
隆 直子 麻知子 龍翁 基樹 真司 十倉 宏

第三部 事務局・関係団体・職員録

## 第一章 酪農学園事務局

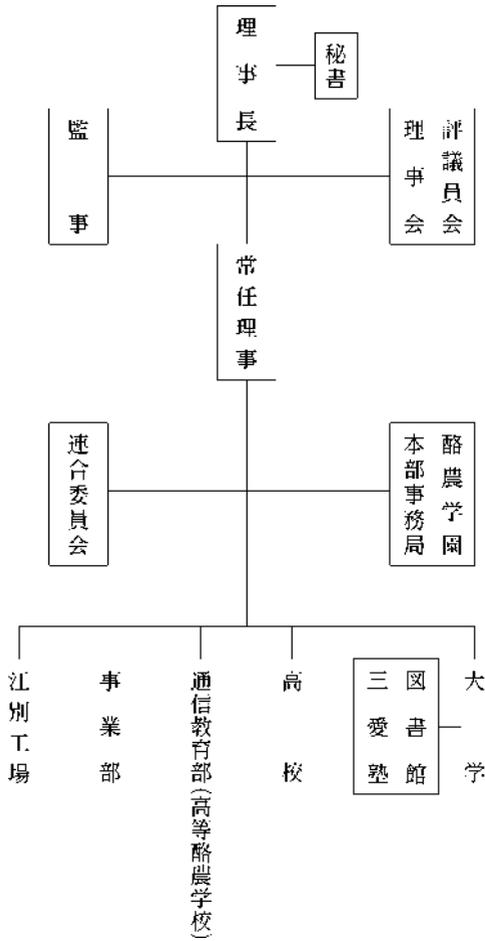
### 一 学園事務局

**創設と推移** 学園事務局の経緯については『学園史一』に詳述されているのでここでは経緯の概要を記すことにする。戦後の教育体制が大きく転換された中であって、学園は一九四六（昭和21）年、理事会の決断によって教育の基本をキリスト教の精神に置くこととした。また、一九四六、四九年の二度にわたり理事長が交代し、一九四八年には機農学校の高等学校への改編、野幌高等酪農学校（通信教育）の設置、新たに収益事業の開始があり、さらに一九四九（昭和24）年には酪農学園大学部（翌五〇年「酪農学園短期大学」に改組）の開設と学園法人名の変更ならびに機構の拡大が行われた。たまたま、この年機農高等学校校舎の焼失があつて、学園の組織や経営などに大きな変化がもたらされた。

そのため、従来各学校や組織単位で処理してきた事務機構を一元化し、法人業務の執行を中心に庶務、人事、管理、給与、経理など共通の業務を統括し、その円滑な運営を図るとともに各学校間の連係を密にする目的をもって一九五〇（昭和25）年七月一日、酪農学園事務局を旧酪農学校校舎内に設置した。

その後、事務局は幾度も機構を改めながら、一九五五（昭和30）年機農自動車学校（七六年閉校）一九

学園事務局設置時の組織図（一九五〇）



五八（昭和33）年三愛女子高等学校（七九年移転）、一九六〇（昭和35）年酪農学園大学、一九六四（昭和39）年中央農場（七六年廃止）などの設置による校舎、施設・設備の拡充に苦しい財政と取り組んできた。

さらにはその後三愛女子高等学校の移設および両高等学校の統合、短期大学、大学の学科増設、新学部の設置、また黒澤記念講堂、酪農学園本館、大学中央館、インテリジェント牛舎群の建設など学

園の発展とともに次々と施行される大型プロジェクトに総力を挙げて対処してきた。

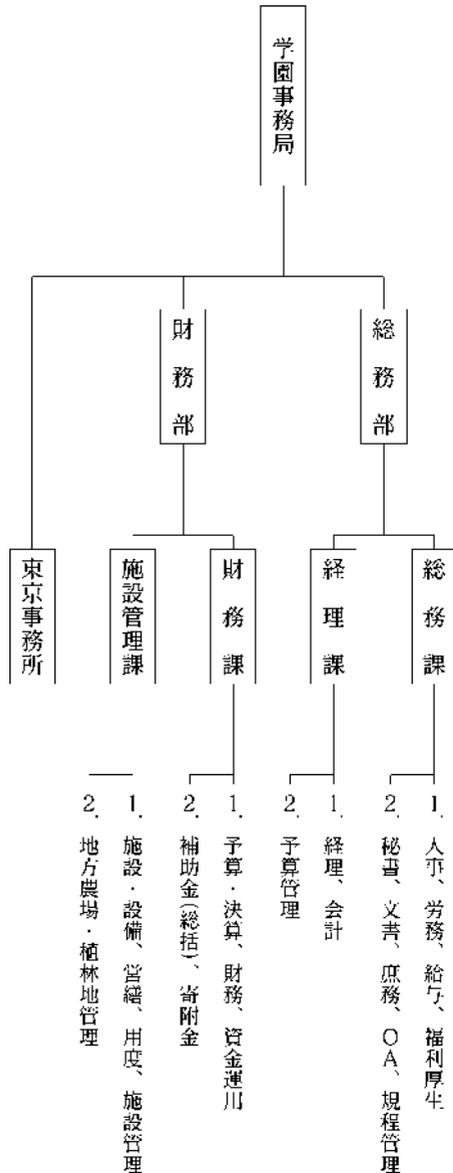
この間、一九六二（昭和37）年には社会一般に比してはるかに低かった給与体系をおおむね地方公務員に準ずる「酪農学園職員給与基準規程」を制定し、大幅な改善を行った。また、老朽化した四五戸の職員住宅を管理維持することは財政上極めて困難な問題であった。そのため用地を売却することによって転住者に建築資金を融資し、隣接地の野幌五六二番地に宅地五〇筆を造成し、教職員に分譲して、一九六八（昭和43）年移転を完了したが、これには三年余の年月を要した。

また、新任職員に対して「酪農学園の成り立ち、理念や使命」への理解を得させるオリエンテーションは一九六五（昭和40）年から続けられ、今日に至っているが、学園創立三〇、四〇、五〇、六〇周年記念式典の実施および記念誌の作成、年三回の酪農学園だよりの刊行など、激動の時代に多くの成果を収めてきた。

事務局には長年総務、管理、経理、特別会計の四課を置いてきたが、一九八六（昭和61）年には企画調整室を設置するなど機構を改革した。一九九四（平成6）年一〇月より、早くからの検討課題であった従来の法人事務局と短大・大学事務部の業務を統合して業務の一元化、新たに企画推進部を設けるなど法人事務機構を大幅に改革した。それに伴って名称も学園事務局と変更した。現在、総務部（総務課、経理課）、財務部（財務課、施設管理課、それに東京事務所という機構になっている）。

一方、元野幌農場、植苗農場の地方農場のほか望来、福島、奥行などの山林も直轄管理運営している。また、年々増える業務の効率化を目指すためコンピュータなどのOA化を進め省力化に努めている。

現在の事務局機構



歴代酪農学園事務局長

初代	川村秀雄	一九五〇・七	一〇一九五一・三・三一
第二代	高杉英男	一九五一・四	一〇一九五五・四・一
第三代	西本宗信	一九五五・四	一〇一九五六・四・一
第四代	宝出久直	一九五六・四	一〇一九六〇・一二・五
第五代	西本宗信	一九六〇・一二	一〇一九六五・四・一



## 二 黒澤記念講堂の建設

黒澤西蔵が召天の後、一九八二（昭和57）年一二月八日開催の理事会において創立者の遺志を後世に継承するにふさわしい黒澤記念講堂建設を、学園創立五〇周年記念事業の一つとして内外からの募金により行いたいとの提案が議決された。学園において初めて黒澤の名が冠せられた記念すべき施設ができることになった。

以来、常任理事会において数回にわたって、基本設計の作成、デザインの打ち合わせを行う一方、募金による建設費造成の可能性と建築面積などの概要を協議した。

八三年八月末、最終的にれんがを多用し、両サイドにサイロをイメージしたデザインならびに資金計画を決定し、募金は学園と、後援会が主体になり、共に進めていくということで、雪印乳業株式会社に募金方を依頼した。また、五〇周年記念式典において佐藤理事長が建設を発表し募金活動の道をつくってきた。

同年一〇月二日より後援会は募金活動を開始し、一〇月二日には五社競争入札の結果株式会社松村組が二億円で落札した。

設計内容の基本的考え方は

① 創立者の学園教育に対する理想と情熱、農業振興に対する業績を末長く顕彰し、学園のシンボルとするとともに建学の理念を日々新たにしていくなかとする。



黒澤記念講堂開堂式 (1984.12.6)

② 記念講堂は、学内諸行事、地域社会と関連ある行事、講演会などに広く利用できる施設とする。

③ 一階は講堂とし、主に礼拝や諸行事に使用する。二階は創立者に関する事績、資料、遺品などを展示する室を配置し、さらに講義にも利用できる多目的教室を設ける。定礎式は一九八四（昭和59）年八月一三日、黒澤力太郎親族代表を迎えて行われた。

開堂式は一九八四年一月六日、黒澤家親族を招き、学園内外の関係者四百余名列席の下に行われた。

式典は、前夜からの雪と厳しい寒気の中、新装成った記念講堂において午前一時より、感謝と祈りのうちに進められた。式辞に立った佐藤貢理事長・学園長は、「この講堂は、全額を内外からの浄財によつて建てられたものであり、この事業の完成は、ひとえに黒澤先生の御遺徳の賜であり、その御功績を讃えるとともに、御賛同と御協力を賜った内外関係者に対し、深く感謝したい。今後、先生の遺訓を継承して使命達成にまい進しなければ

鉄筋コンクリート造2階建 建築面積 約730 m<sup>2</sup>  
延床面積 1,000 m<sup>2</sup>

外部仕上

屋根鉄骨造鋼板葺

外壁コンクリート打放仕上及煉瓦積

開口部スチールサッシおよびアルミサッシ

1階

講堂床フローリング 椅子 526席 約460 m<sup>2</sup> ステージ付

ロビー床フローリング 約70 m<sup>2</sup>

2階

講義室 椅子 100席 約100 m<sup>2</sup>

展示室床フローリング 三面展示柵 約70 m<sup>2</sup>

### 黒澤西蔵の銅像移設

黒澤西蔵の銅像（当時は寿像）建立は、一九六二（昭和37）年一〇月一四日挙

行された酪農学園創立三〇周年記念事業の一環として、あらかじめ結成された「黒澤西蔵顕彰会」により準備が進められ、記念式典に引き続いて除幕式が行われた。当時の銅像は旧機農高等学校の校門

ならない」と決意を述べた。

続いて各界を代表し、福屋茂見酪農学園後援会副会長、永澤悟北海道副知事、岡英雄江別市長、山本庸一雪印乳業株式会社社長らより祝辞が述べられ、最後に、山畑勝美大学・短大宗教主任の祝禱をもって開堂式は終了した。

この後、引き続き大学・短大体育館を会場として祝賀会が催され、高橋節郎同窓会連合会長の牛乳での乾盃、時任正夫北星学園理事長、伊藤豪北海道議会議員、金井輝夫日本基督教団札幌教会牧師など各界代表からの祝辞、また、酪農関係諸団体を代表し、小林道彦北海道酪農協会専務理事による万才三唱、濱本恒男酪農学園常務理事の閉会のことばをもって、一三時四〇分全行事を終了した。

なお、募金額は二億一、八四五万円であった。

近くの丘上に建立されていたが、学園の発展とともに中心から離れてしまい、さらには周囲の樹木が生い茂ったこともあって道路からは見え、年々訪れる人も少なくなっていた。そのような中で、移設の機運が出て二〇〇〇（平成12）年八月八日、黒澤記念講堂前に移設された。なお、黒澤酉蔵寿像の建立の詳細については『酪農学園史一』四三五頁を参照されたい。

### 三 学園創立記念式典と記念事業

学園外から多くの来賓を迎えての大きかりな記念式典は一九六二（昭和37）年一〇月一四日、大学体育館において行われた創立三〇周年記念式典が最初である。式典には学園役職員、学生、生徒のほか教育、酪農関係者六百余名が出席して盛大に開かれ、引き続き記念事業の一環である「黒澤西蔵寿像」の建立除幕式が行われている。

次の創立四〇周年記念式典は一九七三（昭和48）年一〇月一日、大学礼拝堂において行うとともに、さらに会場を札幌パークホテルに移して、本学園の発展と教育の振興に尽力した関係者三百余名を招待して式典と祝賀会を挙行了した。

これら学園創立三〇周年および四〇周年の記念式典・祝賀会の様子は『酪農学園史一』に詳細に記録されているので本稿では省き、以下五〇周年、六〇周年記念式典について記す。

**学園創立五〇周年記念式典・祝賀会** 本学園の創立五〇周年記念式典は、学園内部の催しとして一九八三（昭和58）年九月二四日、学園外関係者出席による催しは一〇月一日と二回にわたって開催され、共に学園半世紀の歴史を象徴するにふさわしい、厳粛にしてかつ盛大に行われた。

一〇月一日午前一一時から学園外関係者を迎えての式典ならびに祝賀会には教育界、官界、酪農界などの関係者、さらに学園旧教職員、学園卒業生代表ら五百余名が出席して札幌市の京王プラザホ

テル札幌において開催された。

式典は礼拝形式によるもので大学の山畑勝美大学・短大宗教主任の司式で進められた。式典に臨むことなく永眠された人たちへの追悼の祈りは牛島純一によってなされた。

佐藤實理事長式辞の後、横路孝弘北海道知事をはじめ岡英雄江別市長、時任正夫北星学園理事長らの来賓の祝辞があった。

中でも時任氏は「――私は信じます。神がこの大業を創立者の心に起こさせ、多くの理解者と協力者と後継者とを与えて、これを達成されたことを。でなければ、酪農に関して、いまだ全く無理解であった日本の社会の中で、しかも採算の上では全く目途の立たないこの教育事業が成立し、五〇年の歩みを遂げ、しかもみごとに結実を見たことを解き明かすことができなからであります」と讃えた。また、祝電は瀬戸山文部大臣をはじめ各界から二百十余通があった。

佐藤理事長は、式辞の中で記念事業として「黒澤記念講堂」建設の具体案を公開し、広く関係方面への協賛を訴えるとともに同窓生から完成された同窓生会館の寄贈に対する謝辞をも併せて述べた。

この式典ではさらに、学園理事、監事、評議員、顧問および校医としての永年功労者三三名の人々に対して感謝状が贈られ、また佐藤理事長に対しては、学園基礎確立と発展への長年の尽力を讃え、山本庸一副理事長から感謝状が贈られた。

引き続き開かれた祝賀会は、本学卒業生の大沢宏一札幌テレビ放送アナウンサーの司会で進められた。

遊佐孝五副学園長の開会のことは、佐藤理事長のあいさつ、雪印乳業株式会社高橋国夫専務取締役の音頭による祝盃、秋山正文全国酪農協会副会長ら来賓各位のスピーチなどの中に、半世紀に及ぶ学園発展の歴史を讃えるところにも、将来への新たな期待と支援の決意が交互に述べられていた。

アトラクションでは、三愛女子高等学校琴クラブ、合唱団の生徒たちによる演奏・合唱と、大学・短大吹奏楽団による吹奏楽が演奏されるなどごやかな雰囲気の中に終えた。

一方、理事長以下学園内全職員による記念式典は、九月二四日午前一〇時から、三愛女子高等学校講堂において行われた。

佐藤理事長は、学園創立半世紀の歴史とこれにかかわった先人への深い謝意と、さらなる世紀への決意を述べ、また、土橋慶吉によって、学園に関与した物故者への、深い追悼の祈りが捧げられ、続いて永年勤続者七二名に対する表彰があり、受彰者を代表し松井幸夫教授から謝意が述べられ式典は終了した。

午後からの祝賀会は会場を江別市民会館小ホールに移して催された。

なお、記念事業として『酪農学園創立五十周年記念史』（昭和58年一〇月一日・B5判変型一四四頁・上製本）が刊行された。

記念式典に当たり学園の発展に長年尽力された方々に対し感謝状ならびに記念品が、また永年勤続功労者に対し表彰状と記念品が贈呈された。

感謝状贈呈者

酪農学園理事および顧問としての永年功労者

樋浦 誠 町村 金五 松原 太郎 三田村健太郎

酪農学園評議員および顧問としての永年功労者

大野 勇 武田 清平 手島 寅雄 山田 利雄

酪農学園顧問としての永年功労者

堂垣内尚弘

酪農学園理事および監事としての永年功労者

菊地 正一 原田 正男

酪農学園理事としての永年功労者

早坂 正吉

酪農学園理事および教育職員としての永年功労者

黒澤力太郎

酪農学園理事および評議員としての永年功労者

青山 義人 高橋 節郎 中曾根徳二 福屋 茂見

酪農学園評議員および監事としての永年功労者

西 佐久一

酪農学園評議員としての永年功労者

石田 貞夫 太田 正治 川村 勉 吉見 一郎 窪田佐智子 高倉 勝孝 土谷 長松

原田 新介 森田 正夫 山岸 六郎 山本 博 吉田 千里

船木長一郎 山本 庸一



創立50周年記念式典 (1983.10.1)

学園創立五〇周年記念式典 式次第(学園外関係者分)

奏楽  
三一二番  
司式 宗教主任 山畑勝美  
戸谷愛子

聖書朗読  
ルカによる福音書八章四節〜八節  
酪農学園機農高等学校 宗教主任 吉田真

祈禱  
永眠者追悼祈禱  
理事長学園長 佐藤貢

学園功労者へ感謝状贈呈  
牛島純一

理事長への感謝  
祝辞  
北海道知事 横路孝弘殿  
江別市長 岡英雄殿  
キリスト教学校教育同盟代表 時任正夫殿  
北星学園理事長

祝電披露  
米 五四一番

祝詞  
後奏

第一章 酪農学園事務局

酪農学園校医としての永年功勞者

野呂 英三

理事長への感謝

酪農学園基礎確立と発展への永年尽力に対する感謝

佐藤 貢

永年勤続表彰者

三〇年以上勤続者（一八名）

遊佐 孝五

村上 美枝

松井 幸夫

平岡 龍一

井上 錦次

牛島 純一

原田 勇

五十嵐 涼二

清水 次子

土橋 慶吉

種田 三郎

市川 舜

石川 健一

樺沢 茂男

五十嵐 巖

本田 たま

西本 宗信

広島 正雄

二〇年以上勤続者（五四名）

高橋登記子

酒田 和彦

藤井清左衛門

松村 衛

天井富士雄

志摩 親壽

竹村 和子

梶崎 昇

松川 清

村山 三郎

湯浅 亮

岩元 典一

川村 健弥

伊東 誠征

本谷 静江

荻原久美子

丹治 昌宣

甲斐 勝子

小林 好友

吉田 博治

中内 博一

坂本 与市

加藤 金治

高畑 武雄

深谷 正男

杉山 昇

角 建雄

関戸キヨ子

中澤儀三郎

原田 泉

甲斐 猛

山中 桂郎

神 正士

原 建雄

野口 薫

井上 昌保

川端 順造

小幡 重治

小野 慎弘

津田 佳吾

前井 礼二

奥山 武美

高尾 幸吉

香味 昭

尾崎 幸雄

長野 徳之

斎藤 義孝

佐藤 明

玉井 宏政

斎藤 寛

森好 敬子

鈴木 明子

山本 辰雄

中村 忠敏

佐藤貢理事長の式辞（抜粋）

顧みれば今から半世紀前「酪農の振興は先ず教育から」の発想の基に黒澤西蔵前学園長が酪農義塾を設立されて以来、機農高等学校、短期大学、通信教育の酪農学校、三愛女子高等学校、大学、大学院を相次いで設立し、今日の酪農学園にまで発展を遂げて参りましたが、これひとえに創立者黒澤園長の卓越した識見と教育に対する燃える情熱によるものであり誠に感謝に堪えません。

しかしこの発展の過程は決して坦坦たるものではなく、その間幾度もの苦難に遭遇し、また危機にも直面致しましたが、これ乗り越えて発展を続けて参りましたのも黒澤学園長の牢固たる信念とその優れた指導力によるのは元よりであります。なお、その上に心からの協力をされた多くの先人たちの献身的な努力と理事、評議員、教職員各位ならびに多くの企業、団体、個人、同窓生などの物心両面にわたる絶大な御支援、さらに近年における国費、道費の助成の賜でありまして、私はこれらの恩恵に対し、心からの感謝を感じ得ないのであります。

当学園は今後百年に向かって使命の達成に努めなければなりません。今日の私学を取り巻く環境は誠に厳しいものがあります。従って私共は今後の時代の変遷と要請に因應するため新たな構想の基に、より開かれた学園としての一步を踏み出そうと考えております。そのためには役職員が決意を新たにし一体となつて努力する所存であります。学内だけの力では容易ではありません。従つて今後とも皆様方の御理解ある御支援と御協力を仰がなければならぬと存じますので何分とも従来に増してよろしく御願いを申し上げます。

当学園はこの五〇周年記念事業として黒澤記念講堂を建設し、先生の功績を顕彰し、遺徳を偲ぶとともに、先生の建学の精神を学生に培う殿堂に致したいと存じます。これは各方面からの募金によつて建設致したいと考えておりますので、この席をお借りして誠に恐縮ではありますが何卒よろしく御願いを申し上げます。

なお、このたび同窓生諸君の御寄付によって同窓生会館が立派に完成され、学園に寄贈されましたことは誠に感謝に堪えません。今後これが広く活用され大きな働きをすることを祈念し、心から御礼を申し上げます。

### 学園創立六〇周年記念式典・祝賀会

本学園創立六〇周年記念式典は、一九九三（平成5）年九月三〇日には学内の催しとして黒澤記念講堂において、一〇月一日には、学園外関係者を迎え札幌ガーデンパレスにおいて、行われた。

一〇月一日午前一一時から開かれた学園外関係者を迎えての記念式典ならびに祝賀会は教育界、官界、酪農界その他各界から関係者、学園旧職員および同窓生の代表など約四〇〇名が出席して開かれた。式は礼拝形式で、山口博大学宗教主任の司式で進められた。出席者は学園発展の歴史に深くかかわり、物心両面で学園を支援された方々である。記念式典では、遊佐孝五理事長の式辞、横路孝弘北海道知事（代理）をはじめ、別掲の五名のご来賓から祝辞をいただき、また、赤松良子文部大臣をはじめ多数の祝電を受けた。さらに学園創立以来黒澤西蔵を支え、本学の礎を築いた佐藤貢名管理理事長、学園・理事・監事・評議員として永年功労者の八名に対し感謝状と記念品の贈呈が行われた。

記念式典に引き続き祝賀会が行われ、佐藤貢名管理理事長のあいさつに続き、松田利民北海道副知事、秋山正文全国酪農協会会長をはじめ、小澤保知日本私立短期大学協会北海道支部長、武田哲北海道高等学校協会副会長より祝辞があり、学園の歴史を讃えるとともに明日へ向けての新たな期待と支援の決意が述べられた。

夕刻よりは、同窓生・旧職員・現職員の集いとして記念祝賀会が行われ、なごやかな雰囲気のうち  
に創立六〇周年を祝った。

一方、学園内全職員による記念式典は九月三〇日午後一時三〇分より黒澤記念講堂で行われ、学園  
の礎となった物故者への祈祷はとわの森三愛高等学校吉田真宗教主任が捧げた。

さらに特別講演会が江別市市民会館で開催された。当日は、あいにくの雨天にもかかわらず午後五  
時開場の二時間前から観客が並ぶ盛況ぶり、観客は、若年層からお年寄りまで幅広く七百余名の市  
民が集まった。

講演者の田中義剛氏は、大学酪農学科を一九八〇（昭和55）年卒業、在学中よりシンガーソングライ  
ターとして北海道・東北を基盤に活動し、現在はテレビやラジオなど、多くのレギュラー番組で活躍  
中である。

前半は、田中義剛スペシャルトークショー「大いなる夢よ、希望よ」と題して、学生時代やテレビ  
界でのさまざまなエピソードを交えながら、彼の夢や希望そして青春を語った。そのユーモアあふれ  
る語り口は、観客を大いに和ませた。後半は、大学農業経済学科一期生、STVのアナウンサーで、  
STV編成本部編成部専門部長の大沢宏一氏との対談形式で行った。

なお記念事業として『健土健民（酪農学園創立六〇周年記念写真集）』（一九九三年一〇月一日・A4判二二八  
頁）と『黄金の土』（一九九三年三月一日・A5判三三〇頁）が復刻版として刊行された。またこの日に合  
せて職員OB会の「酪農学園貴農同志会」も発足した（後出）。

第一章 酪農学園事務局



創立60周年特別講演 (江別市市民会館=1993.9.30)

学園創立六〇周年記念式典 式次第(学園外関係分)

後祝頌祝 電披露 奏禱栄	祝電披露 五四一番	財団法人酪農学園後援会副会長	雪印乳業株式会社代表取締役会長 学校法人北海学園理事長	日本私立大学協会副会長・道支部長 学校法人北海学園理事長	北海道私学団体連合会議長 学校法人東京理科大学理事 日本私立大学協会会長 全私学連合代表	北海道知事 江別市長	理事長 遊佐孝五	遊佐孝五 横路孝弘 岡英雄 橘高重 森本正夫殿	遊佐孝五 遊佐孝五 横路孝弘 岡英雄 橘高重 森本正夫殿	江別市長 理事長 遊佐孝五 横路孝弘 岡英雄 橘高重 森本正夫殿	宗教主任 栄潤子	聖賛奏 美樂 書歌	三一二番 ローマの信徒へ の手紙第五章 第一節～第五節	宗教主任 栄潤子	宮本紀子	山口博
--------------------	--------------	----------------	--------------------------------	---------------------------------	---	---------------	-------------	-------------------------------------	---	--	-------------	-----------------	--------------------------------------	-------------	------	-----

感謝状贈呈者

酪農学園名誉理事長に対する感謝

佐藤 貢

酪農学園評議員および理事ならびに監事としての永年功労者

菊地 正一

酪農学園評議員および理事としての永年功労者

井上 錦次 黒澤力太郎 高橋 節郎 西本 宗信

酪農学園評議員としての永年功労者

高倉 勝孝 土屋 長松 森田 正夫

遊佐孝五理事長の式辞（抜粋）

このたび、酪農学園創立六〇周年の記念式典を開催するに当たり、先日来ご案内申し上げましたところ、皆様方には公私ご多忙中にもかかわらず、全国各地より遠路ご出席賜り、このように盛大に開催することが出来、心から感謝申し上げます。

顧みますれば、大正の後半から昭和の初めにかけての北海道は、明治以来の略奪農業による地力の減耗に加え、毎年ともいえる冷害凶作が続き、農業が行き詰まり、農村は疲弊し、農業・食糧の危機に直面したのであります。このような危機的な状況の下で、黒澤西蔵先生は農業立国デンマークを範とし、酪農を主とした北方寒地農業の確立を痛感され、そのためには教育が先決なりとの信念により、一九三三年（昭和八年）、酪農義塾を創立されました。創立に際し、周囲には教育事業ということでの慎重論や不安など色々の意見がありました。が、黒澤先生は酪農教育、青年教育の重要性を説明して理解と協力を得、現在の雪印乳業株式会社の前身であります通称「酪連」の総会で、酪農義塾の教育運営費として毎年一定の助成金支

出を決め、あるいは篤志家からの寄付金を受けることなどで設立にこぎつけたのでございました。

設立当時、黒澤先生は自ら塾長として全寮制の生徒と起居を共にして実学教育、人間教育に当られましたが、初代理事長には時の北海道長官佐上信一氏が就任されましたことは特筆すべきことであり、この一事をもつてしても、当時の北海道にとり酪農確立が緊急な課題であり、その教育機関として酪農義塾の重要性がよく理解されることと存じます。

創立当初、校舎は酪連の所在する札幌村苗穂の一角にありましたが、一九四二（昭和17）年に現在の江別市野幌に一七〇haの農地を取得し、野幌機農学校として全寮制の中等教育を実施して参りました。一九四五（昭和20）年八月、先の大戦にわが国は敗れ、社会が混沌の極みに達しておりましたとき、黒澤先生がデンマーク復興の歴史にない、日本再建の祈りを込め、神を愛し、人を愛し、土を愛する三愛精神と健土健民の哲理、すなわち酪農畜産によって健康な国土をつくり、そこに健康な国民が育つという理念とをもつて、酪農学園の建学の精神と定めたのであります。さらに先生は、わが国酪農・食糧の発展確立には、高等教育による人材養成が必要なりとして、一九五〇（昭和25）年に酪農学園短期大学を開設いたしました。その後、一九六〇（昭和35）年に大学、七五年には大学院を開設して高等教育の充実に力を注ぐ一方、その間、通信教育野幌高等酪農学校や地域の要請に依って女子高等学校の開設などを進め、現在では一三三haの文京台キャンパスに、大学院博士課程を二つ、修士課程を一つ、大学に四学科、短期大学に三学科、および高等学校には三学科を擁し、学生・生徒約五、〇〇〇人が教職員共々日夜教育研究に努力し、三万二、〇〇〇余名の卒業生諸君が全国各地で活躍する学園にまで発展いたしました。さらに、来年四月には大学に新しく食品流通学科を開設すべく現在文部省に申請中でございます。

創立当初、わずか八〇名の生徒から出発した本学園が、六〇年を経た今日、このように成長発展を遂げることができましたことは、神のご恩寵の賜と感謝するものでございます。と同時に、創立以来、幾多の困難を克服して今日を築き上げて下さった、黒澤先生はじめ多くの先達・役職員の献身的なご努力による

ものと、感謝に堪えないところでございます。

さらにまた、本学園の建学の理念、教育理念に共鳴され、絶大なご支援ご協力を賜っている財団法人酪農学園後援会、ならびに学生・生徒などの育英奨学事業にご尽力下さっている財団法人酪農育英会に対し、深甚なる感謝を申し上げる次第でございます。

創立者黒澤西蔵先生は常々「健土健民は三愛精神の結実したものであり、これを実践する人材の養成が酪農学園の使命である」と私共に教えられました。創立六〇周年に当たり、私共役職員一同はこれを契機として創立の初心に帰り、建学の精神を再確認し、これからの国際化、情報化、生涯学習化時代に即応しながら、特色のある教育研究の質的向上に努め、魅力ある学園を築いて、その使命達成と永続的発展のため、協力一致して努力する決意を新たにしております。

#### 四 創立者と名誉理事長の逝去

創立者黒澤西蔵の逝去と酪農葬

酪農学園の創立者で学園長であった黒澤西蔵は、一九八二(昭和

五七)年二月六日午前一〇時一三分、入院先の札幌医科大学付属病院で九六歳と一一カ月の生涯を終えた。病名は心不全であった。

密葬は、二月八日前夜式・九日告別式が札幌霊堂(札幌市豊平区平岸)において行われたが、本葬は、学校法人酪農学園や雪印乳業株式会社など、酪農関係二六団体主催による「故黒澤西蔵翁酪農葬」として二月二六日午後一時よりキリスト教式により札幌市民会館大ホールで、葬儀委員長参議院議員町

村金五のもとに厳肅に執り行われた。

当日は、積雪を踏んで参列した会葬者は道内外から二千余名を超え、故人の幅広い活躍を物語るように大ホールを埋め尽くした。

葬儀は、北海道の大地をこよなく愛した故人にふさわしく、正面祭壇は、白菊の花で北海道地図が形どられ、その中に飾られた遺影が参列者に温かいまなざしを注ぐ。葬儀に先立って内閣からの「三位」の伝達式が行われ、併せて、生前の栄誉を証する勲記・勲章が白菊の花で飾られた。

式は、小林道彦北海道酪農協会専務理事の司会で進行。司式は大学・短大山畑勝美宗教主任、日本キリスト教団札幌教会金井輝夫牧師、奏楽は三愛女子高等学校荒川恵美子教諭。故人愛唱の賛美歌二八六番を参列者全員が斉唱して始まった。次いで山畑宗教主任の司式で聖書の朗読、町村金五葬儀委員長の葬送の辞のあと、三愛女子高等学校聖歌隊による賛美歌の合唱、続いて、鈴木善幸内閣総理大臣をはじめ各界代表一〇名より弔辞が寄せられ、弔電は一、三〇〇通にのぼった。

葬儀は会葬者全員が白い菊の花を霊前に捧げて、最後の別れを告げ午後三時三〇分終了した。この模様はS T Vで同日午後四時五五分から五時三五分まで、報道特別番組「酪農の父・黒澤翁の足跡」と題して放映された。

学園においては、全職員・学生生徒一同、ありし日の故人を偲び三月一日午後三時三〇分から三愛女子高等学校礼拝堂で、簡素ながら厳肅に追悼礼拝を執り行い、み霊の安らかなことを祈った。

礼拝堂正面には、遺影が掲げられ、その周りは白一色の菊の花で飾られた。荘厳なパイプオルガン



札幌市民会館での「酪農葬」（1982.2.26）

の前奏が流れる中、参列者によって学園長愛唱の賛美歌二三四番Aが斉唱され式は始められた。

聖書「マタイによる福音書」七章七〜八節が朗読され、次いで大学・短大の山畑勝美宗教主任によって『うけつぎ・伝うべきこと』と題し、学園長の教育に対する止むことのない情熱と実践への使命観、根底に流れる『愛の精神』について説教がなされた。

次いで佐藤貢理事長が「学園建設に注がれた学園長の情熱、世に残された偉大な足跡、われわれ志しを受け継ぐ者として園長の遺訓を体し、学園の発展のために互いに励まし合い、助け合い、力を合わせ相努め、故人の残された偉業を、ますます世に輝かすために、ここに誓い合いたい」と述べて終了した。

**葬儀委員長 町村金五 葬送の辞（抜粋）**

本日ここに、黒澤西藏先生に今生のお別れを告げるため、多年にわたりあなたの恩義をこうむり、あなたと志を一つに

する二六団体・会社の後輩一同が、一致協同、真心を捧げて酪農葬の儀をもってお送りするに当たり、謹んで葬送の辞を申し述べます。

私共がご生前のお姿を思い起こす時、何よりも感銘を新たに致すことは、先生のあつぱれ、みごとな生きざまであります。理想を掲げて信念をまげず、苦難にあつて一層の情熱をたぎらせ、明敏にして才に走らず、その明にして智に溺れず、己を持すること実に厳しく、一身を国家社会に捧げて、倦むことを知らず、自ら出所進退を明らかにして、ただひたすら神と共にある世界、愛と正義の世界をこの世に実現せんとする、烈々たる使命感に燃え、直進また直進、詮方尽きれども望みを失わず、九六歳と一一カ月のご生涯を見事に生き抜かれました。

私共はあなたの遺影を拝み、あなたの終生変わらなかつた、憂国の至情に思いをはせております。特に私共が深い感動をもつて思い起こしますのは、あの熱意をもつて押し進められた、多彩な建議活動であります。

国家経営の一大経綸に発する構想を、聴く者が耳を傾けざるを得ない政策原理として、氣迫に溢れる文体でとりまとめられ、強力な説得力、大きな胆力をもつて、率直一途に訴えられたのであります。

あなたの心根からほとばしり出る、高遠なる理想が脈打つ建議、建白は時に天の声として、時に声なき声の代弁として、あるいは憂国の至情の現れとして、国策をも動かす原動力となつたのであります。

かくて、あなたのご生涯は誠に波乱万丈であり、敵千人、味方千人の真つ只中にあつたのであります。

もちろん、あなたご自身の言われた如く、あなたは少年時代には、義人田中正造翁に、青年時代にはわが国酪農の草分けである宇都宮仙太郎翁という大いなる師に出会つて、人生の意義を感得され、また、公私にわたるあらゆる問題を相談出来る真実の友人を得て、人生の活動舞台を拡げられました。

さらに、あなたの掲げる寒地農業の確立、北欧に勝る福祉社会の実現の理想に共鳴し、あるいは、あなたを頼る以外に道のない、窮乏した農民、やすらぎを求めてやまない民衆と、共にあつた幸福なる人生で

もありました。

あなたは明治一八年、常陸太田市で生粋の水戸人として生をうけ、幼少の頃から知行合一と、さきがけと、負けじ魂の水戸学を学ばれ、黒澤家再興を決意して一五歳で上京されました。学僕として苦学の途次、足尾銅山鉱毒事件に義憤を禁じ得ず、被害窮民の救済と、銅山操業即時停止の一大青年運動を組織して、運動に没頭され、この世に生き地獄を体験されるときに、不正不義の跋扈(はつこ)する、現実社会の画像をつぶさに観察され、同時に精神生活を安んじて託す道をバイブルに見出されたのであります。

慈母の死を契機に、心機一転、独立自営の新天地を北海道に求めて、明治三八年七月、宇都宮仙太郎氏の門をたたき、氏の説く、酪農三徳を天の啓示と信じて、一介の牧夫となったのであります。

以来七〇有余年、黒澤先生はわが国はもとより、北海道酪農の草創期に不可欠の存在となり、天下の牛飼い百姓を自認し、やがては酪農畜産の父と称される人となりました。あなたの設立された酪連にしる、酪農義塾にしる、その設立の精神は酪農救国にあり、健土健民にあり、三愛主義にあり、協同主義にあることは、あなたが多年初心忘るべからずとして、私共を諭したところでありました。私共は、この精神と理想を忘れることなく、今後とも精進すべきであると固く信じます。

ひとたび困難な時が至ると、大海に自由を得た巨鯨の如く、あなたは産業経済界に、また政界に縦横の活躍をなされ「酪農の黒澤」から「北海道の黒澤」と称せられるに至りました。

議政壇上の人となつては、戦災と敗戦の悲運に戸惑う政治家に対し、協同主義による国家再建の方途を示され、また窮民に対しては自ら戦災者帰農集団を組織して、北海道移住の道を用意され、私も先生の驥尾(きび)に附して「警視總監として」被災者の北海道送り出しの任に当たりましたことは忘れられません。また、あなたは、全国民に対しては、「剣で失ったものを鋤で取り戻せ」との故事を引いて、いち早く、北海道開発の意義を訴えられ、政府国会に対しては、国策による北海道開発の推進を建議されたのであります。

以来あなたは一貫して、北海道開発に対する在野有識者の代表として、一六年の長きにわたって、北海道開発審議会会長、さらに一〇年にわたって、北海道開発庁顧問の要職につかれ、わが国発展の一翼を担うる北海道建設に、持てる情熱のすべてを捧げられたのであります。

さらに、あなたは活動の舞台は、民主主義日本の死命を制するといわれる、新聞、テレビ界におよび、率先して北海タイムス社の経営再建の労を担われ、札幌テレビ放送の設立に参画され、健全な世論形成に資する言論機関の在り方に、一つの有力な指針を与えられました。

あなたは、この世でなすべき業を、すべて終えられ、すでにこの世の苦しみと悲しみから解放され、この世でおみかけした、あつぱれなお姿そのままに、神の幕屋におられることを信じます。

先生、本当に長い間のご叱正、ご指導ありがとうございました。

いまここに、あなたと今生のお訣れをするに当たり、謹んで、ご平安を祈り、葬送の辞といたします。

昭和五七年二月二六日

### 佐藤貢名管理事務長の逝去

酪農学園七〇年の星霜の中で、六十数年間にわたって深くかわり、ことに一九六六年から一九九一年まで二五年間を酪農学園理事長として、困難を英知と強い信念を持って克服して、今日の拡大発展に導いた佐藤貢名管理事務長が一九九九年九月二六日午後四時二分、一〇一年の全生涯を全うして天に召された。最晩年は体調のこともあつて学園から遠くはいたが、しかし、あまりにも替えがたい存在であつただけに、逝去の知らせにキャンパスは深い悲しみに包まれた。

佐藤家の葬儀は、九月二八・二九の両日札幌霊堂において、遊佐孝五酪農学園前理事長が葬儀委員

長を務めしめやかに執り行われた。

次いで、一〇月二八日午前一時から札幌パークホテルにおいて雪印乳業株式会社の社葬が葬儀委員長石川哲郎代表取締役社長、副葬儀委員長平尾和義酪農学園理事長の下で執り行われた。

学園においては、在りし日の故人を偲び一月八日午後三時三〇分から黒澤記念講堂において教職員、学生生徒、関係者にて追悼礼拝を執り行い、最後のお別れをした。

佐藤名誉理事長の死は農業、社会、経済、教育界などに残した功績の大きさもあつて新聞・テレビでも大きく報じられた。二八日付、北海道新聞(朝刊)の「卓上四季」はこんなふうに掲載した。

明治時代に東京を訪れた外国人の見聞記に、おかしな看板を見つけて面白がっている報告がある。牛乳に「P e s t M i l k」と書いてあつたという。ペストとはあの疫病のことだからこれでは『疫病牛乳』の意味だ／もちろんこの看板は「B e s t (最高の)」（略）少し前まで牛乳が日本人にいかにも縁遠かつたことを物語る／(略)／牛乳や乳製品を今ほど、なじみある食品に育て上げた一人が、一昨日亡くなつた佐藤貢さんだ。一九二三(大正12)年、米留学から戻つた佐藤さんがまず手がけたのが、脂肪分たつぷりの本格的アイスクリームだつた／父が札幌郊外の八垂別(今の札幌南区南沢)に開いた牧場の牛乳を原料に手づくりした。バナナ、チョコ、ストロベリーの色アイスだつたというから、おしゃれだ。「溶けたつていい。形さえ残つていれば」。そんな注文さえくるほどの人気になつた／佐藤さんは少年時代、牛乳配達をして酪農を知つた。その「牛乳人生」を百一歳まで貫いた。明治人のこのすこさが牛乳を身近にした。

平尾和義理事長の追悼のことば

佐藤 貢名誉理事長の御逝去に当たり、謹んで、心から哀悼の誠を捧げます。

先生は私どもにとり、学園創立の偉大な大先達であり、個人的には父のようでありました。生前の先生のお元気な姿が、どれほど私どもの眼に頼もしく映ったことでありましょうか。先生が亡くなられた後の私どもは、まさに暗夜に灯火を失ったようで深い悲しみに包まれております。ありし日の先生の面影はそくそくとして私どもに迫り、時を経るにつれてその思いが一層鮮やかなものになってゆきます。いま静かに臉を閉じて思い出を巡るとき、おのずから先生のお姿がはつきりと浮かび上がってくるのであります。

思えば先生は、一人のキリスト者として、また一人の人間として、私どもが先達として仰ぐには、あまりにも大きな存在でありました。幾多の障害を克服し、酪農学園の創立、建学の御功績は周知であり、深い信仰とその豊かな学識、経験を通じ、今日まで私どもを導いて来てくださいました。日頃から研鑽と努力が欠かせないことを身をもってお示しになり、厳しさの中にもユーモアをもって上下の隔てなく、私どもに声をかけられた先生のあの笑顔がいつまでも脳裏に焼き付き離れません。

晩年の先生は学園に来られることも次第に少なくなりましたが、先生がご壮健でおられることが、わが学園にとりどんなに心強く、如何に大きな力、励みになっていたことか。先生が学園に来られ、子供や孫のような、仕事においても、人生においても未熟な私どもに囲まれて、その中心に静かにお坐りになるだけで、私どもは何かしら安定感と安心感を覚えたのであります。あの先生の温容に満ちたお人柄は彷彿として眼前によみがえり、追悼と哀悼の念切なるものがあります。

いまわが国の教育界、本学園を巡る諸事情もまた厳しい困難な課題が山積し、殊に時代の大きな変化に即応した学園教育の改革推進は急務であります。先生の卓越した識見、才幹と円滑な徳望を必要とするとき、忽然として先生は去られ、再びその温容に接する機会を失ったことは、先生を深く敬慕し、限りない御指導を願っていただけに誠に残念の窮みであります。

しかし、先生の数々の御薫陶はとこしえに私どもの胸中に刻まれ、私どもはこれを生かしつつ、さらに新たなる「学園づくり」に邁進しなければなりません。役職員それぞれがこれからの責務を果たすことを、主の御栄えの裡にある先生のみたまに誓いたいと存じます。

### 黒澤力太郎学園長の追悼のことば

今は亡き佐藤貞先生の御霊前に謹んで哀悼の言葉を申し上げます。貢先生のご尊父善七翁と私の父西蔵とは共に札幌の山鼻に住み、佐藤家では山鼻の果樹園の他、藻岩山裏の八垂別に耕作地と牛舎を持ち、乳牛の飼育をしておられました。札幌市の市街化に伴い、黒澤の山鼻の牧場は月寒に移り、昭和九年には西蔵一家は苗穂の酪連（雪印乳業の前身）社宅に移転、前後して貢先生のご家族も同じく社宅に移られ、隣人としてお付き合いをすることになりました。

昭和九年の年は酪連内に北海道酪農義塾が発足した年であり、父西蔵は毎朝、酪農義塾の午前五時半の朝礼に出て訓辞をするのが常でした。年に何回かは塾生を家庭に招いて夕食を共にすることもありました。当時の酪連の気運が、側の社宅に居て、じかに伝わって来る思いをしたものでした。

酪農義塾の酪農科はその後、上野幌の出納農場跡に移り、野幌機農学校の開校（昭和一八年）と共に閉塾いたしました。

その後私自身も、進学、卒業、入隊と家を離れやがて終戦を迎え、学園に勤める身となりました。

多くの先達に支えられて来た学園であることを思います。特に先生には、学園創設の頃から変遷多い時代を貫いて苦勞と知恵を惜しまず發揮されたことを思います。

先生の巧まざるジョークには誠に面白いものがありました。

先生安らかにお休み下さい。

## 第二章 関係団体と会社

### 一 財団法人酪農育英会

黒澤西蔵は、戦後のわが国の産業、経済の大きな転換期にあつて、人材の養成こそがすべての基本であるとの信念のもとに酪農学園の充実発展と平行して育英事業の構想を練り続けてきた。機熟して、一九五六（昭和31）年一月、設立準備委員会を開いて設立の第一歩を踏みだした。

**基本金の造成** 一九五七（昭和32）年一二月、文部省より財団法人酪農育英会の設立が認可され、翌年一月に第一回理事会を開いて当面の課題が審議された。設立当初の法人財産は黒澤西蔵、梅江の寄付によるものである。

(1)	土地	二、三〇三坪八五
	評価額	一一、五〇〇、〇〇〇円
(2)	現金	五三〇、〇〇〇円
	計	一二、〇三〇、〇〇〇円

さらに、基金の造成が急を要する課題であつた。その方策として、①土地の売却による現金化 ②関係会社、団体、個人への寄付の要請を決議するとともに、評議員二七名の選任を行つた。

寄付の要請は当初維持会員の制度を考えていたが、文部省の指導もあってこれを取りやめ、一般寄付によることになった。創設者の熱意にこたえて各会社、団体からの寄付も順調に集まり(表1)、一九五八(昭和33)年度より事業開始のめどもついた。

特に、雪印乳業株式会社 六五〇万円(五八〇六八年)、北海道農業協同組合連絡協議会 六〇〇万円(五九〇六八年)、北海道農材工業株式会社 一五〇万円(五八〇七〇年)には約一〇年間にわたって協力を得られた。

その後、黒澤力太郎の六、〇〇〇万円のほか、多くの会社、団体、個人より基金ならびに維持費の拠出を得て、基本金も年次を追うごとに増加し、一九六〇(昭和35)年度末には二、〇〇〇万、一九七九(昭和54)年度末には一億円を越すことができた(表2)。現在、基本財産四億八、六〇〇万円を保有し、酪農学園各学校に学ぶ多くの学生、生徒に対し奨学金の貸与を行っている。また、酪農研究の奨励として研究団体や海外私費留学生・研修者に奨学金を交付している。

**初期の奨学事業** 奨学金の貸与は一九五八年度より開始された。しかし、当時酪農学園大学は開校されておらず、同年開校の三愛女子高等学校がこの年から対象になった。また、学園の職員や雪印関係会社職員の子弟(特に遺族)にも枠を広げ、広く募集を行った。

規程では、大学月三、〇〇〇円、高校二、〇〇〇円(通学一、〇〇〇円)となっていたが、当時、日本育英会の奨学金が大学月二、〇〇〇円ということもあって、一般大学は三、〇〇〇円を貸与したが、酪農短大および酪農大学は月二、〇〇〇円の貸与でスタートした。なお、当初三カ年の学校別貸与状況は表

## 第二章 関係団体と会社

表1 設立当初10年間の年度別寄付額

年 度	寄付件数	寄 付 額
1958 (昭和33)	24	1,336,400 円
1959 (昭和34)	19	3,806,370
1960 (昭和35)	18	2,315,544
1961 (昭和36)	12	1,318,190
1962 (昭和37)	7	1,425,400
1963 (昭和38)	8	1,356,800
1964 (昭和39)	6	1,323,600
1965 (昭和40)	7	1,556,750
1966 (昭和41)	4	1,350,000
1967 (昭和42)	5	1,400,000
1968 (昭和43)	6	1,452,000

表2 基本金の推移

(単位：円)

年 度 別	基本金繰入	基本金額
1957 設置分 (設立当時) (昭和32)	12,030,000	12,030,000
1958～1965 (昭和33～40)	17,120,000	29,150,000
1966～1975 (昭和41～50)	23,850,000	53,000,000
1976～1985 (昭和51～60)	195,000,000	248,000,000
1986～1993 (昭和61～平成5)	197,000,000	445,000,000
1994 (平成6)	15,000,000	460,000,000
1995 (平成7)	7,000,000	467,000,000
1996 (平成8)	4,000,000	471,000,000
1997 (平成9)	4,000,000	475,000,000
1998 (平成10)	4,000,000	479,000,000
1999 (平成11)	4,000,000	483,000,000
2000 (平成12)	2,000,000	485,000,000
2001 (平成13)	1,000,000	486,000,000
2002 (平成14)	0	486,000,000

表3 設立当初3力年の学校別奨学生数 (1958~1960)

	1958年 (昭和33)	1959年 (昭和34)	1960年 (昭和35)
酪農大学	0	0	9
酪農短大	6	7	5
機農高	11	26	32
三愛女子高	6	12	19
一般大学	1	2	3
一般高校	0	11	7
計	24	58	75
奨学金額計	510,000円	1,136,000円	1,572,000円

注) 一般大学は北大、東京神学大学、明治大学、また一般高校は道内11高校である

3のとおりである。

奨学金のほかに酪農研究奨励金として、一九五八年度より北日本酪農青年研究連盟(現日本酪農青年研究連盟)に二〇、〇〇〇円が支給された。優秀発表者に贈られる黒澤賞の副賞としてであるが、酪農青年に大きな励みを与えた。

この奨励金は、その後三万円、五万円と増額されて現在は一〇万円が支給されている。このほかに、酪農研究のために海外に留学または実習する者に一〇万円の助成がなされ、一九五九年〜六四年に計六〇万円が支給された。

**経済の推移と奨学金の改訂** 一九六〇(昭和35)年の池田内閣の「国民所得倍增計画」は、一九七二(昭和47)年までの年平均実質経済成長率一〇%という、いわゆる高度経済成長時代を出現させた。

しかし、一九七四年の石油ショックをはさみ、七二〜七七年度の経済成長率は三・八%に落ち込み、物価狂乱、公害発生、副産物を生みつつ新しい時代へと移行した。

こうした時代の推移の中で、奨学金の改訂が必至となった。

前に述べたように大学、短大は規程では月三、〇〇〇円であるが、日本育英会に準じて二、〇〇〇円とし、奨学生の数を増やしてきた。これを一九六八年度より、一斉に三、〇〇〇円に改めた。さらに七二年度より大学、短大を月四、〇〇〇円、高校を三、〇〇〇円（通学二、〇〇〇円）に改訂した。

また、このころより国公立と私立学校間の学費の格差が社会的にも問題となり、私学に対する国庫助成が政治問題になっていた。やがて一九七〇年に、全私学に対する補助金交付、資金融資を扱う日本私学振興財団が設立され、さらに一九七五（昭和50）年には私立学校振興助成法が全私学の声を背景に制定された。

日本育英会も、このような時代背景の中で奨学金の改訂を次々と行う一方、国公立と私立の奨学金に格差を設けるなど、時代の要請にこたえる処置を講じた。また、北海道においても一九七二年より私立高校生を対象とする奨学金制度が設けられた。

**基金造成の対策** 一九七五（昭和50）年からの物価高騰は、私学においては学費の値上げを余儀なくし、奨学金の改訂にはねかえってきた。七五年以降の日本育英会および酪農育英会の改訂状況は次のとおりである。（表4）

酪農育英会の設立とほぼ時を同じくして、酪農学園後援会の結成が進められていた。三愛女子高等学校、酪農学園大学の校舎建設を後援すべく、一九六〇（昭和35）年ころより全国的規模で募金活動が開始され、当面の必要を満たすことができた。一九六九（昭和44）年には財団法人の認可を得て、さらに組織的、本格的募金活動を展開し多く成果と貢献をもたらした。

表 4 奨学金改訂状況 (月貸与額)

年度	酪農育英会		日 本 育 英 会		
	大学院 大学、短大	高校	私立大学 (一般)	私立短大 (一般)	私立高校 (一般)
1975 (昭和50)	7,000	4,000	11,000	9,000	4,000
1976 (昭和51)	”	”	12,000	11,500	6,000
1977 (昭和52)	”	”	14,000	13,000	7,000
1978 (昭和53)	12,000	6,000	17,000	16,000	8,000
1979 (昭和54)	”	”	27,000	26,000	18,000
1980 (昭和55)	15,000	7,000	”	”	”
1982 (昭和57)	17,000	8,000	”	”	”
1984 (昭和59)	20,000	9,000	(自宅) 31,000 (自宅外) 41,000	(自宅) 30,000 (自宅外) 37,000	(自宅) 21,000 (自宅外) 26,000
1987 (昭和62)	23,000	10,000	(自宅) 35,000 (自宅外) 45,000	(自宅) 34,000 (自宅外) 41,000	(自宅) 22,000 (自宅外) 27,000
1988 (昭和 63)	”	”	”	”	”
1989 (平成元)	”	”	(自宅) 38,000 (自宅外) 48,000	(自宅) 37,000 (自宅外) 44,000	(自宅) 23,000 (自宅外) 28,000
1990 (平成 2)	30,000	10,000	”	”	”
1991 (平成 3)	”	”	(自宅) 41,000 (自宅外) 51,000	(自宅) 40,000 (自宅外) 47,000	(自宅) 24,000 (自宅外) 29,000
1992 (平成 4)	大学院 50,000 35,000	15,000	”	”	”
1993 (平成 5)	”	”	(自宅) 44,000 (自宅外) 54,000	(自宅) 43,000 (自宅外) 50,000	(自宅) 25,000 (自宅外) 30,000
1994 (平成 6)	”	”	”	”	”
1995 (平成 7)	”	”	(自宅) 47,000 (自宅外) 57,000	(自宅) 46,000 (自宅外) 53,000	(自宅) 26,000 (自宅外) 31,000
1996 (平成 8)	”	”	”	”	”

第二章 関係団体と会社

酪農育英会			日本育英会		
年度	大学院 大学、短大 高校		私立大学 (一般)	私立短大 (一般)	私立高校 (一般)
1997 (平成9)	大学院 50,000 35,000 15,000		(自宅) 49,000 (自宅外) 59,000	(自宅) 48,000 (自宅外) 55,000	(自宅) 28,000 (自宅外) 33,000
1998 (平成10)	” ”		”	”	”
1999 (平成11)	” ”		(自宅) 50,000 (自宅外) 60,000	(自宅) 49,000 (自宅外) 56,000	(自宅) 29,000 (自宅外) 34,000
2000 (平成12)	大学院 50,000 40,000 20,000		”	”	”
2001 (平成13)	” ”		(自宅) 51,000 (自宅外) 61,000	(自宅) 50,000 (自宅外) 57,000	(自宅) 30,000 (自宅外) 35,000
2002 (平成14)	” ”		”	”	”
2003 (平成15)	” ”		(自宅) 53,000 (自宅外) 63,000	(自宅) 52,000 (自宅外) 59,000	(自宅) 30,000 (自宅外) 35,000

注) 日本育英会には、一般貸与奨学生のほかに特別貸与奨学生があり、自宅通学と自宅外通学によって貸与額が異なる。

なお、1984年度より全面的法改正が行われ、一般、特別の区別をやめて、自宅、自宅外通学に二分した。大学、短大では第1種奨学金(利息なし)、第2種奨学金(年利3%)に分け家計困難な者は第1種、第2種の併額ができることになった

こうした中で酪農育英会は、当面の事業遂行に必要な基金確保は続けてきたが、積極的な募金活動は後援会とのかかわりの中で行わずにきた。しかし、時代の推移は育英会の存立を危くするほど急であり、基金造成に対する緊急な対策を必要とした。

**創設者の先見と基金の充実** 黒澤西蔵

は育英会設立当初、法人の基本財産として将来換金できる土地の獲得を念頭に描いていた。当時、弟・和雄の経営する東月寒の牧場の農地約5haが対象になったが、農地法の制約や法人の土地売買の手續上の繁雑さから、息子の力太郎名義で売買を終え仮登記を済ませた。一九五七(昭和32)年のことである。

やがて、この牧場周辺の都市化が進み、一九七〇年には牧場も千歳市に移転し、周

辺の地価も上がってきた。七六年ころより換金が始まり育英会の急場をしのぐとともに基金造成のめどもついてきた。

また、七四年には瀬尾俊三からの一千万円余の寄付、さらに酪農学園後援会からは七九年度より引き続き計一、一〇〇万円の助成がなされた。

一九八二（昭和57）年、黒澤は、九七歳の生涯を終えたが、生前「基金はせめて三億円に」という当時の夢は酪農育英会設立三〇周年を迎えた一九八七（昭和62）年に実現することができた。

また、三〇周年を記念した同年度より、学園内の三五歳未満の若手研究者に研究奨励金の道を開くことができたのも創設者の遺志に沿ったことである。

#### 歴代理事長

黒澤 酉蔵 一九五七・一二・二七〜八二・二・六  
 佐藤 貢 一九八二・六・三〇〜九二・六・二九  
 黒澤 力太郎 一九九二・六・三〇〜現

#### 現理事

黒澤 力太郎 一九五七・一二・二七〜現  
 菊池 利治 一九九二・六・三〇〜現  
 菊地 正一 一九七二・六・二一〜現

高田哲夫	一九八四・	六・三〇〇	現
遊佐孝五	一九七二・	六・二一〇	現
黒澤信次郎	一九八〇・	六・三〇〇	現
町村末吉	二〇〇〇・	六・三〇〇	現
正野勝也	一九八八・	六・三〇〇	現
高橋節郎	一九七二・	六・二一〇	現
平尾和義	一九九六・	六・三〇〇	現
坂本与市	一九九六・	六・三〇〇	現
山口義弘	二〇〇三・	六・三〇〇	現

現監事

高倉勝孝	二〇〇三・	六・三〇〇	現
安田勲	一九九二・	六・三〇〇	現

二 財団法人酪農学園後援会

後援会組織の変遷

一九六〇年代中ごろから学園は、三愛女子高等学校と酪農学園大学を相次いで設置したが、これに伴う教育、施設費と老朽化しつつあった機農高等学校の建物の更新、増設などに多額の資金が必要になってきた。こうした学園を経済的に援助し、教育の充実を図る目的の下に、一九六〇（昭和35）年五月三十一日、当時の北海道知事町村金五を会長に「酪農学園後援会」が設立された。

やがてその活動によって、二億五、五〇〇万円の募金を得、この資金によって酪農学園大学校舎と実験室、三愛女子高等学校校舎と体育館ならびに機農高等学校の校舎、体育館が新增築された。

その後、一九六九(昭和44)年に至って、この後援会組織を法人化し、積極的活動を行うことになり、同年一月一八日文部省より財団法人として認可された。会長に経団連会長植村甲午郎を選出し、基金の造成と活動資金の募金を始め、一九七八(昭和53)年三月までに関係各界、各機関および個人の方々より八億二、六〇〇万円を募り酪農学園大学校舎の新築と附属施設の設備を行った。

七八年五月、植村会長病氣退任に伴い、再び、参院議員町村金五を会長に選出した。学園が設定した長期財務計画に対応する中で、さらに、黒澤記念講堂、学園本館あるいは大学の新学科・新学部の開設など年を追って施設・設備の充実が急務となった。特に大学中央館など大型建造物の構築に伴い大幅の資金造成を図ることになった。

またこの間に、後出のように町村金五が退任し、一九八八(昭和63)年五月、衆院議員倉成正、一九九六(平成8)年八月、同町村信孝の会長交代があったが、一九九八(平成10)年三月から町村末吉が会長に就任し今日に至っている。

**募金活動と広報活動** 募金活動を進める中で寄付行為の一部を変更し、従来の募金活動に加えて、卒業生を中核に在校生父母、学園教職員、企業団体、会社、農業団体および個人を会員とした維持会員制度をつくり、組織の拡大、充実を図ってきた。

一方、会員相互の連携を深めることや情報交換、さらには学園の現況を広く理解してもらうために

会報『健土健民』誌を年三回、加えて教職員には『身土不二』誌を年四回発行している。

こうした募金活動を通じ、後援会が組織された一九六〇（昭和35）年から一九六八（昭和43）年までに二億五、五四六万円、財団法人としてスタートした一九六九年から二〇〇二（平成14）年三月までに総額三六億二、八七三万円を募金と運用収入で調達し、学園、各学校、育英会などの教育や施設に二四億一、七七三万円の助成がなされた。その時々の貨幣価値に換算すると十数倍に達するものと考えられる。またその間、基本財産として一〇億七、九六一万円を造成することができた。

#### 酪農学園後援会設立趣意書

酪農学園は酪農業後継者をはじめ、幾多の人材を輩出し世の注目を集めているところであるが、国の総合農政における酪農の使命が一段と強調されている折柄、酪農学園の教育に対する期待が愈々大きい。然るに財政的に恵まれない私学、殊に酪農学園の如く理科系私学においては多額の施設、設備費を要する反面、学生生徒数は比較的少数のため教育効果を期する上での財政上の負担は一層容易ならぬものがある。従って、財政確立のもとに教育内容の充実を図り酪農学園の使命達成を援助するため、財団法人酪農学園後援会を設立する。

#### 後援会の寄付行為（抜粋）

第一条 この法人は、財団法人酪農学園後援会という。

第四条 この法人は、学校法人酪農学園が設置する学校における教育を助成するため、酪農学園に対し財政的援助を与え、もって教育の振興に寄与する殊を目的とする。

第五 条

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(一) 酪農学園の施設、設備の整備拡充費に対する助成

(二) 酪農学園の維持運営に対する助成

(三) 酪農学園における学術調査研究に対する助成

(四) その他前各号に掲げる事業に付帯する事業

第六 条

この法人の資産は、次のとおりとする。

(一) この法人設立当初の寄付にかかる別紙財産目録記載の財産

(二) 資産から生ずる果実

(三) 寄付金品

(四) その他の収入

第一六 条

この法人に、次の役員を置く。

(一) 理事 一八名以上二五名以内（うち会長一名、副会長三名、常務理事二名）

(二) 監事 二名以上三名以内

第二二 条

この法人には、評議員五一名以上五五以内を置く。

第二八 条

この法人の目的および事業に賛同し後援するものは、次に掲げる後援会員になることができる。

(一) 維持会員

ア 個人会員 会費年額五千円以上（一口五千円を単位とする）を納める個人

ロ 法人会員 会費年額一万円以上（一口一万円を単位とする）を納める法人または団体

(二) 賛助会員 寄付金一万円以上を納める個人、法人または団体

(三) 名誉会員 この法人に対し、特に功労のあった者のうちから、理事会で議決をもって推薦する者

組織

評議員会——理事会——会長——事務局

本部事務所…北海道江別市文京台緑町

五八二番字校法人酪農学園内

東京事務所…東京都港区虎ノ門一丁目一―二

虎ノ門ビル四〇六

基本財産の実績（二〇〇二年三月現在）

基金積立預金 七億八、四五〇万円（寄付金、維持会費および運用収入から基金へ積立累計）

黒澤記念講堂基金 二、四六〇万円（黒澤記念講堂建設特別寄付金より基金繰入分）

佐藤貢基金 四、七〇〇万円（佐藤貢名誉理事長 指定基金寄付）

土谷基金 一、三〇〇万円（土谷長松 ㈱土谷製作所会長 指定基金寄付）

宇都宮基金 一、〇〇〇万円（宇都宮潤 宇都宮牧場社長 指定基金寄付）

雪印国際交流基金 一億〇、〇〇〇万円（雪印乳業㈱の国際交流基金として指定基金寄付）

佐藤・雪印―酪農学園・アルバータ大学交流基金

三、〇〇〇万円（佐藤貢・雪印乳業㈱ 指定基金寄付）

クローバー基金 七、〇五一万円

合計 一〇億七、九六一万円

第三部 事務局・関係団体・職員録

年 度	(単位・千円)			寄付金・維持会費、 学園助成金、 基金積立の推移
	寄付金・維持会費	学園助成金	基金積立	
1960 (昭和 35)	255,461	245,461		
1968 (昭和 43)				
1969	76,249	54,610	22,500	
1970 (昭和 45)	91,387	68,756	24,000	
1971	95,719	29,507	69,500	
1972	113,177	46,258	77,000	
1973	43,835	21,260	33,300	
1974	97,282	38,703	60,500	
1975 (昭和 50)	37,278	24,866	35,500	
1976	25,481	35,275	29,000	
1977	22,809	35,940	5,000	
1978	280,917	94,667	149,500	
1979	78,336	110,456	0	
1980 (昭和 55)	66,140	82,365	3,000	
1981	58,416	92,457	1,200	
1982	58,429	93,447	1,000	
1983	78,359	59,920	5,000	
1984	134,055	167,295	7,000	
1985 (昭和 60)	61,475	69,686	22,000	
1986	161,859	211,926	9,800	
1987	94,625	39,023	55,400	
1988	94,314	87,799	33,000	
1989	55,402	44,455	40,800	
1990 (平成 2)	40,023	40,570	39,700	
1991	68,355	51,695	53,200	
1992	42,790	42,234	30,700	
1993	78,667	58,012	53,500	
1994	79,660	51,260	37,000	
1995 (平成 7)	115,885	50,563	74,000	
1996	84,219	47,213	40,000	
1997	50,409	49,717	510	
1998	50,219	46,982	3,000	
1999	80,715	52,558	33,000	
2000 (平成 12)	66,977	71,169	3,000	
2001	44,888	47,683	13,000	
2002	44,850	53,941	15,000	
合 計	2,928,662	2,417,729	1,079,610	

酪農学園後援会歴代役員（二〇〇三・七・一日現在）

会長

町村 金五 一九六〇・四・六〜一九六九・一・一八  
 植村 甲午郎 一九六九・一・一八〜七八・五・六  
 町村 金五 一九七八・五・六〜八八・五・三〇  
 倉成 正 一九八八・五・三〇〜九六・七・三  
 町村 信孝 一九九六・八・三〇〜九八・三・二五  
 町村 末吉 一九九八・三・二五〜現

副会長

高橋 雄之助 一九六九・一・一八〜七九・六・一四  
 瀬尾 俊三 一九六九・一・一八〜八三・六・三〇  
 三井 武光 一九六九・一・一八〜八三・六・三〇  
 早坂 正吉 一九七九・六・一四〜八三・六・三〇  
 床鍋 繁則 一九八三・六・三〇〜九四・五・二五  
 福屋 茂見 一九八三・六・三〇〜九三・五・二七  
 山本 庸一 一九八三・六・三〇〜八八・五・三〇  
 鈴木 常正 一九八八・五・三〇〜九一・六・三〇  
 正野 勝也 一九九一・七・一〜九九・六・三〇  
 町村 末吉 一九九三・五・二七〜九八・三・二五

相談役

三澤 政雄 一九九四・五・二五〜九五・六・三〇  
 阿部 忠男 一九九五・七・一〜〇〇・六・三〇  
 高倉 勝孝 一九九八・三・二五〜現  
 石川 哲郎 一九九九・七・一〜〇〇・二・一四  
 宮田 勇 二〇〇〇・七・一〜現  
 西 紘平 二〇〇〇・七・一〜現  
 山口 義弘 二〇〇三・七・一〜現  
 金川 幹司 二〇〇三・七・一〜現

堂垣 内尚弘 一九七三・七・六〜現  
 町村 金五 一九七三・七・六〜七九・六・一四  
 高田 富与 一九七三・七・六〜七六・六・三〇  
 黒澤 西蔵 一九七三・七・六〜八三・六・三〇  
 佐藤 貢 一九七三・七・六〜〇〇・六・三〇  
 菊地 正一 一九七九・六・一四〜現  
 山岸 六郎 一九八三・六・三〇〜〇二・三・一二  
 鈴木 常正 一九九一・七・一〜九九・六・三〇  
 土谷 長松 一九九一・七・一〜〇〇・六・三〇

原田 新介	一九九四・	五・二五〇〇・六・三〇
正野 勝也	一九九九・	七・一〇〇〇・現
常務理事		
菊地 正一	一九六九・	一一・一八〇七九・六・一四
山岸 六郎	一九六九・	一一・一八〇八三・六・三〇
青山 義人	一九七九・	六・一四〇八三・六・三〇
小林 哲威	一九八三・	六・三〇〇八八・五・三〇
原田 新介	一九八三・	六・三〇〇九四・五・二五
植田 勝美	一九八八・	五・三一〇〇〇・六・三〇
濱本 恒男	一九九四・	五・二五〇九五・六・三〇
戸水 雅智	一九九五・	七・一〇〇一・六・三〇
井上 詳介	二〇〇〇・	七・一〇〇〇・現
須田 利明	二〇〇一・	七・一〇〇〇・現

監事		
安達 勇	一九七〇・	二・一四〇七九・六・一四
増田 信一	一九七〇・	二・一四〇七三・七・六
西 佐久一	一九七〇・	二・一四〇八七・六・三〇
神田 正秋	一九七三・	七・六〇七六・六・三〇
三上 孫一	一九七三・	七・六〇八三・六・三〇
小林 秀敏	一九七六・	六・三〇〇八一・六・一四
床鍋 繁則	一九七九・	六・一四〇八三・六・三〇
大関 正人	一九八三・	六・三〇〇九一・六・三〇
堀 巳之松	一九八三・	六・三〇〇八七・六・三〇
木下 知行	一九八七・	六・三〇〇九一・六・三〇
黒澤力太郎	一九八七・	六・三〇〇〇〇・現
中島 亘	一九九一・	七・一〇〇〇・六・三〇
山崎 真治	一九九一・	七・一〇〇九五・六・三〇
物井 清人	二〇〇〇・	七・一〇〇〇・現

### 三 酪農学園同窓会連合会

一九三三（昭和8）年酪農義塾が創設されてから、七〇周年を迎えた今日までに機農高等学校、短期大学酪農学校（通信教育）、酪農学園短期大学、三愛女子高等学校、酪農学園大学を設置し、発展してきた酪農学園は、さらに大学院、新学科、新学部を開設して多くの卒業生を社会に送り出してきた。これらの同窓生は北海道に限らず全国各地に分布し、いまや農業界をはじめ教育、文化、政治、経済などのあらゆる分野において大きな活躍を続けている。

学園各学校の卒業生は、かねてからこの卒業生をもって独自の同窓会を組織し、それぞれ活動を行ってきた。しかし、一九七二（昭和47）年に至って、この学校単位の同窓会をもって連合会を組織し、相互連携の下に強力な発展を図ろうという気運が高まった。そのため関係者による準備委員会が持たれ検討の結果、一九七三年六月二三日「酪農学園同窓会連合会」が設立され、初代会長に中西文雄（酪農義塾が就任した。ことに設立に至るまでには初代事務局長として、推進役の働きをした辻田武作の陰の力のあつたことを明記しておきたい。

この同窓会連合会は、学園各学校単位同窓会相互の連携と緊密化によって、単位同窓会の向上発展を図るとともに、酪農学園の教育振興に寄与することを目的とし、学園内に事務局を設置し活発な活動が続けてきた。

一方、二十数年前の一九八〇（昭和55）年時の学園同窓生は一万七、八二九名（酪農義塾八七人。機農高

等学校三、四〇九。同研究科、別科、選科農機科三二一。三愛女子高等学校四、五四三。酪農学園短期大学三、三四五。酪農学園大学五、三三三、全国の支部数は一三であったが、現在は四万五、三〇一名に達し(別掲表)、支部数も四六支部(道内地域一七、道外二九)に増えている。

この間、一九七五(昭和五〇)年二月、中西会長に代わって高橋節郎(短大創期生)が二代目会長に就任した。その後も学園教育の再編に伴って機農高等学校と三愛女子高等学校の統合があり、統合以前の卒業生によって「酪農学園機農会」および「酪農学園三愛会」の単位同窓会も誕生した。

従って、現在の単位同窓会は酪農義塾、酪農学園機農会、酪農学園短期大学短期学部、(酪農学園短期大学・北海道文理科短期大学三愛女子高等学校、とわの森三愛高等学校、酪農学園大学の単位同窓会によって構成されている。

また、準会員は他大学を卒業して本学大学院に在籍し、修了した者、ならびに短期大学酪農学校を卒業した者となっている。

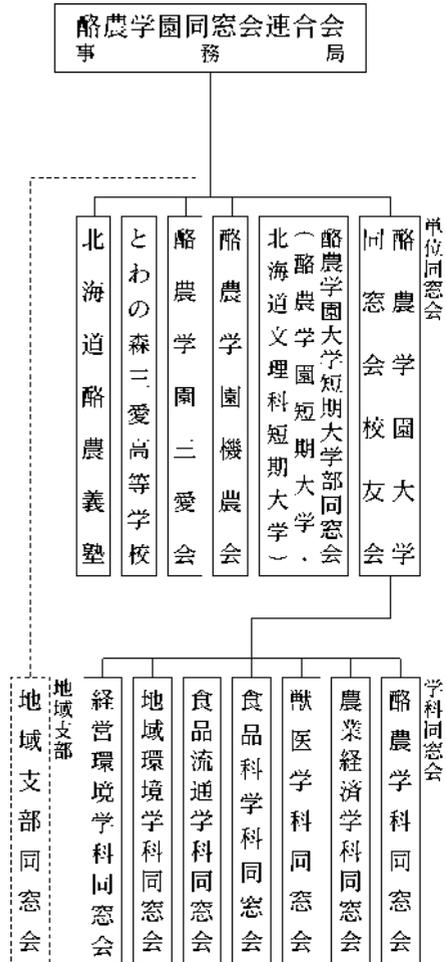
また、現在の役員構成は会長一名、副会長四名、理事二二名、評議員六〇名、幹事一七名、監事三名によって運営されており、各单位同窓会より選出された役員によって構成されている。

一方、同窓会連合会の発足以来今日まで膨大な同窓生会員の住所および動向の掌握作業を進める中で数度にわたる同窓生名簿を刊行してきた。しかし、特筆すべきは、同窓生会館の建設であった。旧短期大学校舎のシンボルであった二階建中央部分および両翼の一部を活用しての同窓生会館の建設に、数年間にわたる準備期間と三、〇〇〇万円に及ぶ建設費募金活動の困難を乗り越えて完成させたこ

とである。また、佐藤貢名管理事長へのレリーフ、樋浦誠初代学長の追悼記念会（九二年一月一四日）、ホームカミングデーの実施、「酪農学園だより」への情報提供など多くの事業を展開してきた。

さらに、近年になって支部、単位および各種同窓会開催における生涯学習講座、学習会に対して本学講師の派遣、あるいは大学エクステンションセンター主催の酪農公開講座、酪農セミナーと支部活動の連携を図るなど卒業後の生涯学習講座と学習会への役割を果たしてきた。また同窓会連合会のホームページ開設によって母校や会員間の情報提供に努めている。

周知のとおり、わが国の人口構成は未曾有の少子化時代を迎えている。さらには農家戸数の減少と重なって、ことに農学系の私学経営は厳しさを増してきている。そんな中であって年々会員数を増す同窓会の存在と活躍は、本学園の将来に大きな勇気と希望を与えている。



- ・支部同窓会名 (二〇〇三・六)
- 道内地域の支部同窓会 一七支部
- 札幌、千歳、恵庭、空知、北松山、南松山、新冠、上川中央、幌延、名寄、剣淵、紋別、斜網、鶴居、釧路、標茶、根室
- ・道外、県支部同窓会 二九支部
- 青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島、富山、石川、福井、茨城、栃木、千葉、群馬、埼玉、神奈川、関東、静岡、愛知、岐阜、近畿、岡山、広島、山口、佐賀、高知、熊本、宮崎、長崎、福岡

## 第二章 関係団体と会社

## 同窓生会員「大学、短大、高校、義塾」卒年度別推移

(調査月は5月)

項目 \ 年度	1973 (昭和48)	1988 (昭和63)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)	2003 (平成15)
大学院							
獣医(研究科、博士)		7(博) 685(修)	910	912	914	916	922
酪農(研究科、博士)			10	10	11	12	18
修士			30	141	159	181	203
計	—	722	1,061	1,081	1,106	1,131	1,165
大 学							
酪 農 学 科	1,600	4,576	6,832	7,039	7,227	7,410	7,613
農 業 経 済 学 科	660	2,368	3,845	3,981	4,097	4,209	4,335
獣 医 学 科	339	1,974	3,394	3,545	3,681	3,817	3,958
食 品 学 科			896	1,024	1,150	1,275	1,389
食 品 流 通 学 科			193	295	375	454	525
経 営 環 境 学 科			—	—	—	116	226
地 域 環 境 学 科			—	—	—	141	293
計	2,599	8,918	15,160	15,884	16,530	17,422	18,339
短 大							
酪 農 科	2,079	4,910	6,571	6,629	6,690	6,747	6,815
教 養 学 科		243	1,314	1,422	1,422	1,422	1,422
経 営 情 報 学 科			917	1,073	1,073	1,073	1,073
計	2,079	5,153	8,802	9,124	9,185	9,242	9,310
とわの森高校							
普通科・英語科	2,737	6,506	9,523	9,828	10,107	10,428	10,738
酪農経営科	3,251	4,262	4,759	4,793	4,824	4,848	4,871
計			14,282	14,621	14,931	15,276	15,609
酪農義塾	304	304	304	304	304	304	304
(S62調査時点)	(878)	(878)	(878)	(878)	(878)	(878)	(878)
総 計	10,970	25,865	39,609	41,014	42,056	43,375	44,727
	(11,544)	(26,499)	(40,183)	(41,588)	(42,630)	(43,949)	(45,301)

注)・卒業生数は、調査集計時点で人数に差異が生じている

・酪農義塾の会員数は、「調査時点の判明者」とし、( )内は終了生総数

・とわの森高校酪農経営科には「酪農学園機農会」が、同校普通科には「酪農学園三愛会」が含まれている

酪農学園同窓会連合会（抜粋）

第一条 本会は、酪農学園同窓会連合会と称す。

第二条 1. 本会の会員は、酪農義塾、酪農学園機農会、酪農学園短期大学・北海道文理科短期大学、酪農学園短期大学部、三愛女子高等学校・とわの森三愛高等学校、酪農学園大学の単位同窓会をもって組織する。

2. 本会の準会員は酪農学園大学及び大学院に在籍し、卒業及び各研究科を修了したものの、並びに酪農学校同窓会に属している会員をもって組織する。

第三条 本会は、単位同窓会相互の連繫と緊密化を図り、単位同窓会の発展向上に寄与すると共に酪農学園教育の振興に寄与することを目的とする。

第四条 本会の事務局は北海道江別市文京台緑町五八二番地一、酪農学園内におく。

第五条 本会は第三条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 単位同窓会会員名簿の作製に必要な事業
2. 同窓会連合会誌等の発行
3. 地方支部に必要な事業
4. 酪農学園の教育に必要な事業
5. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第六条 本会に次の役員をおく。

- 会長 一 副会長 四 理事 二二  
評議員 六〇 幹事 一七 監事 三

第七条 役員を選出および任期は次に掲げる事項による。

1. 会長・副会長は単位同窓会の会長の互選とし、理事・監事は会長が委嘱する。
  2. 評議員、幹事は各支部長および単位同窓会より選出した者とする。
  3. 役員の任期は二カ年とする。但し再任は防げない。
- 第十一条 名誉会長の推載および顧問は評議員会の議決を経て会長が委嘱する。
- 第十二条 本会の経費は単位同窓会の拠出金、寄附金その他収入をもつてあてる。
- 第十三条 本会は毎年一回会務を報告する。

会長・副会長氏名および期間

会 長	中西文雄	一九七三・六～一九七五・二
”	高橋節郎	一九七五・二～現在
副会長	高橋節郎	一九七三・六～一九七五・二
”	石田貞夫	一九七三・六～現在
”	高倉勝孝	一九七三・六～一九九一・五
”	中井保博	一九九一・五～現在
”	窪田佐智子	一九七三・六～一九八九・五
”	小山内豊美	一九八九・五～一九九五・五
”	山崎惠子	一九九五・五～現在
”	野村武	一九九九・五～現在

歴代事務局局長氏名

辻田武作	一九七三・六～一九七六・三
安藤功一	一九七六・四～一九七九・四



理事 松原純子  
〃 佐藤恒平

#### 四 北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

カナダ・アルバータ州の政府関係者と親交の深かった佐藤貢理事長は、かねてから本道と気候風土の類似しているアルバータ州と、教職員や学生および実習生を相互交流し、両国の文化、酪農科学技術の研究向上を図ることを考え、これの具体案について両者の間で検討を進めていた。

一九七三(昭和48)年五月、アルバータ州農業省よりこの交流計画の構想に関する提案があったため、急速に話し合いが進展して、同年九月一〇日、アルバータ州エドモントンにおいて開催された北海道貿易物産展に出席した佐藤理事長と、アルバータ州農業省および同州立大学との間に具体的な計画の合意が成立した。北海道側は事務所を酪農学園に設け、大学・短大と連携をとって準備作業を進めた。このようにして一九七三年一〇月一六日「北海道アルバータ酪農科学技術交流協会」(会長佐藤貢)の設立となり、一九七四年七月に第一回の酪農交流生八名、同年一〇月には本学教員鯨島邦彦助教が一年間派遣された。なお、本会は北海道の助成を得ている。

一方、アルバータ州からは一九七五年二月に第一回酪農交流生としてパトリシア・ファリス嬢を迎えた。その後も毎年大学、短大より研究者学生を派遣したほか、多くの酪農青年の相互交流を実施して、酪農の振興と日加親善のため大きな成果を収めてきた。ことに最初の一〇年間は、教員・学生・

酪農青年の三者レベルでの交流事業であったが、一九八五（昭和60）年にアルバータ州立大学が道内三大学との交流に変更したため、酪農青年の交流が主になった。さらに、一九八九（平成1）年、カナダ連邦政府が労働ビザを発行停止してからは酪農青年の交流もできなくなった。

しかし、一九九〇（平成2）年、実学に重きを置くオールズカレッジと協定を結び五〇名（平成15年現在）の学生を派遣して幅広い学問分野の学科で教育を受けることになった。また、アルバータ酪農協会の協力により酪農青年（ワーキング・ホリディビザ）の派遣が可能になった。一九九六（平成8）年五月にはアルバータ大学のフレーザー学長の熱心な交流再開の申し出を受け、三者レベルの交流が継続でき得ることになった。

なお、設立趣意書（抜粋）ならびに教育者、実習生（二カ年）の交流状況は別表のとおりである。

このほか会報「アルバータだより」を発行（年一回）し、会員相互の連絡を図っている。また、一九九八（平成10）年六月二七日には創立二五周年記念祝賀会を挙行するとともに「25周年記念誌」（A4判52頁）を刊行した。

近年、交流事業はアルバータ州立オールズカレッジに派遣する学生に限定されるようになったが、新しい事業としてこれまでの交流事業に加え、酪農環境、家畜衛生、農業教育、産業クラスターなどの諸分野においてアルバータ州をはじめとするカナダから実践的優秀な技術者を招き、推進会議、農業セミナーなどを開催して農業技術の積極的導入を図るとともに、これまで同州に派遣した酪農農研修士のネットワークづくりを進め、道内各地、生産現場の技術普及を通じ、本道酪農の発展に一層寄

与するために努力している。

二〇〇三年六月二七日には設立三〇周年記念式典が挙行され、来賓として迎えたオールズカレッジ・トンプソン学長と改めて交流協定が更新され、交流内容が幅を広げさらに充実することが期待される。

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会設立趣意書（抜粋）

(1) 目的 文化及び技術的知識を交換し又酪農場の経営及び作業について又は酪農科学の学習或は酪農研究について個人的経験を習得し更に両国間に大きな友情を進展するにある。

(2) 交流対象者及び人員

A 酪農家 一〇名

B 大学の酪農に関係ある学生（在校生及び卒業生） 四名

C 研究教育者 二名

上記交流人員数は最初の段階にして経験を経て交流人員数の増加は可能である。

(3) 参加資格 参加者は経験豊かな者であること。即ち酪農家は酪農業に少なくとも二年以上従事した者で且つ次の経験を有する者であること。 A 搾乳 B 飼養 C 繁殖 D 管理

(4) 交流期間 各人共六か月から一か年以内とし酪農家は夫々夏冬の期間を組み合せ両期間の作業経験を含めるものとする。

(5) 旅費は参加者の国の実情によりきめる。

(6) 滞在費 酪農家の場合滞在期間中における生活費は実習労働によってまなかう。

(7) 交流は先ず酪農家から始める事とし最初の交流開始目標は一九七四年一月三〇日とする。

第三部 事務局・関係団体・職員録

交流実績表

(2003年4月現在)

	年 度	教育・研究者		学 生		酪農青年		計		
		派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計
1	1974年	1				8		9		9
2	1975年	1				9	1	10	1	11
3	1976年	1				9	1	10	1	11
4	1977年	1		1		10	6	12	6	18
5	1978年	1				10	2	11	2	13
6	1979年	1	1	1		8	4	10	5	15
7	1980年	1	1			9	3	10	4	14
8	1981年	1	1			10	4	11	5	16
9	1982年	1		1		10	5	12	5	17
10	1983年	1	2			4	4	5	6	11
11	1984年		1			5	2	5	3	8
12	1985年		1			7	1	7	2	9
13	1986年					7	1	7	1	8
14	1987年					8	2	8	2	10
15	1988年					9	1	9	1	10
16	1989年					6		6		6
17	1990年			1		10		11		11
18	1991年			4				4		4
19	1992年		1	1		1		2	1	3
20	1993年			7		2		9		9
21	1994年			2				2		2
22	1995年			4				4		4
23	1996年			7		3		10		10
24	1997年			10		1		11		11
25	1998年			6				6		6
26	1999年			2				2		2
27	2000年			4				4		4
28	2001年			3				3		3
29	2002年			1				1		1
30	2003年			2				2		2
計		10	8	57		146	37	213	45	258
合計		18		57		183		258		

注) 酪農青年派遣 1974～1990 Working Visa、1992～ Working Holiday Visa で渡航  
 学生派遣 1977、1979、1982 アルバート大学、1990～ オールズカレッジへ派遣  
 1997 内4名はアルバート大学へ派遣

第二章 関係団体と会社

顧 問  麻 田 信 二  高 橋 は る み  二 〇 〇 三 年 七 月	名 譽 會 長 、 顧 問 、 參 与  二 〇 〇 三 年 七 月	監 事  田 佐 菅 櫻 大 菊 北 武 安 大 遊 菊 高 黒 松 町 金 平 尾 和 義  良 英  良 善 一 俊 孝 利 節 力 太 郎 夫 吉 司	現 役 員  二 〇 〇 三 年 七 月
	副 會 長  松 中 村 川 尾 幹 司 和 義	常 任 理 事  黒 澤 照 末 吉 司 和 義	理 事  池 橋 節 力 太 郎 夫 吉 司 和 義

事 務 局  事 務 局 長  事 務 局  二 〇 〇 三 年 七 月	事 務 局 長  二 〇 〇 三 年 七 月	参 顧 与 問  松 佐 佐 岩 金 田 中 村 小 加 岩 岡 高 井 石 井 福 久 矢 野 征 治 男  本 正  木 均 洋 弘 實 男 男 一 勲 滋 弘 孝 次 夫 介 仁 治 男	参 顧 与 問  松 佐 佐 岩 金 田 中 村 小 加 岩 岡 高 井 石 井 福 久 矢 野 征 治 男  本 正  木 均 洋 弘 實 男 男 一 勲 滋 弘 孝 次 夫 介 仁 治 男
	堂 地 修  敬 禮 農 學 園 大 學 エ ク ス テ ン シ ヨ ン セ ン タ ー 内	堂 地 修  敬 禮 農 學 園 大 學 エ ク ス テ ン シ ヨ ン セ ン タ ー 内	松 佐 佐 岩 金 田 中 村 小 加 岩 岡 高 井 石 井 福 久 矢 野 征 治 男  本 正  木 均 洋 弘 實 男 男 一 勲 滋 弘 孝 次 夫 介 仁 治 男

## 五 酪農学園職員組合

酪農学園職員組合の誕生は一九六二（昭和37）年二月二七日であった。この日の午後五時、野幌教会附属幼稚園ホールに一六名が参加して賛美歌・聖書の朗読、祈祷の中で結成大会が開かれ、組合の歴史的な一歩をしるした。

それまでは一九四八（昭和23）年に設立された酪農学園共済会があった。この共済会は学園に働くすべての教職員を会員とし、会員の親睦、教養、生活の安定、体育の向上および福利の増進などを目的としていた中、その後「学園教育の理想を推進するとともに会員の生活を擁護する……」と生活の擁護を前面に掲げるなどして、長年にわたって労使間の問題討議の場として、一定の役割りを果たしてきた。

しかし、たまたま世論を二分する、いわゆる六〇年安保（昭和35年）を背景に、酪農学園にも労働組合法に基づく組合を組織しようという気運が有志らによって急速に高まり、周到な学習と準備が静かに進められていた。

当時の社会風潮は、まだまだ労働組合に対しての偏見や懐疑の念を抱く者も多くタブー視されていた。そのような時代相は酪農学園も同様であった。結成大会出席者わずかに一六名——という人員からも当時の状況をうかがい知ることができよう。次の一六名の人たちこそが酪農学園職員組合のパイオニアであった。

阿部 彰	五十嵐 徹	井上昌保
浦部 浩行	大澤二郎	岡部孝也
川端 順造	神 正 士	塩 入 隆
斎藤 忠夫	杉 山 昇	長 井 実
原 国 夫	野 村 喬	松 繩 善三郎
本谷 静江		

しかしその後、これらの人たちを中心とした一途な働きかけによって着実に組合への理解も深まって、同年一二月には多くの教職員が参加して共済会を解散し、本格的な組合活動が始まった。

以来、組合は組合員の自主的な団結権および団体交渉権を確立し、労働条件の維持改善、社会的、経済的地位の向上を図るとともに、併せて学園の教育目的達成に寄与する一方、学園の建学精神と民主化、民主教育の推進、労働条件および待遇の改善、組織の拡大強化、上部団体との連携などと取り組んできた。特記すべきことは規約第三条にあるように「学園所期の教育目的達成のために寄与する」としていることである。

さらに酪農学園職員組合は学園の職場の組合にとどまることなく早くから江別地区労働組合協議会、北海道私立学校教職員組合、日本キリスト教主義学校教職員組合連合会に加入している。

一方、酪農学園職員組合は、年間計画の基に各部が組織化されており、福祉・厚生・文化の向上をはじめ組合員の家族を交えての親睦を図っている。

酪農学園職員組合同約（抜粋）

第一条 この組合は、酪農学園職員組合と称し、事務所を江別市文京台緑町五八二番地酪農学園内に置く。

第二条 この組合は、次の各項に該当する者であつて組合同約第五条に規定された者によつて組織される。

- 一 酪農学園の職員
- 二 酪農学園の職員であつた者で、その意に反して職員地位を奪われた者であつて、本人が組合員であることを希望する者
- 三 六カ月以上長期にわたつて酪農学園と雇用関係を持続している者で、組合員であることを希望する者

第三条 この組合は、組合員の自主的な団結権及び団体交渉権を確立し、労働条件の維持改善、社会的、経済的地位の向上を計ることを目的とし、併せて学園所期の教育目的達成のために寄与するものである。

第六条 組合加入希望者は、所定の手続を経て、執行委員会において承認を得た時から組合員たる資格を得る。

第七条 何人も、いかなる場合でも、人種、宗教、性別、年令、門地または身分によつて組合員の資格を奪われることはない。

第八条 組合員は次の諸権利を有する。

- 一 大会に参加し、議決に参加すること。
- 二 役員を選挙権、及び被選挙権。
- 三 関係書類を閲覧すること。

第二三条

四 この組合の各機関に出席して発言する権利。  
五 大会の議決によらない何らの懲罰負担もかけられないこと。  
六 その他、すべての問題に参加し、平等の取り扱いをうけること。

この組合は、次の機関を置く。  
大会、代議員会、執行委員会、支部。

第二四条

大会は、この組合の最高決議機関であつて、組合員全員によつて構成され毎年六月執行委員長が召集する。

第二五条

臨時大会は、次の場合2週間以内に執行委員長が召集する。

第二六条

- 一 組合員の三分の一以上の要求があつたとき。
- 二 代議員会が必要と認めたとき。
- 三 執行委員会が必要と認めたとき。
- 四 大会に討議する事項は次の通りである。
  - 一 組合の運動方針
  - 二 事業報告
  - 三 予算、決算
  - 四 役員の選出
  - 五 規約の改正
  - 六 争議行為の開始と終結
  - 七 労働協約の締結、改訂
  - 八 その他、上部団体への加盟、脱退、組合の解散、組合員の除名等、組合員の意志を決定する重要事項

第一九条

代議員会は大会に次ぐ議決機関で、大会の議決に従い組合業務の運営に必要な諸決定を行う。

第二〇条

代議員は、組合規約第三〇条による各支部より、組合員一〇名またはその端数につき一名の割合で互選される。但し、代議員は執行委員を兼ねることはできない。

第二三条

代議員会に討議する事項は次の通りである。

一 運動方針の細目的事項

二 大会に提出する議案の作成及び報告

三 規約に生じた疑義の解明

四 組合内規の制定改廃

五 追加補正予算及び暫定予算並びに臨時徴収金

六 役員の補欠選挙

七 組合員の義務違反に関する事項

八 その他、臨時大会を開くに至らない程度の事項、または緊急やむを得ない事項

第二六条

執行委員会は、大会及び代議員会の議決に基いて組合業務を執行し、大会及び代議員会に対して責任を負う。

第二八条

執行委員会が協議する事項は、次の通りである。

一 大会、代議員会の議決の具体化に関する問題

二 加入、脱退の承認

三 大会、代議員会への提出議案の作成

四 その他

第三〇条

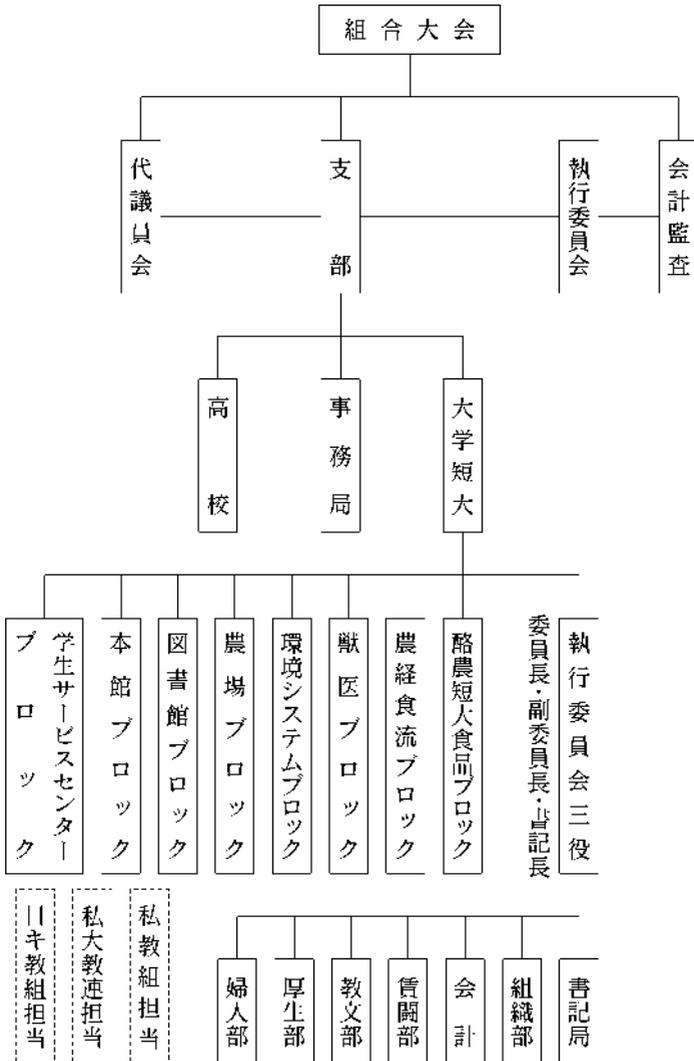
この組合には支部を置き、上部機関への要望事項、その他、支部固有の問題等を協議することができる。

第三一条

支部とは、大学・短大、高校、事務局の三つをいう。支部の中にブロックを置くことができる。支部に支部長を置き、支部役員を置くことができる。支部に関する規定は別に定める。

- 一 執行委員長 一名
- 二 副執行委員長 二〜三名
- 三 書記長 一名
- 四 書記次長 二名
- 五 会計 一名
- 六 執行委員 若干名
- 七 会計監査 二名

酪農学園職員組合組織図



第二章 関係団体と会社

歴代委員長・書記長（年度）

委員長

大澤 二郎	一九六二（62・2・27） 12・1
牛島 純一	一九六二（62・12・1） 63・7・6
井上 錦次	一九六三、六四、六五
神 正士	一九六六、七〇、七一、七二、七三
野村 喬	一九六七、六八、六九
小野 恒弘	一九七四、八一
村山 昭二	一九七五、七六
太田 一男	一九七七、七八、八五
大谷 俊昭	一九七九
中原 准一	一九八〇、八六
青柳 剛	一九八二、八三
塩見 建樹	一九八四
安宅 一夫	一九八七
小阪 進一	一九八八
高橋 清志	一九八九
菊池 直哉	一九九〇
中尾 敏彦	一九九一

書記長

市川 治	一九九二
平賀 武夫	一九九三
谷山 弘行	一九九四
佐々木 均	一九九五
横田 博	一九九六
石下 真人	一九九七
加藤 勲	一九九八
宮川 栄一	一九九九
干場 信司	二〇〇〇
森田 茂	二〇〇一
佐藤 博	二〇〇二
荒木 和秋	二〇〇三
神 正士	一九六二（62・2・27） 12・1
井上 昌保	一九六二（62・12・1） 63・7・6
神 正士	一九六三、六四、六五、六七、六八
小野 恒弘	一九六六、七七、八〇、八六

浦部 浩行	一九六九	林 多喜夫	一九八七、九三
村山 昭二	一九六九(70.3.20より代行)七〇、七 四(75.11)	佐々木 淳	一九八八、八九、九〇、二〇〇〇、〇二
井上 昌保	一九七一、七二、七四(74.12.75.6)、 七五	泊出 秀雄	一九九一、九二
渡邊 基	一九七三	加藤 浩	一九九四
柴橋 伴夫	一九七六、八一	藤島 浩二	一九九五
梶原 興正	一九七八	十倉 宏	一九九六
塩見 建樹	一九七九、八三	浅川 満彦	一九九七
原 国夫	一九八二	久保木 崇	一九九八
沖本 憲行	一九八四	大中 隆	一九九九
浦川 利幸	一九八五	佐藤 文彦	二〇〇一
		石川 和哉	二〇〇三

## 六 クロバー食品株式会社

**設立と経緯** クロバー食品株式会社は、一九六六(昭和41)年五月九日、学校法人酪農学園事業部の商業部門を分離・引き継ぐことよって設立された。

設立に至る背景は、一九六〇(昭和35)年三月、酪農学園大学酪農学部酪農学科を設置、一九六二年一二月大学に農業経済学科増設、一九六四(昭和39)年一月、獣医学科を増設するなど、酪農学園教育

発展の基盤の確立と並行して、学園の諸規程もおおむね公務員に準ずる法体系に整備されつつあった。当然のことながら、酪農学園職員給与基準・規程など人事にかかわる諸規程も整備される中にあって、収益を目的とする商業経営の体質とは一致せず、また、経営規模にも限界がある事業部（商業部門）の経営とは、相いれないものが生じてきた。

従って、本来の収益事業の使命・目的を欠くばかりでなく事業部の存続の意義を無くすることが危惧される事態となった。そのため、学園理事会において「事業部合理化案」が上程され、事業部（商業部門）を引き継ぎ法人格を持つ会社組織とする基本方針の下に設立された。

学園から引き継いだ七事業所の内、採算に合わない事業所の閉鎖や合併、あるいは移転など質、量ともに時代の商環境の変化に整備即応し、会社を維持発展してきた。

**札幌駅周辺整備事業と撤退**　しかし、一九九一（平成三）年以降は、札幌駅舎地下街のステーションパート内の「純喫茶ノール店」と、北農会館地階の職員食堂「北農パラ店」の二店舗のみとなった。

札幌市は、一九九二（平成四）年五月「北方圏の拠点にふさわしい都市づくり」を基本方針にうたった提言を基に、札幌駅周辺地区整備事業計画の本格的検討に入った。すなわち、現在の駅前広場を拡張し国際都市「さっぽろ」の表玄関にふさわしい駅前広場にするべくJR本社ビルを取り壊すことを決定し、当営業所の「純喫茶ノール店」もこの整備事業の対象に含まれることとなった。

この動向を踏まえ、一九九三年一月開催の取締役会において「クローバー食品株式会社の将来展望」

と題し審議を行い、JR本社ビルの取り壊しが行われる時期と合わせて、ノール店・北農パーラ店の閉店を決め、翌一九九四年六月、開催の株主総会において会社を清算する方針を決定した。

この方針によって、北農パーラ店は一九九五（平成7）年九月三〇日に、またノール店は同年一月三〇日にそれぞれ退店・撤去を行った。

残務整理もほぼめどがついた一九九七（平成9）年一〇月四日、株主総会を開催し、会社の解散決議を行い年度内に清算結了に向け作業を行うこととした。

事業部から会社に移行して以来、会社の運営に携わった多くの役員およびに従業員は一体となって、事業部設立当初の使命・目的の意向を引き継ぎ努力してきた。しかも汗と苦勞の結晶を、設立から撤退までの間に、出資元である学校法人酪農学園（後援会を含む）に対し約二億一、七〇〇万円の金額を納付・寄付を行ってきた。また寄付金の一部を酪農学園後援会において、社名を冠した「クロバー食品教育振興基金」七、〇五二万円」として永久に社名を残すこととした。

純喫茶ノール店も先にも述べたとおり、一九五一（昭和26）年一月、酪農学園が財団法人から学校法人に組織変更をした際、学園の収益事業を統括して学園事業部が発足した。

翌一九五二年には事業の種類変更を行い、食料品およびおみやげ品販売業・ミルクホール業を加え、国鉄札幌駅舎が民衆駅として改築され再開業されるのを機会に、学園も札幌ステーションデパート協同組合の一員としてこれに加わり、一九五二年一月二五日、駅地下に札幌ステーションデパートが開業された。

デパートの開店に合わせて学園は、「ミルクホール」を出店開業したのが始まりである。

その後、クロバー食品株式会社（一九六六年五月二〇日設立）に業務が引き継がれ、店名も「ミルクホール」のまま営業をしてきた。

一九七二（昭和47）年、店舗を大幅に改修し、店名を「ノール」と改名、喫茶店として九月一日に再開店し、以来一九九五（平成7）年一月三〇日の閉店まで札幌ステーションデパート内において多くの市民や旅行者に親しまれながら延べ四三年間営業を行ってきた。

北農パーラ店⇨酪農学園事業部は、一九五六（昭和31）年八月、北農会館ビル（札幌市中央区北四条西一丁目）が竣工されたのを機会に、同ビル地下一階東側に北海道農業協同組合の職員食堂（二四九㎡・四五坪）を事業部の営業所「北農パーラ店」として開店、営業を開始した。

しかし一〇年を経た一九六六（昭和41）年五月、酪農学園事業部の商業部門を切り替え、クロバー食品株式会社を設立したと同時に北農パーラ店も他の営業店舗とともに引き継ぎ、以来退店した一九九五（平成7）年九月三〇日まで延べ三九年間、同一営業種目で行ってきた。

なお、事業主の名義変更（酪農学園からクロバー食品株式会社）は、一九七三（昭和48）年九月二〇日、北海協同株式会社に願い出て、同年一〇月一日承認された。

歴代役員名

代表取締役社長

西本宗信	一九六六・五・九	一九八七・六・八
西村富男	一九八七・六・八	一九九二・五・二二
遊佐孝五	一九九二・五・二二	一九九六・一〇・七

専務取締役

西村富男	一九八二・二・三	一九八七・六・八
斎藤義孝	一九九一・五・二三	一九九六・一〇・七
(清算人)	一九九六・一〇・七	清算終了迄

取締役・相談役

西本宗信	一九八七・六・八	一九九二・五・二二
西村富男	一九九二・五・二二	一九九六・一〇・七

取締役

川村秀雄	一九六六・五・九	一九七八・五・二〇
松原太郎	一九六六・五・九	一九七二・五・二七
三井武光	一九六六・五・九	一九八〇・一二・七
築山泰蔵	一九六六・五・九	一九六七・五・二四
阿部孝一	一九六六・五・九	一九八四・五・三一

境田和巳	一九六六・	五・九	一九九二・	五・二二
菊地正一	一九六七・	五・二四	一九八二・	五・一八
築山泰蔵	一九七二・	五・二七	一九七四・	五・二一
佐藤貢	一九七四・	五・二一	一九九六・	一〇・七
小林哲威	一九七八・	五・二〇	一九八四・	五・三一
遊佐孝五	一九八二・	五・一八	一九九二・	五・二二
濱本恒男	一九八六・	六・二三	一九八九・	五・二七
牛島純一	一九八九・	五・二七	一九九六・	一〇・七

監査役

藤田保平	一九六六・	五・九	一九六七・	五・二四
青山義人	一九六七・	五・二四	一九八七・	六・八
斎藤義孝	一九八七・	六・八	一九九一・	五・二三
菊池利治	一九九一・	五・二三	清算終了迄	

七 酪農学園貴農同志会（酪農学園職員OB会）

酪農学園教職員OB会の組織である「貴農同志会」は酪農学園創立六〇周年に当たる一九九三（平成五年）八月六日、黒澤記念講堂において旧職員ら八六名が参加して設立総会を開き、初代会長に山下正

亮を選任した。

設立総会は佐藤貢名督理事長、遊佐孝五理事長をはじめとする常任理事と酪農学園後援会、酪農育英会よりの来賓を迎え、学園記念行事に倣い、職員OBである山畑牧師の司式により礼拝形式で行われた。この日は遠く東京、埼玉、山形県などからの参加者もあり、会則、事業計画、役員の選任などについて審議が行われた。

会の名称は佐藤名督理事長によるもので「貴農同志会」（酪農学園職員OB会と名付けられ、名督理事長より名称を記した色紙が贈呈された）。

同会の設立に当たっては早くからその動きがあったが、具体的には前年の一九九二（平成4）年八月二八日、有志二十余名から成る発起人会を発足させ山下正亮が代表となり、準備を進めてきたものである。同会設立の趣旨は旧職員間の親睦を深めることはもちろんだが、旧職員として酪農学園を支援していくという強い思いからであった。

このようにして設立した同会は、以来毎年一月に新年交礼会と、夏期には総会を開き今日に至っている。この間会旗の作成、会員名簿の整備、二〇〇三（平成15）年七月に迎える一〇周年記念事業の準備などを進めてきた。また、二〇〇一年七月、初代会長山下正亮が水戸市に転住するのに伴い会長を辞任し、代わって原田勇が二代目会長に就任した。

一方、同会設立一〇周年を記念して「一〇周年記念式典」が二〇〇三年七月四日実施された。この日は、午前一〇時から酪農学園中央館多目的ホールを会場に、平尾和義理事長ら来賓を迎え、六三名

が出席した。

定期総会に続き一時から黒澤力太郎学園長の「酪農学園と歩みを共にして」の特別記念講演会が行われた。その後、会場を酪農学園本館に移して昼食懇談会が開かれ、和やかな時間を共有して終了した。

#### 設立趣意書（抜粋）

酪農学園の前身は北海道酪農義塾で、昭和八年一〇月、札幌郡札幌村大字苗穂の北海道製酪販売組合連合会（酪連）の構内の一隅に誕生しました。

酪農義塾は創立以来多くの農村青年に酪農経営の学理と実学を教授してきましたが、昭和一七年その農業部門を財団法人興農義塾野幌機農学校として、現在の野幌の地に生まれ変わりました。機農学校は、戦後学制改革により、野幌機農高等学校となり、その後酪農学園大学付属高等学校を経て、とわの森三愛高等学校の酪農経営科として存続しております。

現在の酪農学園は、機農学校が野幌にあったお陰で酪農学園大学、北海道文理科短期大学（旧酪農学園短期大学）、とわの森三愛高等学校（旧酪農学園女子高等学校、三愛女子高等学校）と発展して参りました。

道央の特等地に緑したたる畑地のひろがり、また道内各地に散在する農場用地、植林地は、その大部分が酪連からの寄附によったものであります。酪農学園の主要財産は酪農民の団体である酪連が酪農家の興望をになつて酪農義塾に寄付され酪農学園へと継承されたものであります。

今、酪農学園の義塾時代から機農学校、事業部、高等酪農学校、酪農学園短期大学、酪農学園自動車学校、三愛女子高等学校、酪農学園大学、大学院と設置順に学園の発展を眺めてみますとき、そこに勤務された人々は専心献身して努め、時到着て学園を去って行かれました。それらの先輩諸氏は、本学園にとつ

て酪農学園発展の礎石となられた大切な方々であります。ここに、有志の者が相計り、退職者諸賢と新たな交誼の輪をひろげ絆を結び酪農学園発展のために相協力して支援する組織を設けたいと考えます。つきましては、来る平成五年一〇月には、酪農学園創立六〇周年のめでたい年に当たります。この日を職員〇Ｂ会創立の日と致したく、酪農学園職員〇Ｂ会（仮称）設立を提唱して、各位の御賛同を希望する次第であります。

平成五年一月二〇日

酪農学園職員〇Ｂ会発起人 一同

### 酪農学園貴農同志会（酪農学園職員〇Ｂ会）規約

#### 第一条 名称

本会は『酪農学園貴農同志会（酪農学園職員〇Ｂ会）』と称する。

#### 第二条 目的

本会は、酪農学園が掲げる三愛精神にのっとり、会員相互の連絡と親睦を図ると共に酪農学園の発展に寄与することを目的とする。

#### 第三条 事業

本会は、前条の目的を達成するため必要なる事業を行なうものとする。

#### 第四条 事務局

本会の会員は、酪農学園事務局総務課内に置く。

#### 第五条 会員

本会の会員は、酪農学園を退職した者とする。

#### 第六条 役員

- (一) 本会に次の役員を置く。役員は総会において選任する。
  - 会長 一名

## 第二章 関係団体と会社

副会長 三名

理事 若干名

幹事 二名

(二) 役員の任期は二カ年とする。但し、再任を妨げない。

(三) 役員会は必要に応じ開き、会長これを招集する。

### 第七条 顧問

本会に顧問を置くことができる。

### 第八条 総会

総会は年一回開くものとし、会長がこれを招集し次の事項を協議する。なお、議決については出席者の過半数によるものとする。

(一) 規約の改廃

(二) 本会の事業計画

(三) 予算および決算

(四) 役員を選任

(五) その他必要な事項

### 第九条 会計

本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入を以てあてる。

(一) 会費は、終身会費三〇〇〇円とする。

(二) 会合の費用等、臨時に要する経費はその都度これを徴収するものとする。

(三) 本会の会計年度は、毎年四月一日より翌年の三月三十一日までとする。

### 第二〇条 雑則

本会の運営に必要な場合、別に細則を設けることができる。  
 但し総会の承認を得るものとする。  
 施行 本規約は、平成五年八月六日に制定し平成五年一〇月一日よりこれを施行する。

平成五年一〇月一日施行  
 平成六年一〇月一日一部改正  
 平成七年 七月一日一部改正

会員の状況（二〇〇二年六月一日現在）

会員数 一三三五名

消息不明会員数（死亡会員数含む） 七九六名

貴農同志会歴代会長・副会長

会長	山下正亮	一九九三・八〇二〇〇一・七
	原田勇	二〇〇一・七〇現
副会長	福原虎雄	一九九三・八〇一九九七・七
	和田季雄	一九九三・八〇一九九五・六
	沼田芳明	一九九五・六〇一九九八・一二
	西村富男	一九九三・八〇二〇〇一・七
	長谷川清市	一九九七・七〇現
	原田清勇	一九九九・七〇二〇〇一・七
	木村敏夫	二〇〇一・七〇現
	阿部光雄	二〇〇一・七〇現

第三章 酪農学園役職員録

第三章 酪農学園役職員録

一 酪農義塾役職員 一九三四(昭和8)年一〇月—一九四四(昭和19)年三月

理事・監事・評議員・顧問

理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
理事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
評議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
顧問	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

第三部 事務局・関係団体・職員録

講主	職名	教職員
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	師事	
折今鈴佐神定野中青	氏名	
橋村木藤田免曾根山		
佐正 不惣喜德	名	
一郎男伝貢夫一 郎二永		
講	職名	
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	師	
佐辻福河鈴神佐中長	氏名	
瀬岡島野木田々木川崎		
一教正定重哲西忠寛	名	
笑太郎雄義光二二行作		
講	職名	
〃 〃 〃 〃 〃 〃	師	
舎書嘱	職名	
〃 〃 〃 〃 〃 〃	監記醫師	
片沖太西樹氏松北辻	氏名	
岡田村村家崎村		
計太外 義 宗キ	名	
雄平男実博孝光ク淳		
用嘱	職名	
務 〃 〃 〃 〃 〃 〃	助手	
神中阿寒本常本相上	氏名	
田曾根部江井盤田沢原		
花ミ信弘力林栄弘	名	
子チ行道治節司男明		

第三章 酪農学園役職員録

三井武光	平野一城	斎藤一	ゴードン・チャップマン	樋浦誠	白戸郎	佐藤貢	川村秀雄	大東勝市	幡野直次	青山永	安孫子孝次	岡村文四郎	深澤吉平	佐藤善七	黒澤西蔵	
55 7	50 3	50 3	50 3	50 2	48 8	48 8	46 3	46 3	46 3	46 3	42 3	42 3	51 6	42 3	50 11	42 3
18 80	7 57	7 55	7 55	8 64	10 51	10 91	31 72	31 47	31 55	31 66	31 46	31 59	20 57	31 46	25 57	31 82
12 7	7 23	7 20	3 16	3 31	6 20	6 30	6 21	4 10	7 20	2 28	3 31	1 28	12 15	3 31	2 2	2 6
7	23	20	16	31	20	30	21	10	20	28	31	28	15	31	2	6
築山泰蔵	宮古哲雄	蒔田余吉	中曾根徳二	藤田保平	鈴木伝	野村喜一郎	町村金五	高橋雄之助	三田健太郎	児玉由一	黒澤力太郎	西本宗信	高杉英雄	出納陽一		
63 6	61 3	59 1	67 6	59 1	79 6	59 1	71 6	59 1	59 1	59 1	59 1	59 1	57 7	55 7	55 7	
12 74	27 72	28 63	14 69	28 64	18 81	28 63	15 72	28 69	28 68	28 67	28 77	28 75	23 現	19 87	19 63	19 64
3 11	4 5	6 12	6 2	7 20	1 4	6 12	2 17	12 17	7 14	6 14	6 29	6 17		6 30	6 12	7 20

理事・監事・評議員・名譽理事長・顧問

二 酪農学園役職員

財団法人（一九四二年三月二日）  
 学校法人（一九五二年二月二十四日）  
 （現）  
 一九五一年二月三日

山土山辻遊青勝伊沼早牛井橋菊松高澤大黒河町原  
 本橋花村佐山目藤田坂島上本地原橋川澤口村田  
 庸慶 富孝義孝幸芳正純錦吉正太節潤義亮陽敬正  
 一吉豊朗五人雄郎明吉一次雄一郎郎一男助一貴男

75 75 74 74 73 72 72 72 72 8371 71 8169 69 68 67 67 67 67 67 67 67 67 67 63 63 63  
 6 6 7 4 7 6 6 4 7 6 6 6 6 3 6 6 6 6 6 6 6 6 3 6 6 6  
 17 17 1 1 6 21 21 5 1 15 15 25 2 2 31 14 14 14 14 14 14 31 12 12 12  
 87 83 76 82 現 79 80 74 8775 83 0371 87 71 79 71 現 77 81 68 71 67 79  
 6 6 10 7 6 6 3 6 6 6 6 6 6 1 6 6 12 7 3 6 6 6  
 30 30 31 7 17 30 31 3017 30 3015 30 3 17 15 21 13 31 14 14 17

坂平齋原石浅高永山崎床濱井船山町中山杉鈴五福小津  
 本尾藤田田田澤本浦鍋本上木崎村野下田木嵐屋林田  
 与和義 貞邦哲 誠繁恒昌長 末富正文德 茂哲佳  
 市義孝勇夫八夫悟稔治則男保郎勇吉雄亮雄信清見威吾

89 89 87 87 87 87 87 87 86 85 83 83 82 82 81 81 81 81 80 79 79 78 77 77  
 4 4 7 7 7 7 7 7 6 4 7 7 7 6 6 6 6 6 6 6 7 7 3  
 1 1 1 1 1 1 1 1 26 1 1 1 8 30 25 25 25 25 30 18 18 8 11 4  
 97 現 90 91 現 91 95 93 91 97 95 89 95 95 86 現 86 89 88 81 80 87 83 81  
 3 12 6 6 6 5 6 4 6 5 3 6 8 5 3 6 6 8 6 6 6 6  
 31 31 30 30 30 27 30 6 30 31 31 30 31 31 31 30 25 23 30 30 25

第三章 酪農学園役職員録

監事										
氏名										
菊地正一	西安達	石畑久勇	築山泰成	松原太郎	佐治正一	二瓶栄吾				
79 6	75 6	67 6	63 6	59 1	51 6	42 3	42 3			
18 94	17 87	14 79	12 79	28 63	20 67	31 51	31 75			
6	6	4	6	6	6	6	6			
30	30	7	17	12	14	20	17			
在任期間										
97 5	97 4	95 7	95 7	95 7	95 4	91 7	91 7	91 7	91 7	
22 現	1 現	1 現	1 現							
		9				10		6		
		7				10		30		
氏名										
山田義弘	高野瀬	工藤英一	加藤清一	西藤紘平	鮫島邦彦	宮田保	中井哲	石川哲郎		
03 7	03 7	03 7	03 7	01 12	01 5	99 9	99 7	99 7		
1 現	1 現	1 現	1 現	21 03	26 03	8 03	1 現	1 現		
				6	6	6		8		
				30	30	30		24		
在任期間										

第三部 事務局・関係団体・職員録

																			評 議 員
西田進	小野林	上野田	瀬尾	手島	三田村	野村	安孫子	白戸	佐藤	幡野	川村	青山	安孫子	岡村	深澤	佐藤	黒澤	氏名	
49	49	49	49	49	49	49	49	48	48	46	66	46	42	42	51	42	42	50	42
5	5	5	5	5	5	5	5	8	8	3	12	3	3	3	6	3	3	11	3
12	12	12	12	12	12	12	12	10	10	31	19	31	31	31	20	31	31	25	31
67	63	59	79	79	77	68	51	51	91	55	72	60	66	46	59	57	46	57	82
6	6	1	6	6	6	7	6	6	6	7	6	4	21	3	1	12	3	2	2
14	12	28	17	17	29	17	20	20	30	20	21	6	28	31	28	15	31	2	6
.....																			在任期間
山中良造	大澤二郎	辻田武作	井上錦信	西本宗昇	田村栄吾	榎田	寺田	鈴木	池田	高三	三井	鈴木	平野	樋浦	斎藤	ゴードン キヤップマン	高杉成道	氏名	
55	71	64	55	55	55	53	51	51	67	51	51	51	50	50	50	50	71	63	49
7	6	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	3	3	3	3	6	6	5
19	15	20	19	19	19	6	20	20	14	20	20	20	7	7	7	7	15	6	12
63	74	67	58	76	87	03	59	58	53	63	69	53	63	67	67	57	64	55	55
6	4	6	9	3	6	6	1	8	6	6	6	6	6	6	7	3	7	3	7
12	6	14	13	20	30	30	28	5	6	12	2	6	12	14	14	23	31	20	16
.....																			在任期間

第三章 酪農学園役職員録

黒武高山宮五土塩藤吉川吉山山森安大児黒菊牛  
 澤田橋田本十嵐谷野野田田村見本本田達川玉澤地島  
 亮清雄為平長平保千一庸正義由力正純  
 助平之助吉郎清松蔵平里勉郎一博夫勇男一太郎一

59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	75	59	95	59	59	85	79	58
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	1	7	1	1	4	6	9
28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	17	28	1	28	28	1	18	13
68	67	63	79	74	79	99	67	79	79	83	83	75	79	現	67	81	76	63	現	74	79	95	82	71	
3	6	6	6	11	6	6	6	6	6	6	6	6	6		6	7	7	6	6	6	6	6	6	6	
31	14	12	17	23	17	30	14	17	17	30	30	17	17		14	13	8	12	30	17	30	2	15		

河服谷原蒔中出朝西泉佐小井原掛三相依石大宝高  
 口部川田田田曾根納日木野上田村浦沢田亀島出田  
 陽吟作余德陽佐当三三徹新義太榮光繁捨久富  
 一 郎 栄 勇 吉 二 一 昇 夫 郎 郎 郎 雄 介 博 郎 郎 男 一 郎 松 直 与

59	59	59	75	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	79	59	59	59	59	59	59	59
1	1	1	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	1	1	1	1
28	28	28	17	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	18	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
63	67	67	91	71	67	69	64	67	63	63	67	67	67	95	67	63	67	63	61	64	64	60	60	71	
6	6	6	6	6	6	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	3	7	7	12	6		
12	14	14	30	15	14	2	20	14	12	12	14	14	14	30	14	12	14	12	31	20	20	5	15		

中 原 五 細 後 伊 神 国 藤 館 上 大 太 高 高 澤 宮 原 吉 吉 板 德 西  
 島 十 川 藤 臣 塚 生 井 原 野 田 倉 橋 古 田 水 垣 田 本  
 国 齡 邦 第 一 サ 義 才 弘 正 勝 節 潤 哲 二 定 信 二 嘉  
 誠 夫 七 明 義 郎 夫 介 清 明 勇 治 孝 郎 一 雄 郎 郎 続 之 郎 一

63 70 63 63 63 63 63 63 63 63 63 63 63 63 63 61 59 59 59 59 59 59  
 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 3 1 1 1 1 1 1  
 12 2 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 27 28 28 28 28 28 28  
 71 71 67 67 64 64 71 67 67 67 67 67 67 83 95 03 77 72 67 63 67 71 67 67  
 6 6 6 6 1 7 6 6 6 6 6 6 6 6 6 12 4 6 6 6 6 6 6 6  
 15 15 14 14 31 20 15 14 14 14 14 14 14 30 30 30 21 5 14 12 14 15 14 14

松 桜 山 安 石 中 小 青 尾 佐 阿 高 長 神 野 遊 山 橋  
 井 井 崎 藤 田 西 野 山 崎 竹 部 畑 谷 川 村 佐 岸 田  
 幸 功 貞 文 愷 為 静 孝 武 清 正 孝 六  
 夫 豊 勇 一 夫 雄 弘 人 郎 治 一 雄 市 士 喬 五 郎 武

93 82 67 67 67 67 67 67 67 64 64 64 83 75 69 64 64 83 79 64 69 64 72 64 63 63  
 5 6 6 6 6 6 6 6 6 6 7 7 7 7 6 6 7 7 7 6 7 6 7 6 6  
 28 30 14 14 14 14 14 14 14 20 20 20 1 17 2 20 20 1 18 20 2 20 21 20 12 12  
 現 71 80 91 現 75 99 72 67 67 66 87 79 71 67 67 91 80 75 75 67 99 71 79 67  
 6 6 6 5 6 6 6 6 6 4 5 6 6 6 6 6 3 4 3 6 6 6 6  
 30 15 15 31 30 17 30 21 14 30 31 30 17 15 14 14 31 7 31 17 14 30 15 17 14

第三章 酪農学園役職員録

松坂太中大渡井土船沼橋戸藤名齋浦米西原  
 繩本田村高辺上橋木田本田井越藤部田川田  
 善与一忠全昌慶長芳吉克一典浩  
 三郎市男敏洋基保吉郎明雄己夫昭寛行孝求泉

71	99	87	71	95	71	71	71	99	71	87	75	69	69	82	69	68	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67
6	7	7	6	7	6	6	6	7	6	7	6	6	6	6	6	3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
15	1	1	15	1	15	15	15	1	15	1	17	2	2	30	2	31	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
75	現	97	75	99	91	82	78	75	02	95	94	83	71	03	89	75	71	68	71	71	71	70	71	68	71	71
6	3	6	6	6	6	1	9	8	3	3	3	6	6	6	3	6	1	11	6	6	6	3	6	4	6	6
17	31	17	30	30	30	22	30	31	31	31	31	30	15	30	31	17	3	26	15	15	15	31	15	10	15	15

福尾梶甲伊市山本津辻勝伊山福窪大佐五十松村  
 田崎原斐藤川花多田村目藤田屋田谷藤十嵐村山  
 武幸興茂八佳富孝幸利茂佐智子昇明巖衛昭  
 明雄正猛生舜豊郎吾朗雄郎雄見子昇明巖衛二

75	75	95	75	87	75	74	74	77	74	74	72	72	71	71	79	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71
6	6	7	6	7	6	7	6	3	6	4	6	4	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
17	17	1	17	1	17	17	1	22	4	22	1	21	5	15	15	18	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
89	79	99	83	91	79	98	現	79	76	79	81	75	82	80	74	79	87	91	75	79	79	91	75	75	現	79
11	6	6	6	6	6	3	6	10	6	6	6	6	7	6	3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
26	17	30	30	30	17	31	17	31	17	25	17	7	30	31	17	30	30	17	17	17	17	30	17	17	17	17

奥塩荻澤久遠中三高杉山廣石寺大後小深町山山柴高  
 山見原田米藤野野橋田下瀬塚田原藤林谷村下極田島  
 武建康憲小清富和国文正可喜一久輝哲正末仲三四温  
 美樹之宏郎司雄雄夫雄亮恒明男寿友雄威男吉市郎朗子

79	79	79	03	79	79	79	79	79	79	79	79	79	79	79	78	77	77	76	76	76	75	75	75
6	6	6	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	7	7	6	6	6	6	6	6
18	18	18	1	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	8	11	11	30	30	30	17	17	17
83	86	87	現	83	83	81	83	85	85	88	89	現	03	91	94	83	83	79	83	85	75	79	79
6	3	6	6	6	3	6	6	6	6	3		6	6	9	6	6	6	6	6	9	6	6	
30	31	30	30	30	5	30	26	26	30	31		30	30	25	30	30	17	30	26	16	17	17	

三青大平阿濱奥高 大鈴太古小太松小野日平西渡  
 上柳谷尾部本 田田吉木田田林田村木下尾 邊  
 俊和光恒兵哲 常多修道真弘雅 誠  
 勝剛昭義雄男治夫豐正美子吾彦夫宏司順保仁治

83	83	83	89	83	89	83	83	95	83	83	83	83	83	83	81	81	99	80	80	80	99	86	79		
7	7	7	4	7	4	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	7	6	6	6	7	6	6	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	25	15	1	30	30	30	1	26	18		
87	87	現	現	87	95	87	89	86	現	87	85	91	91	91	01	91	85	83	現	86	90	91	03	88	83
6	6		6	6	6	5	6	6	6	6	6	6	6	12	6	6	6	6	6	3	6	6	5	6	
30	30		30	30	9	31	26	30	26	30	30	30	30	9	30	26	30	25	3	30	30	31	30		

第三章 酪農学園役職員録

浅新菊横新三大加中安中片森田金柴永山磯正山酒斎  
 田谷池山 宅川藤尾宅原山山中川橋澤羽西野田井藤  
 邦富利節政 建 敏一准純 時幹伴 将勝光 義  
 八雄治鷹文勝雄隆彦夫一男昭信司夫悟昇治也年保孝

91	90	90	89	88	88	87	87	87	87	87	87	87	87	87	86	85	85	85	85	85	85	85	85	95	83
7	3	3	4	6	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	7
1	24	24	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	26	27	27	27	27	27	27	27	1	1	
93	96	現	91	91	99	95	91	99	現	現	91	95	99	現	現	93	87	87	91	91	88	03	90		
5	6		6	6	6	6	6	6			6	6	6			5	6	6	6	6	6	6	6	12	
27	30		30	30	30	30	30	30			30	30	30			27	30	30	30	30	30	30	30	31	

温植佐湯安横山中土野林綱高佐菊金浦和山藤種佐小  
 泉田木山田山崎井田村 島橋 木 池田川根畑井田藤 幸泰 恒  
 和勝 莊 初惠保孝 多彰清 直隆利喜勝幸泰 恒  
 也美均平勲惠子博幸武 夫男志 淳 哉一幸郎美昭典巖男

95	95	94	93	93	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91
7	7	5	5	5	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
1	1	26	28	28	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
01	現	現	99	99	99	現	現	99	現	95	97	94	現	99	95	95	03	93	現	99	01	現	99	
12			6	6	6			6		6	3	12		6	6	6	6	1		6	12		6	
20			30	30	30			30		30	31	18		30	30	30	31		30	20		30		

第三部 事務局・関係団体・職員録

中尾憲満 土谷令彦 笹島昭彦 金川弘司 小野武夫 大野裕 山下政之 木村栄進 三島陽子 赤尾全廣 干場信司 加藤清雄 岡本全弘 内生啓貢 田中義則 横田賀博 平賀親夫 志摩壽彦 鮫島邦彦 加藤勲 市川善治 齋藤一

99 99 99 99 99 99 99 99 99 99 99 99 99 98 97 97 95 95 95 01 95 95 95  
 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 5 5 5 7 7 7 5 7 7 7  
 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 27 21 21 1 1 1 26 1 1 1  
 〽  
 01 現 01 現 01 現 03 現 03 現 現 現 現 現 03 99 99 03 02 03 03 99 現 現  
 12 12 12 6 3 6 6 6 6 3 6 6 6  
 20 20 20 30 31 30 30 30 30 31 30 30 30

横山明光 福恒雄 平島孝志 辻富美子 篠塚勝夫 井上詳介 水野直治 桂川美正 上野篤正 浅野政輝 森田茂 永幡肇 谷山弘行 佐藤文彦 工藤英一 阿部忠夫 田部俊哉 菊地升 吉田和良 太田内人 竹内良種 岡田晴彦 十倉彦宏

03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 03 02 01 01 01 01 01 01  
 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 5 12 12 12 12 12 5  
 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 28 21 21 21 21 21 26  
 〽  
 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 現 03 現 03 03 03 03 現  
 6 6 6 6 6  
 30 30 30 30 30

第三章 酪農学園役職員録

顧問											名誉理事				
氏名											佐藤	氏名			
松原太郎	高田与	植村郎	堂垣内	黒澤尚弘	武田亮助	大野清平	町村金五	高橋雄之助	塩野平蔵	町村敬貴	樋浦誠	岡村文四郎	小林篤一	91	在任期間
6	6	6	6	3	6	6	6	6	6	6	4	59	55	7	1
15	15	15	15	30	14	14	14	14	14	14	6	28	19	99	26
86	76	78	現	73	83	84	92	83	70	69	91	68	72	9	9
2	10	7		12	12	5	12	1	4	8	1	10	11	22	17
22	17	8		13	17	30	14	24	15	14	14	20	23		
氏名											在任期間				
土谷長松	西佐久一	福屋茂一	山本庸一	岡田英雄	原田正男	山田利雄	山田為吉	手島寅雄	瀬尾俊三	三田健太郎	川村秀雄	宮古哲雄	99	在任期間	
7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	7	6	4	7	1	
1	1	1	1	1	1	18	18	18	18	11	17	5	99	88	
99	88	92	87	現	92	01	80	85	80	87	80	72	10	9	
10	9	12	12		4	10	3	9	9	3	1	6	12	13	
12	13	22	23		21	3	28	30	17	2	31	10			

教 職 員

注1、職種は主たるもの、教は教育職、事は事務職、技は技術職、用は用務・調理職、医は校医、栄は栄養士を示す。

注2、所属は、機は機農高校・附属高校、酪は酪農学校、自は自動車学校、三は三愛女子高校・とわの森三愛高校、高はとわの森三愛高校(新設)、短は短期大学、大は大学、本は法人事務局および農場勤務を示す。  
注3、なお、臨時職員および五カ月未満の勤務者は除外した。  
注4、在職期間は西暦で記載した。

氏名	職種	所 属	在 職 期 間
小野好一	機	機	42.4.1 ~ 46.8.25
辻武男	機	機	42.5.1 ~ 46.4.20
松島照世	機	機	42.5.1 ~ 52.3.31
宮崎孟雄	機	機	42.6.1 ~ 58.3.31
中曾根徳二	機	機本短大	42.6.1 ~ 46.12.15
野喜一郎	機	機酪本短大	51.1.7 ~ 79.3.31
吉原兵次郎	機	機	42.6.1 ~ 68.7.17
鈴木重光	機	機短酪	42.7.15 ~ 49.7.13
橘文七	機	機	42.8.1 ~ 54.4.1
西村文七	機	機	42.8.1 ~ 46.12.31
村上実	機	機	42.8.16 ~ 46.12.31
政雄	機	機	42.8.25 ~ 46.11.30
澤田昇一	機	機	42.8.29 ~ 43.5.24
菊田直次	機	機	42.8.29 ~ 43.5.24
飯塚清	機	機	42.9.1 ~ 45.1.31
本井力治	機	機	42.9.1 ~ 46.12.31
井上ヨシエ	機	機	44.4.24 ~ 45.4.25
石川健一	機	機短自	42.9.26 ~ 86.3.31
木村照雄	機	機	42.9.26 ~ 48.12.31
久保田一郎	機	機	42.11.1 ~ 44.2.10
北村キク	機	機三	42.11.1 ~ 43.8.31
上原弘	機	機	55.4.21 ~ 61.3.31
土橋重嘉	機	機	42.11.1 ~ 48.12.31
木村博	機	機	42.12.1 ~ 51.3.24

第三章 酪農学園役職員録

鈴木小七	待島義夫	本多八郎	酒井熊一	星野泰肇	大平富夫	川上静治	佐竹孝一	阿部孝一	小倉輝行	佐々木勝郎	多田省一	猪狩友一	阿部幸吉	高尾政治	東中武作	辻田盤根	高橋秀雄	丹羽正人	菅原
技	事	技	技	技	教	事	技	技	教	用	技	教	技	技	教	技	教	技	教

機本																				
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

43	43	43	43	43	43	43	43	47	43	43	43	43	43	43	72	43	43	43	54	43	43	42
4	3	3	3	3	3	3	2	5	2	2	2	2	2	2	4	2	1	1	4	1	1	12
1	31	29	29	27	15	8	28	10	21	16	16	12	4	4	1	1	23	12	5	8	1	15
45	43	81	47	47	53	45	75	66	46	44	45	52	44	73	86	57	43	76	72	44	47	53
12	12	3	5	9	6	12	3	5	5	4	3	1	3	3	9	9	3	3	3	11	3	9
31	31	31	7	23	30	20	31	31	30	10	31	31	30	31	31	30	30	20	31	30	21	30

杉沢明技	前川マサ子	東崎八重子	塚崎末雄	坂井正介	高谷繁雄	三上一郎	鈴木辰遠	鳴海友男子	猪狩敏雄	津田五市郎	柄多捨松	大倉博雄	菊地敏太郎	佐瀬一笑	今村正男	金沢孝治	五十嵐清太郎	辻岡教太郎	鈴木邦夫	栗野
技	教	技	技	事	技	技	技	用	事	技	技	技	技	技	技	技	技	技	教	教

機本																						
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

47	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43
6	7	7	6	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	27	8	28	31	23	10	10	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
49	46	69	46	46	47	47	57	52	44	44	72	43	69	46	46	46	46	46	46	46	46	46
1	6	3	4	4	3	4	3	4	1	4	3	10	3	7	4	4	4	4	4	4	4	5
26	30	20	30	20	5	12	31	16	20	30	31	30	31	4	30	30	30	30	30	30	30	21

第三部 事務局・関係団体・職員録

木村	吉原	五十嵐	相馬	相馬	林馬	相馬	半澤	山崎	佐伯	小竹	後藤	広瀬	黒澤	三田村	御園生	柳谷	永瀨	木村	秋森	川島
鬼一郎	サエ	齢七	チヨ	トシ	菊次郎	幸之進	虎太郎	弘	伊与吉	四郎	英三	敏夫	力太郎	健太郎	義一	武雄	ミエ	真	正人	隆夫
〃	用教	〃	〃	〃	教	用教	用教	用	事	技	医	〃	〃	〃	〃	教	事	教	事	教

機	機	機本	機	機	機	機本	機	機本	機本	機	機	機	機	機短	機	機	機	機	機	機
														自大	大					

44	44	44	44	44	44	44	44	45	44	44	44	43	43	43	62	43	43	43	43	43
4	4	4	4	4	3	3	3	9	1	1	1	12	11	10	4	10	10	10	8	8
4	1	1	1	1	11	10	1	1	1	1	18	16	20	1	14	14	1	19	18	17
52	50	75	49	44	46	58	45	58	45	66	74	44	60	88	76	46	46	46	46	44
4	8	3	2	12	3	3	12	3	6	5	4	5	7	3	3	4	3	3	10	3
15	9	31	24	31	31	31	31	31	30	31	6	31	1	31	31	30	31	31	31	4

五十嵐	高畑	奥山	阿部	内澤	柳谷	原子	山口	寒河江	内澤	天野	碓石	坂本	吉水	山田	宮腰	福島	日野	福嶋	渡辺	齐藤	本田
巖	正夫	与四郎	進道	ミサヲ	ヨシノ	八重	トメ	政次	松二	堅次郎	敏次郎	勘助	統	フ	要人	ヤス	本男	竹之助	博吉	林勉	司
教	〃	技	〃	教	事	〃	用	〃	〃	技	教	技	教	用	事	用	医	〃	用	技	教

機短	機本	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機

45	45	45	45	45	45	45	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44
4	4	4	4	4	3	1	12	9	9	8	8	10	8	7	7	7	7	6	5	5	4
1	1	1	1	1	1	19	18	15	1	20	5	7	24	16	1	1	11	10	23	22	
50	47	45	49	47	46	47	48	47	45	46	45	60	46	62	48	45	47	45	58	45	
3	1	11	4	2	3	10	4	9	3	3	12	3	4	5	10	4	6	4	3	12	
25	31	30	30	5	10	25	15	25	25	15	31	31	31	30	15	16	5	30	31	31	

第三章 酪農学園役職員録

下岡垣治	林山貞吉	島行三	辻トヨコ	木村キ園	倉キ園	前川五郎	後藤末吉	花田弥一	平野惠美子	宇野泰明	林田昭二	池田治久	中山賢和	山岸芳雄	鈴木昭三	定免三昌
〃	教技	〃	事	〃	〃	用技	教	用	〃	〃	〃	〃	〃	技事	〃	技

機三	機	機	機	機	機	機本	機	機酪	機	機	機	機	機	機	機	機
----	---	---	---	---	---	----	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---

67	53	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	50
4	6	9	8	8	6	6	6	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	21	1	1	1	1	1	1	1	1	1	19	1	1	1	1
78	56	53	47	46	46	45	52	47	54	47	46	46	46	49	46	47	45
3	10	5	9	2	4	9	10	5	3	7	5	4	6	6	4	11	9
31	31	15	30	28	10	30	31	1	31	17	31	28	25	31	20	5	31

後藤信春	高尾日出子	石黒喜誉志	坂東ウタ子	黒滝正隆	福士秀雄	川村千恵子	前川徹	舟津ノブ	桜庭幸男	石丸幸雄	小関寿雄	五位野茂男	榎田伊藤	野田ミツ子	池田憲之	得能政久	丸尾キヨ子	大野キエ	大野栄太郎	
技	〃	〃	〃	事	技	教	用	〃	〃	技	教	技	〃	教	〃	〃	技	〃	〃	用

機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
		本酪		本		酪			酪											

46	46	46	46	46	46	46	46	46	45	53	45	45	51	45	45	45	45	45	45	45
5	5	5	5	4	4	4	3	3	1	1	12	11	1	11	11	10	10	10	9	9
10	1	1	1	10	5	1	20	10	1	1	1	5	1	1	1	13	1	1	10	10
49	50	61	46	54	47	72	47	46	46	49	74	46	46	58	46	51	46	46	48	46
6	3	9	10	4	4	6	6	9	10	10	3	5	5	8	4	1	4	2	8	3
14	31	9	20	30	11	21	4	30	1	5	31	31	31	5	17	31	20	26	10	5

第三部 事務局・関係団体・職員録

越橋金吾	梶田幸三	江原敬二	山北均	高杉成道	阿部進	辻村壯	伊藤信雄	向井春市	若井新工	棧敷新松	半田裕	河合睦郎	黒澤京子	阿部ミヨ	三浦所太郎	白川健太郎	中井克三	佐藤一郎	越橋哲郎	横山和雄
用事	教	技	教	〃	技	教	技	用	〃	〃	〃	教	事	教	用	技	教	技	教	

機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
	酪		本	短			本	本	短			三			本					本

47	47	60	47	47	47	47	47	47	47	47	53	47	47	47	47	46	46	46	46	46	46
5	5	4	4	4	4	4	4	3	3	3	7	2	2	2	1	11	10	9	8	7	5
15	1	1	10	10	1	1	1	30	25	1	1	1	1	1	26	1	26	1	1	20	14
49	50	74	53	52	75	48	47	51	66	58	54	53	52	59	48	68	47	47	49	52	52
6	3	4	5	3	3	10	11	5	5	3	2	3	9	3	4	1	10	9	2	3	3
30	12	30	30	20	31	1	19	15	31	31	12	31	31	30	1	20	10	30	28	15	15

棧敷愛子	下岡ミサヲ	池田実	大沢徳治	本間博光	木谷一	益子二	遊佐貢	白部孝五	安田多紀子	伊藤政太郎	若井俊之	若井嘉和	本間大蔵	野呂英三	相沢栄佐男	中野武光	吉村不二男	本田ミツエ	寒河江チヨ
〃	事	〃	教	事	〃	技	教	事	技	事	〃	技	医	教	教	技	事	〃	用

機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
		短	酪	本	本	本	短		本	本	本	本		大	大	三				本

47	47	66	47	47	47	47	47	56	47	47	47	47	47	52	47	47	47	47	47	47	47
12	12	4	12	12	11	10	10	8	10	9	7	7	7	11	7	7	7	6	6	6	5
1	1	1	1	1	24	22	18	1	1	11	1	1	1	5	1	1	1	1	1	1	16
49	50	77	53	55	50	55	58	93	54	48	58	50	52	53	52	52	91	65	47	47	49
5	3	3	3	1	9	9	3	3	10	9	11	3	3	5	9	5	10	5	11	12	4
31	31	31	31	15	28	1	31	31	31	3	17	31	25	25	1	1	1	16	19	24	30

第三章 酪農学園役職員録

石	湊	米	武	梅	横	辻	畠	佐	中	吉	川	森	古	川	梶	関	横	小	田	田	渡	山
亀	田	藤	野	井	本	山	藤	野	田	越	谷	山	上	野	矢	山	山	中	中	辺	田	
繁	金	正	克	光	昭	昌	昌	米	正	虎	金	勝	芳	忠	ク	忠	ミ	祐	楽	義		
太郎	次郎	雄	昇	二	郎	三	実	藏	久	成	義	彦	作	美	章	雄	子	男	ヨ	吉	治	雄
事	〃	〃	技	教	〃	〃	技	〃	〃	事	技	〃	〃	〃	〃	教	事	教	〃	用	〃	事

機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
本				酪									酪	酪				短		本		
酪																						

48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	47	47	47	47
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	2	2	2	2	12	12	12	12
30	30	26	14	10	10	5	5	1	1	1	1	18	11	8	16	10	1	27	27	1	1	
76	50	50	49	53	49	49	49	53	49	49	49	51	55	57	50	53	49	53	50	55	51	
3	4	7	3	12	6	3	2	2	7	9	11	3	3	11	4	3	4	5	3	9	3	
31	8	31	22	15	27	5	17	1	31	15	30	31	30	5	30	10	30	28	31	5	31	

白	白	門	狩	岡	湯	斎	田	樺	相	道	大	宗	田	片	水	鈴	大	阿	久	桧		
石	石	崎	野	部	浅	藤	中	沢	沢	見	坪	玄	村	岡	間	木	沢	波	木	森		
正	正	マ	邦	義	昌	惣	茂	敏	田	君	佐	ト	渡	俊	吉	ト	二	慶	正	一		
美	明	サ	彦	明	志	四	仁	男子	中	光	子	藤	子	雄	三	メ	郎	昭	男	弥		
技	〃	事	教	事	〃	〃	技	教	〃	〃	〃	事	技	事	技	用	教	技	医	事		

機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機
本	本	酪					本				本	大	酪		本		酪		本			

48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	50	48	54	48	48	48	48	48	48
11	11	10	10	10	10	10	10	10	9	8	8	7	7	7	7	6	4	5	5	5	5	5
15	15	13	1	1	1	1	1	1	1	1	30	20	22	1	1	8	1	15	10	4	1	1
52	58	51	49	49	50	49	50	85	50	53	49	57	53	51	49	66	51	48	74	48	60	
2	3	1	3	5	9	5	3	3	3	9	7	1	9	3	3	5	3	12	4	12	3	
29	31	31	31	31	20	31	31	31	31	12	6	31	30	21	26	31	31	25	6	25	31	

第三部 事務局・関係団体・職員録

原田勇	砂川清	松井幸夫	末光力作	小島幸治	細川明男	下天鉄男	長谷川英男	高杉誠	樋浦白子	森好敬	厚海忠夫	梶田夕三	佐藤政一	海津通誠	中島祐弘	須藤三郎	八巻トミ子	熊谷井東	(旧姓)村上美枝	五十嵐亮三	堀
事	事	事	事	教	教	事	事	教	事	教	用	事	事	教	教	技	事	用	事	教	教

短大	機短本	機短本	機本	機短大	機短大	機															
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	---

49.4.11.49.6.30	49.4.11.54.3.20	49.4.11.96.3.31	49.4.11.58.3.31	49.4.11.57.3.31	49.4.11.64.1.31	49.4.11.50.7.31	49.4.11.51.11.1	49.4.11.60.3.31	49.4.11.65.3.31	68.5.11.86.3.31	49.4.11.57.3.20	49.4.11.50.12.31	49.4.20.54.3.31	49.4.5.52.6.30	49.4.18.53.6.30	49.4.1.74.6.30	49.4.1.51.1.31	49.4.1.53.4.10	48.12.17.54.3.9	48.12.15.85.3.31	48.12.1.49.6.30	48.11.22.50.2.28
-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	-----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------	------------------	-----------------	------------------

斎藤春雄	久保田有作	山崎侯文	若井榮男	末田栄	山下欽一郎	長井小夜子	向井次子	清水恒次	鈴木博忠	安藤良二	宮脇敬三	小林栄治	藤田栄男	遠藤亀夫	飯沢ふで子	五十嵐純子	(旧姓)長野たま	本田正賢	清水耕作	志摩
技	技	用	用	技	教	教	用	用	用	用	用	用	用	技	用	用	事	用	用	技

機本	機本	機本	機本	機本	短機	短機	短機	短機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	機	短大	短大	短大
----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----

49.7.11.52.3.25	49.7.11.50.5.31	49.7.11.55.7.31	49.6.4.52.3.25	54.4.13.66.3.31	49.6.11.52.11.10	49.6.11.64.3.31	49.6.11.64.10.31	49.5.24.50.7.22	49.5.15.85.3.31	49.5.1.50.4.5	49.5.1.49.11.30	49.5.1.49.10.31	49.5.1.49.11.8	49.5.1.51.3.25	49.5.1.50.3.31	49.4.19.52.3.5	49.4.7.55.11.19	49.4.6.66.4.30	49.4.2.84.3.31	49.4.2.53.3.28	49.4.1.73.4.19	53.4.1.96.3.31
-----------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	------------------	-----------------	------------------	-----------------	-----------------	---------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------

第三章 酪農学園役員録

孫	廣	尾	渡	西	岡	更	宍	松	丸	阿	泉	佐	赤	野	酒	丹	横	長	
入	島	崎	辺	本	田	科	戸	実	野	部	藤	松	村	井	治	山	井	田	
道	正	幸	末	宗	満	一	芳	秀	嘉		勝	三		昌	貞	子	修	み	
興	雄	雄	六	信	穂	見	美	夫	勝	正	秀	美	勉	三	毅	宣	子	や	
教	技	事	技	事	〃	〃	〃	〃	〃	技	用	〃	技	事	〃	技	用	事	用

短	機	酪	機	本	機	機	機	機	機	機	短	機	機	酪	機	機	短	機
本	本		本							本			本		自		大	

50	50	63	50	54	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	49	63	49	49	49	49
3	3	4	2	4	12	12	10	10	10	10	10	10	8	8	8	7	6	7	7	7
16	1	1	1	10	15	5	1	1	1	1	1	12	1	1	20	1	18	11	1	1
52	現	85	55	55	51	87	50	50	50	49	50	51	50	59	50	89	50	76	68	50
4		3	6	4	3	3	3	3	3	12	2	7	9	3	3	3	3	3	6	10
10		31	20	4	31	31	31	31	31	28	23	30	31	31	30	31	31	31	30	5

林	南	磯	鈴	館	湯	奥	片	斎	高	五	土	船	三	磯	多	道	高
美	正	義	一	土	房	武	重	藤	貞	涼	禎	純	悦	登	己	作	英
智	子	雄	義	清	子	美	勝	寛	子	二	造	良	郎	登	己	作	治
〃	〃	事	〃	技	用	教	〃	技	用	教	〃	技	教	技	用	〃	教

本	本	本	機	機	短	本	本	本	機	短	短	短	本	本	酪	機	酪
			本	本	自	大	酪	酪	本	機			機				

50	50	50	50	50	50	56	50	50	57	50	50	53	50	50	50	55	50	50	50	50	53
6	6	6	6	6	5	11	5	5	7	5	5	9	4	4	4	4	4	4	4	4	3
1	1	1	1	1	20	1	15	1	1	1	14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	31
53	53	52	51	62	66	90	52	51	88	53	50	89	51	63	54	59	52	51	52	57	55
6	7	11	1	3	3	4	6	6	11	6	11	3	3	8	9	4	3	3	4	4	11
25	20	29	31	31	31	31	30	12	27	30	30	31	31	31	30	20	31	31	22	10	2

第三部 事務局・関係団体・職員録

吉田俊江	工藤三太郎	前原拳治	一宇正男	楠原義男	佐藤イ卜	堤由太郎	本田栄子	真島邦夫	(旧姓)野三浦	今塚祐子	平塚千工	(旧姓)藤添八千代	和田季雄	原武男	中山勝子	長谷川宏幸	磯部恵覚	西島	桑山	渡辺	土田	老岐	
技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用	技用

短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短

50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
52	53	62	62	59	52	56	54	53	55	53	51	62	62	62	52	52	51	77	65	51	53	53	53
5	2	3	3	8	5	8	10	8	3	1	6	3	3	3	8	9	4	9	4	8	7	7	7
31	20	31	31	14	5	25	17	31	25	28	20	31	31	31	24	22	23	20	1	28	1	1	1

本間兵七	西塾松蔵	飯塚義雄	立石利雄	河井辰蔵	佐々木綾枝	有元澄枝	浅野幸子	後藤信子	近藤富恵	島田外次	吉清美	名児耶勉	林都久夫	鹿野サキ子	石井三夫	西村富男	茂木アイ子	土倉敏男	軽部守一	清水藤一	佐藤忠雄	牧原薫
技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技

短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短	短
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
62	62	62	62	63	57	53	54	51	51	56	62	62	52	53	62	62	52	62	62	62	62	62	62
3	1	3	3	3	4	5	6	7	2	11	3	3	6	5	3	3	3	3	3	3	3	3	3
31	6	31	31	31	17	20	25	20	28	26	31	31	20	20	31	31	20	31	31	31	31	31	31

第三章 酪農学園役職員録

石井智子	山崎正雄	山崎静子	工藤悟治	服部武治	坂井信子	小野島千鶴子	前井礼二	丸山とみ	渡辺茂夫	松下ふみ子	長尾清	熊田三治	三條隆一	向井美佐子	佐藤三雄	尾崎為次郎	田村昇	請川政広	荒川豊彦
技	技	技	技	技	技	技	事	用	技	用	用	技	技	用	技	用	事	用	技

短 短 短 短 短 短 短 酪本 短 機 短 本 本 機 機 短 短 短 短 短

50	50	50	50	50	50	50	61	50	50	50	50	50	50	50	50	50	72	50	50	50
11	11	11	11	11	11	11	1	10	10	10	10	10	9	9	9	9	9	9	9	9
1	1	1	1	1	1	1	1	16	1	1	1	1	12	4	1	1	1	1	1	1
54	62	56	51	62	55	59	89	55	71	51	52	51	52	68	62	82	83	56	52	61
10	3	2	9	3	8	8	3	4	3	3	2	2	4	3	3	7	6	10	3	3
27	31	16	20	31	10	20	31	20	31	31	29	28	15	31	31	31	2	30	18	20

三上岳也	松倉保子	古谷静子	星野久雄	三本貞子	平岡龍一	柳谷光	砥谷重光	星野弘三	小田切禎三	本間進	井上錦次	土橋慶吉	磯野宇一	高野由太	千葉清一郎	白沢一	高桑	寛義	前井英子
技	用	技	用	用	用	技	教	技	技	用	用	教	用	用	用	技	用	用	技

機 短 本 機 機 短 短 機 短 短 短 短 短 本 本 本 機 機 機 短

51	51	51	51	51	54	51	51	51	51	51	51	51	51	63	51	51	51	51	51	50
5	5	5	5	4	7	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	2	2	1	11
15	13	9	1	11	12	9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14
52	53	52	51	52	90	54	62	55	52	51	56	93	97	64	53	54	58	51	54	52
4	12	3	11	5	3	2	3	4	3	12	3	3	3	7	8	3	4	7	3	9
20	20	31	30	12	31	17	31	30	31	31	31	31	31	31	26	25	10	24	20	12

第三部 事務局・関係団体・職員録

佐藤孝一	今谷正雄	谷部勝太郎	下川田幹豊	黒野幹司	杉野	能勢馨司	吉原弘	西村岩男	川合三郎	野崎要司	杉本亥之助	木下克彦	水間益次郎	阿部夕ヨ	金子幸子	種田三郎	今井澄	佐藤盛男	吉沢美代子	牛島純一
技用	技	教	事	技	〃	〃	〃	〃	〃	〃	技	用	〃	〃	教	〃	〃	技	教	

短短短 醜本機 本醜 機短短 短本短 短短短 短本短 短本短 短大本

52 3 17 52 10 15	52 3 17 62 8 31	51 12 20 62 3 31	51 12 1 70 3 31	51 11 1 53 10 15	51 11 1 52 10 6	54 10 1 61 4 25	52 11 15 53 5 18	51 11 1 52 3 20	51 10 24 53 1 31	51 10 1 62 2 29	51 10 1 62 3 31	51 9 20 83 3 31	51 9 6 52 3 31	51 9 4 54 3 31	51 9 4 53 10 17	51 9 4 60 4 20	51 9 1 96 3 31	51 8 20 53 3 23	51 7 18 51 12 31	51 7 1 57 3 31	51 7 1 93 3 31
---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

鈴木恒治	藤倉玲子	志賀文夫	大竹恵子	五十嵐光	名越直	佐野孝弘	三上信之	加藤金治	惣蔵福春	高岡郁夫	遠藤教子	加藤明実	畠山忠雄	小原敏	木村雄	村田ガ美	山崎清	佐藤美広	星野文作
〃	〃	技	事	用	〃	〃	技	教	〃	技	事	〃	〃	〃	技	用	〃	〃	技

機短短 機本 短大 機機機 短機高 本機短 機本機 短機機 短機機 短短短

52 8 16 54 5 31	52 6 17 57 6 20	52 6 15 62 3 31	52 6 4 60 2 10	68 5 1 77 3 31	52 6 1 67 3 31	52 5 23 64 3 31	52 5 1 53 1 31	52 5 1 52 10 31	60 5 1 96 3 31	55 4 1 59 3 17	52 5 1 53 4 15	52 5 28 53 8 9	52 4 19 67 7 31	52 4 10 52 10 31	52 4 1 54 3 15	52 4 1 54 3 31	52 4 1 62 3 30	52 4 1 53 11 1	52 4 1 62 3 31	52 4 1 54 4 10
--------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------

第三章 酪農学園役職員録

鈴木	宇和	麻川	小生	市梨	三善	菅野	菅原	篠田	湯浅	田中	香田	平林	山田	佐藤	田村	岩崎	鷹背	阿部	工藤	平尾	春日	館(旧姓)
永	喬	信	雄	舜	知	清	敬	泰	清	計	誠	稻	昌	讓	ス	恵	啓	正	ミ	キ	恵	藤(旧姓)
勲	海	子	雄	舜	道	一	敬	雄	栄	子	碩	二	子	介	辞	子	子	一	人	キ	子	百(旧姓)
〃	〃	〃	技	教	〃	〃	〃	〃	技	事	〃	技	事	〃	技	事	〃	〃	技	事	技	事

短短短短短短機機機機本機短酪本機短短短短機短機  
本三

53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	52	52	52	52	52	52	52	52
6	5	5	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	1	12	12	11	11	10	9	8	8
12	28	1	20	1	1	1	1	1	17	16	1	1	1	1	8	1	1	1	1	18	25	25	25
62	55	53	54	98	53	53	56	53	55	57	54	57	67	69	53	63	53	62	62	54	53	66	66
3	7	10	4	3	12	11	4	11	3	4	3	2	12	8	8	5	5	3	3	6	2	1	1
31	15	31	26	31	4	1	11	1	21	10	31	20	31	31	31	31	31	14	31	31	7	20	15

豊田	佐藤	宮田	村山	光岡	長沢	及川	境山	丸山	福原	今井	浦本	藤井	高島	遠藤	和藤	藤村	白木	今野	本(旧姓)	出納	松岡	菊地	
谷明	臣治	英治	男	静男	浩二	正雄	美沙	子己	徹己	虎雄	正代	美子	安和	和義	明子	房子	弘直	野直	藤(旧姓)	信陽	子一	豊治	
男	臣	治	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
〃	〃	〃	〃	〃	技	教	事	技	事	技	用	〃	事	〃	〃	技	教	技	事	教	技	教	

短機機短短酪酪短短機酪短短短短短短機短酪短本機  
大機

54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53
4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	1	12	12	11	11	11	10	9	9	8	7	7	6	6
1	1	1	1	1	1	1	1	21	3	1	5	1	1	10	1	1	19	15	14	1	1	20	20
55	55	54	62	55	55	55	66	62	81	57	58	58	57	56	62	62	57	55	62	70	54	53	53
3	4	12	3	3	4	3	3	3	3	4	3	3	5	3	3	3	3	3	1	3	7	12	12
20	15	31	8	31	9	5	31	31	31	25	31	31	25	15	31	31	31	20	20	31	31	1	1

第三部 事務局・関係団体・職員録

中川寅夫	白川キミ	浜名三郎	福田千恵子	斎藤義孝	高橋登記子	高橋勇記	渡辺千恵子	久保田勝美	狩野智	囚浦義人	三浦光典	須藤裕純	石井純昭	香味一	藤野洋	豊田光	田村香居	九島真佐治	田中次夫		
技用	機大	短	短	本	機短大本	機	短	機	機	短	機	本	機	短	本	本	短	短	短	技	
54 6 1 54 12 31	54 5 15 78 7 14	54 5 1 55 3 20	54 5 1 57 3 25	54 5 1 56 4 25	54 5 1 95 3 31	60 4 1 91 3 31	54 5 1 58 5 10	54 5 1 55 3 31	54 5 1 59 8 16	54 4 21 56 3 31	54 4 19 54 3 28	54 4 11 54 11 28	54 4 10 57 8 20	54 4 7 56 10 31	60 5 1 90 3 31	54 4 1 55 3 20	54 4 1 56 2 12	54 4 1 57 4 12	54 4 1 57 8 17	54 4 1 55 2 28	54 4 1 57 3 31
久慈節郎	谷津保夫	武田幸子	長永再信	萩野津次	浅野すみ子	浦山正	細川虔	野沢己義	志摩寿美代	大島ちせ	益子誠司	桜庭とみ子	杵渕秀夫	本間敏弘	田高修吾	塩野谷勝己	宮川未松	柴田弘司	吉田久美	松浦幸男	森田ハル
技教	機短本	機本	本	酪	短	機本	短	本	本	短	酪	機	機	機	本	本	短	短	短	短	機
55 4 1 58 4 11	55 4 2 68 3 31	55 5 1 58 5 10	55 5 1 62 11 30	54 12 1 62 3 10	54 12 1 58 9 20	54 10 1 57 2 8	54 10 1 67 7 25	54 8 1 57 2 25	54 8 1 58 5 12	54 8 1 55 3 4	54 7 1 60 3 31	54 7 1 59 6 1	54 7 15 57 8 8	54 7 12 56 4 1	54 7 12 56 4 25	56 4 1 56 11 23	54 6 1 62 11 30	54 6 1 62 3 31	54 6 1 62 3 31	54 6 1 62 3 31	54 6 1 56 6 5



第三部 事務局・関係団体・職員録

(旧姓) 伏木 賢太郎	山本 宏	玉井 政	柳沢 智	花田 哲男	津田 佳吾	山貫 絹江	野崎 国雄	熊谷 俊三	富塚 周也	増田 好男	武藤 吉之輔	武藤 浩	尾田 豊孝	金田 孝次	酒田 和彦	斎藤 忠夫	橋村 完	高見 享	富永 清	湯沢 厚子	福島 加代子	高松 和子	
事	事	事	技	技	教	教	機	機	機	短	短	機	短	短	短	機	本	本	機	本	本	短	事

本	大機	本機	本機	本機	本機	機	機	機	短	短	機	短	短	短	短	機	本	本	機	本	本	短	短
56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56
5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	11	10	10	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
59	77	86	57	57	94	59	57	57	56	58	57	57	57	58	99	61	57	56	58	61	56	59	59
2	5	3	1	4	3	10	1	5	9	3	3	11	11	2	3	5	3	8	3	4	9	10	10
20	25	31	31	25	31	17	19	15	10	2	31	5	29	15	31	31	31	31	31	15	30	30	10

深谷 正男	原国夫	富田 哲	加藤 莞爾	高見 俊二	神正 士	(旧姓) 鈴木 千恵子	佐藤 七	本間 正	新井 光枝	大坪 秀子	竹川 豊治	只野 喜夫	小山 久	前田 玲	小野寺 保	松原 茂	長尾 玄	徳野 隆	勝田 七	末沢 亨		
事	教	技	事	技	教	事	教	機	短	短	短	短	短	短	本	自	自	機	機	短	本	本

57	57	60	57	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	56	59	56	
4	4	5	4	11	10	10	9	9	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	4	5
1	1	1	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20	1
91	95	61	59	61	61	91	59	63	62	61	61	57	62	58	59	58	58	57	58	63	62	57	57
3	3	8	3	6	6	3	7	3	3	11	9	12	3	8	11	6	6	8	6	3	2	1	1
31	31	11	31	24	21	31	25	31	31	31	6	20	28	31	20	25	10	10	15	30	10	28	31

第三章 酪農学園役職員録

北田満之進	田口哲夫	水間一男	茂木宜江	小堀一章	後藤章二	大西紀子	猪口フサ子	永尾順子	島崎宏政	入江広武	高畑武雄	綿引昭一	北村卓爾	斎藤正寿	武内勇藏	神塚アサ子	赤羽清司	諏訪俊子	上野嘉子	金(旧姓)金智恵子	川(旧姓)金弘子
教	技	事	技	技	技	技	技	技	事	技	技	教	教	技	教	技	技	技	技	技	事

短本機 本機 短機 短大 本本 本本 本本 本本 本機 機大本 機大本 機大本 短機 短機 短大 機本 本本 本本 本本

57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	89	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57
7	7	7	7	6	6	5	5	5	5	4	11	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	12	10	15	15	15	15	13	1	11	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1
66	59	58	60	63	59	58	59	64	58	60	94	89	64	58	57	59	70	58	59	61	61	61
4	3	4	7	3	3	4	4	3	5	12	3	3	3	11	4	3	3	2	4	10	5	5
28	31	10	15	31	31	30	10	26	10	30	31	31	31	13	21	31	31	28	10	16	31	31

井上昌保	杉船五郎	菜原美吉	山田為吉	谷津憲	吉田司	菊地創	金安哲夫	宿田欣司	志(旧姓)間一守	房(旧姓)間美	若森繁弥	樫野弘正	長谷川正三	藤井清左門	野口薫	那須野庸夫	高山末雄	高橋保雄	皆川弘幸	菊地智幸	
教	技	技	技	事	技	技	事	技	技	用	技	事	教	技	技	事	技	技	技	技	技

三短機 短機 本機 酪機 短機 短機 本機 本機 短機 短機 機本 本酪 本酪 本大 本大 本機 本酪 短機 短機

58	58	58	58	57	57	64	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57
4	2	1	1	12	11	10	11	11	10	10	9	9	9	9	9	8	7	7	7	7	7	7
1	15	15	13	1	20	15	5	1	1	1	15	6	2	1	1	1	15	15	1	1	1	1
現	63	62	60	59	58	65	60	59	59	62	67	58	62	61	91	98	58	58	80	66	58	61
	10	2	6	4	5	3	10	7	3	3	4	7	3	3	3	5	7	3	5	3	8	8
	31	28	30	25	7	31	31	25	31	31	1	25	31	31	31	10	16	31	31	31	26	26

第三部 事務局・関係団体・職員録

高橋澄子	佐藤悦子	佐藤文吾	小松直人	入船正儀	桜庭定義	戸梶昌彦	莊司敏子	風林順勤	河井杜男	小笠原美智子	東田増宜	平野弘昇	佐野妙子	杉山五津子	牛島	佐々木(旧姓)	荒木とみえ	八条寛子	井上(旧姓)	井上郁子
事	事	事	事	事	事	事	事	事	技	教	技	技	技	技	技	技	技	技	技	教

本本短機本本本短短短短三短機機三三三高三

58.9.20.60.3.31	58.9.20.62.8.20	58.9.20.62.3.31	58.7.25.59.1.10	58.7.1.61.7.15	68.7.1.69.12.28	58.7.1.61.3.31	58.7.1.60.3.10	58.7.1.62.3.31	58.7.1.62.3.31	58.7.1.62.3.31	58.5.21.59.3.31	58.4.20.58.10.10	58.4.1.59.7.31	58.4.1.59.3.31	58.4.1.59.11.30	71.4.1.98.3.31	58.4.1.63.3.31	58.4.1.59.3.31	58.4.1.62.3.31	58.4.1.65.2.25
-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	-----------------	------------------	----------------	----------------	-----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------

河端信雄	小山邦武	原田泉	佐藤真佐美	西村朝歌	市岡祐進	今野順子	佐藤昌隆	藤田昭夫	塩岡勝行	片岡与市	佐藤市喬	坂本義美	野村江子	林間和枝	本上鉄哉	塚上美代子	三庭美子	秋沢昭二	滝摩栄子	須井富士雄	天富本	
技	事	教	事	事	事	事	事	教	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	技	事	事

機短機短三大三三三三三機機機短短短短短短本酪

59.4.1.61.3.11	59.4.1.69.3.31	64.4.1.93.3.31	59.4.1.62.4.15	59.4.1.65.6.30	59.4.1.61.3.31	59.4.1.71.3.31	59.4.1.61.3.31	59.4.1.60.3.31	59.4.1.60.3.31	59.4.1.64.3.31	59.4.1.61.3.31	59.4.1.60.3.20	59.4.1.02.3.31	59.4.1.83.3.31	59.4.1.62.3.31	59.4.1.60.3.31	59.4.1.62.3.31	59.4.1.62.3.31	59.4.1.62.3.31	58.10.7.30	58.10.1.31
----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	------------	------------

第三章 酪農学園役員録

林	橋	渡	松	森	丸	森	砂	小	畑	須	伊	伊	長	久	大	鈴	庄	角	佐	芳	岡	松
場	部	田	永	山	田	嘉	恭	利	利	義	葩	忠	政	建	孝	志	工	孝	善	三	郎	
国	刑	恵	修	君	美	嘉	三	助	求	明	修	昌	雄	正	満	良	治	雄	志	工	也	
勲	光	八	明	正	子	子	三	助	求	明	修	昌	雄	正	満	良	治	雄	志	工	也	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

本 本 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 短 本 機 機 短 短 機  
大 大

59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59
8	8	8	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	5	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	10	10	10	10	10	10	10	10	10	1	1	1	1	1	1	1	1
62	62	62	60	61	61	62	61	61	62	62	62	62	61	61	60	60	61	01	60	60	69	78
11	5	3	3	5	5	3	7	9	3	3	3	3	6	8	4	3	7	3	3	3	3	3
30	10	31	28	25	31	31	17	20	31	31	31	31	30	11	10	31	15	31	7	28	31	31

佐	中	川	青	市	浦	猪	水	高	石	渡	北	山	若	石	小	角	星	山	佐	山	楠	織
野	沢	端	木	岡	端	野	間	田	坂	辺	尾	下	林	井	林	田	野	内	竹	崎	原	田
邦	儀	順	祐	昭	昭	織	美	直	信	礼	武	淳	保	祥	弥	博	進	修	至	武	子	稔
俊	三	造	実	子	雄	男	子	屹	子	子	武	郎	治	之	生	子	進	修	至	武	子	稔
教	教	教	技	事	〃	技	〃	事	〃	教	医	教	〃	技	事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	事
機	機	機	本	短	短	短	本	本	三	三	本	大	本	短	本	機	短	短	短	短	短	酪
大	大	三																				

60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	60	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	12	12	11	11	10	10	9	9	9	8
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
62	97	91	62	62	61	62	63	66	65	63	67	66	66	60	60	60	62	61	62	62	60	61
10	3	3	8	5	3	3	4	5	3	3	3	3	5	5	5	5	3	8	3	3	3	3
31	31	31	25	15	31	20	15	31	31	31	31	31	31	20	20	12	31	15	31	31	10	15

第三部 事務局・関係団体・職員録

阿部澄子	梅原昇三	竹村和子	安田勲	清水紘子	木村直雄	福士貞吉	堀田明陸	齋藤忠士	常世田夫	中村和男	太田幸雄	中野嘉世也	大河原光敏	樋浦智稔	板倉光治	高見光勝	伊藤治勝	山原国雄	菅原雄春	上田密春		
事	技	教	教	事	教	〃	〃	〃	〃	技	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教	〃	技		
本	本	機大	機大	大	本短	大	大	大	大	三	大	大	大	大	大	大	大	機	機			
60 6 1 63 3 31	60 6 1 66 5 31	60 5 10 99 3 31	91 4 1 99 3 31	60 5 1 66 3 30	60 4 1 79 3 31	60 4 1 65 3 31	60 4 1 60 10 31	60 4 1 61 2 25	60 4 1 61 3 20	60 4 1 60 12 31	60 4 1 64 3 31	60 4 1 61 6 30	60 4 1 61 3 31	60 4 1 65 4 15	60 4 1 61 3 30	60 4 1 66 3 31	60 4 1 63 4 15	60 4 1 80 3 31	60 4 1 61 3 11	63 12 15 65 3 31	60 4 1 61 1 20	
阿部彰	大場芳松	山下祐子	河津進野	三谷重子	官澤トミ子	高松妙子	藪孝平	野口静子	宮古哲雄	堀田律男	棟方信三	高杉親寿	志摩保吉	山田保三	森山三千男	仲保芳子	佐京輝明	大森彰	土居三洋子	土居梅子	関戸キヨ子	岩佐啓子
教	技	事	技	教	事	〃	教	事	教	〃	技	〃	事	〃	〃	〃	〃	技	〃	〃	事	事
機	本	本	機	酪	機	短	本	本	三	短	短	本	短	短	本	短	短	短	本	本	本	本
61 4 1 65 3 31	61 1 1 66 5 31	60 12 1 66 5 31	60 11 1 63 8 31	60 11 1 65 7 31	60 10 1 61 3 30	60 9 1 62 9 30	60 9 1 64 3 31	60 9 1 66 2 28	60 9 1 72 4 5	60 9 1 62 3 31	60 9 1 62 3 31	60 8 1 73 3 31	60 8 1 02 3 31	60 8 1 62 3 31	65 4 1 69 3 31	60 7 1 63 12 20	60 7 1 62 3 31	60 7 1 62 3 31	60 7 1 62 3 31	60 6 15 69 8 31	60 6 15 01 3 31	60 6 1 60 10 31

第三章 酪農学園役職員録

関根隆一	斎藤秀子	高橋敏明	青木貴美子	島田隆甫	佐藤治也	福井幸雄	札木正	岩崎健一	北郷美恵子	多田芙二子	宝代弘子	浦部浩行	小倉勝	高野二千六百	川崎忠男	村山三郎	中曽直子	田原喜一	檜崎昇	湯浅亮	松川清
教	事	事	事	事	事	事	技	技	技	技	技	技	技	技	教	教	事	事	事	事	教

機本本本機短大大本大短三三三機大大大大短大大

61	61	61	61	61	61	61	68	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61
6	6	6	5	5	5	5	6	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
15	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
63	64	62	66	63	62	63	71	66	64	63	68	62	70	70	62	63	98	62	63	01	03
4	4	7	5	3	1	2	3	2	3	9	4	3	3	2	12	3	3	12	3	3	3
1	30	10	31	4	20	28	15	28	31	25	30	31	31	28	20	11	31	19	11	31	31

山熊大(中渡相山高只草犬長千若渡小大高今森岩菊)	中野塚(旧姓坪)	大塚(旧姓)	小(旧姓)	下(旧姓)	則(旧姓)	幸(旧姓)	村(旧姓)	海子	博子	京子	征子	平三郎	哲夫	徳之	啓子	郁夫	久勲	雄進	由利子	秀雄	清水正昭	
教	技	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	技	教	教	事	事	事	事	事	事	事	技

機三本大本本本本本本機大酪酪本本機本機短短短短

62	62	62	61	61	61	61	61	61	61	61	66	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61
4	3	1	10	10	10	10	10	10	10	10	8	4	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
98	64	66	72	65	65	62	63	63	62	76	99	64	62	62	62	62	70	63	62	62	62	62
3	3	5	3	6	6	2	12	2	2	3	3	3	11	7	7	12	3	7	3	3	3	3
31	31	31	31	30	30	17	25	14	20	31	31	25	28	14	31	31	31	1	31	31	31	31

第三部 事務局・関係団体・職員録

井手	梅河	鈴村	遠岡	利根	土	水	栗	太	小	高	川	岩	生	佐	舟	狩	甲
東塚	津本	木林	藤本	川	居	野	崎	田	森	山	村	元	富	藤	山	野	斐
知哲	典栄	邦徹	玲	満	憲	弘	千	多	健	保	健	典	征				
行子	昭吉	子雄	修子	子	一	正	利	美	治	二	弥	一	寛	幸	弘	宏	猛
〃	事	〃	技	事	技	〃	〃	教	〃	〃	技	事	〃	〃	〃	〃	教

短	短	大	大	大	機	機	三	短	短	本	短	三	大	大	大	大	大	本	機	三	機	
																						高

62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62
7	7	7	7	7	7	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
65	64	62	63	65	62	63	69	67	67	63	62	63	70	67	63	97	94	77	63	63	63	97
3	7	12	12	5	12	3	3	4	4	1	9	3	12	3	11	3	3	3	12	12	4	3
31	20	20	11	31	31	31	31	30	30	31	30	20	31	31	10	31	31	31	31	31	30	31

後藤	小野	三上	吉田	井上	山本	山本	永桶	小林	松島	森木	藤井	小竹	本谷	曾根	伊東	小森	中林	宇佐	佐々	鈴木	千葉	
邦	フ	景	純	英	ス	辰	総	重	重	イ	き	ヨ	ソ	静	満	誠	英	義	隆	明	サ	
義	子	子	子	子	テ	雄	枝	治	信	チ	の	シ	ノ	江	而	征	子	博	也	清	子	
〃	〃	〃	事	〃	〃	技	事	用	教	〃	〃	〃	〃	用	技	〃	〃	事	〃	技	〃	事

本	本	本	短	本	大	機	大	三	大	大	機	機	機	機	短	大	本	本	本	機	機	短

62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62
12	12	12	10	10	9	8	8	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
69	66	63	70	66	58	90	67	84	71	77	69	64	83	86	62	84	63	63	62	66	02	66
3	5	9	4	5	3	12	12	3	3	10	4	3	3	3	12	3	4	5	11	3	7	7
31	31	30	30	31	17	7	31	9	31	31	30	31	31	31	27	23	30	31	30	31	31	31

第三章 酪農学園役員録

水野武夫	清寛	森三郎	鈴成夫	松田瑞子	向原彩子	菅原幸広	津田勝子	七東祥毅	板東康毅	安部恭敬	近藤日出夫	岩谷征輝	加藤征子	深尾光裕	清水二耕	梅木勇勝	射守矢正藏	逢見茂夫	杉本英夫	小野(旧姓)廣川	荻原久美子	島善鄰	
教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事
大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

63.4.1.1.65.4.1	63.4.1.1.74.3.31	63.4.1.1.64.8.31	63.4.1.1.66.3.31	63.4.1.1.75.3.31	63.4.1.1.66.3.31	63.4.1.1.64.3.31	63.4.1.1.66.12.31	63.4.1.1.63.3.31	63.4.1.1.70.3.31	63.4.1.1.77.3.31	63.4.1.1.64.3.20	63.4.1.1.67.3.31	63.4.1.1.66.1.31	63.4.1.1.65.9.21	63.4.1.1.64.6.15	63.4.1.1.65.3.31	63.4.1.1.69.6.20	63.4.1.1.66.5.31	63.4.1.1.66.5.31	63.3.1.1.63.8.31	63.1.1.1.96.3.31	62.12.1.1.64.8.26
-----------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------

梅津典邦	佐々木征務	永瀬良治	吉田(旧姓)永治	重山(旧姓)絹子	山田千恵子	鈴木明子	狩野千津子	小松紀子	薩摩大二	小林つよ	安部千恵子	東本悦弘	小野恒邦	轟智子	向平律子	小林好操	舘脇秀子	高松節子	嶋屋節子	高橋興	
教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教	技	事	教
大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

66.4.1.1.68.6.20	63.5.1.1.64.3.20	63.5.1.1.64.3.20	63.5.1.1.63.11.6	63.5.1.1.95.3.31	63.5.1.1.68.6.30	63.5.1.1.65.3.31	63.5.1.1.67.11.10	63.5.1.1.65.12.31	63.5.1.1.64.12.25	63.5.1.1.66.6.30	63.5.1.1.63.12.31	63.5.1.1.66.5.31	63.4.4.1.66.5.31	63.4.4.1.66.5.31	63.4.4.1.66.3.31	63.4.4.1.現	63.4.4.1.64.9.30	63.4.4.1.65.5.31	63.4.4.1.85.3.1	63.4.4.1.68.3.31	63.4.4.1.68.3.31	63.4.4.1.68.3.31	63.4.4.1.64.3.31
------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	-------------------	-------------------	------------------	-------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------	------------------	------------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	------------------

第三部 事務局・関係団体・職員録

早川正夫	林木キ	青部三郎	阿部徳子	坂井武雄	三井顕途	吉良一栄	北島トミ子	西川康子	石山松子	石後藤朝繁	崎野厚子	杉田繁治	岩男忠敏	中村(旧姓)佐藤	西野(旧姓)妙道	門前(旧姓)木寛	伊藤(旧姓)佐藤	甲斐勝子	洪田貴子	水野信子	一条和夫
技	事	事	技	技	教	教	教	教	事	事	技	技	事	事	教	教	技	技	事	事	技
大	三	短	本	本	大	大	本	本	本	本	本	本	大	大	本	機	機	機	大	三	大

64	64	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63
2	2	12	11	10	10	8	7	7	7	7	7	7	6	6	6	5	5	5	5	5	5
1	1	10	1	1	1	19	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
79	69	69	66	67	68	65	75	66	65	68	66	66	72	85	68	81	67	現	63	63	64
1	1	3	5	10	3	3	9	3	6	9	5	5	2	3	5	3	3		10	12	1
21	31	31	31	31	31	25	31	21	20	30	31	31	7	31	20	31	31		15	23	31

宮下勝美	井上正志	宮本正敏	渡部光男	太田一男	野口栄吉	安藤功彦	池田篤彦	島崎忠利	下条(旧姓)山田	小野(旧姓)樹子	塚本(旧姓)恭子	南条巨季	櫛引浩司	小山谷清夫	長谷川美紗子	工藤コトミ	渡辺慎一郎	粟野保太郎	山本百合	中村百雄
技	技	技	技	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	教	技	技	技	事
大	大	大	大	大	本	大	本	三	三	三	三	三	三	三	三	三	本	本	本	短
					大		高	高					高							本

64	68	64	64	74	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64
4	4	4	4	9	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
65	70	65	67	90	73	現	77	現	74	01	92	71	66	68	65	00	89	65	66	66	74
7	6	4	3	3	4		3		5	3	10	3	3	3	3	3	3	3	5	3	3
31	20	20	31	31	1	31	31	5	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	20



第三部 事務局・関係団体・職員録

松木任弘	田中孝次郎	坂田幸太郎	小林秋子	小(賀姓)川和子	大高全洋	一戸辰男	森清静	小山昌子	河(旧姓)松奈美子	小(旧姓)松純子	中山純輝	鈴木(旧姓)高智恵子	森(旧姓)浦高子	村山昭二	小野弘守	大川建雄	後藤俊子	甲斐節子	篠原邦彦	鮫島功彦
教	事	用	事	事	事	教	事	事	事	事	事	事	事	事	教	事	事	事	教	教

機	機	大	大	大	大	短	三	三	三	三	三	三	三	三	三	機	機	大	大	大	大
				三	高				高				高	高	高		大	大	大	大	大

65	65	65	65	86	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
66	66	66	80	現	75	78	66	79	85	66	02	69	70	70	現	99	98	現	69	67	03
3	3	3	3		12	9	3	3	3	3	3	4	3	3		11	3		12	6	3
31	31	31	31	31	30	31	31	31	31	31	31	1	31	31	31	9	31	31	20	30	31

村木弥	橋本雄	東谷雄	山口格	岡本佑	中川明	日下雅	木村幸	管野紘一	小(旧姓)野靖彦	加(旧姓)藤奈子	阿部緋子	田部隆美	田坂美	小沢一	日下喜	赤木久	山下正	山崎紀	作田栄	三浦明	加藤悦	下村悦	藤原美代子	
教	教	教	教	教	教	教	教	教	事	事	教	教	教	教	用	用	教	事	事	事	事	事	技	技

大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	短	大	大	大	本	本	本	本	本	本
						本									機									

66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	65	65	65	65	65	65	65
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
76	71	68	68	67	73	現	74	68	74	72	68	96	67	76	78	81	70	66	66	66	66	66	66
3	1	3	3	7	7		9	3	7	12	3	3	7	3	3	6	3	3	3	3	3	3	5
31	3	31	31	31	31	31	30	31	31	31	31	31	31	31	31	24	11	31	31	31	31	31	31

第三章 酪農学園役職員録

藤原政雄	鶴卷正敏	木川尚仁	大美鋸ひろ子	梶原興正	松 <small>(旧姓)</small> 神治	柱 <small>(旧姓)</small> 孝沢	下 <small>(旧姓)</small> 石川	中 <small>(旧姓)</small> 大場	峯園昌子	齊藤寛子	土合佳鶴子	中島紘造	中村捷実	西川求	伊藤茂生	深沢則勝	三上洋明	沼崎栄教	金畑北雄	古畑北雄
教技	事	教	用	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教技	〃	〃	〃	教	事	技	〃	教	

酪本	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	機大	機大	機高	機高	機高	短酪大	大	大	大	大
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	-----	---	---	---	---

66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	95	66	66	66	66	66	66	66
7	6	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
73	81	68	73	73	〇〇	現	68	71	71	80	70	67	97	74	現	68	〇〇	03	現	71	66
3	3	9	7	3	3		2	3	3	3	3	5	3	6		4	3	3		3	11
31	31	30	31	31	31		29	31	31	31	31	31	31	30		10	31	31		31	1

管井大果	島久子	北和枝	星鈴江	菊利治	小林禎次郎	小渡京子	青山義人	小幡幸子	村田キミ	渡辺富子	奥山ミエ	後藤七郎	福田ミツ子	加藤隆美	川合信美	小 <small>(旧姓)</small> 林都美	澤田麗子	高橋清志	永野茂夫	横山智恵子	吉田津子	大 <small>(旧姓)</small> 串子
教	〃	〃	〃	事	教	用	〃	事	用	事	用	〃	事	教	〃	〃	事	教	用	事	用	事

大	大	大	機	本大	大	本	本	三	三	三	機大	三	酪大	酪大	大	大	大	大	三	本	機	大
---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	----	---	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---

67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	66	66	66	66
10	8	8	8	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	9	8	7	7
1	16	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15	1
69	68	71	69	01	69	68	83	71	84	68	86	68	87	現	67	75	74	94	84	現	67	69
3	8	6	3	3	2	8	6	12	3	2	3	1	3		8	3	1	12	6		3	3
31	31	30	20	31	28	5	3	31	31	21	31	31	31		31	31	31	18	30		31	31

第三部 事務局・関係団体・職員録

安藤正道	黒田寿美子	山田和子	折尾ユキエ	荻原康之	小野由美子	浜内征雄	田中賢彦	赤坂喜恵子	久米小十郎	米沢トク	吉村千代	斉藤留雄	村尾和子	横地千代子	横地竟吾	三島八重子	川村幸一	野田きよ子	吉田信子	加村正直	
〃	〃	教	用	技	事	〃	〃	技	事	教	事	用	事	医	用	事	用	事	〃	用	技

三高	三	三	大	大	短	大	大	大	本	大	三	三	本	本	短	短	短	短	短	大	本

68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	67	67	67	67	67	67	67	67	68	67	67
4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	2	2	12	12	11	11	11	11	11	11	6	10	10
1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	13	8	25	4	4	4	1	1	1	1	1	1	1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
03	69	74	69	93	現	71	69	71	73	92	85	71	70	86	76	81	74	97	69	97	68	69
3	3	3	10	3		12	3	3	3	1	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
31	31	31	18	31		31	31	31	31	12	31	31	30	31	31	31	31	31	31	31	31	31

福田銀蔵	池倉ストミ	近藤恒美	朝倉直子	野田明丸	九津芳丸	佐々木武夫	武内ク	長田キク	橋間泰作	卯野悦子	澤田憲宏	鎌田みどり	小林公子	土田祐和	坂本邦永	志摩陽子	奈良将治	川上野克己	島田昌俊	小幡光昭	
〃	〃	用	技	用	教	技	用	事	教	〃	〃	〃	〃	〃	〃	事	技	〃	〃	〃	教

短	大	大	本	機	大	本	本	三	短	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68
5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
70	71	72	69	71	00	69	83	70	74	74	70	現	76	73	73	70	72	72	現	73	現	現
12	12	2	3	1	3	3	3	2	7	11	7		6	3	12	4	3	3		3		
31	31	29	31	25	31	31	31	28	31	26	23		15	31	31	30	31	31		31		

第三章 酪農学園役員録

齋藤純	野村興雄	今井保之	白(旧姓)川	小(旧姓)川	菊(旧姓)池	荒(旧姓)岡	齋(旧姓)藤	杉(旧姓)木	小(旧姓)玉	溝(旧姓)福	武田保弘	野明美	高野しづ	川端よし子	鴨田幸三	三島徳生	小谷忠行	森清	広島厚子	加藤信幸	神保新太郎
〃	〃	教	事	教	〃	〃	事	教	事	教	事	用	用	事	用	〃	教	用	〃	事	技

大 大 三 三 酪 大 本 機 短 大 大 三 本 大 大 機 大 大 機 大 大 短 本

69	69	69	69	69	69	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	68	
4	4	4	2	1	1	12	10	10	10	10	9	9	9	9	8	8	8	4	7	7	7	5
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	16	16	1	1	16	16	16	16	10	15	16	1	1
91	72	99	現	74	70	70	00	80	69	75	92	70	85	73	96	74	03	72	68	74	74	74
12	3	6		3	9	7	12	6	4	3	12	12	3	3	3	6	7	3	9	8	3	4
15	31	30		31	30	25	22	30	30	31	31	31	31	31	31	30	27	31	30	31	31	30

片岡昌子	前川美津江	勝目孝雄	吉田勝美	大野陽子	高橋賢二	渡辺基	貝沢二	佐藤幸一	野田万寿雄	能(旧姓)登谷順子	渡(旧姓)谷順子	M F デ ビ ト ソ ン	田村康夫	(旧姓)竹元道代	平尾和義	大橋義躬	外山敏雄	森田修	仲野定男	道下幸子	及川真理子	村木茂明
教	事	教	技	〃	事	教	技	事	用	教	事	〃	教	事	〃	〃	〃	教	技	事	〃	教

機 機 本 本 大 大 大 本 本 三 三 機 大 大 大 大 短 短 大 本 短 大 大

69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69	69
7	6	6	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	16	1	1	1	16	16	1	1	9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
86	70	80	71	70	71	75	69	76	79	73	74	70	77	76	98	74	73	70	71	73	70	現
3	7	6	10	6	3	8	10	3	3	12	8	8	3	4	3	3	3	3	4	7	10	
29	5	30	20	30	31	31	31	31	31	31	31	31	31	30	31	31	31	31	26	15	15	

第三部 事務局・関係団体・職員録

鳴谷	鳴海	三島	柴橋	荒木 (旧姓 栗原)	首藤 (旧姓 嘉原)	小倉	伊藤	種池	三田	山畑	岡田	上田	橋詰	新谷	樺沢 (旧姓 宮崎)	増本	島崎	服部	前島 (旧姓 池)	沖本 (旧姓 津)	加藤 (旧姓 江)	
洋子	敏夫	陽子	伴夫	朋子	嘉子	規子	慶市	哲朗	保正	勝美	雅昭	真理子	喜代子	良一	誠一	淑子	と	智恵子	正義	美津	正勝	
〃	事	技	〃	〃	〃	教	事	用	〃	〃	〃	〃	〃	教	事	技	事	用	事	技	事	事

短	本	本	三	三	三	三	短	短	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
三	三	高	高	高	高	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	69	69	69	69	69	69
6	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	12	10	9	8	7
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	1	16	16	1	1
76	75	72	03	現	71	71	76	75	97	90	76	74	73	00	74	73	75	91	71	80	現	現
6	8	3	3		3	12	12	3	3	3	3	9	3	3	2	6	3	3	4	2	2	2
15	31	31	31		31	31	15	1	31	31	31	31	17	31	28	30	31	31	30	29		

俣野	寺山	小池	古瀬	中島	菊地	西塾	高橋	岩佐	島津	木村	池田 (旧姓 林)	小川 (旧姓 世羅)	白田 (旧姓 田)	中松	渡辺	田島	南野	平野	高峰	山本 (旧姓 是安)	杉沢 (旧姓 厚子)	
弥生	佳代子	万夫	庄平	豊吉	政則	進茂	二栄	千治	宣治	宣治	和子	豐子	道三郎	喬三郎	誠治	誠吉	裕子	敦江	静恭	則子	安子	
〃	教	事	用	技	〃	〃	〃	教	〃	〃	〃	事	〃	教	〃	〃	事	技	事	教	事	教

三	三	三	大	大	大	大	大	大	大	大	本	短	三	短	本	短	本	大	大	短	大	大
三	三	三	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	12	12	11	10	9	9	9	8	7	7	7	6
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17	17	18	1	16	1	1	1	16	1	1	1
72	88	73	76	72	現	97	73	00	74	75	現	現	75	75	現	73	74	現	73	79	現	72
9	3	10	3	6		3	9	7	3	3			3	3	8	3	3	12	5	4	4	
30	31	13	31	30		31	29	30	31	31			31	31	31	31	31	31	21	30		

第三章 酪農学園役職員録

大新	植	塩	中	勝	板	菊	中	深	引	加	萬	富	菅	安	鈴	青	千	橋	山	中	古
石保	田	見	村	部	橋	地	島	沢	地	藤	田	田	沼	宅	木	柳	葉	本	崎	本	瀬
清葉	大	道	建	和	信	孝	あ	ま	麗	久	正	寿	英	一	矩	昌	子	伸	金	教	イ
司子	高	子	樹	子	二	雄	き	つ	子	美	治	美	二	夫	子	子	子	子	治	一	ト
技	事	教	技	技	技	技	技	用	教	事	教	事	事	事	事	事	事	事	教	技	用

大 大 短 三 三 本 本 大 大 大 三 大 大 大 大 大 三 短 三 三 大 本 三  
高

72	72	72	72	72	72	72	72	72	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71
4	4	4	4	4	4	4	3	2	11	8	8	7	6	5	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	5	1	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
73	74	73	86	76	73	75	89	80	77	73	76	75	00	現	84	99	03	79	77	73	73
11	12	3	3	3	3	3	3	3	3	7	2	1	3		3	3	3	3	3	3	3
13	31	31	31	31	25	31	31	31	31	10	29	31	31		31	31	31	31	31	31	31

綱	木	後	高	黄	堀	斎	橋	雨	的	松	砂	若	川	和	德	雉	森	南	平	伊	林	荒	
島	村	藤	橋	田	川	藤	向	宮	場	浦	川	瀬	村	田	永	戸	谷	雲	田	藤	田	木	
彰	恵		由		玲	兵	啓	恵	豊	善	千	政	武	正	敏	子	玲	美	子	子	貞	幸	正
男	利	弘	子	満	子	市	子	二	繼	治	代	芳	夫	光	子	子	子	子	子	子	太郎	清	重
事	事	教	事	技	事	事	事	教	技	事	事	事	事	用	事	事	事	事	用	教	技	教	

大 大 短 短 短 短 短 三 三 自 本 本 機 大 大 大 大 大 大 三 大 三 本 大  
本

73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	72	72	72	72	72	72	72	72	72	72	72	72
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	11	9	9	9	8	5	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
97	78	80	75	75	74	84	75	75	75	91	74	79	83	82	75	74	現	76	75	74	84	94
3	8	3	5	3	3	3	3	3	4	3	6	3	3	3	3	3		3	3	3	3	1
31	31	31	10	31	31	31	31	31	1	31	30	31	8	31	31	31		31	31	31	31	26



第三章 酪農学園役職員録

渡尾 辺崎 伸邦 雄嗣	加賀 谷千 晴	斎藤 英則	浦(旧姓) 川(旧姓) 敏江 子	半沢 敏義 郎	斎藤 美津 枝	家股 美津 枝	吉田 久彦	白崎 船直 橋	(旧姓) 北川 直光 夫	荒川 上真 知子	川(旧姓) 朝昭 子	柴川 朝昭 子	竹(旧姓) 川出 保夫	武内 千三 夫	其田 キヨ 子	竹橋 セツ 子	高橋 正一	藤(旧姓) 本紀 子	岡土 本部 紀美 子
技	技	技	事	事	教	事	事	事	事	事	教	事	教	事	用	事	教	事	事

大 大 大 大 大 大 短 短 機 機 三 三 三 三 三 三 大 大 短 短 大 大 大

75 4 1 76 3 31	75 4 1 76 3 31	75 4 1 79 3 31	75 4 1 79 3 30	75 4 1 79 3 31	75 4 1 80 3 31	75 4 1 75 12 3 31	75 4 1 96 3 31	75 4 1 81 3 31	75 4 1 現	75 4 1 現	75 4 1 現	75 4 1 82 3 31	75 4 1 78 3 31	74 12 1 83 3 31	74 11 15 94 3 31	74 11 1 99 3 31	74 10 1 現	74 9 1 83 3 31	74 9 1 94 3 31	74 9 1 80 3 9 13
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	--------------------	-------------------------------	-------------------------------	------------------------------------

佐々 木均 教	筒井 雅弘	尾形 仁	福(旧姓) 井永 野	中(旧姓) 野明 美	豊野 真由 美	浦川 利幸	野川 英二	岩井 正敏	神藤 久美 子	近藤 勝美	(旧姓) 岡瑞 恵	宮脇 菊太 郎	高林 周造	宮崎 晋一 郎	今村 晋一 郎	中尾 敏彦	小阪 進一	小早 久一	千池 直哉	菊池 照	小岩 政	武田 と も 子
教	技	技	事	事	事	事	事	事	事	用	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	教	事

短 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 三 本 機 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大

76 4 1 77 3 31	76 4 1 77 3 31	76 4 1 79 3 30	76 4 1 96 3 31	76 4 1 80 3 30	76 4 1 79 3 31	76 4 1 86 10 21	75 10 16 86 10 21	75 9 15 79 12 31	75 9 15 84 7 31	75 4 1 79 3 31	75 4 1 81 3 31	75 4 1 79 3 31	75 4 1 99 3 31	75 4 1 99 3 30	75 4 1 現	75 4 1 現	75 4 1 86 7 1	75 4 1 現	93 9 1 現	75 4 1 80 3 31	75 4 1 79 3 31
-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	----------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------	-------------------	------------------------------	-------------------	-------------------	-------------------------------	-------------------------------

第三部 事務局・関係団体・職員録

河田啓一郎	梅沢清馨	加藤雄	近藤誠司	平賀武夫	山舖直孝	高坂嘉孝	阿部朝子	上野光敏	滝沢義一郎	長谷川誠一	多田正栄	森下美喜代	(旧姓)川藤恵真	斎藤真弓	南条道雄	小林めぐみ	(旧姓)坂本百合子	近野雅宜	村岡範男	三股正年	本田優子	(旧姓)井大静子	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	短大	三高大	大	三	短大	短大	本大	大	大	三	短	
77.4.1.96.3.31	77.4.1.00.3.31	77.4.1.現	77.4.1.83	77.4.1.現	77.4.1.現	77.4.1.80	77.4.1.85	77.4.1.現	77.4.1.84	77.4.1.88	77.4.1.84	77.4.1.89	77.4.1.現	76.12.16.79	76.10.18.81	76.6.16.現	76.6.16.84	76.6.1.現	76.4.1.現	76.4.1.85	76.4.1.77	76.4.1.現	
荒田善之	山岸雅樹	中居千枝子	木村貞夫	(旧姓)山恵美子	荒川恵晃	安達恵理	(旧姓)野伊克子	(旧姓)藤国真	伊藤真美	長瀬隆	伊藤敦司	和泉一	中山一二三	奥村優子	前田義雄	角田修男	薄井健雄	中ノ目敏雄	安藤由章	白井俊三	佐藤金四郎	佐藤毅	大塚讓
教	事	教	技	〃	〃	〃	教	事	〃	教	用	技	事	用	教	技	〃	教	〃	技	用	教	
大	機	三	本	三	大	三	三	機大	機高	機高	短	短	短	大	大	本	機高	大	本	本	大	大	
78.9.1.86.3.31	78.6.15.80.6.31	78.5.1.96.3.31	78.4.2.81.3.31	78.4.2.83.3.31	78.4.4.85.3.31	78.4.4.81.3.31	78.4.4.88.3.31	78.4.4.現	78.4.4.現	78.4.4.現	78.4.4.85	78.4.4.87	78.4.4.83	78.4.4.86	78.4.4.83	78.4.4.83	77.4.4.現	77.4.4.91	77.4.4.78	77.4.4.81	77.4.4.83	77.4.4.80	

第三章 酪農学園役員録

青木道子	黒澤隆	竹花成一	岩井洋隆	高木浩典	菊田治典	海野芳太郎	(旧姓)小野美保子	有野好潤	永澤繁	長谷川真理	赤尾全廣	黒岩京子	先本勇吉	赤塚正太郎	井下さゆり	飯沼香代子	永幡肇	宮崎秀人	森津康喜	上野弘志	久保舒章	伊藤文雄	
〃	〃	〃	教	技	〃	教	事	〃	〃	〃	〃	〃	教	用	〃	事	〃	〃	〃	〃	教	用	技

大 大 大 大 本 短 短 機 機 三 三 三 三 短 三 三 大 短 大 短 大 大 機 本  
大 大

80 4 1 〃 83 3 31	80 4 1 〃 〃 〃 〃	80 4 1 〃 〃 〃 〃	80 4 1 〃 〃 〃 〃	79 11 〃 〃 80 6 10	79 7 1 〃 〃 〃	79 6 1 〃 〃 〃	79 5 1 〃 〃 〃	79 4 16 〃 〃 〃	79 4 1 〃 〃 〃	78 9 1 〃 81 7 31													
------------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	-------------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-----------------------------	------------------------------------

柴田弘幸	高橋秀一	小寺明子	横田博子	佐藤秀子	竹内博子	(旧姓)奥寺好子	小松敏子	関浩一	小政夫	十倉宏子	田村敬弘	山崎洋子	山野裕子	浅中則忠	田澤正夫	角澤幸枝	伊福道(旧姓)谷	加藤千鶴	高村明美	今村耕太郎	伊藤尊久	下田久	
〃	〃	事	教	用	〃	〃	〃	事	技	事	〃	〃	〃	事	〃	教	〃	〃	〃	〃	〃	〃	事

機 大 大 大 大 本 本 本 本 大 酪 三 機 短 短 短 短 大 大 大 大 大 大 大 大  
酪 大

80 7 1 〃 現	80 7 1 〃 現	80 5 1 〃 84 12 31	80 5 1 〃 94 3 31	80 4 1 〃 86 3 31	80 4 1 〃 〃 〃 〃																		
------------------------	------------------------	-------------------------------------	------------------------------------	------------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------

第三部 事務局・関係団体・職員録

平棟孝志	酒井保	石川恒	小西辰	千田直	中西明	日置芳	服部武	奥平多	林藤喜	加藤康	照井俊	田口み	榮島潤	千島真	木曾忠	風岡利	辻直人	菊池小	中国本	ジームス・クラーク	松本寛	
教	教	教	教	教	教	教	技	技	技	技	事	事	教	教	事	事	事	事	教	教	教	
大	大	大	大	大	大	機	本	本	本	本	本	三	三	三	機	大	大	大	大	大	大	
82	82	82	82	82	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	80	
4	4	4	4	4	10	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	10	
2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
97	89	89	84	83	94	83	82	現	現	現	現	83	94	85	85	現	00	92	現	82	83	
3	3	3	3	3	3	3	12				2	3	5	3		3		3		3	9	
31	31	31	31	31	31	31	31				28	31	31	31		31		31		31	10	
(旧姓)林西	大橋真	亀尾義	堀内一	佐藤絵	佐々木	新(旧姓)肥田	田中睦	中村真	廣岡亨	奥村み	折出須	今野美	松田浩	岡田洋	森好政	工藤英	坪敏一	峯尾洋	東本真	福澤一郎	桐澤力	荒井惣
事	技	事	教	教	教	事	教	教	事	事	用	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	教
大	本	本	大	本	本	本	本	三	短	短	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	83	82	82	82
10	8	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	10	4	4
24	20	10	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
87	92	95	01	現	現	現	91	現	現	87	02	93	現	現	現	93	97	85	現	現	99	3
3	3	3	3				3			12	9	4				3	8	3			3	3
31	31	31	31				31			14	30	30				31	31	31			31	31

第三章 酪農学園役職員録

白田一昭	松田直子	山田真由美	尾崎巖	マーク・アンラジル	山口令子	森田茂夫	塩見徳夫	小林弘之	C・L・ロッグ(ヘー)	秋田定夫	稲垣義人	中村武夫	日光文夫	島尻宗義	高橋中子	菅原真澄	加藤浩	四月朔日英子	丸山明	小沼操
教	事	事	教	教	用	用	用	用	教	技	用	用	技	技	用	用	教	事	事	教
機	短大	機大	短大	短大	大	大	大	大	三高	大	機	三	本	本	三	三	大	大	大	大

85.4.11.90.3.31	85.4.11.現	85.4.11.99.3.31	85.4.11.現	98.4.11.現	85.4.11.85.10.25	85.4.11.02.3.31	85.4.11.現	85.4.11.90.3.31	84.10.11.現	84.10.11.90.3.31	84.9.30.96.3.31	84.4.16.99.3.31	84.4.11.89.3.31	84.4.11.86.2.28	84.4.11.88.3.31	84.4.11.現	84.4.11.86.3.31	84.4.11.現	84.4.11.90.3.31	84.4.11.現	84.4.11.89.6.30
-----------------	-----------	-----------------	-----------	-----------	------------------	-----------------	-----------	-----------------	------------	------------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------	-----------------	-----------	-----------------	-----------	-----------------

後藤哲也	岩井素枝	梅津敏	佐々木壽	千代西尾知恵	柏倉宏造	坂本妙子	岩井繁和	ネル・L・ケネディ	矢田貝紀雄	森二三男	和田謹吾	岡田富子	甲田佳子	荒木和秋	小野寺秀一	今岡久弘	秋山敏彦	浅川満彦	新山雅美	漆原滋	梅津佐衛子	佐々木富八
事	事	事	事	教	用	教	事	事	事	事	教	事	事	事	事	事	事	事	教	事	教	用
本高	本高	三高	三高	三	機高	機高	短大	短大	短大	短大	短大	大	大	大	大	大	大	大	大	本	三	機

86.4.11.現	86.4.11.93.6.30	86.4.11.現	86.4.11.98.3.31	86.4.11.89.3.31	86.4.11.91.3.31	86.4.11.98.3.31	86.4.11.現	86.4.11.現	86.4.11.99.3.31	86.4.11.93.3.31	86.4.11.92.3.31	86.4.11.現	86.4.11.89.3.31	86.4.11.現	86.4.11.現	86.4.11.98.3.31	86.4.11.96.3.31	85.11.11.現	85.9.11.現	85.4.11.現	85.4.11.92.3.31	85.4.11.90.3.31
-----------	-----------------	-----------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------	-----------	-----------------	-----------------	-----------------	-----------	-----------------	-----------	-----------	-----------------	-----------------	------------	-----------	-----------	-----------------	-----------------

第三部 事務局・関係団体・職員録

中 田	宇 野	遠 藤	吉 田	長 谷 川	伊 東	泉 澤	黒 畑	桜 井	伊 藤	尾 野	小 宮	柳 村	谷 山	北 澤	竹 内	土 永	高 原	河 内	栗 田	内 田	田 口	金 子
	光 順	か よ 子	慶 子	登 晴	康 勝	勝 男	孝 郎	明 美	久 麻 紀 子	恒 子	道 士	俊 介	弘 行	馨 恭	孝 好	利 克	夫 正	一 佳	子 哉	俊 恵	千 恵	
平	雄	三	教	用	教	教	教	事	事	事	事	事	事	事	教	教	技	教	技	事	事	

大	大	大	大	大	大	大	三 高	三 高	機 三 高 本 大	短 大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	本	大	本	本	大
---	---	---	---	---	---	---	--------	--------	-----------------------	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

88	88	88	88	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	86	86	86	86	86	86	86	86	86
4	4	4	4	11	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	9	6	4	4	4	4	4	4	
1	1	1	1	1	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1	1	
93	92	89	89	現	現	現	97	94	現	現	現	現	現	94	93	92	91	90	94	現	現	現	現	現	
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	

大	八	安	後	佐	高	池	坂	天	藤	泊	三	林	河	笹	榎	佐	旭	山	梁	小	工	大
友	木	井	藤	藤	尾	内	村	田	島	出	浦	田	原	原	本	藤	弘	田	川	池	藤	林
勘	康	勉	徹	子	一	則	雄	久	二	雄	寛	江	淳	丸	恵	昭	勝	司	良	男	夫	士
十	郎	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教	事	教	事	教	事	教	事	教	事	教	事	教	事	教	事	教	事	技	教	事	教	事

大	大	大	大	大	大	大	大	大	三 本	三 高	三 高	三 高	三 高	三 高	短	短	大	大	大	大	大	大	大	大
---	---	---	---	---	---	---	---	---	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

89	89	89	89	89	89	89	89	89	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88	88
10	4	4	4	4	4	4	4	1	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
00	96	96	96	95	97	93	90	01	現	98	94	91	91	92	93	現	90	現	95	95	95	95	95	95
3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	9	3	3	3	3	3	3	3	3	3
31	31	31	31	31	31	31	28	31	31	31	31	31	31	31	8	31	31	31	31	31	31	31	31	31

第三章 酪農学園役職員録

---

金室鹿平中佐長	大翁岩石石中田藤矢阿佐	(河高岡川市
内松野山本藤山	和田長井原下尾島田端部	藤原取崎口川
稔正昭 憲善五秀武	智真 誉 信忠	久池麻則良
郎雄一明治也郎一紀	滋明人茂士肇介夫	美彦生梢治
〃 〃 〃 〃 〃	教 技 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃 〃 〃

---

短短短短短短大大大大大大大本三三三三短大大大  
大 高高高高大

---

90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	11	9	8	7	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
94	03	96	94	94	92	95	現	現	現	現	93	94	97	現	現	01	97	現	現	現	現	現	現
9	3	3	3	3	3	3					6	12	3			6	3						
30	31	31	17	31	31	31					30	31	31			3	31						

---



---

宮塩高義阿垣佐石津長上相内菅大辻堤板佐森松清篠	川出橋平部内藤川田川野馬田原賀	正	義	甲	九	夏	康	志
栄真樹大悦恵文和昭隆秀秀英四	皓	義	雄	子	二	節	懿	二
一司史樹夫子彦夫信博樹一二郎	皓	義	雄	子	二	節	懿	二
教事 〃 教技 〃 〃 〃 〃 教技事 〃 〃 〃 〃 〃 教技 〃 〃 〃 教	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃

---

大大大大大本三三三三短大大大大大大大大三機短短短短  
高高高高高 高高大大大大

---

92	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	91	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90
1	10	10	9	9	4	4	4	4	4	4	5	4	4	4	9	9	4	5	4	4	4	4	4	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	
						99	96	96	現	95	現	96	96	現	96	95	98	現	現	現	現	現	現	
						7	3	3		3		3	3		3	3	10							
						5	31	31		31		31	31		31	31	31							

---



第三章 酪農学園役職員録

細川充史	芝崎希美	角田順三	石黒直文	相馬憲子	栄藤多忍	伊藤邦男	中村保之博	竹田藤フミ	佐藤フミ	盛田フミ	小川茂環	一条江彦	辻橋佳紀	石橋隆義	大藤一伸	佐藤芳昭	上山J・D・ウィリアムス	吉野宣彦	矢吹哲夫	松村圭	
〃	〃	〃	教	事	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教	技	〃	〃	〃	教

大 大 大 大 高 高 大 大 大 大 大 大 高 高 高 高 高 大 大 大 大 大

97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	96.4.1	96.4.1	96.4.1	96.4.1	96.4.1	96.4.1	96.4.1	95.10.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	95.4.1	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
現	現	02.3.31	99.3.31	現	現	02.3.31	現	現	01.3.31	97.3.31	98.3.31	現	現	現	00.3.31	97.3.31	03.3.31	現	現	現	現

井上博紀	岩崎仁	押谷一	伊藤悟	河合司	森純	村野紀雄	加藤文	金子弘	山崎亮一	梅田美恵子	伊藤史	佐藤治	北山陽	岩森憲	諏訪馨	栃金健	越後治	太田静	高橋一	山保千都子	萩原克郎	及川伸	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教	用	〃	〃	〃	〃	事	〃	〃	〃	〃	教	用	〃	教

大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 本 本 大 本 高 高 高 短 大 大 大

98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	98.4.1	97.10.1	97.9.1	97.8.1	97.7.1	97.7.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1	97.4.1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	99.3.31	現	現	99.3.31	現	現	現	現

第三部 事務局・関係団体・職員録

走	山	昌	植	相	小	遠	B・J・サネスキ	艾尼瓦尔・艾山	北倉公彦	丹倉渥修	堂地修	A・M・ティルムルティ	樋口豪紀	龍所康一	北井久美子	酒井典子	肝付良悟	寺脇良智	西田隆文	中村隆一	浅井太一	泉賢一
出	形	子	田	原	澤	藤	大	大	大	大	高	大	大	高	高	高	高	短	大	大	大	大
成	郷	守	弘	晴	修	大	大	大	大	高	大	大	大	高	高	高	高	短	大	大	大	大
子	美	彦	美	伴	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
用	栄	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 高 大 大 大 高 高 高 高 短 大 大 大 大

99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98	98
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	11	10	10	7	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
現	現	現	現	現	現	現	〇2	〇1	〇0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
							3	3	3													
							31	31	31			30			31	31						

仙	黒	保	森	音	嘸	曾	岩	津	佐	石	妹	東	伊	石	長	平	田	千	澤	松	竹	久保木
北	澤	坂	永	竹	田	春	澤	川	々	若	尾	條	藤	川	松	澤	口	田	向	浦	田	矢吹
富	誠	善	文	尔	春	水	勉	一	和	梓	義	将	め	有	和	孝	佐	清	忠	豊	光	生
志	治	真	彦	満	迪	水	勉	一	和	梓	義	将	め	有	和	孝	佐	清	忠	豊	光	生
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

大 大 大 大 大 大 大 本 本 本 高 高 高 高 高 高 大 大 大 大 大 高 高 高

01	01	01	01	01	01	01	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	99	99
4	4	4	4	4	4	4	7	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
1	1	1	1	1	1	1	12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
現	現	現	現	〇3	〇2	〇2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
				3	3	3																
				31	31	31																

第三章 酪農学園役職員録

小島友子	中橋な	植村敦子	阿久津敦子	B・S・ブライアン	本多芳彦	長谷川豊	佐野晴行	三谷光昭	眞船直樹	佐藤和夫	小糸健太郎	菊地和美	周光仲慎太郎	大光明子	柿崎貴辰	倉内辰保	石川紀子	小野輝夫	吉田英雄	三河勝彦	日野晃輔	
用	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教

大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 高 高 大 大 大 大 大 大 大 大

02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1	01.4.1
現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現

3  
31

隼野	竹中	岡本	名久井	坂本	脇島	吉田	廣田	仲野	佐藤	許藤	千葉	中野	澤本	上野	家串	千田	横川	守田	福田	福田	(旧姓)蟹田	大光	新井	我妻
謹	志	弘	忠	勲	宏	平	則	子	平	應	哉	男	治	史	夫	喜美子	容子	純子	憲太郎	憲太郎	蟹田	真礼	昭雄	尚弘
〃	〃	〃	教	技	〃	〃	〃	〃	事	〃	〃	〃	〃	〃	教	用	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	教

高 高 短 短 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 高 高 高 高 高 高 短

03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	03.4.1	02.10.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1	02.4.1
現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現	現

第三部 事務局・関係団体・職員録

前	播	真	八	蒔
田	磨	田	木	田
俊	良	昭	啓	弥
哉	信	好	太	生
〃	〃	〃	〃	教
高	高	高	高	高
03	03	03	03	03
4	4	4	4	4
1	1	1	1	1
〃	〃	〃	〃	〃
現	現	現	現	現
酒	都	中	高	
見	築	野	松	
蓉	圭	亮	真	
子	子	子	哉	
〃	教	事	〃	
大	大	本	高	
03	03	03	03	
7	7	4	4	
1	1	1	1	
〃	〃	〃	〃	
現	現	現	現	

酪農学園史年表

注・元号下の小文字は酪農学園開設年からのカウントしたものの

年代	酪農学園関係事項	一般関係
一九三三年 (昭和8年)	6・〃 酪連役員会において、「北海道酪農義塾」の設置を決定 10・1 札幌村苗穂に北海道酪農義塾を設置。 理事長に北海道長官佐上信一就任、酪農と製酪に関する短期講習(修業期間一カ月)を開始	3・27 日本国際連盟を脱退
一九三四年 (昭和9年) <sub>1</sub>	2・11 北海道酪農義塾酪農科と製酪科(修業年限各一カ年)を設置し、入塾式を挙行 4・〃 北海道酪農義塾苗穂の酪連用地に第一農場を開設。同時に札幌村三角に農地一haを取得して、第二農場を開設	3・21 函館市大火
一九三五年 (昭和10年) <sub>2</sub>		4・〃 青年学校令公布
一九三六年 (昭和11年) <sub>3</sub>	7・13 北海道酪農義塾社団法人の許可を受け、理事長に黒澤西蔵就任	2・26 二・二六事件が起こる
一九三七年 (昭和12年) <sub>4</sub>	12・1 北海道酪農義塾に冬期学校を設置し、短期講習を開始(昭和19年まで継続実施) 4・〃 札幌郡白石村野津幌の出納農場跡地二haを借り受け北海道酪農義塾酪農科経営農場を開設し、第一農場をここに移す	4・18 国号を「大日本帝国」に統
一九三八年 (昭和13年) <sub>5</sub>	2・1 北海道酪農義塾冬期学校に女子部を開設 2・11 北海道酪農義塾に皮革科を併置(昭和14年廃止) 10・〃 札幌村三角の農場用地を酪連に譲渡し、酪農義塾酪農科の塾	5・〃 国家総動員法公布 7・7 日華事変起こる 8・〃 北海道開道七〇年祭開催
		5・〃 パリ万国博開催 7・7 日華事変起こる

一九三九年 (昭和14年) <sup>6</sup>	舎と第二農場を白石村野津幌に移す	5・11 ノモンハン事件起こる
一九四〇年 (昭和15年) <sup>7</sup>		7・8 国民徴用令公布
一九四一年 (昭和16年) <sup>8</sup>	5・20 北海道酪農義塾、酪連より基本財産として現金一〇万円と別海村奥行臼、苫小牧市植苗の農地、原野ならびに福島町の造林地の寄付を受ける	10・12 大政翼賛会結成
一九四二年 (昭和17年) <sup>9</sup>	3・12 江別町西野幌の宅地と農地一六〇haを学校用地として購入	12・28 北海道興農公社設立
一九四三年 (昭和18年) <sup>10</sup>	3・31 財団法人興農義塾野幌機農学校設立認可を受け、黒澤西蔵理事長に就任	6・5 日本キリスト教団設立
一九四四年 (昭和19年) <sup>11</sup>	同日「野幌機農学校」の設置認可	10・23 酪連解散
一九四五年 (昭和20年) <sup>12</sup>	6・18 江別町西野幌の仮校舎において野幌機農学校の開校式を挙行	12・8 太平洋戦争起こる
一九四六年 (昭和21年) <sup>13</sup>	2・5 北海道酪農義塾第一〇回卒業式をもって閉塾	2・21 食糧管理法公布
	3・31 社団法人北海道酪農義塾を解散	3・11 農業団体法公布
	4・5 太平洋戦争激しさを増し、野幌機農学校教職員の応召者二三名に達する	8・23 学徒動員令、女子挺身隊勤労令施行
	5・20 野幌機農学校教職員生徒一八名を日本軍現地自活指導のため千島に派遣(同年7月15日帰校)	8・6 広島、長崎(8・9)被爆
	3・31 財団法人興農義塾野幌機農学校理事長黒澤西蔵退任し、青山永理事長に就任	8・8 ソ連対日宣戦布告
	9・1 財団法人興農義塾野幌機農学校理事会、教育の指導理念をキ	8・15 日本ポツダム宣言を受諾して無条件降伏
		2・20 ソ連、樺太、千島の領有を宣言
		11・3 日本国新憲法公布

<p>一九四七年 (昭和22年)<sup>14</sup></p>	<p>リスト教の聖書に置く方針を決定</p> <p>4・1 野幌機農学校に研究科と選科(各修業年限一カ年)を併置</p> <p>7・3 北酪社より江別乳製品工場を無償にて譲り受ける(営業は北酪社に委託)</p>	<p>4・1 六・三・三制教育実施</p> <p>5・3 新憲法施行</p>
<p>一九四八年 (昭和23年)<sup>15</sup></p>	<p>3・31 学制改革により野幌機農学校、高等学校(全日制農業課程)としての認可を受け、4月1日開校</p> <p>4・1 「野幌機農高等学校」、研究科、選科を廃止して、別科(修業年限一カ年)を江別町元野幌、苫小牧市植苗、標津町川北の各地方農場に併置、授業を開始</p> <p>4・3 野幌機農高等学校に通信教育酪農科(修業年限二カ年)を併置し、7月開講</p>	<p>4・3 新制大学発足</p> <p>7・29 ロンドンオリンピック開催</p> <p>11・3 東京裁判開廷</p>
<p>一九四九年 (昭和24年)<sup>16</sup></p>	<p>7・3 「酪農学園事業部」発足</p> <p>8・1 「野幌高等酪農学校」(通信教育、酪農科、家庭科)開校。野幌機農高等学校より通信教育を引き継ぐ</p> <p>12・27 野幌高等酪農学校、各種学校として設置認可</p> <p>3・31 野幌機農高等学校、標津町川北の別科を廃止</p> <p>4・1 野幌機農高等学校元野幌農場内に農機科(修業年限一カ年)を併置</p> <p>5・3 財団法人興農義塾野幌機農学校の名称を「財団法人酪農学園」に変更し、12月12日変更認可</p> <p>5・12 酪農学園理事長青山永退任し、佐藤善七が理事長に就任</p> <p>7・11 「酪農学園大学部」を開学し、9月6日各種学校として設置認可</p> <p>9・20 野幌機農高等学校火災により校舎・施設を全焼。直後、復興後</p>	<p>11・3 湯川秀樹日本人初のノーベル物理学賞受賞</p>

一九五〇年 (昭和25年) 17	<p>援会を組織し募金活動を開始</p> <p>3・14 「酪農学園短期大学」酪農科設置認可を受け、4月1日開学</p> <p>3・31 酪農学園大学部を廃止</p> <p>4・1 野幌機農高等学校内に別科を併置</p> <p>4・15 野幌機農高等学校第五農場の希望寮焼失</p> <p>5・5 江別乳製品工場を酪農学園で直営、同時に酪農学園短期大学の附属実習工場となる</p> <p>7・1 財団法人酪農学園事務局を設置</p> <p>8・10 酪農学園短期大学において三愛塾を開設（昭和38年まで継続実施）</p>	<p>1・7 新一、〇〇〇円札発行</p> <p>3・15 私立学校法施行</p> <p>4・1 短期大学制度発足</p> <p>5・1 北海道開発庁発足</p> <p>6・25 朝鮮戦争起こる</p>
一九五一年 (昭和26年) 18	<p>12・22 酪農学園に学園長制度を新設し、初代学園長に黒澤西威就任</p> <p>1・10 財団法人酪農学園を「学校法人酪農学園」に変更。2月24日変更認可</p> <p>6・20 酪農学園役員機構を変更し、専務理事に樋浦誠、常務理事に川村秀雄就任</p> <p>7・25 野幌機農高等学校開校一〇周年記念式典を挙行</p>	<p>9・8 対日講和条約・日米安全保障条約調印</p>
一九五二年 (昭和27年) 19	<p>7・25 野幌機農高等学校開校一〇周年記念式典を挙行</p>	<p>2・14 オスロウ冬期オリンピック開催</p> <p>4・28 講和条約発効</p> <p>4・5 公職追放令廃止</p> <p>6・5 中央教育審議会設置</p> <p>7・19 ヘルシンキオリンピック開催</p>
一九五三年	<p>7・25 野幌機農高等学校開校一〇周年記念式典を挙行</p>	<p>8・5 日華平和条約発効</p> <p>6・8 朝鮮戦争休戦</p>

第三章 酪農学園役職員録

(昭和28年) <sup>20</sup>	4・1 野幌機農高等学校に農業協同組合科(修業年限三カ年)を併置	3・1 米、ビキニ環礁で水爆実験
(昭和29年) <sup>21</sup>	4・1 酪農学園短期大学学則の一部変更	6・14 酪農振興法公布
一九五四年	11・1 野幌機農高等学校、全校ストライキに入る(翌年1月解除)	9・27 15号台風により洞爺丸沈没
(昭和30年) <sup>22</sup>	2・8 「野幌機農自動車学校」、各種学校として設置認可を受け、7月開校	
一九五六年	3・31 野幌機農高等学校、別科と農機科を廃止	1・26 コルチナダンベッツオ冬期オリンピック開催
(昭和31年) <sup>23</sup>	4・1 野幌機農高等学校農業協同組合科の名称を農村経済科に変更	10・19 日ソ国交回復
	7・1 樋浦誠酪農学園専務理事を退任	11・22 メルボルンオリンピック開催
一九五七年	2・2 酪農学園理事長佐藤善七死去により、2月7日黒澤西藏再び理事長に就任	12・18 日本国際連合に加盟
(昭和32年) <sup>24</sup>	6・1 野幌高等酪農学校開校一〇年記念式典を挙行	
	6・10 黒澤西藏私財を抛出して「酪農育英会」を設立し、12月27日財団法人として認可を受ける	
一九五八年	7・23 酪農学園常務理事に西本宗信就任	
(昭和33年) <sup>25</sup>	2・14 「酪農学園女子高等学校」(全日制普通課程)設置認可を受け、4月21日開校	
一九五九年	12・20 酪農学園理事会、「酪農学園大学」の設置を決定	8・1 国際教育会議東京において開催
(昭和34年) <sup>26</sup>		

一九六〇年 (昭和35年) <sup>27</sup>	<p>1・20 酪農学園大学酪農学部酪農学科設置認可を受け、4月20日開学(定員一〇〇名)</p> <p>3・21 酪農学園女子高等学校の名称を「三愛女子高等学校」に変更認可4月1日変更</p> <p>4・6 酪農学園常務理事川村秀雄が専務理事に就任</p> <p>5・31 「酪農学園後援会」設立</p>	<p>2・18 スーパー冬期オリンピック開催</p> <p>6・23 日米新安全保障条約発効</p> <p>8・25 ローマオリンピック開催</p>
一九六一年 (昭和36年) <sup>28</sup>	<p>4・5 酪農学園短期大学開学一〇周年記念式典を挙行</p>	<p>4・5 ソ連のガガーリン少佐がボストーク1号で人類初の軌道飛行に成功</p>
一九六二年 (昭和37年) <sup>29</sup>	<p>2・10 酪農学園大学酪農学部酪農学科に就職課程認定(中学・高校理科・高校農業)</p> <p>2・27 「酪農学園職員組合」結成</p> <p>3・23 酪農学園短期大学に製造科設置認可を受け、4月開設</p> <p>3・30 野幌高等学校に通信教育酪農講座、酪農経営研究講座開設認可</p> <p>3・31 酪農学園大学、同短期大学附属乳製品工場を雪印乳業株式会社に売却</p> <p>10・10 野幌機農高等学校第一校舎落成</p> <p>10・14 酪農学園創立三〇年、野幌機農高等学校開校二〇周年記念式典および「黒澤西蔵寿像」除幕式を挙行</p> <p>12・20 酪農学園大学酪農学部に農業経済学科設置認可、昭和38年4月開設</p>	<p>10・5 キューバ危機が起こる</p>

第三章 酪農学園役員録

<p>一九六三年 (昭和38年) 30</p>	<p>4・1 野幌機農高等学校、農業科と農村経済科を統合して酪農経営科に変更</p>	<p>11・1 米大統領J・F・ケネディ暗殺される</p>
<p>一九六四年 (昭和39年) 31</p>	<p>1・27 酪農学園大学酪農学部獣医学科設置認可を受け、4月開設 4・1 「酪農学園中央農場」発足 4・1 酪農学園短期大学製造科学生の募集を停止して、酪農科に季節制(修業年限三カ年)を増設、従来の全日制を第一コース、季節制を第二コースと改称 野幌高等酪農学校副教材(酪農の学校)を「近代酪農」(月刊)に改め、全国に販賦する</p>	<p>1・29 インスブルック冬期オリンピック開催 10・10 東京オリンピック開催</p>
<p>一九六五年 (昭和40年) 32</p>	<p>5・1 学長更迭をめぐって酪農学園大学、同短期大学自治会全学ストライキに入る(6月29日解除)</p>	
<p>一九六六年 (昭和41年) 33</p>	<p>6・16 野幌機農高等学校を「酪農学園機農高等学校」に、野幌高等酪農学校を「酪農学園短期大学酪農学校」に、野幌機農自動車学校を「酪農学園自動車学校」にそれぞれ校名変更認可 3・1 酪農学園大学酪農学部農業経済学科に教職課程認定(中学・高校社会) 3・1 酪農学園大学酪農学部酪農学科に教職課程(聴講生の課程)認定 4・19 酪農学園副理事長制度を新設し、専務理事制を廃止する。佐藤貢副理事長に、また川村秀雄常務理事に就任 10・30 酪農学園大学獣医二号館落成 6・1 学園事業部を分離して「クローバー食品株式会社」設立 12・19 酪農学園理事長黒澤西蔵退任し、佐藤貢理事長に、川村秀雄副理事長に就任</p>	

一九六七年 (昭和42年) <sup>34</sup>	6・14 酪農学園常務理事西本宗信退任し、菊地正一常務理事に就任
一九六八年 (昭和43年) <sup>35</sup>	7・17 中央農場長 野喜一郎死去、7月20日学園葬を実施 11・7 三愛女子高等学校開校一〇周年記念式典を挙行 11・19 酪農学園大学酪農学部酪農学科に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設認定
一九六九年 (昭和44年) <sup>36</sup>	11・18 酪農学園後援会、財団法人として認可 12・20 「酪農学園だより」創刊
一九七〇年 (昭和45年) <sup>37</sup>	1・3 酪農学園大学、同短期大学学長橋本吉雄死去、1月19日酪農学園葬を実施
一九七一年 (昭和46年) <sup>38</sup>	12・5 学費改定、学長選任規定等をめぐって酪農学園大学、同短期大学学生自治会全学ストライキに入る(翌年2月解除)
一九七二年 (昭和47年) <sup>39</sup>	3・31 酪農学園短期大学製造科廃止認可 6・10 三愛女子高等学校前校長宮古哲雄死去、12日酪農学園葬を実施 6・21 酪農学園副理事長川村秀雄退任 8・31 酪農学園大学酪農一号館落成
	10・9 酪農学園機農高等学校開校三〇周年記念式典を挙行 10・27 酪農学園短期大学酪農学校酪農経営研究講座を農業経営講座
	2・6 グルノーブル冬期オリンピック開催 5・16 北海道十勝沖地震 10・12 メキシコシティーオリンピック開催 1・5 大学管理法案をめぐって全国的に大学紛争激化 7・5 米宇宙船アポロ11号、人類初の月面着陸に成功 3・5 大阪で日本万国博覧会開催
	2・3 札幌冬期オリンピック開催 5・15 沖縄、日本に復帰 8・26 ミュンヘンオリンピック開催 9・29 日中国交回復

第三章 酪農学園役職員録

一九七三年 (昭和48年) 40	6・23 「酪農学園同窓会連合会」発足 10・1 酪農学園創立四〇周年記念式典を挙行 10・16 「北海道アルバート酪農科学技術交流協会」を酪農学園内に設立 12・25 三愛女子高等学校開校一五周年記念式典を挙行 4・5 酪農学園短期大学に生活専攻コース新設	10・5 石油ショック始まる
一九七四年 (昭和49年) 41	3・25 酪農学園大学院獣医学研究科獣医学専攻修士課程設置認可、 4月開設	
一九七五年 (昭和50年) 42	7・31 酪農学園大学、同短期大学附属図書館落成 8・31 酪農学園大学獣医一号館落成	
一九七六年 (昭和51年) 43	3・31 酪農学園中央農場を廃止 6・30 酪農学園自動車学校を廃止（翌年1月13日北海道教育委員会 認可）	2・4 インスブルック冬期オリ ンピック開催 2・4 米国上院多国籍企業小委 員会でロッキード事件が 暴露
一九七七年 (昭和52年) 44	7・11 酪農学園常務理事菊地正一退任し、小林哲威常務理事に就任 12・6 酪農学園理事会長期財務計画を決定	7・17 モントリオールオリ ンピック開催
一九七八年 (昭和53年) 45	4・1 酪農学園大学酪農学部獣医学教育六年制に移行 8・27 三愛女子高等学校二〇周年記念式典を挙行 11・20 三愛女子高等学校移転に伴う新校舎の起工式を挙行	

に変更認可

一九七九年 (昭和54年) 46	<p>6・18 酪農学園副理事長に山本庸一、常務理事に鈴木徳信就任</p> <p>6・18 酪農学園に副学園長制度を新設し、遊佐孝五副学園長に就任</p> <p>9・4 酪農学園大学、同短期大学附属農場牛舎火災により施設、設備を全焼(12月復旧)</p> <p>11・15 三愛女子高等学校の校舎、施設落成により西野幌へ移転を完了し、12月1日落成式を挙行</p> <p>7・13 北海道酪農義塾、酪農学園機農高等学校卒業生と五寮会有志学園用地内に「野喜一郎顕彰碑」を建立</p> <p>7・30 酪農学園大学、同短期大学酪農二号館完成し、8月11日落成式を挙行</p> <p>8・30 酪農学園大学開学二〇周年、同短期大学開学三〇周年記念式典を挙行</p> <p>9・1 「酪農学園史」刊行</p> <p>11・22 植苗農場牛舎と付帯施設完成</p> <p>3・26 酪農学園大学院獣医学研究科獣医学専攻博士課程と酪農学研究科酪農学専攻修士課程設置認可、4月開設</p> <p>3・31 酪農学園常務理事鈴木徳信退任</p> <p>8・17 酪農学園大学獣医三号館完成、落成式を挙行</p> <p>2・6 酪農学園園長黒澤西蔵死去。2月26日酪農葬、3月1日、追悼礼拝を挙行</p> <p>6・18 酪農学園機農高等学校開校四〇周年記念式典を挙行</p> <p>6・30 酪農学園理事長佐藤貢が酪農学園長を兼任</p> <p>12・13 酪農学園将来計画推進委員会を発足。12月18日酪農学園将来計画案策定</p>
一九八一年 (昭和56年) 48	<p>8・3・4 集中豪雨で石狩川はんらん</p>
一九八二年 (昭和57年) 49	<p>2・13 レイクブラシッド冬期オリンピック開催</p> <p>7・19 モスクワオリンピック開催</p>

第三章 酪農学園役職員録

一九八三年 (昭和58年) 50	4・1 三愛女子高等学校普通科に英語コース設置 6・30 酪農学園常務理事小林哲威退任し、濱本恒男常務理事に就任 10・1 酪農学園創立五〇周年記念式典を挙行、同記念史刊行		
一九八四年 (昭和59年) 51	1・10 三愛女子高等学校英語科増設認可、4月開設 2・22 酪農学園機農高等学校を「酪農学園大学附属高等学校」に校名変更認可 3・31 酪農学園短期大学酪農科二コースの学生募集を停止 7・10 酪農学園短期大学教養館完成、落成式を挙行 8・20 酪農学園大学農業経済学科館完成、落成式を挙行 12・6 「黒澤記念講堂」完成、落成式を挙行 12・22 酪農学園短期大学を「北海道文理科短期大学」に校名変更認可 12・22 北海道文理科短期大学教養学科増設認可、4月開設 4・1 酪農学園園長に遊佐孝五就任 9・14 酪農学園大学野球場完成 8・27 酪農学園大学獣医二号館完成、落成式を挙行		
一九八五年 (昭和60年) 52			
一九八六年 (昭和61年) 53			
一九八七年 (昭和62年) 54	2・2 酪農学園ホール完成、落成式を挙行 12・23 酪農学園大学酪農学部食品科学科増設認可、4月開設		
一九八八年 (昭和63年) 55	3・17 三愛女子高等学校を「とわの森三愛高等学校」に校名変更認可 8・3 酪農学園大学酪農二号館完成、落成式を挙行 9・1 酪農学園大学第二体育館完成、落成式を挙行		
		2・8 サラエボ冬期オリンピック ク開催	
		7・28 ロサンゼルスオリンピック ク開催	
		3・16 筑波科学万国博開催	
		1・28 米国スペースシャトル・ チャレンジャー号爆発	
		4・26 ソ連でチェルノブイリ原 発事故	
		3・13 青函トンネル開業	
		9・17 ソウルオリンピック開催	
		2・13 カルガリー冬季オリン ピック開催	

一九八九年 (平成1年) 56	<p>4・1 酪農学園大学エクステンションセンター開設</p> <p>6・1 酪農学園常務理事濱本恒男退任し、牛島純一常務理事に就任</p> <p>9・1 酪農学園大学獣医四号館完成、落成式を挙行</p> <p>12・22 北海道文理科短期大学経営情報学科増設認可、4月開設</p>
一九九〇年 (平成2年) 57	<p>1・22 北海道文理科短期大学経営情報館完成、落成式を挙行</p> <p>8・5 獣医学科二五周年記念誌を刊行</p> <p>9・14 北海道文理科短期大学四〇周年、酪農学園大学三〇周年記念式典を挙行</p> <p>9・28 酪農学園本館定礎式を挙行</p> <p>11・27 大学肉製品実験実習室完成</p> <p>12・21 大学の期間を付した入学定員の増加に係る学則の変更認可</p>
一九九一年 (平成3年) 58	<p>1・11 酪農学園大学附属高等学校およびとわの森三愛高等学校廃止認可。統合した「とわの森三愛高等学校」設置認可</p> <p>1・11 酪農学園短期大学酪農学校廃止認可</p> <p>2・27 酪農学園大学教員の免許状授与の所要資格を得させるための課程設定</p> <p>3・20 酪農学園大学大学院酪農学研究科食生産利用科学専攻博士課程設置認可、4月開設</p> <p>6・3 米国コーネル大学と学術交流協定を締結</p> <p>7・1 酪農学園理事長佐藤貢退任、名誉理事長制度を新設し佐藤貢就任、遊佐孝五理事長に就任、高田哲夫副理事長に就任、牛島純一学園長に就任、菊池利治常務理事に就任</p> <p>7・31 酪農学園本館完成、落成式を挙行</p>
	<p>1・7 昭和天皇崩御。新元号は平成と決定</p> <p>4・1 消費税がスタート</p> <p>1・13 大学入試センター試験</p> <p>6・29 生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律公布</p> <p>10・3 ベルリンの壁崩壊、統一ドイツ誕生</p> <p>12・2 秋山豊寛、日本人初の宇宙飛行</p> <p>1・17 湾岸戦争突入</p> <p>2・8 大学審議会答申「大学教育の改善について」など</p> <p>5・17 大学審議会答申「平成五年度以降の高等教育の計画的整備について」など</p> <p>5・29 長崎県の雲仙・普賢岳噴火</p> <p>置基準、学位規則の一部改正</p> <p>11・25 大学審議会答申「大学院の量的整備について」</p>

第三章 酪農学園役職員録

<p>一九九二年 (平成4年) 59</p>	<p>12・20 酪農学園大学・同短期大学附属農場教育棟完成 2・29 酪農学園教職員組合三〇周年記念式典 教学事務電算化完成、運用開始 8・31 酪農学園大学獣医学科大動物臨床センター完成、落成式を挙 行</p>	<p>一九九三年 (平成5年) 60</p>	<p>3・2 経営情報館増築完工 8・6 酪農学園退職者による「貴農同志会」が発足 9・30 酪農学園創立六〇周年学内記念式典を挙行、同講演会を開催 10・1 酪農学園創立六〇周年記念式典、同祝賀会を挙行、同記念誌刊 行 10・23 酪農学園大学、同短期大学馬術部馬場(六、〇〇〇㎡)が完成 11・27 農業経済学科創設三〇周年記念式典 12・21 酪農学部食品流通学科増設認可、4月開設 中国内蒙古哲里木畜牧学院と学術交流協定を締結</p>	<p>一九九四年 (平成6年) 61</p>	<p>2・28 食品流通館完成、落成式を挙行 3・4 フイリピン大学ロス・パーニョス校と学術交流協定を締結 5・19 ポーランド・ワルシャワ農業大学と学術交流協定を締結 10・1 酪農学園大学・同短期大学事務部と学園事務局の業務関係事 務を統合 10・14 韓国 安城産業大学校と学術交流協定を締結</p>
<p>2・8 アルベールビル冬期オリ ンピック開催 6・5 P K O 法案可決 7・25 バルセロナオリンピック 開催</p>	<p>9・12 毛利衛スペースシャトル・ エンデバー号で宇宙へ 1・1 EC市場の統合 2・12 高等学校教育の改革に関 する会議第四次報告「総合 学科について」 3・10 学校教育法施行規則の一部 改正(単位制高校、調査書な しの高校入学者選抜、高校 間連携、総合学科開設等)</p>	<p>7・12 北海道南西沖地震 2・12 リレハンメル冬期オリ ンピック開催 6・21 専修学校設置基準の一部 改正(「専門士」の称号新 設)</p>	<p>7・8 向井千秋宇宙飛行士、日本 人女性初の宇宙飛行</p>		

一九九五年 (平成7年) 62	一九九六年 (平成8年) 63	一九九七年 (平成9年) 64	<p>1・31 教養館完成、落成式を挙る</p> <p>2・15 デンマーク国立畜産研究所と学術交流協定を締結</p> <p>3・16 大学院酪農学研究所フードシステム専攻修士課程増設認可</p> <p>4・1 酪農学園大学・同短期大学教務部入試課を入試部入試課に、教務部に教務課と学務課を併置</p> <p>7・1 平尾和義酪農学園副理事長に就任</p> <p>12・22 獣医学部獣医学科設置認可(酪農学部獣医学科改組)</p> <p>10・7 クロバー食品株式会社解散登記</p> <p>7・31 中国 新疆農業大学と学術交流協定を締結</p> <p>11・30 中華民国 国立嘉義技術学院と学術交流協定を締結</p> <p>12・19 環境システム学部経営環境学科、地域環境学科設置認可、4月開設</p> <p>北海道文理科短期大学を「酪農学園大学短期大学部」に校名変更。酪農学園短期大学部酪農科を「酪農学科」に学科名称変更および収容定員変更認可</p>									
10・4 北海道東方沖地震	11・24 学校教育法施行規則の一部改正(学校週五日制次年度から月二回実施)	1・17 阪神淡路大震災	3・20 オウム真理教地下鉄サリン事件	10・22 国連創立五〇周年記念総会開幕	12・8 高速増殖炉「もんじゅ」事故発生	2・10 豊浜トンネル崩落事故	7・19 アトランタオリンピック開催	8・27 教育課程審議会発足	4・1 消費税率5%がスタート	10・30 町村文相「二一世紀の大学像」を大学審に諮問	11・17 北海道拓殖銀行破綻	12・3 省庁再編で文部省は科学技術庁と統合し「教育科学技術省」へ

第三章 酪農学園役員録

一九九八年 (平成10年) 65	4・6 酪農学園大学中央館完成、落成式を挙行 5・7 カナダ オールズ・カレッジと学術交流協定を締結 8・31 中華民国 国立屏東科技大学と学術交流協定を締結 12・17 米国 オハイオ州立大学食品農業環境科学部と学術交流協定を締結
一九九九年 (平成11年) 66	7・1 平尾和義酪農学園理事長に就任、高橋節郎副理事長に就任 9・26 酪農学園名誉理事長佐藤貢逝去 9・27 雪印乳業株式会社札幌研究所と連携大学院の協定を締結 11・24 乳牛糞尿循環研究センター落成
二〇〇〇年 (平成12年) 67	12・22 酪農学園大学短期大学部教養学科、経営情報学科廃止認可 3・17 北海道立食品加工センターと連携大学院の協定を締結 3・21 酪農学研究科フードシステム専攻修士課程に高等学校教諭専修免許(商業)の課程認定 5・26 短大五〇周年・大学四〇周年記念式典を挙行 8・8 黒澤西蔵銅像を黒澤記念講堂前に移設 9・30 インテリジェント牛舎完成、落成式を挙行 10・18 酪農学部食品科学科にフードスペシャリスト養成課程設置認可、4月開設
	2・7 長野冬期オリンピック開催 10・26 大学審議会答申「二一世紀の大学像と今後の改革方策について」 5・24 日米防衛協力のための「ガイドライン」関連法が成立 8・9 大学審議会答申「大学院入学者選抜の改善について」 3・31 有珠山噴火 7・2 雪印大阪工場で乳飲料が問題化 9・15 シドニーオリンピック開催 11・22 大学審議会答申「大学設置基準等の改正、入試の改善、グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」 12・22 中央教育審議会まとめ「新しい時代における教養教育の在り方について」

二〇〇一年 (平成13年) 68	<p>1・22 ドイツ・ハノーバー獣医科大学と学術交流協定を締結 酪農学園大学酪農学部食品科学科に食品科学専攻および健康栄養学専攻設置認可、4月開設</p>	5・5 牛海綿状脳症(BSE)発生
二〇〇二年 (平成14年) 69	<p>8・9 台湾・国立嘉義大学と学術交流協定を締結 10・13 とわの森三愛高等学校一〇周年(統合)記念式典を挙</p>	9・11 米中枢同時テロ発生
二〇〇三年 (平成15年) 70	<p>9・30 酪農学園創立七〇周年学内記念式典を挙、同講演会を開催 10・1 酪農学園創立七〇周年記念式典、祝賀会を挙行 「酪農学園史二」刊行</p>	<p>1・1 EUの統一通貨ユーロ流通開始 2・8 ソルトレークシティ冬期オリンピック開催</p>

## 編集後記

本書の編集構想が持ち上がったのは二〇〇一年七月で、編集委員、実務委員が決定し具体的作業に入ったのは同年一月からであった。

その段階で、一九八〇（昭和55）年に刊行されている酪農学園史を「一」とみなし、本書を酪農学園史二と表示することとした。それは、酪農学園は過去に学園史一（一九八〇）のほかに「五十年記念史」（一九八三）、「六〇年史」（写真集―一九九三）を刊行しているが、三点とも判や装丁、編集方針に共通性を持たせていなかった。しかも創立時からの四十数年間の資・史料の収集量や詳細な記述の本格的な史書は、学園史一のみであった。

したがって、本書では今日に至るその後の約三〇年の歴史は、学園史一に準じることにしたが、新たな問題が出てきた。学園史一が刊行されて二十数年が経ち、在庫も限られ、個人で所持している職員も少なくなってきたことである。むろん図書館や各部所には備えられているが、気軽に読むということでは不便が生じてきた。そのため学園史二も創立時から書き起こし、学園七〇年の歴史を通読できるようにしたが、四十数年間分は多くの点で重複した。

また本書でも各部ごとに画然とした線引することは極めて困難で、そのため各部各章にわたって重複したり、説明不足の点多く、あるいは紙数の都合で一部省略したため明確さを欠いている。

本書はあくまで史実に基づきできるだけ客観的記述に努めたが不備、不正確な点や冗長、不統一の

点も多く読者の叱正と寛容をお願いしたい。

刊行に当たっては、学園内外を問わず多くの人たちからご指導をいただいた。また編集委員長および編集委員にはお手数をかけたし、特に長野徳之氏には編集の中心としてその労多くに感謝する。また終盤では加藤隆、川上美紀子両氏の応援を得、さらに(株)アイワードの小山学氏には種々助言をいただいた。合わせて心からの謝意を表すとともに、酪農学園の更なる発展を祈りつつ筆を置く。

(黒澤記)

## 参考文献

- 新北海道史年表(北海道 1992) 人脈北海道農業編(北海道新聞社 1976) 北海道の百年(永井秀夫・大庭幸生 1999) 雪印乳業史、宇都宮仙太郎(黒澤西蔵 1958) 黒澤西蔵(黒澤西蔵刊行会 1961) 国際基督教大学創立史(1990) 日本酪農の歩み(酪農学園大学エクステンションセンター 1998) 記念史(短大30・大学20周年 1980) 記念誌(短大40・大学30周年 1990) 同(短大50・大学40周年 2001) 学長12年に感謝して(遊佐孝五 1985) 野喜一郎の歩み(野みつ子 1980) 日本酪農の展望(安宅一夫 2002) 落穂拾い(池田実 1982) その他。

編集委員会

委員長 (酪農学園理事長)

平尾 和義

副委員長 (酪農学園学园长)

黒澤力太郎

委員 (酪農学園副理事長)

高橋 節郎

委員 (酪農学園常務理事)

菊池 利治

委員 (酪農学園大学学長)

大谷 俊昭

委員 (酪農学園大学短期大学部学長)

安宅 一夫

委員 (とわの森三愛高等学校校長)

村山 昭二

実務委員会

委員長 (酪農学園事務局長)

黒澤力太郎

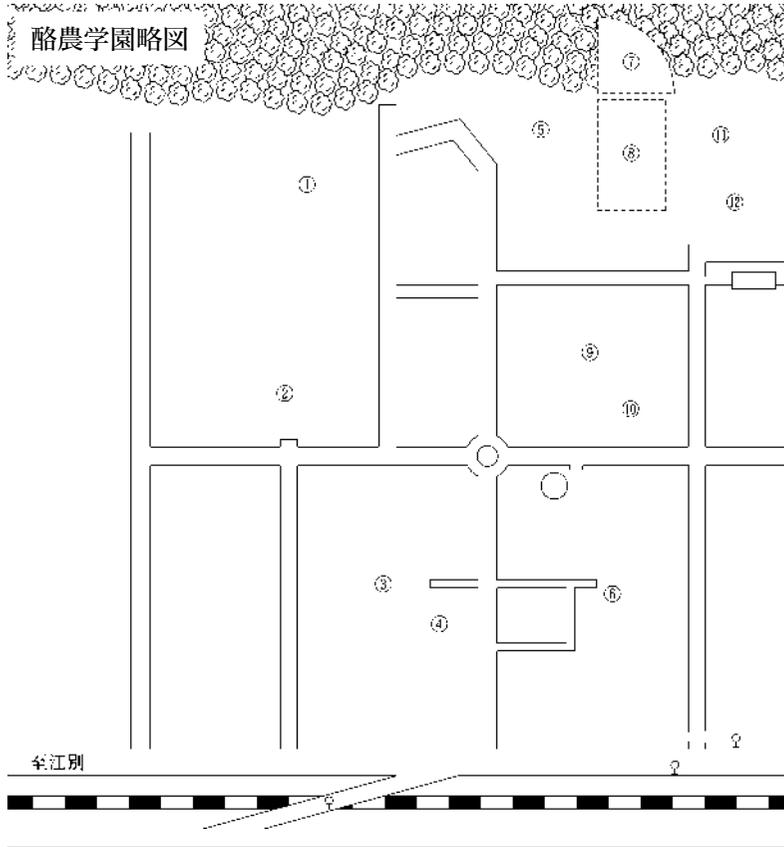
委員 (前酪農学園大学エクステンションセンター主事)

澤田 憲宏

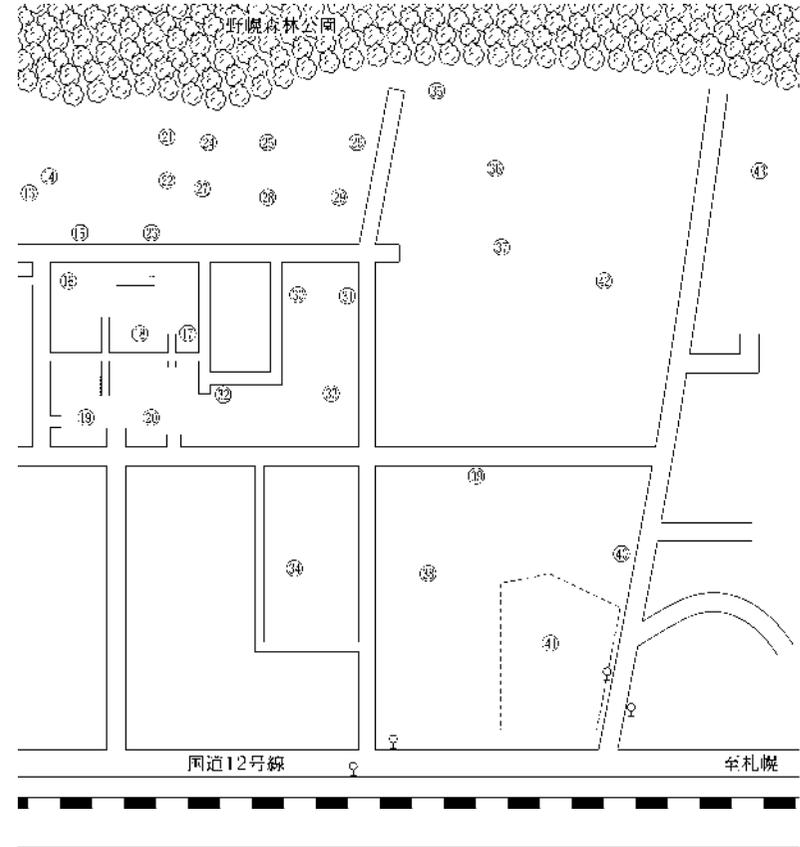
委員 (前酪農学園大学エクステンションセンター主事)

長野 徳之

酪農学園略図



- |   |                    |
|---|--------------------|
| ① 機農寮 (高校)  | ⑩ 多目的格納庫           |
| ② 旧酪農学園短期大学酪農学校校舎   | ⑪ 体育館              |
| ③ 旧精農寮 (高校)   | ⑫ 第1校舎             |
| ④ 研修館   | ⑬ 食品流通館            |
| ⑤ 課外活動施設群   | ⑭ 黒澤記念堂            |
| ⑥ インテリジェント牛舎群および関連施設 (乳牛糞尿循環研究センター・貯蔵粗飼料研究センター・酪農機械実験・整備センター) | ⑮ 農経館              |
| ⑦ 大学・短大野球場  | ⑯ 学生サービスセンター       |
| ⑧ 大学・短大グラウンド  | ⑰ 酪農学園大学中央館 (図書館含) |
| ⑨ 学生会館  | ⑱ 学生ホール            |
|   | ⑲ 酪農学園本館           |
|   | ⑳ 同窓生会館            |



- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| ②① 大動物臨床センター     | ③③ 乳製品実験実習室          |
| ②② 獣医2・3・4号館     | ③④ 農場教育研究棟           |
| ②③ 獣医1号館/家畜病院    | ③⑤ 家畜センター実験実習室       |
| ②④ 食品科学講義棟       | ③⑥ 温室・実験棟            |
| ②⑤ 酪農2・3号館/酪農講義棟 | ③⑦ 大学・短大創世寮          |
| ②⑥ 食品科学館         | ③⑧ 機農ファーム            |
| ②⑦ 中央講義棟         | ③⑨ シオン寮              |
| ②⑧ 酪農1号館         | ④① とわの森三愛高等学校 (第1校舎) |
| ②⑨ 環境システム講義棟     | ④② 高校グラウンド           |
| ③① 環境システム館       | ④③ 家畜管理牛舎            |
| ③② 食品加工実験実習室     | ④④ 北光寮、カナン寮          |
| ③③ 酪農学園ホール       |                      |

二〇〇三年一〇月一日発行

## 酪農学園史二

編集兼

江別市文京台緑町五八二番地

発行人

学校法人 酪農学園

印刷所

札幌市中央区北三条東五丁目  
株式会社 アイワード